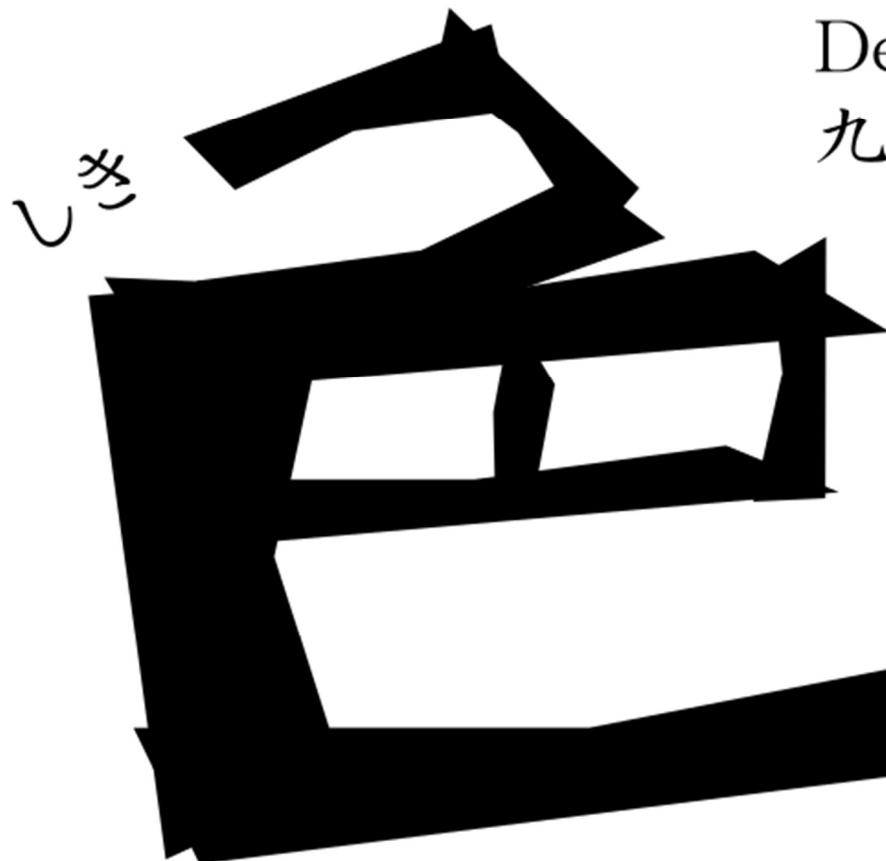
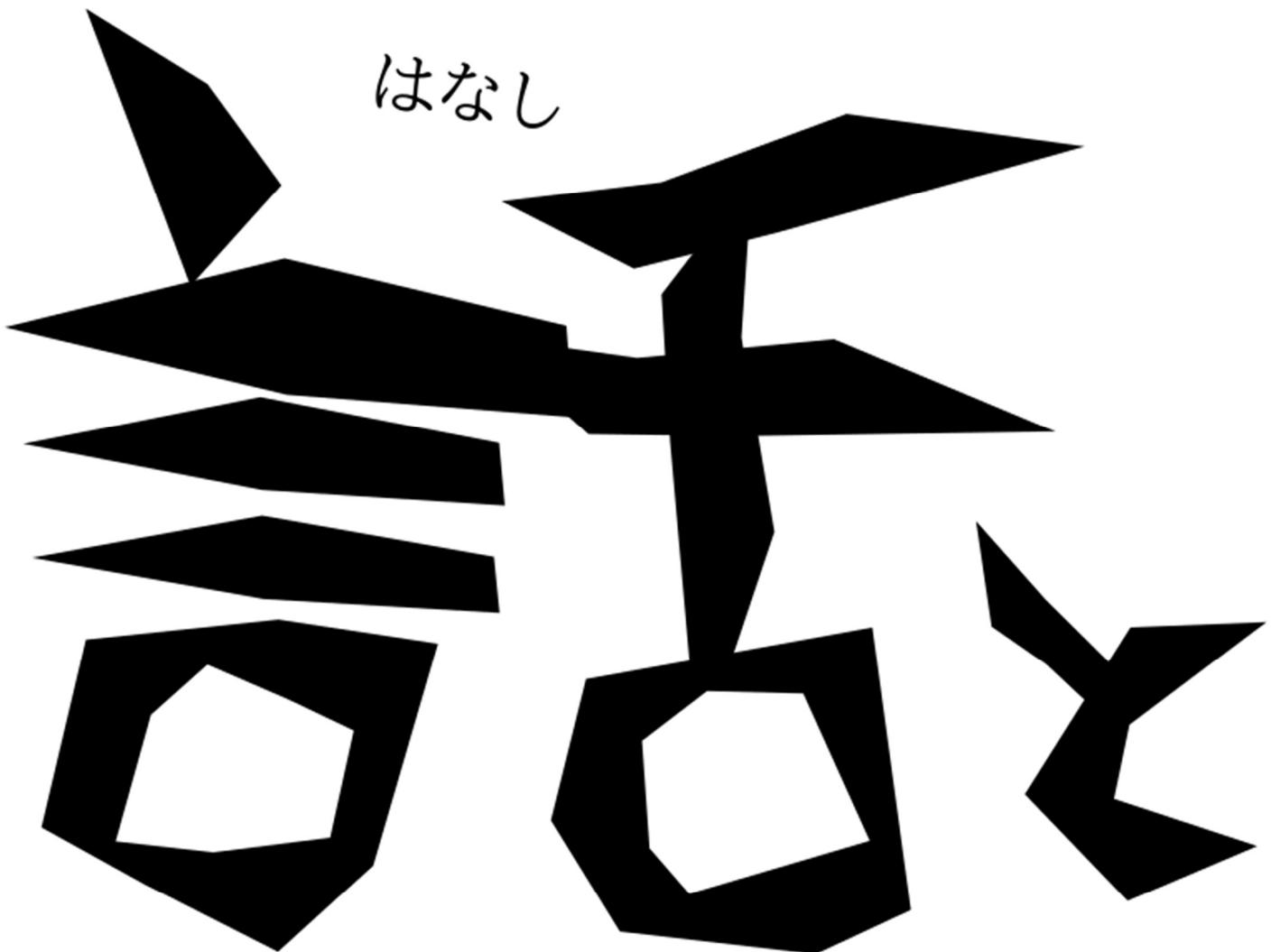


はなし



Dec 31st, 2025  
九折空也

## 目次

罠	88
人類史上屈指のハズレ男	95
真ん中が空っぽのあなたへ	3
自我は他人だ	107
時間量が古ではない	115
色（しき）とは「量」のことだ	126
「手品に惹かれた、だから手品師になった」	4
何の中で生きてきたか、何の中で育ってきたか	6
成長について	9
損得	13
親の人生を生きる	14
色魔	16
量は状態をもたらし、状態は実感をもたらし、実感はふたたび量である	20
観測	24
「分かる」という機能のエラー	26
あなたがあなたを「分かる」と言ふ張るといふ	30
自我と、使用できる記憶	36
夜は「在る」のか	42
自我の真ん中と「い」の人 の真ん中は、位置が違う	46
色（しき）の不連続性と「色々」	51
不連続性と自己愛	57
関係・関わりと、つながりの錯覚	60
つながりとふう、まったく不明のもの	64
関係力グラビティ	69
魂魄	74
話の進行	78
同一性	83
罪	159
耽美と欲	169
罪	17
音楽には「しない」	182
認識と矛盾した思い込み	194
作品および仕事という、絶望を得にいくかのようない行為	199
魂魄と稽古	203
【「年喰つたオッサン」は、生まれてこのかた一度も「仕事」をしたないとがな】	208
【現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けていく】	210
【稽古は自我未然について】	214
①稽古は自我未然領域に得られる現象であって、自我以降はただの「生（なま）」の世界だ	215
②時間を逆行し、重力と逆向きの作用が掛かる	216
③「話」のほうが速く、「観測」のほうが後だ	216
④脱力は違う、わたしは無力に立つ	217
⑤具体的な処理	218
⑥横隔膜のいちばん奥を通ったものは体験され、そうでないものは体験されていない	218

⑦わたしの無力は、あなたを無力化させ、いいに主題の支配が呼び込まれる。……	219
⑧稽古は、肉体にも文体にも全体にもひく	222
⑨稽古は時間的隔たりが感想されず、また時間的作轍（やへてへ）もなやれない	224
⑩体の形	225
稽（かんが）えろ	228

# 「そんな話はない」

「そんな話はない」というのがキーワードだ。

人々は、「話」が何なのかわかつていらない。

ショート動画を再生すると、スカートを短くした女子高生のふたりが踊りはじめる。

美人で、キュートで、脚がきれいで、バストが大きく、セクシーだ。

ふたりは踊り、照れくさそうにはしゃいでいて、青春、というようなイメージを与えてくる。音楽に乗り、とてもかわいらしい。

が、そんな話はない。

女子高生の二人組が、スカートを短くして、とつぜん駆け寄ってきてダンスを踊って、セクシーさを振りまくというような、そんな話はない。

そんな話はないのだが、そんな色（しき）はあるのだ。

目撃しているものが「話」ではないということに人々は気づいているのだろうか。

現代においては、「そんな話はない」がキーワードになる。

ショート動画をスワイプすると、次は見ず知らずのドイツ人青年が現れて、「見ててね」と言い、スケートボードのスゴ技を披露してくれる。

そしてスゴ技をキメたあとには、白い歯を見せて、サムアップを示してくれる。

そのスゴ技は、スゴいし、ドイツ人青年の彼はイケメンで清潔感があつてカッコいいのだが、だからといってやはり「そんな話はない」のだ。

見ず知らずのドイツ人青年が、駆け寄ってきてスケボーのスゴ技を見せ、ニカッと笑つてサムアップしてくるというような、わけのわからぬい話はない。それに「いいね」をプッシュするというような話もない。

「そんな話はない」のだが、そんな色（しき）はあるのだ。  
見ず知らずの中年男性が、

「どーも、○○チャンネルの、△△です！ えーと本日はですねえ」と言い出して、とつぜん最新家電のおすすめポイントを紹介していく

というような、そんな話はない。

とつぜん、発信者が誰かもわからないようなアニメ絵が示され、「重曹を使うだけでアツという間に台所がキレイになるワザ三選」を四十五秒で示してくるというような、そんなわけのわからない話はない。

見ず知らずの美容師が、見ず知らずの客を、ヘアカットして染色してブローして垢抜けさせるのを見せつけてくるというような、そんなわけのわからない話もない。

見ず知らずの誰かがいきなり目の前にやってきて、マツチングアプリを使っていてろくでもない異性にばかり出くわすと「マジで精神を病む」と語りかけてくるというような、そんなわけのわからない話はない。

申し訳ないが、末期ガン患者が「これから展望」について「緊急」と題打った話を赤の他人のこちらにいきなり向けてくるというような話もないし、「自宅でカクテルをおいしく飲むコツ」をきゅうに教えてくるお兄さんがいるとか、「大工歴四十年の父親が最近の職人について思うこと」を語りかけてくるとか、そんな話もないのだ。

そんな話はない、が、そんな色（しき）はある。

現代にあるのはすべて色（しき）であつて、話ではないのだ。

では、何が「話」なのか。

「話」というものが、本質的にどういうものなのか、それを説明するのは極端にむつかしくなる。

ただ、誰でも知っているのは、「浦島太郎」や「桃太郎」が話だということだ。寓話と呼ばれるような話だ。

あるいはアマテラスオオミカミが、天岩戸に閉じこもつてうんぬんと

いう、そういうのも「話」だ。神話と呼ばれる、カミガミの話だ。

一方、電柱に不動産広告が貼ってあり、「駅徒歩一分、新築4LDK分譲、八千万円」と書かれてるのは、さすがに「話」ではない。

また、日本交通状況センターの○○さんが、「東名高速下り線、△△インターから五キロの渋滞です」と言つてくるのも、さすがに「話」ではない。

一方、桂小五郎が、かつて江川太郎左衛門英龍坦庵と町人に扮装したことがあり、その経験が後の小五郎の逃走劇を救つたというようなことは、「話」と言つていいだろう。

あるいは、「泣かした事もある」冷たくしてもなお よりそう気持ちがあればいいのさ 俺にしてみりや これで最後の lady」というのも、直接的ではないが、一定の「話」として聞こえてこない。

一方、「残酷な天使のテーゼ 窓辺からやがて飛び立つ ほとばしる熱いパトスで 思い出を裏切るなら」というのは、色（しき）に満ちているだけで「話」としては聞こえてこない。

現代人は「話」がわかつていないので。

だから、「そんな話はない」がキーワードになる。

たとえば、

「千本桜 夜ニ紛レ 君ノ声モ届カナイヨ 此処は宴 鋼の檻 その断頭台で見下ろして」

これについて冷静に眺めれば、さすがに、

「そんな話はない」

と言えるだろう。

一方、草野心平の「さくら散る」の詩文を引用すると、

「はながちるはながちる ちるちるおちるまいおちるおちるまいおちる 光と影がいりまじり 雪よりも 死よりもしづかにまいおちる まいおちるおちるまいおちる／光と夢といりまじり ガスライト色のちら

ちら影が 生までは消え」

こちらにはたしかに「さくら散る」という話が聞こえてくる。

まずキーワードは、「そんな話はない」だ。

どんなマンガが流行り、どんなアニメが流行り、どんな歌が流行り、どんなツイートがバズり、どんなレスバトルが横行し、どんな YouTuber がどんなコンテンツを供給し、どんなインフルエンサーがどんな運動を拡散しているにせよ、それらはすべて色（しき）であつて話ではない。わたしはそのことを悪いと言つているのではなく、それらに染まりつづけると、あなたの話がなくなり、あなたの話が壊れ、あなたはあなた の話がないままに生き続けることになるということを警告したいのだ。

## 色（しき）とは「量」のことだ

○○県△市で火事があり、二人が重軽傷を負いました、というニュースがあつたとして、そのニュースはさすがに「話」ではない。

ニュースはただの「情報」であつて、話ではない。

ではなぜ情報は話ではないのか。

それは、情報には情報量があるからだ。

情報「量」という、量があるということ、それが色（しき）だ。

話には「量」がない。

浦島太郎という話には量がないし、桃太郎という話にも量がない。

もし、浦島太郎という話をフラッシュメモリに保存するとしたら、テキストデータとして何 byte かの情報量になるだろうが、そこに保存さ

れているのは浦島太郎のテキストデータであって、浦島太郎という話ではない。

色（しき）とは「量」のことなのだ。

色（しき）とは量であり、パラメーターであり、その比率だ。

われわれは、五円玉を拾つても、比較的ドーザーが出ない。

五十円玉を拾つてもあまりドーザーは出ず、五百円玉なら「おつ」

と思うかもしれない。

それが五千円になつたら「おおつ」となり、五万円だと逆に「えつ」と

なる。

それが五億円になつたら、「……」となる。

ドーザーが分泌される。

ドーザーの分泌「量」は、五円と五億円では大違ひだ。

不美人が三メートル向こうにいたとしても、ドーザーは出ない。

美人が三十センチの目の前にいたら、男性はドーザーを分泌するだ

ろう。

パラメーター比が違うし、ドーザーの分泌「量」が違う。

あなたのアカウントに、フォロワーが五人なら、あなたはしょぼくれているが、フォロワーが五万人なら、あなたはそれなりに肩をそびやか

すだろう。

「量」という概念、それじたいが色（しき）なのだ。

浦島太郎でしょぼくれることはできないし、桃太郎で肩をそびやかすこともできない。

「話」には量がないのだ。

あなたがAさんから、一万円もするプレゼントをもらえば、あなたはよろこぶかもしれない。

けれどもAさんが、別の人には、十万円もするプレゼントをしていたとすると、あなたは「ええーっ」となる。

Aさんからプレゼントをもらったという「話」は消え、コスト量として十分の一しか掛かっていない、「負けじやん」という色（しき）に取つて代わられる。

あなたは、古本屋で五十円で売られている浦島太郎の絵本より、総製作費五十億円が費やされた「シン・浦島太郎」のほうが偉いと思つていいのだ。

そのことについては、おれははつきりと、「救いがたいバカだ」と申し上げておく。

あなたはまず、五十億円という量にドーザーを分泌し、次いで観客動員数五千万人という量にドーザーを分泌する。

そしてじつさいの映画「シン・浦島太郎」も、映像・音響・演出・ワードセンス・イケボにおいて、ドーザー分泌を狙つてくるので、あなたはそれを見てドーザーを大量に分泌し、「名作」「感動」「芸術」「天才ですよね」「涙腺崩壊」と思うのだ。

重ねてはつきり言つておくが、それは本当に救いがたいバカだ。

このことは、あなたがいつか真剣に「救われないとマズい」と思い始めたときに必要な知識なので、容赦のない確たる言い方で記しておく。

量は色（しき）であつて話ではない。

最高裁判所や桜田門の建物がクソデカいのは、そのデカさで人を威圧しようというアホの発想の産物であつて、それじたいは何ら「法」の話ではない。

江戸時代の大火で江戸城が焼け落ちたとき、保科正之という将軍後見人は、「もう戦国の世は終わつたのだから、人々を威圧して見下ろす天守閣は要らない」と、まともな話をし、江戸城天守閣の再建はしないという政策を推進した。

以来、たしかに江戸城には天守閣がない。

（江戸城は現在の皇居です。いまも天守閣はありません）

話には量がなく、量という要素はそれじたいが色（しき）となる。

たしかに保科正之の「話」には量がないし、比率やパラメーターを当てはめることができない。

先のキーワード、「そんな話はない」に加えて、「それはただの量じやん」を言うことができる。

若い女の子が、肌を露出して、甘い声で自殺っぽいソングを歌い、「天然」っぽい仕草をアップロードし、ときおり「意味深」なツイートをすると、受け手側はドーパミンが出る。

そのドーパミン量が、大なり小なりあるというだけで、その甘い声のアーティストに何かの「話」があるわけではない。

彼女が語りかける話などなく、「音楽性」と呼ばれているもののすべては、どのように聴き手のドーパミンを誘うかということにしか向けられていない。

いま、どんなマンガが流行し、どんなアニメが流行し、その「画力」がどうであれ、その「作画」がどう派手であれ、それらはただドーパミンを誘導できる量を競っているだけだ。

何の話もない。

おれの言っていることが、ただの悪口だったならば、それが何よりも越したことではない。

ただし、おれの言っていることが本当で、事実あなたには何の話も与えられていないのだとしたら、あなたとしてはいつまでもこのことに無防備・無抵抗で恭順しているわけにはいかないのだ。

## 「手品に惹かれた、だから手品師になつた」

わたしは、自己紹介のときに「手品師です」と述べても、まあ差支えはないだろうというていて、その実演に通じている。

なぜそんなことになつたかというと、中学～高校のころに、その筋の人々に引き込まれたからだ。

具体的には、天王寺の近鉄百貨店の七階、おもちゃやのフロアの手品道具売り場にいたKさんという人の実演を見て、「おおっ」と引きずりこまれたのだが、そんな細かい話はいいだろ。

とにかく、そうした目撃があり、「手品に惹かれた、だから手品師になつた」と言つてよい。

わかりやすい、単純な話だ。

けれどもこの単純な話を、あなたはまともに受け取つてくれない。

簡単に言うとどういうことかというと……すでに最大に簡単に言つているのだから、これ以上簡単に言うことはできない。

「手品に惹かれた、だから手品師になつた」

おれの話を、あなたはまともに受け取らない。

ここであなたはきっと、おれの言つていることを「ふつうに理解している」つもりでいると思うが、そうではないのだ。

現代において、あなたが受け取つてているイメージ、あるいは捏造している理解イメージは次のようなものなのだ。



便利な時代になつたもので、お察しのとおり、ふたつのグラフィックは、いわゆる生成A-Iにだらしなくプロンプトを打ち込み、粗雑に出力したものだ。

現代人の頭の中は「これ」なのだ。

あるいは、精神構造じたいが「これ」に書き換わったと言つてもよい。

その他、さまざま形で「エモい」グラフィックを出力して当てはめることもできようが、ひたすら下品になるだけなのでこれ以上は控えようと思う。あなたの側の想像で補つてもらいたい。

おれの話は何だつたか。

「手品に惹かれた、だから手品師になつた」

おれの話は先ほどから変わつていなはずなのに、二枚のエモい・エロいグラフィックによつて、何かもう別のものに書き換わつてしまつたはずだ。

あなたはこのことを、ここまで追究したわけではないだろうし、このことここまで精細な自覚はなかつたと思うが、あなたは男女どちらであれ、こうした美麗な・エモい・エロいグラフィックを見せられると「わ

つ」となり、それだけでドーパミンが出るのだ。

そしてドーパミンの分泌「量」に合わせて、キヤブショーンに書かれて

いることをエモく神経に刻みこむ。

それで、おれは二枚のグラフィックに向けて言うし、またあなたに向

けても言うのだ、

「そんな話はない」

と。

じつさい、そんな話はないのだ。

手品に惹かれた、だから手品師になつたというのは、おれの若いころの話、おれが天王寺の近鉄百貨店の七階をうろついていたときの話であ

つて、グラフィックに描かれているふたりの女の子の話ではない。

ただ、たとえ生成A-Iのものであれ、描き出されたふたりの女の子を

悪しざまに言う気には、おれはなれない。

だからわざわざ正確に言うが、ここに表示されたふたりの女の子が悪いわけではなくて、彼女たちから誘われるドーパミン量と、それに比例する色（しき）を、「話」にすり替えようとする企みを持つ者が悪いのだ。

ここに生成された、きれいなふたりの女の子は、どこかで元気に樂しくしあわせにやつているのであつて、ただ、おれの話とは関係ないというだけだ。

話と色（しき）を結びつけるな。

色（しき）で話を補おうとするな。

彼女らには彼女らの話があるのだろう。

おれにはおれの話がある。

色（しき）、ドーパミン量の多少で、何かをわかつたつもりになるな。

あなたにはあなたの話があるだろうか？

このあたりで、あなたには自信を失くしてほしいし、恐怖を覚え始めてほしいのだ。

自分がこれまで「話」と思つていたものは、すべて「話」ではなかつたのではないか、という可能性、というよりは蓋然性に、恐怖してほしい。

一本の映画を見て、一冊の本を読んで、ひとりの人を知つて、じつは、自分は何らそれらの「話」を受け取れずにいるのではないか？

おれはあなたの悪口を言つてているのではないし、あなたを追い詰めようとしているのでもない。

そうではなく、このことが、あなたの根っこにどこまでもある不安、自信のなさ、あなたがずっと抱えているあなた自身の不確かさを、うまく説明するのではないかと思うのだ。

もしあなたが、観た映画、読んだ本、知つた人、それらすべての「話」

を確かなものとして受け取っているのだと仮定するなら、あなたのどこまでも自信のなさはおかしなものだし、あなたのいつまでもガキくささはおかしなものではないか。

おれは「話」の専門家として断言するが、「話」を正しく受け取るといふのはそんなに簡単なことではない！ たとえばあなたの観た映画について、あなたがそこに何を体験したか、それはどんな話だったか……あなたに原稿用紙五枚でも投げつければ、あなたは「うつ」と詰まつて立ちすくむのじやないか。それがふつうだ。

## 何の中で生きてきたか、何の中で育つてきたか

おれは子供のころ、典型的なファミコン少年、ゲーム少年だった。初代のドラゴンクエストやゼルダの伝説、あるいはゲームセンターの「スペースハリアー」などで育つてきたのだ。

友達と公園で遊ぶのも、どこか RPGじみていた。

おれは子供のころ、ゲーム世界を生き、ゲーム世界に育つてきた。

いま現在のおれだつて、一部はアレフガルドを歩いているかもしがれず、アーランド地方を歩いているかもしがれず、アサシン教徒となつてトップカプ宮のまわりを歩いているかもしがれないと。

おれはそのように生き、そのように育つてきたのだ。

おれと同年代の男性は、ほとんどが「ファミコン」をやつたことがあるはずで、その後もきっと、初代かIIかの「バイオハザード」ぐらいまではやつたことがあるはずだ。

ただ、同年代の誰もがファミコンをやつたとしても、誰もが誰も、「ファミコンの中を生きた」というわけではない。

あなたがコンビニでアルバイトをしたとしても、そのときのことを指して、「ファミリーマートの中を生きた」とは、あまり言うまじ。

コンビニのアルバイトでも、学ぶことはいくらでもあつたと思うが、それにしても、あなたは「ファミリーマートの中で育つた」とはあまり言わないだろう。

それはじつにもつたいたいことだ。

あなたが、ファミリーマートの中を生きたのではなく、ファミリーマートの中で育つたのではないとしたら、あなたはこれまでに生きてきていないし、これまでに育つてきていないとということなのだ。あなたがどこまでも、根っこで自信が持てず、老けてはいく一方で、いつまでも根っこでガキっぽいのはそれが理由だ。

生きてきていないし、育つてきていないので。

おれは十歳のときに、アニメ映画「天空の城ラピュタ」を観、衝撃を受けた。

また、二十歳のときに、映画「タイタニック」を観、やはり衝撃を受けた。

天空の城ラピュタは、おれの十代の生きようを大きく決定したし、タイタニックは、おれの二十代の生きようを大きく決定した。

Make each day count.

引き下がれなかつた。

友人からの洗脳で、くヴィメタルを聴くようになつていた。

I feel like I've been wasting precious time.

引き下がれなかつた。

おれはその中を生き、その中で育つてきたのだ。

それはそんなにおかしな話だろうか。

おれは、「ストII」全盛期のゲームセンターで育つたし、手品というエンターテインメントの中で育つた。

その中を生きてきたから。

阪神淡路大震災のとき、被災した街で住み込みのボランティアをする、その中で育つたし、その後も神戸で育ち、大学のアホ男声合唱団の中で育つた。

その中を生きたからだ。

いろんな人がいてくれて、いろんなことを教えてくれ、いろんな理不尽を叩きこんでくれた。

「伝統だから」

「声が小さい奴はショボい」

「ブルつたら負けやで」

正しいかどうかはさておき、その中を生き、その中で育つてきた。

無理をして、フロイトの全集を読み、畠正憲の全集を読み、その他シヨーペンハウアーやら西田幾多郎やら、構造主義やら、ドストエフスキーやらトルストイやらも読んだ。

ドストエフスキイの「罪と罰」は、一冊に詰め込むとじつにゴツい本であつて、それを布団に寝転びながら読んでいると、うとうとし始め、寝落ちした瞬間にそのゴツい本が顔面に降つてくるのだ。

まだ半分寝ている仲、顔面に本の角が刺さり、「ぐあっ」となつて、

「まさに罪と罰だな」

と、若い日のおれは思つたものだ。

凍える冬の夜、誰もおらず、近場の自動販売機だけがおれの味方だつた。

そういう中を生きて、そういう中で育つてきた。  
かなぐり捨てないと、人に見えないし、作品が聞こえてこないというのを知つた。

訓練した上でかなぐり捨てていないといけないのか。

しかも、かなぐり捨てた上で、本当に笑つていないといけないのか…

…それないと、本当ににはかなぐり捨てていかないのか。

そのことは、指揮台の上で知つた。

あそこに生き、あそこで育つたということを、おれはいやというほど今も覚えている。

モテない男は、フラれるもので、フラれるばかりの日々はとてもつらく、そんなおれに対してもやさしい女性はいてくれて、そのやさしさはちょっと信じられないぐらいのもので、だからこそ、そうした女性に甘えるのだけはクソだと思い、ぎりぎりのところで踏みとどまつた。そういう中を生きてきたし、そういう中で育つてきた。

東京に出てきて、丸の内に勤め、初めの一週間は部長に毎日六本木に連れていかれる、そして夜中の三時に交差点に置き去りにされる、という日々を過ごした。

背の高い真っ黒なガーナ人に、路上で、

「お前、毎日置き去りにされているじゃないか」

と同情されて、おれは、  
「うるせえ」

と応えた。

最後のほうは、もう朝が眠くてしようがなく、出社時には歩きながら寝て植え込みに突っ込んだ覚えがある。

それでもなんとか、遅刻はせず出社して、「余裕っスよ」とだけウソをつき、トイレの個室に入つて屁まで氣絶した。

二日間だけ、明らかに役に立たないニセモノの「研修」があり、三日目

からはデスクについて実地だった。

初めて取った電話は、イランの弁護士からで、なまつた英語をまくし  
たてられ、死ぬほど何を言つているかわからなかつた。

翌週には、何も知らないまま単独で東芝の課長のところに営業に行か  
され、すべてを知つたかぶりで一時間のやりとりをなんとかしのぎきつ  
た。

（「お前は顔がフケているから大丈夫」というでたらめな言いようで行か  
されたのだが、無理に決まつてはいる、ひどい話だ）

（あまりにひどい話だったので社名を出してやつた、もちろん東芝さん  
の側は何ひとつ悪くない）

そういう中を生きてきて、そういう中で育つてきた。

思えば、そうして生きてきた中に紛れ込んでいた大江健三郎の一冊が、  
現在のおれをここまで大きく決定したのだった。

おれは大江の文体と文学理論に生き、その中を育つてきている。

いまになって、合唱曲の音楽と、唄われていた詩文によつても、深く  
育てられてきているということがわかる。

そのときはその中を生きていたから。

何かがわかつていたわけではなく、ただその中を生きて、その中で育  
つってきたのだ。

さてこのようにして、いささか柄でもないが、おれ自身がこれまでに  
生きてきた「話」を少々してみた。

もちろんこんなことは言い出せばきりがないのだ。

ところで、ここでA子さんが、  
「数年前、タピオカ屋の制服がすごくかわいかつたから、そのタピオカ  
屋でバイトしていました」

ということを言つたとしよう。

そのことは何も悪くないが、それは果たして「話」なのだろうか。

「話」になるかそうではないかは、一点で決まる。

その中を生きてきたか、その中で育つてきたかと、いう一点だ。

かわいい制服を目当てに、タピオカ屋でアルバイトをするというのは  
何も悪いことではないし、かわいい女性がかわいく働くのは素敵なこと  
だが、彼女がそれで「あのときわたしはあそこに生きた」「タピオカ屋の  
中で育つた」ということにならなければ、そのことは彼女に彼女の  
の「話」をもたらさない。

ここでBくんが、

「おれ、バイクあるし、ウーバーイーツ始めてみようかな？ 道に詳し  
くないけど、逆に道を覚えるために、一石二鳥でやつてみたらいいかな  
つて思う」

と言い出したとする。

その案は、何も悪くないものだ。

ただ彼がやはり、後になつて「そのときウーバーイーツの中を生きた」  
「ウーバーイーツの中で育つてきた」と言えないのであれば、そのウー  
バーアイーツ勤務は、彼に彼の「話」をもたらさない。

このようなことをつづけていると、何十年も生きるあいだ、「何の話も  
なく生きた人」になつてしまつ。

誰だつて、生きているうち、色んなことがあるものだ。

けれども、それはまさに「色んな」ことであつて、色（しき）だ。  
色（しき）は話ではない。

誰だつて小学校に行き、中学に行き、多くの人は高校に行く。部活動  
に入る人も多いだろうし、その後は人それぞれ、就職したり結婚したり  
する。

友人と遊び、あちこちお出かけするだろうし、海外旅行にいく人も多  
いだろう。

だが、自分に何かを足したって、自分に何かを貼り付けたって、それは自分の「話」にはならないのだ。

自分がそのとき、その中を生き、その中で育ったということにならないかぎり、自分の「話」にはならない。

いまこのとき、ふとおれは思い出したことがある。

シヴアとかヴィシュヌとかブラフマーとか、名前を出せば、「インドの神様ですよね」と、博学な人は知っているかもしだれない。

そのとおり、ヒンドゥー教の神様だ。

そのことは、検索すれば出てくるが、おれは数日、そのヒンドゥー教の中を生きたことがある。

いま思い返せばそうだ。

おれはガンガーのほとりで日々を過ごし、夜も昼も、早朝も、いつのまにか、ヒンドゥー神話の中を生きていた。

あのときからおれは、決定的に、根暗にはなれない男になつたのかもしれない。

(本当に唐突に、いまこのことに思い至つた)

おれはあのとき、あの川べりに生きていて、あの世界の中だけつこう育つたのだ。

(いまこのときまで、その自覚がまつたくなかつた)

一方、

「小学五年のとき、担任がマジでキモくてさあ」

「中一のとき、部活の顧間にセクハラされたんだよね」

「中三のとき、クラスのみんな超仲良くて、すごい楽しかった」

「高校のとき、ビジュアルバンドの追っかけやつてて、割と病んでいたと思う笑」

「大学のとき、付き合つた彼氏がすごい束縛の強い人で」

「就職してから、満員電車がマジで無理な自分に気づいた。そのころか

らめまいがひどくなつたんだよね」

こうしたことはたしかに“色々ある”のだ。

でもこれらは「話」ではない。

担任が「どれぐらい」キモかつたかという量、顧問のセクハラが「どれぐらい」イヤだったかという量、クラスメートの仲が良くて「どれぐらい」楽しかったかという量、追っかけをやつていて「どれぐらい」病んでいたかという量、束縛が「どれぐらい」強かつたかという量、満員電車が「どれぐらい」無理で、めまいが「どれぐらい」厄介かという、量の取り扱いだ。

色（しき）であつて話ではない。

あなたは担任のキモさの中を生きたとは言わないだろうし、顧問のセクハラの中を生きたとも言わないだろう。クラスメートが仲良しの中で育つたとも言わないし、追っかけと病みの中で育つたとも言わない。もつたいないことだ。

あなたが、めくるめくショート動画を視聴する中で、じつは何の話にも触れてはいないということが観えてきただろうか。

ここまで精密に「話」とそうでないものを見分けていくなら、あなたはこれまで自分が生きてきた「話」について、果たしてどうなのだろうかと、一定ていど不安を覚えたはずだ。それが正しい。

何かの中を生きてきた人、何かの中で育つてきた人、そうした話の中を歩んできた人というのは、実数としてとても少ない。

# 成長について

成長、などという、ダサいことは言いたくないが、それをダサいと言放てるのは年齢として思春期のうちの特権でしかないし、あるいはちゃんと成長を得てきた人が、しがない露悪趣味としてそう言い放ちうるというだけの、やはり特権でしかない。

あなたは成長したいと思っているかもしれない。仕事において、人間関係において、あるいは部活動において、恋愛関係において、また人として、個人として、自分として、さらには芸術として、人によつては親として、成長したいと思っているかもしれない。

それらのすべては、「Aとして、成長したい」という言いように一般化できると思うが、それについてあなたが努力を惜しまないとして、おれからはささやかなアドバイスを申し上げたい。

それは、他人受けする努力を貼り付けるよりは、Aの中を生き、Aの中で育つほうがよい、ということだ。

ヨソで努力・勉強したものを、引っ張ってきてあてがい、それでAを攻略しようとは考えないほうがいい。

つまり、たとえば仕事というなら、仕事の中を生き、仕事の中で育つほうがいい。

あなたの仕事が仮に、ダンボール箱を手配することなら、あなたはダンボール箱の中を生き、ダンボール箱の中で育つほうがいい。

本当の成長というのは、「わたしはダンボール箱の中で育つたんです」という話それじたいを指すからだ。

たとえば、「人間関係攻略法」というような本があつたら、その本をただちにゴミ箱に捨てる。

そして、人間関係の中を直接生き、人間関係の中で直接育て。飼い始めた犬のしつけの仕方がわからなかつたら、犬のしつけの本を読むな、飼っているタロウ自身の声を読め。

犬のしつけの仕方がわからないんです、と、他人に相談せず、タロウに直接呼びかける。

「お前のしつけの仕方がわからないんだ」とタロウに呼びかけろ。

タロウにしつけをする中を生き、タロウにしつけをする中で育て。そこを省略しようとする逃げを打つな。

犬のしつけの仕方がわからないなら、「わからない」の中を生きろ。

「わからない」の中を生きつづけ、「わからない」の中で育て。

「わからない」のまま、タロウの首に親しくヘッドロックを掛け、その中を生き、その中で育て。

その中を生き、その中でもがくことで、その中で育つていき、「生きもの」と話が通じる、こころが通じるつてやり方を、知つたんだよね

「超かわいいんですよ」と、得意げに知り合いに話すことにはあまり意味がない。

そうではなく、タロウに向けて「かわいいな」と言い、その声を聴いたタロウが、

「ほんと?」とよろこんで応えるということのほうに意味があるのだ。

「勅命である」と言われても、あなたには、「勅命」が何なのか本当にわからないだろう。

それで、あわてて検索をするな。

検索して、勉強「量」で、努力「量」で、なんとかしようとすると。

努力量をあてがつて何かを攻略するつもりになるな。

「勅命」が何なのかを知りたければ、帝国軍の中を生きる。帝国軍の中を育て。

帝国軍の中を生き、元帥府の中で育てば、勅命がわからないなんてことにはならないから。

マリオとルイージが何をやっているか、知りたければ、クリボーを踏みながら生きる、キノコを食いながら育て。

人が何を唄っているのか、また歌とは何なのか、知りたければ、歌の中を生きる、歌の中で育て。

音楽室の中で、勉強と努力で攻略しようとは考えるな。

メンデルスゾーンの音樂性が知りたければ、メンデルスゾーンの音樂の中を生きて、メンデルスゾーンの音樂の中で育て。

教科書でどれだけ勉強しても明治維新のことなんてわからない。

天誅、國家転覆、為ざればその場で切腹、その中を生きて、その中で育て。

そうでなければ維新なんてわからない。

（公安の人へ、わたしはあくまで歴史の話を申し上げているだけなので、念のため）

Aの中を生き、Aの中で育てば、Aによって進んできたあなたという、「話」が得られる。

Aについて、あなたが「どう思う」というようなことは、あなたの話ではないのだ。それはただの、あなたの感想だ。

たとえば、桜田門外の変について「どう思う」というようなことは、あなたの話ではない。

なうではなく、桜田門外の変と言えばすぐに、

「やつぱよ」

「やりもつそ」

と、腰の刀に手が伸びるということ。それが桜田門外の変という「話」だし、サムライという「話」だ。

そういうことの中を生き、そういうことの中で育て。

成長についての、おれからのアドバイスは、Aについて遠ざかって努力をせず、Aの中を生き、Aの中で育てということ。

そうしたら、あなたはまず、自分の真ん中がそんなに強くないということに気づくだろうし、あわせてこれまでの自分が臆病で逃げ腰で他人に依存していただけだということに気づくだろう。維新志士たちは教科書で維新を勉強したわけじゃない。腰の物でそう育つた。

## 損得

色（しき）は、話ではない。  
色（しき）は、「量」だ。

「量」といって、それは何の「量」なのかというと、行き着くところ「力」の量ということになるのだが、そのことを言い出すにはまだ説明が足りないだろう。

さしあたり、われわれが実地で目撃していくのは、量といえば「損得」のことだ。

損得というのはさらに、すぐにでも「量」という尺度を超えていくのだが……そのことを言い出すのにもやはり、まだ説明が足りていない。

街中のあちこちには、何でもないじいさんたちの集まりや、何でもな

いばあさんたちの集まりを見かける。

そうした老人たちの集まりにはしばしば、何か「いかがわしい」気配を覚える。

われわれはそうしたものを、すでに見慣れてしまつてゐるので、いまさら何とも思はないのだが、その集団は何かがキナくさく、何かがいかがわしいのだ。

さして仲が良いとも見えないのに、何かを大声で言い合つており、傍若無人で、電話が掛かってくるとやはり大声で応対し始めるなどもあり、全体としてあつかましさがにじみ出でている。

彼らは、何かの「話」に集(つど)つてゐるわけではない。

町内会で何かがあるかもしないし、市政とかかわつて何かの折衝があるのかもしないし、商工会や医療法人や、あたらしく建つホテルの不動産関連で何やかんやとあるのかもしないが、それらは「話」ではない。

彼らは「損得」に集つてゐるのだ。

損得、という原理で彼らは拳動し、いま彼らはそこに集つてゐる。

まさか耳をそばだててラジオから聞こえる「牡丹灯籠」に聞き入つてゐるというわけではあるまいし、有線から流れる三橋美智也に聴き入つてゐるというわけでもあるまい。

「損得」で目をぎょろぎょろさせ、「損得」で拳動し、「損得」で集まつているのだ。

利益量を大にし、不利益量を小にすれば、得になる。

そうした色(しき)で拳動している。

話の中を生きていらない人は、早晚、そうした「損得拳動」に行き着く。内心、

(いま○○さんのところに食い込んでおいて、損はないな)

(ここで△△さんと顔をつないでおけば、のちのち得があるかもな)

(これ以上××さんと関わつても、何の得にもならないわ)

(ここで□□さんと縁が深いというふうに見せておかないと、別の会合があつたとき損をするでしょ)

そんなことばかり考えている。

それで、そこに集まつて、何をしているかというと、何もしていないのだ。

そこに集まつて、顔をつないでおけば、得があるかもしないということで、ただそこに来て、「最近のアレはさあ、もうダメだよ。だつてさあ」と、ただ思いついたことを大声で発してゐる。

何の意味もなくそこにいるのだが、それでもそうしてそこにいないと、何かの「おいしい話」があつたときに、自分が入り込みそこねてしまうので、無意味なままそこにいるのだ。

そこで、○○さんのやつてゐる事業が下振れでいるらしく、「この先はもうないな」と見越せたら、ただちに自分は無関係の人となつて姿を消す。

何の話でもなければ、何ら友人でもない。

「損得」ばかり考えているのだ。

もはや当人はそうしたことを考えているという自覚もなく、ただまるで昆虫のように、損得を本能として拳動してゐる。

若い人の場合、

「Aさんのところには、若くてエロい女の子が来がちだから、食い込んでおこう。Aさんはおだてておけば気安いし」となる。

「Bさんのところには、人脈とか社会的立場とかがけつこうある人が来るからな、親しく入り込んでおけば、ころつとおいしいコネとか就職先とかにつながるかもしない」

となる。

「Cさんのところには、この先、おいしい展開は待つていなさそうだし、もうこのへんでいいかなって思うわ」

となる。

「Dさんのところには、ヤバい人たちがけつこう来るから、この近所で万が一揉めたときのことを考えると、いざというときのためにDさんと知り合いでいるほうが頼もしいわ」

となる。

若い人は、こうした色（しき）に囚われたとき、自分でそれを「情熱的」「リアルで充実している」と感じがちだ。たしかにリアリズムにおいてはそうなのかも知れない。

ただ、本人としては情熱的・充実的に思えても、やっていることは單なる色（しき）の虜囚なので、当人の内部はむしばまれてゆき、目に透明感がなくなり、独特の皮膚感とともに、存在が汚らしくなっていく。

そしてそうなると、日々、内心と鏡の前で発見する自分の汚らしさに、自分自身も失望して、もう「話」について興味がなくなってしまうのだ。自分の生きる「話」というのも、「もうどうでもいいや」ということになつてくる。

そうなると、もうどんな「話」も響かなくなり、どうあがいても、「話なんか、要らないので、少しでもトクになる情報をくださいよ」

という思いばかりが百パーセントになつてしまふ。  
そしてそうなると逆に、人というのは、その形で安定するのもある。

そうして安定すると、それを当人は、「いや、人ってそういうものでしょ」「みんな、大人ですから」と半笑いするようになるのだ。

それが「人」の真の姿なのか、それとも単に生き残ることができなかつた人の姿でしかないのか、おれにはわからないが、とにかく多くのケースにおいて、人は加齢と共にそうなっていくという事実だけを述べて

おきたい。

当人は、もう何らの自覚も持たなくなるので、当人に訊いても無駄だ。

そのことは早ければもう中学生ぐらいのときに起こつていて、色（しき）の果ては、量であり、量の人は直接、「損得拳動の人」として目撃される。

一見、楽しそうにしている人も、つまらなそうにしている人も、なぜそこにいるのかというと、じつは「得をしたいから」「損をしないため」にそこにいる。

おれは損得ではなく「話」で拳動し、どこにいるときも「話」によつてそこにいるが、拳動がそうした原理になつている者は、実数としてはやはり少ないと申し上げておく。

## 親の人生を生きる

色（しき）は量であり、量はたいてい「損得拳動」の形になる。

もちろん人によって、どういう得をしたいとか、どういう損はしたくないとかいう、こだわりや偏りがある。

人によつては、銭金の損得について異様に鋭敏という人もいるし、人によつては、色恋沙汰、スケベの損得について異様に鋭敏という人もいる。見栄えやチヤホヤされるということに鋭敏な人もいれば、労働力の損得に鋭敏な人もいる。

そして、どういった損得に鋭敏になるかは、多くが親からの遺伝だ。

よつて、多くの人は、単純に言つて「親の人生を生きる」ことになる。

このことは、遺伝子（gene）のはたらきとしては正しい。

すでに過去の学者によつて説明されているように、遺伝子のはたらきは利己的だ。

献身的な働きバチでさえ、女王バチのために働いているのではない。

遺伝子の構成上、働きバチにとつては、自分が子を成すより、女王バチに自分の妹を生んでもらつたほうが、自分の遺伝子が濃く保存されるというだけだ。

働きバチは人間と違い、「子供が欲しい！」ではなく「妹が欲しい！」なのだ。

遺伝子というのは、そういう身も蓋もない、自己増幅（自分量）への合理的な、悍（おぞ）ましいはたらきのみをする。

これは、そういうサイエンスなのだからしようがない。

電卓が、計算ばかりをし、そのこと以外をしようがないということのよう、遺伝子は、自分の遺伝子を増やす機能のみを持つ。

だから、遺伝子の仕組みとして、色（しき）・量の人は「親の人生を生きる」しかないのだが、このことは遺伝子から見れば「本望」ということになる。

じつさいわれわれもそうなるのだ。

未だすべての話から切り離されないうちは、「親の人生を生きる」などと聞かされると、「げつ」と反応して忌避感を覚えるものだが、しだいに加齢して損得拳動のみをするようになつていくと、親の人生を生きるということについて、遺伝子のまま、

「本望かもね」

と感じるようになつてくるのだ。

損得拳動は、みずからで獲得する拳動ではなく、元から遺伝子に具わつている、遺伝子の拳動だ。

そして遺伝子はとうぜん親から受け継いでいる。

だから損得拳動は、初めから「あなた」の拳動ではなくて、あなたが長年見てきた「親の拳動」だ。

そして、その親を捕まえて言うなら、やはりその親自身の拳動でもないのであつて、それはもともとの「遺伝子の拳動」だ。

仏教ではこのことを業（カルマ）と呼ぶ。

もちろん、遺伝子は gene だけでなく meme もあるから、現代のように「巨乳！」がミーム化すると、父親は貧乳好きだったのに息子は巨乳好きだということも起ころるかもしれない。

だがどちらにせよ、あまりにもどうでもよすぎるのことだ。

色（しき）は量であつて、量は損得拳動となり、人は多くの場合で「親の人生を生きる」。

初めはそのことに忌避感があるが、損得拳動に染まつていくうち、「本望かもね」と思うようになつてくる。

そのことが誤りなのか、悪いことなのか、それともそれでよいのか、おれにはわからない。

ただおれはやはり、初めから言つているひとつのことと言ひ続けるのみだ、

「そんな話はない」

## 色魔

現代には、かわいい女の子がたくさんいる。

そして、エッチな女の子もたくさんいる。

じつさい、標準的と言いたくなるような高校生の明るい男子が、同級生のことを指して、

「え、あいつマジかわいくね？ しかも胸でかいし、ヤバいんだけど」と、高い声で堂々と言い合っているのを耳にすることがある。

おれは文化の異なる世代として、正直おどろいてしまうのだが、おれがおどろくということには何の意味もないだろう。

ところで、かわいいとか、胸がでかいとか、ヤバいとか、それらはすべて形容詞だ。

現代人は、「マジ」「ヤバい」「ありえなくね」「尊い」「わかりみが深い」と、形容詞・形容動詞のみで会話している。

そして形容しているということは、パラメーターがあるということだから、それは色（しき）だ。

色（しき）は話ではない。

「浦島太郎い」という形容詞は存在しない。

「あいつマジで浦島いよね」というような言い方はできない。

標準的な明るい高校生は形容詞で会話しており、それが標準的な明るい大学生になるとさらに大きな声で「ヤバい」「エロい」「エモい」と露骨になつた形容詞で会話している。

それらのすべては色（しき）だから、彼らは単純に言つて「色魔」だと捉えてよい。

いわゆる「陽キヤ」は色魔だし、もちろん「陰キヤ」も色魔だ。

公然とスケベキャラクターのコスプレをし、人々がそれを写真にバシリバシ撮り、それを電腦通信で拡散し、人々が「いいね」と言い合つているのだから、それらは色魔以外の何物でもない。

何の中を生きているのか、何の中で育つているのか。

何の話の中も生きていらない。

ただの色魔だ。

皆、明るくて、充実しているふうで、健全なように見えるのだが、性質としてはただの「色魔」になつてしまつていて。

色（しき）は話ではないので、色魔に話は通じない。

意地悪を言つているのではないし、悪口を言つていてのでもない。

人々は、いまそのことで困つてているだろう、ということに同情を申し上げているのだ。

あるいは少なくとも、これから各自、致命的に困る局面に至るだろうということについて、先触れを示しているのだ。

致命的に、話が通じない。

テンションの大小というような、やはりドーパミンの量しか返つてこない。

そのことが、他人事ならまだしも、自分のことだつたとしたら、さすがに人は青ざめる。

人は多くの場合、「いざとなれば」、自分はまともな話ができると思っている。

けれども、そうではないと、おれは話の専門家として申し上げておこう。

何の話も生きてきていないのに、「いざとなれば」、しづかに聞こえてくるひとつ的话を申し述べられるというようなことは、完全に幻想だ。

おれの前に来てふつうに話してみればいい。

信じがたいような絶望感に、多くの人はめまいを起こすだろう。自分で、

（なぜまともに話ができないんだ？）

ということに動搖する。

「あれ、なんか話が行方不明になつちやつた。いや、だから、あれちよつ

と待つてください。つまりですね」

どうやつても、「話」なんか出てこないと、おれは専門家なので前もつてわかる。

あなたからは、ヘンな挙動が出て、ヘンな声が出て、ヘンな語が出る。あなたは内心で、

（え、なんでわたしそんなヘンなこと言うの。なんでこんなヘンな声を出すの）

と自分を諂（いぶか）る。

こうして取り乱し、行方不明になつて苦しむあなたを、長引かせることには何の意味もない。

だからすつきり整理しよう。

色魔というものがあるのだ。

それも、エッチな意味に限定してではなく、広義においてだ。

色（しき）とは、量であり、パラメーターであり、比率だ。

それのみに反応する、色魔になつてしまつた。

色（しき）と話は異なるのだから、色魔に「話」は取り扱えない。

自分がいつのまにかそうなつてているということに、あなたがなかなか

気づけなかつたというだけだ。

そんなことが、仮にあつたとして、いまここでそのことに気づいて、仮にマジだつたら青ざめるというだけだ。

自分が、悪口ではなくてガチの色魔になつたというようなブツ飛んだ

話は、ふつうの人はなかなかシリアルな意味では受け止めかねるだろう。

何のせいでそうなつたのかといふと、それはもう、世の中のせい、といふことにしておいていい。

少なくとも、あなた個人のせいだけではない。

だが、そんなことはどうでもいいのだ。それが世の中のせいであろうがなかろうが、けつきよくあなたをなんとかするのはあなた自身でしか

ないのだから。

いま、標準的な明るい高校生は、同級生女子へのすなおな性的関心を示すのにこなれたというわけではなく、ただ色魔になつただけだ。

その色魔の昂るエモいシーンを、わざわざ「アオハル」と呼んだからといって、それが「それっぽく」思えるというのは、ただの色（しき）だ。やはり「そんな話はない」ということばかりが当てはまる。

「アオハル」のはずの高校生が、少し入り込んでみると、じつは「エッチ」ということしかわからない生きものになつていたらどうする。

漠然とした「エモい」ということしかわからない生きものになつていたらどうする。

何の話も、本当にはわかつていなくて、何の話も生きていなくて、時にギャハハハーと大声で笑いながら、ただ、

「エッチじやね？」

「ヤバくね？」

「エモいんだけど」

という、漠然としたドーサミン・パラメーターを変動させることだけで活動していたとしたら。

「あなたは本当に、色魔というやつなの？」

いつかそう問い合わせたくなるときが来てもおかしくないだろう。

問い合わせされた当人は、「えつ、それってどういうこと」と、ニタニタしている。

話が通じていない。

この、色魔は話が通じない、話が取り扱えないという問題は、深刻とすべきなのか、あるいはそれ以上に、リアルに「ぐつちやぐちや」になつてしまつていて。

大谷翔平がヤバくて、藤井聰太もヤバくて、オールドメディアはオワコンつすよね、みたいなことを、狂つたドーサミン量で撒き散らすだけ、

そのことを当人らは本当に「会話」「コミュ力」だと思っているふしがある。

あなたはいま、おれの話を、すなおに聞いてくれているところだ。  
あなたはいま、おれからの影響づけによって、「話」という事象について接続できている。

けれども、いま話されたことについて、あなたが述べようとするとどうなるだろう。

そのときあなたの「コミュ力」は、

「ヤバいっすね、これは」

と応えかねない。

コミュ力。

そのときあなたは、ここまでに受け取ってきた話をみずからで見失ってしまう。

そのときあなたが、果敢にもドーザーを増やせば、  
「でも、なんとかしていきましょう！」

と、キラキラしてあなたは言うかもしれない。

あるいはそのときあなたが、まことにドーザーを減少させれば、  
「じゃあ、もう無理ってことですよね」

と、真っ暗な声でつぶやくかもしれない。

前者は「マジ明るい」で、後者は「マジ暗い」のか。

それはそのとおりだろうが、やはり、同じことが繰り返される。  
「そんな話はない」のだ。

## 量は状態をもたらし、状態は実感をもたらし、実感はふたたび量である

「話」を受け取れ、という、ただそれだけのこと。

話を受け取れと言われたら、ただちに「ハイ」と言いたいところだが、じつさいにやってみると、もうそんなことは出来なくなっていますよという、警告というよりは通知の話。

おれは、現在から七年前、二〇一八年の一月に、「フィクション・クライシス」を唱え始め、この危機に対するせめてもの抵抗活動をしようとしました。

いや、じつさいに抵抗活動をし、そのときから抵抗活動をつづけていきます。  
まあ、規模が極小なので、全体の趨勢に対してはまったく無力なものだけれど。

ただおれは、以前からずつとこのことを言っているのだということを、懲りもせず述べたいのだった。  
それだっておれの「話」だからな。

話と色（しき）は違うのであって、話の機能を失えば、人は色魔になるのだ。

現代アオハルの高校生は、乳デカ漫画を読み耽っていて本当に大丈夫なのか？  
たぶん、大丈夫なわけはなくて、すでにものすごいことが進行してし

まったくのだが、そのことを嘆いていてもしようがないので、話を続けよう。

「色（しき）は、話ではなく、「量」だ。

「量」を取り扱うということじたいが色（しき）ということ。

そして、「量」は、一定ごとに「状態」をもたらす。

じつは、われわれは、このことで日常を生きているのだ。

説明しないと意味不明だろう。

たとえば、販売店の課長は、在庫「量」を把握している。

在庫量を把握していないと、在庫切れという「状態」になってしまふかも

かもしれないし、在庫過多、不良在庫という「状態」になってしまふかも

しれないからだ。

あるいはもつと単純に、

「十時の待ち合わせだから、八時半には家を出なきやね」

というようなこと。

家から駅までの移動に要する時間量、駅から駅まで電車で移動する時間量、駅から待ち合わせの喫茶店まで移動するのに要する時間量を、「量」

る」と、だいたい八時半には家を出ておきたい、ということがわかる。

この、適正な時間量を誤ると、「遅刻」という状態になつたり、「早く来すぎちやつた」という状態になつたりする。

「量」は「状態」をもたらすのだ。

大量に食べると食べ過ぎ状態になり、少量しか食べないと空腹状態にななる。

受験生の、勉強量が多ければ、高学歴という状態になつてゆき、勉強

量が少なければ、浪人生という状態になつてゆく。

仕事量が多すぎるとパンク状態になり、仕事量が少なすぎるとヒマ状

態になる。

娯楽量が多ければ「楽しい」という状態になり、娯楽量が少なければ

「退屈」という状態になる。

財産量が多くなれば金持ちという状態になり、財産量が少なければ貧乏という状態になる。

肉を加熱するとき、加熱量が少ないと生焼け状態だし、加熱量が多すぎると肉はカチカチ状態になる。

「きのう、あまり寝ていなくてさあ。睡眠不足なんだよ」

というのは、量→状態についての情報であって、「話」ではない。

「なんで寝ていなかつて？ 仕事が、繁忙期でさあ。残業つづきなんだよ」

これも、量→状態についての情報であって、「話」ではない。

「そもそも、人員が足りていないんだよね。上の人がバカでさ、マジうちの会社終わっているよ」

これも、量→状態（以下略）だ。

「ところで、おれ今月、けつこう散財しちやつてさあ。きょう、貧乏なんだよね。あときのう、自宅でステーキ焼いたんだけど、焼き過ぎでカチカチになつちやつた笑。そういうえばキミって、自宅からここまで何分ぐらいかかるの？ あ、そうだ、おれ新しく動画のサブスク入つたんだよ！ 観たい動画がたくさんあるのマジで超楽しい、生活に潤いが出るよね」

量→状態がダメと言つてはいるのではなく、ただこのようにして、人は<sup>へへ</sup>永遠に「話」に触れられなくなる<sup>vv</sup>のだ。もちろん当人としては、これらがまさか「話」ではないとは露ほども思つていない。

加えて、状態はさらに実感をもたらす。

「ところできあ、おれもついに、誕生日来て、三十歳になつちやつたよ。うわあ、ついに来たね。三十歳つて！ もうおじさんだよ。ついに、若者じやくなつちやつた。なんかこう、ずつしり来るものがあるよね。なんかもう、いろいろ、キツいわあ笑」

三十という数値は加齢の「量」だし、それによって若者という状態から中年という状態に変わるのかもしれない。そして、与えられた「状態」は「実感」をもたらすのだ。

「二十歳になつたときもさあ、同じように思つたんだよね。おれもついに、十代ではなくなつてしまつた、って。でもそのときとは何か、やっぱりインパクトが違うわ笑。若いときって、自覚ないけど、若いつてことだけで、その若さが自信になつているんだよね。その自信がついにはぎとられたってことがキツい。何かこう、リアルなものを感じる」

そして、実感はふたたび「量」となる。彼の口述によると、二十歳のときの年齢の実感と、三十歳になつたいまの年齢の実感は、実感の強さ、実感の質量が違うらしい。

このようにして、われわれの自我は、量→状態→実感→量という循環を繰り返していく。

それで、いつまでたつても「話」に至ることはなく、ついぞ何の話も得ないまま、何十年も生きていくと、いうことがありうるのだ。

量「なんか最近、飲酒量が増えてさあ」

状態「それで正直、最近は、朝起きたとき、身体がダルいんだよね」

実感「そうすると、あ、マジでこういうふうになるんだ、本当に健康に気をつけないと、やつていけなくなるんだって、本気で思わされるよ」

量「これまでも健康への意識はあつたけど、なんかこれまでのやつとは違う。もつとヘヴィなやつだよこれ」

状態「だからさあ、情けないけど、おれ自身なんか勢い落ちてきたなつて自覚あるんだけど、これやつぱりしようがないと思うんだよね」

実感「むかしの人が、寄る年波には勝てないって言つていたけど、それつてこういうことなのがあって、ようやく思い知らされるよ」

量「そそこそこの年齢になつたら、年齢のことすなおに受け入れようと、思うのは思つていたんだけどね。いやあ、甘かったわ。リアルに来たら、

なんかけつこう切ないぐらいの感じするわ」

こうした日常会話について、もちろんわたしは糾弾の目を向けるわけではない。

けれども、こうしたことが延々つづけられて、そのうちにますます「話」から遠ざかっていくということについて、本来はもつとれつとアナンダウンスがあるべきだと思うのだ。

量「正直、もうガマンの限界」

状態「なんかね、もう、わたしの中で何かが壊れたの」

実感「あー、もうね、少なくとも、向こうから謝つてこない限りぜつたいたい無理」

量「どれぐらい無理かつて、もう、生まれてこの方、これ以上の無理はないってぐらい無理だよ笑」

状態「なんかさあ、なんでわたしがこんな思いをさせられなくちゃいけないの？」って、そのことじたいが理不尽で許せない」

実感「なんか思い出したら、ますます腹立つてきた」

量「今回だけのことじやなくて、これまでの蓄積なんだよ」

状態「ああもう、怒り過ぎて吐きそう。気持ち悪い」

実感「こうしてさあ！ けつきよく、いつもわたしが損するんじやん。わたししばっかり苦しんでんじやん」

量「どれだけ苦しんでいるか、誰もちつともわかつてくれない」

どのような事情があつて、このように「大荒れ」になつているのかは不明だし、もちろんその事情の内容はいまここでの焦点ではない。

まさかこうしたことのすべてが、事象として「話」ではないのだと言われても、一般の人にはとてもどうしたらよいものか、取り扱うことじたいが不可能だろう。

このように、往々にして、われわれが「話」と思つてゐるものは、事象

としては「話」ではないことがある。

ひいては、われわれは「浦島太郎」をひとつのお話として知っているが、それを本当に「話」として取り扱っているかどうかは、いささかあやしいところなのだ。

浦島太郎が、いじめられていたカメを助けたという、「正義」の量、あるいは「親切」の量、さらには「義侠心」の量は、浦島太郎の「話」ではない。

竜宮城がどれぐらい豪勢かという、そのきらびやかさの量も、浦島太郎の「話」ではない。

玉手箱を開けて、老人という「状態」になつたといふことも、浦島太郎という「話」ではない。

このあたりは、本当に説明しようとすると専門的になりすぎるので、いまは簡易な説明に留めよう。

量、状態、実感というのは、話の「要素」ではありえても、それじたいが話にはなりえない。

量、状態、実感は、あくまでへへ主題に寄与するものとしてある場合のみ▽▽、話の要素たりえるのだ。

たとえば、「大きなつづら」と「小さなつづら」という表現があつたとして、つづらのサイズそれじたいは量的かもしけないが、これは話の主題に寄与する量なので、話の要素になりうる。

同様に、竜宮城でのもてなしや「とても」華やかだったといふことも、浦島太郎という話の主題に寄与するので、話の要素とみなしてよい。けれどもたとえば、子供たちがカメをいじめていたとして、「めっちゃ、いじめていました」

というような表現は、何ら浦島太郎の主題に貢献しないので、それは話の要素ではなく、逸脱した單なる色（しき）だということになる。

あるいは、浦島太郎の身長は 185cm でしたというような付記をした

として、それはやはり主題に寄与していないので、話と無関係の色（しき）だということになる。

ここで、明敏な人は、浦島太郎の記憶を掘り起こし、「むかしむかし、浦島太郎という青年がおつたそくな」

という表記を思い出すかもしれない。

ここでは「青年」という年齢量、あるいは青年という状態を書き添えてあるのは、「話」としてむしろ必要なことなのだ。なぜなら浦島太郎は後に玉手箱によって老人になるというのが話の進みゆきなのだから。

もともと浦島太郎が老人では、玉手箱を開けたとしてもさして変化がないということになつてしまふ。

このようにして、いくらかでも踏み込み、「話」という事象の性質を知つてゆくならば、この「話」という事象は、これまであなたが思つていたよりもずっと「手ごわそうだ」というふうに思えてこないだらうか？ た

かが、子供でも知つているような、平易な「浦島太郎」の話でさえ……それを精密に「話」として取り扱うということになれば、それはじつはころ一般の人にとって容易なことではない。

ともあれ、ここであなたが知るべきは、一足飛びに「話」の専門性ではなく、色（しき）がわれわれにおいて循環するということ。

小さな島のまわりを小舟でぐるぐる回つたとする。すると、小舟はさまざまな角度からの波に揺らされ、船頭は忙しくなるにせよ、そのことをつづけたとてその舟の乗員は小島のことをよく知るということにはいつまでたつてもならないだらう。それは小島のまわりと小島そのものが事象として別のもので、そもそもへへ島じたい海でないことによつて島たりえている▽▽ということによる。島が海だつたらそれはもう島ではないのだ。波打つ海のうち、海でない部分をわれわれは島と呼んでいるだらう。

量→状態→実感→量、この循環を漕ぎまわることは、われわれを話に

近づけない。

島に上陸するためには、循環を手放すということ、上陸それじたいへの勇気を持つことが必要だ。

## 観測

「話」そのものは観測できない。

この、「観測」という、あなたにとつては縁遠い単語を、あなたはこれから先に自分のものにする必要がある。

観測という機能を使っているうち、逆に、「話」は得られてこようはずがないからだ。

話を得るために必要な機能は、じつは「かんがえる」ということなのだが、このことはまた後の章で述べよう。

観測は、主に量を観測する。

合わせてもちろん、状態や実感も観測する。

たとえば、あなたの手元にあるスマートホンと、あなたのテーブルに置かれているテレビのリモコンは、どちらが「重い」だろう。

重さは、質量なので、もちろん量だ。

スマホとリモコン、どっちが重い？

あなたはそれをどうやって観測するだろう。

たまたま、台所に秤があれば、それで量るだろうが、そうでない場合、あなたはそれぞれを自分の手に乗せてみるはずだ。

そして、感じる重さ、それを持つときの力感などの、直接の「実感」を

用いて、どちらがより重いか、その比率（重力比）を観測するはずだ。

そのとき、あなたはスマホとリモコンを、同じ高さ、同じ位置、つまりなるべく同じ「状態」で観測しようとする。

われわれにはそうして「観測する」という能力があるのだ。

そして、観測それじたいについて、われわれは「かんがえる」ということをしない。

たとえば、「背中がかゆい」ということを観測する。

そのかゆさの量、かゆいという実感、かゆくて気になるという状態を観測する。

そして、そのようにして観測するとき、われわれはそのことじたいに「かんがえる」という機能は向けない。

背中がかゆい、ということに、「かんがえる」ということは向けようがない。

かんがえるとすればせいぜい、

「窓を開けたまま寝たから、蚊に刺されたかな？」

ということぐらいで、それは「かゆい」という直接のことからは離れている。

窓を開けたまま寝たせいで、蚊に刺されたという「話」はあります。

だがその話は、かゆみのようには「観測」はできない。

背中のかゆさは、観測できるが、だからこそ、「背中かゆい！ かゆいかゆい、超かゆい、マジかゆい」というのは「話」ではないのだ。

それは^^観測結果を発表しているだけ▽▽だ。

たとえばここに、

「セレブになりた～い！」

という強い調子の言い方があつたとする。

これは「話」だろうか。

セレブというのは「状態」だ。

庶民よりも財力パラメーターが数十倍高い（比率）という「状態」を婚姻で得ることを俗にセレブという。

そして、そのセレブになりたいといつても、そのなりたいという度合いの「量」があるだろう。

なりたい度合いの量が大きくなれば、言いようも強くなる。

「セレブになりた～い！」という強い言いようは、そのように生じているのであって、それは「話」ではない。

ただの観測結果の発表だ。

観測結果の発表なのだと捉えると、冷淡すぎるが、いつそ笑えもするだろう。

笑えるものでありながら、これは哲学的に正しい知見だ。

じつさいに「わたしの観測結果の発表」なのだ。

観測結果の発表をしてはいけないということではない。

ただ、それは「話」ではないだけだ。

浦島太郎は、「話」だから、量がなく、浦島太郎を観測することはできない。

仮に、「浦島太郎、だ～い好き」という人がいれば、その好きという度合いは量だから、その比率やパラメーターは観測できるのかもしれないが、それは先ほどの「セレブになりた～い」と変わらない。

ゴミをポイ捨てするおじさんは悪で、それを掃除するおばさんは善かもしないが、それだってパラメーターの観測なので、「話」ではない。

そうして悪がのさばり、善がしいたげられるのを見て、  
「とても許せない」

とあなたが感じたとしても、それもやはり「話」ではない。

「マッチ売りの少女」が、すごくかわいそ～だつたして、それがすごくかわいそ～と感じることは、「話」ではない。

かわいそ～というのには「感じる」ことだし、かわいそ～という状態でもあるし、「すごくかわいそ～」とか「ちょっとかわいそ～」とかは量だからだ。

浦島太郎だつて、浦島太郎が砂浜を「歩いていた」として、その「歩いている」という状態だけを捉えるなら、それは話ではない。

カメがいじめられていたというのは「状態」だし、浦島太郎が玉手箱を開けて老人になつたとして、老人というのも「状態」でしかない。「セレブになりた～い」

の反対、

「勝ち組でもなければイケメンでもない、ただの人と地味婚するとか、考えるだけで無理。ありえないぐらい無理。超無理」

というのも、すべて「自己観測結果の発表」でしかない。

声はデカいし、感情も確信も当人において強いのかもしれないが、それでもそれらはまったく「話」ではないのだ。

このように追究していくと、このあたりでそろそろ、

「じゃあ『話』って何だ……？」

と、よくわからなくなつてくる。

どうも、われわれが日常で見聞きするもの、日常で発想するほ～すべてのものが、どうやら「話」ではないのではないか。

「話」って何だ。

「話」とはこのことだと、あきらかに示せる自信がなくなつてきた…

こうして、「話」というものがよくわからなくなつてくるということが、この場合は正しい。

学門が進めば進むほど、「話」の真相のむつかしさがあきらかになつてくるのだ。

＾＾話は観測できないvv

というのが真相となる。

「話」は、存在するし、体験されるのだが、観測はできないのだ。

一方で、われわれは自我の能力として、「観測」ということを得意にしている。

だからわれわれは、大人になると、桃太郎や浦島太郎の話を聞かなくなる。

ほとんどの場合、大人はもう「観測」に首つたけで、「話」を体験できなくなっている。

子供に寓話の読み聞かせをするのは、子供はまだ、自我（量観測装置）がそこまで膨張しておらず、自我がそこまで燃え盛つてもいないため、「話」を体験しうる——と期待されている——からだ。

子供は、大人よりはまだ、話を聞くということ、話を体験するということに近い。

大人になると、桃太郎の話を聞こうが浦島太郎の話を聞こうが、それよりはアイドルグループの女性たちがショートパンツで股をパカパカしているのを見て、

「おっ」

と、ドーパミン量の増大・性的興奮状態をもたらすことのほうに価値があると感じ、そちらを攝取することに向かっていく。

「つけまつげを上手につけるテクニック三選」や「いま〇〇区の土地が安く変える理由！」などに期待される損得やドーパミン量に比べれば、浦島太郎の話を聞くことには何の得もないし退屈すぎる。

天国や浄土にいけるという得があるなら、聖書の話やお釈迦様の話も聞こうかと思うが、それが保証されているわけでもない眉唾ものなら、やはり作画がド派手なアニメでも観ているほうが楽しくて得だ。

われわれの日常はそんなものだし、日常はそんなものでかまわないだろうとわたしも思うが、それにしても、その日常ばかりを是とする中で、

ふと気づくと「話」を体験する能力がゼロになっていたということになれば、それはいささか由々しいことではないかと思う。

話を体験する能力がゼロになっていたということは、「じつはもう誰とも話していない」「じつはもう誰の話も聞いていない」「何の話も生きていらない」ということなのだから。

われわれは観測を得意とする。それは自我の能力であって、観測する対象は「量」だ。量にかかる比率、比率を現わすパラメーター、それらの比率が生じさせるさまざまな「状態」、また状態がもたらすさまざまな実感を、やはり量的なものとして、われわれの自我は「観測」する。

この「観測」を、横行させること、またそのことのやまぬ得意ぶり、それがわれわれの「色（しき）」なのだと捉えてよい。

一方、「話」は観測できない。

観測できないものを「話」と呼ぶ。

観測はできないのに、なぜか体験はされ、なぜか「在る」と言わざるをえなくなる、その現象を「話」という。

## 「分かる」という機能のH-ラ-

人は一般に「わかる」ということが好きだ。

「どっちがほうれん草で、どっちが小松菜か、わかる？」

女性にとってサンダルとミュールは違うものだし、ミリタリーファンにとつて戦艦と巡洋艦は違うものだ。

「わかる」というのは本来「分かる」もしくは「解る」ということだ。A

と B が分離しているということ。分解可能であるということを意味している。

英語では tell A from B という (B から A を分離する、の意)。

ほうれん草と小松菜は、分ける」とができる。

われわれはそうした、「分かる」ということが好きで、そのことを活用しながら生きている。

たとえば、赤信号と青信号が分からぬ生活ができない。

あるいはライトニングケーブルと Type-C ケーブルが分からぬ生活がしにくいだろうし、化粧水と乳液が分からぬ女性は肌の手入れがしにくいだろう。

ただ、分からぬことはいくらもあるもので、たとえば子供にとっては、ほうれん草と小松菜などは「分からぬ」かもしない。

「どつちもただの葉っぱじyan!」

子供にはそう投げやりに見えていてもおかしくないだろう。

そのことは、大人においても同じであつて、たとえば多くの人にあっては、目の前にスルメイカとケンサキイカを置かれて、「分つかんないよ、どつちもただのイカじやないの」

といふことがありうるだろう。

こだわりのない人にとっては、醸造酒と大吟醸酒は、たいして違いのない「同じようなもの」かもしれないし、こだわりのない人にとっては、

スピーカー部分もアンプ部分も、同じひとくりの「スピーカー」かもしけない。

われわれは一般に「分かる」ということが好きで、それ以上によくよく観察すると、「分かる」と「分からぬ」とのあいだで、相互に侮辱的なはたらきが起こっていることが発見される。

つまり、

「お前、ほうれん草と小松菜の違いがわからないのかよ」

と、バカにする、侮辱のはたらきが起こる一方、スルメイカとケンサキイカについては、

「分つかんないよ、どちらもただのイカじやないの」

と、やはり逆向きにも侮辱のはたらきが生じるのだ。

このことは一般化して、「分かるは分からぬを侮辱し、分からぬは分かるを侮辱する」ということになる。

なぜこのような侮辱が衝動的に起こるかについては、説明可能だが、その説明は以降の章に譲ろう。端的に言つて、「分かる」と「分からぬ」の、どちらが主であり、どちらが従であるかということによつて、権威の抗争が起こるのだ。

本稿の唱えるところ、「話」は「分からぬ」に属している。なぜなら、「分かる」ということは観測に依拠するからだ。

たとえば、ゴミのポイ捨てをするおじさんがいたとする。一方で、そ

のゴミを拾つて静かにかたづけるおばさんがいたとする。

この場合、われわれはおじさんのほうを悪と観測し、おばさんのほうを善と観測する。かといって、これで何かの「話」があるわけではないので、われわれはこれについて感・想を生じるにとどまる。

つまり、おじさんの悪が罰されず、おばさんの善が報われないといふことについて、理不尽や不条理を感じ、嘆かわしく想う、などをする。

いっぽうでおじさんが、なけなしの資金をはたき、赤十字に醸金（募金にお金を出すこと）や、チャリティーの主催をしていたりするとする。その場合、われわれはおじさんの「悪さ」について、かなりの寛恕を向けることになるだろう。なぜならわれわれは、人の悪の「ていど」や、悪行の「量」などを、パラメーター的に観測しているからだ。ポイ捨ての悪行は、醸金の善行によつてあるていど相殺してよいだろうとわれわれは想うし、そう感じもする。いっぽうでおばさんが、勤め先で金銭の横領をしていたとしたら、それはいくらゴミ拾いをしたところで、量的に悪行

のほうが勝るだろうというふうにわれわれは判断する。

ともあれわれわれは、そのようにして「観測」によつて善と悪を分離・分解している。そして善のパラメーターが勝るか悪のパラメーターが勝るかのジャッジを行う。われわれはそのようにして善悪が「分かる」のだ。このように善悪が「分かる」ということは、赤信号と青信号が「分かる」、「分かる」ということと同質だ。われわれは周波数の違いによつて赤と青を識別する。赤を赤と感じ、青を青と感じることで、信号が「分かる」という状態で暮らしている。

しかし、日常われわれが考えもしないところ、われわれの「分かる」という機能はそこまで際やかに明白なものではないのだ。というのは、たとえば赤信号が青信号に変わると、ぼんやり・じっくりとしたグラデーションで示したとしたらどうだろう。

赤がしだいに、明瞭な赤でなくなり、赤紫に近づいていく。それはいつからか、紫になり、紫はいつからか青紫になる。そしていつのことかはわからないが、グラデーションの終端ではたしかに青になるのだ。もしそのようない信号機を設置したら、もちろん市民から、「ばかやろう、これじやどのタイミングで信号が変わったか、『分かる』じゃない』じやねえか」と苦情が殺到するだろう。

グラデーションで変化する信号機においては、どの時点をもつて赤が青になつたとは言えなくなる。もちろん人それぞれに「まだ赤だ」「いま青になつた」というような想いは持つだろうが、では青になつた 0.01 秒前はまだ赤だったのかと言わると、そのことを力強く断言はできない。

要するに、人それぞれの、そのときその瞬間にそう感じたしそう想つたというだけの、場当たりの「匙加減」しかそこにはないわけだ。このようにして、じつはわれわれの「わかる」という機能は、その内部に巨大なエラーを抱え込んだまま運用されている。

けつぎよくのところ赤と青にはつきりとした境目などない以上、赤と青を「分かる」とは本当には言い得ないのだ。

赤と青は、本当には「分からぬ」し、それどころか、その境目においては「同一だ」とさえ言わねばならなくなる。

赤もあるし青もあるという瞬間、またそのどちらでもないという瞬間で、赤と青はつながつてしまつてている。

たとえばあなたが、しばらく「ふつう」に歩いていたとする。そこであなたが、ほんのわずかずつ、その歩く速さを増していったとしよう。

ほんのわずかずつ加速していくと、あなたの歩行はいつからから「急ぎ足」になるはずだが、それが急ぎ足になつたのはいつからだろう。「ふつう」の歩きと「急ぎ足」の歩きは、それぞれ別のものとして分離して取り扱えるように思えるが、それでいてその境目はやはり不明瞭なはずだ。

むしろその境目においては、「ふつうでもあるし、急ぎ足でもある」「どちらでもあり、どちらでもない」という状態があるはず。よつて、境目においてこそ知られるのは、むしろ「ふつう」と「急ぎ足」は同一」ということなのだ。

ところが、話がこの同一性に及んだとき、あなたの内部からはあなたの自覚のないままに、なぜかこのことを侮辱しようとする衝動が湧き出てくる。

あなたの内部からは、

「いや、急ぎ足は急ぎ足だし、ふつうの歩き方は、ふつうの歩き方でしょ笑」

と、この話を小馬鹿にし、侮辱しようとするはたらきが起つてくる。

人は一般に「分かる」ということが好きだ。そして、そのことの思いがけない内部構造として、「分かる」が好きといふことより、「分からぬ」ということへの侮辱衝動のほうがシリアルなものとして機能しているようなのだ。

たとえば、あなたにはあなたの体がある。それはあきらかなことだ。

一方で、あなたの目の前に大豆を置いたとしよう。あなたはその大豆を食べる。食された大豆は、アミノ酸に分解されて吸収され、アミノ酸はやがてあなたの体を形成していくはずだが、大豆はいつのまにあなたの体になつたのだろう。

あなたの体と大豆は、それぞれ別個のものとして、あきらかに分離されている。少なくともそのように感じられる。

「どちらがあなたの体で、どちらが大豆ですか」

まさかそのことが分からぬといふ人はいない。

そのことが分からなくなつたらその人は単純に精神病だ。

しかし、あなたの血流にじっさいアミノ酸はいまも駆け巡つてゐるはずで、それらはいつかあなたの体になるのだろう。

なぜそうしたただの「物質」が、あなたの「体」になるのか。

アミノ酸は大豆と同一の概念ではないと思えるが、大豆はいつのまにアミノ酸になつたのか。その境目もやはり不明瞭だ。

吸収されたアミノ酸があなたの体を形成するとき、どこかの瞬間で、「アミノ酸でもあり、あなたの体でもある」という状態が生じるはず。その境目の瞬間にむしろ、あなたの体とアミノ酸は「分かる」の真逆、同一性のものになつてしまつてゐる。

同一性において、大豆とあなたの体が「分からぬ」となるのだ。

そしてこのことについては、なぜかあなたの内部から、このことを侮辱したくてたまらないという衝動が湧いてくる。小馬鹿にしたくてたまらず、茶化したくてたまらず、否定したくてたまらず、陳腐化したくてたまらず、侮蔑の表情を浮かべたくてたまらず、話を逸らしたくてたまらず、汚らしい声を出したくてたまらない。

あなたは、

「大豆は大豆、わたしの体はわたしの体。それに決まつてんじやん」

ということで、この話を終わらせたいのだ。

「なんかさあ、ごちやごちや言うの、マジで無駄。だからやめてくんない？」

実感として、「大豆」と「体」が同じ（同一性）であるわけがないので、それに反する理屈をああだこうだとこねられるのは不毛と想える。

「そもそも、わざわざそんな細かいところまで観る必要ないじやん？ 観測がどうこうといつても、

「そもそも、わざわざそんな細かいところまで観る必要ないじやん？」

じっさい、誰もそんなヒマなことしていなーいし」と想う。

われわれの「分かる」という機能は、重大なエラーを内包したまま運用されているのだ。

あらゆるシステムがそうであるように、エラーを内包していたとしても、そのエラーが表沙汰にならないうち、そのシステムは何の問題もないかのごとく、そのまま運用される。けれどもいつだつて、種子といふものは小さいもので、種子じたいは些細なものとして見過ごされるけれども、問題はそれが発芽して以降のことなのだ。

（備考1. 本稿では、一部に慣習的・日常的な意味として「わかる」の語を使用します。たとえば「話のわからぬえ野郎だな」「話を把握できない野郎だな」といったふうに書き換えるべきかもしれませんのが、文体が物々しくなり、読み物として妥当でなくなるので回避措置として「わかる」の語を平常に使用するものです。ここで述べた「分離」「分解」を意図して言う場合には「分かる」あるいは「解る」の語をあてるにします）

（備考2. 博識な方はここにカントの純粹理性批判を想起すると思いますが、境界を理性では追求できないという点についてはカントのそれと同一性ということのほうを主題に捉えていきます）

このことは、考えれば考えるほど混乱するので、前もって、「あまり深入りして考えすぎないほうがよい」と警告しておきたい。

大仰に思われるかもしれないが、決して誇張ではなく、このことは深入りし過ぎると精神を損傷することがある。

## あなたがあなたを「分かる」と言い張るということ

Aさんが落ち込んでいたとする。

そこにBさんがやってきて、Aさんのことについて、「わたしにはあなたの方が分からぬ」と言つたとする。

一方、そこにCさんもやってきて、

「いやあ、おれはAちゃんのつらさ、すぐわかるなあ」と言つたとする。

このとき一般には、Bさんのところが冷たく、Cさんのところがやさしいというふうに受け取られる。

そして日常的には、BさんがAさんに対する分離的で、CさんがAさんに同一的（同情的）と感じられるのだが、このことは語義と矛盾しておかしくなる。

Bさんのほうが、Aさんのことについて「分からない」と言つているのだから、Bさんのほうが非分離的・同一性寄りのはずだ。  
Cさんのほうは、「分かるわあ」と言つてているのだから、CさんのほうがAさんのことについて分離的なはずなのだ。

われわれの「分かる」ということには、大きなエラーが含まれたままで、このような混乱が生じる。

その読み飛ばしの援助のため、わたしはこの章で書き話すことについて、「大学の哲学科の教授でも取り扱えない」と申し上げておく。

「分かる」という機能は、それじたいが自我そのものであって、その「分かる」を揺るがされると、哲学的に分かろうとする・理解しようとするその機能じたいがクラッシュするのだ。そのことには些少とはいえない健康上のリスクがある。

その前提で進めていきたい。

「分かる」というのは、分離できる、という意味のはずだ。  
ほうれん草と小松菜を分離できるということが、それを「分かる」ということ。

スルメイカとケンサキイカを分離できないということが、それを「分からぬ」ということだ。

（もちろん漁師さんや料理人はそれぞれのイカを分かつている）

では、Aさんのことが「分かる」というのは、Aさんのことが分離されている、ということのはずだ。

にもかかわらず、われわれが、

「わかつてほしい」

というとき、われわれはむしろ、分離ではなく同一性のほうに期待を寄せてている。

つまり、自分が雨でずぶ濡れになつたとき、そのことを本当にわかつてくれるのは、同じく雨でずぶ濡れになつた人——同一性の人——では

ないのか、ということだ。

傘を差して雨を除けている人は、ずぶ濡れのわたしのことを本当にはわかつてくれないのでないか。

ここでもう一度、念のために申し上げるが、このことの追究は、あなたの精神に思いがけないストレスとリスクをもたらす。

ほどほどにするというか、それ以上に、表面を眺めてサッと素通りするぐらいのつもりでいい。

A B間の「分かるか否か」問題、A C間の「分かるか否か」問題があるように見える。

けれどもそれ以前にあるのは、A A間の「分かるか否か」問題だ。

AはAのことが「分かる」のかという問題。

このことはそのまま、あなたはあなたのことが「分かる」のか、という問題だと捉えていい。

「分かる」？

AとAは同一なのに、どうしてそれが分離可能なわけがあるのか。

ほうれん草と小松菜は分離できるが、ほうれん草とほうれん草は分離できない。

「分かる」ということ、分離ということ。

「分かる」というのは観測の結果だ。

観測の結果、赤信号と青信号が分かる。

観測の結果、赤信号という状態と、青信号という状態が、極端ならば、

そのことはいかにも分離して捉えられ、「分かる」と体感される。そのことは何の問題もないのだが、問題はそれがグラデーション信号だった場合だ。

グラデーション信号の場合、赤と青は境界においてむしろ分離され

いないということ、「分からぬ」ということがあきらかになる。

赤信号と青信号が、分かたれてはおらず、両者は同一性のものだ。

それでは、交通が成り立たなくなってしまう。

赤信号と青信号が同一と言い出したらもう交差点は無法地帯だ。だからわれわれは日常、グラデーション信号などという思考実験を、「じつさいそんな信号ないんだから、意味なくない？」

と侮辱的に始末する。

信号と交通は、哲学ではなく、世の中で通用すればいいのだから、結論はそれでいいが、問題はそうではない。

問題は、世の中で通用するだけでは済まされないテーマにおよんだときた。

Aさんは、大卒だ。

大卒ということは、高卒ではない。

地方の公立大学より、都内の私立大学を選んだ。

Aさんは、猫派であつて、犬派ではない。

犬については「元気すぎて、わたしの側がついていけない」とのことだ。

Aさんは、きょう寝不足だ。

「シリーズ物のドラマとか観ていると、やめられなくなつて夜更かしあちやう。でも、本望」

Aさんは、どちらかといふとインドアが好きで、アウトドアは苦手だ。

「親がけつこう登山とか好きで、子供のころはほんと迷惑だつた笑」

Aさんは、旅行が好きだが、団体旅行は苦手だ。

「旅行こそ、気ままにしたいのに、旅行でまで団体行動させられるのは本末転倒じやない？」

Aさんは、親のことを大切に思つてゐる。

「なんだかんだ、親のおかげでいまのわたしがあるんだつて、いよいよ年齢的にわかるようになつたんだと思う」

Aさんは、男女交際に興味がなく、それじたいを疑問に思つてゐる。

「そんなさあ、無理してまで付き合うことなくない？ 他に楽しいことはあるし、他にやりたいことはいくらでもあるじやん」

Aさんは、いまの仕事で活躍しているが、前職ではまるでやる気がなかつた。

「わたし自身、意外と周りのムードに呑まれやすいっていうか。前の職場は高齢化していたから、なんかわたしで年老いていたんだよね」

Aさんは、美術館に行くと、絵画が好きな一方、彫刻には感性がはたらかない。

「これはもう、純然たる趣味。絵描きと彫刻家なら、わたし断然絵描きになりたいって思うもん」

Aさんは、チューハイをあまりながら、

「けつきよくわたし、こうやって、気の合う人とゆっくりお酒飲んでいるのが好きなのよね」

と想う。

Aさんは、

「そういえば高校のとき、三ヶ月だけ、バレー部に入ったんだけど、ぜんぜん馴染めなかつた。なんで球技にあそこまで必死にならなきやいけないのか笑、それじたいピンとこなかつたんだよね」

と想う。

わかる、わかる。

Aさんのことが、どんどんわかつてくるように感じられる。Aさん自身においても、いろいろ想うところはありながら、

「まあ、これが“わたし”だからね」

と感じられているだろう。

しかし、分かるということは分離であつて同一性ではない。

AさんがAさんを「分かる」以上、AさんはAさんと分離され、同一ではないのだ。

AさんがAさんと同一ではない？

AさんがAさんでないなら、それはもう別の誰かではないのか。

そのとおり、Aさんは、分かれば分かるほど、もうAさんではないのだ。

われわれはすでにAさんでないものをAさんと呼んでいる。

われわれは、笛やトランペットというと、「音の出るもの」と思つていい。そのとおり、笛やトランペットは、音を出すということを本質に作らされたものだろう。

だが、笛やトランペットを、水中で吹いたとしても音は出ない。おかしなことだ。

笛やトランペットが、水中では、笛ではなくなりトランペットでもなくなるというのか。

じつは笛やトランペットが音を出すとき、鳴っているのは内部を貫いている「空間」だ。

その空間に、水が満たされてしまうと、音は鳴らなくなつてしまふ。笛を観測すると、素材は木かもしれないし、全体はおおむね円柱状かもしれない。

トランペットを観測すると、素材は金属で、全体は複雑にうねつた構造をしていよう。

宇宙空間で、宇宙人が笛やトランペットを拾つたら、宇宙人は難儀するのじやないか。

「これは何をするための道具なのだ？」

宇宙空間には空氣がないので、どうひねつても、それらが何をするための道具なのか、ついに彼らにはわからない。

宇宙人は、それを「笛」と呼び、それを「トランペット」と呼ぶ。けれどもそれらは、われわれが呼ぶところの笛やトランペットとは違つてしまはないのだ。

まっている。

それらはすでに笛でもなければトランペットでもない。

あらためて、地球上の、われわれの「笛」について考える。

笛の内部を貫いている空間は、それじたいの笛ではなく、笛の一部分と

しては観測されないのだけれども、その空間に鳴り響く音こそが笛だ。

トランペットの内部空間は、トランペットの一部分としては観測され

ず、そこにあるのはただの普遍的な空気でしかないのかもしれないが、それでもそこに鳴り響く音こそがトランペットだ。

では、Aさんの内部を貫いている空間はどこへ行つたのか。

Aさんの内部空間に響いているはずのものはどこへ行つた。

Aさんを観測すれば、Aさんのことが次々に「分かる」ように感じられる。

分かるけれども、それはAさんの「存在」ではない。

^^Aさんの存在は、観測上、Aさんでない部分に存在しているvv。

笛やトランペットの本質と同じようにだ。

Aさんの「存在」は、Aさんとして観測はできないのだ。

なぜなら、Aさんの「存在」は、本質的に「話」であって、量のもので

はないからだ。

Aさんという話があるのみならず、或る話の群が「Aさん」なのだ。

量れない、観測できない。

体験は出来るが観測はできない。

Aさんを観測すると、「分かる、分かる」となるが、そうして分かることで得られてくるものは「存在」ではない。

そうした、「存在ではない観測」のみのものを、形骸と呼ぶ。

宇宙人に拾われた笛とトランペットのようにだ。

空気のない宇宙空間で、「これは笛だ」「これはトランペットだ」と分かれている。

Aさんも、Aさん自身を観測している。

観測により、AさんはAさん自身のことが「分かる」ようになつてくるが、そうして「分かる」ことで得られてきたものを、Aさんは「自分」と感じる。

「自分」のパラメータ、「自分」の状態、「自分」の感じること、「自分」の想うこと。

それが「わたし」なのだと確信する。

大卒で、猫派で、シリーズ物のドラマのせいで寝不足で、現在の仕事にはやる気があり、インドアで少人数でゆっくりお酒を飲んでは、「無理に恋愛とかで付き合うことなくない?」と言つてはいる、それが自分であり、イコール「わたし」なのだと思つてはいる。

そのことは、一般・日常の感覚において、まさか誤りであるはずはない。

けれどもそれらは本当には、Aさんという「存在」ではなく、そこで交わされているものに、Aさんの「話」はない。

多くの人は、生きていく途中、短い期間であれ、どこかでそうした「自分」イコールわたしということについて、

「わかるけど、なんか、わたしそのものが形骸化している気がする」と感じたことがあるのではないだろうか。

それがいつのことだったか、もう昔のことすぎて、あざやかには思い出されないかもしれないけれども。

Aさんがあるとき、わけもなく落ち込んでいたとする。

「なんかさあ、何があつたっていうわけじゃないんだけど。なんか急に、わたし自身がいつからか形骸化しているんじゃないかなって思えてきて、グツタリ来ているんだよね」

それについて、Cさんが、

「いやあ、おれはAちゃんのつらさ、すごくわかるなあ」

と応じた。

ここにあるものは本当に、Cさんの“やさしいこころのはたらき”なのだろうか。

一方、ここでBがAに向けて唐突にこう言つた。

「わたしにはあなたのことが分からぬ」

すると奇妙なことだが、ここではこのBの応じ方のほうが、本質的にAの存在と通じ、何かの共鳴でコミュニケーションしているかのように体験されてくるのだ。

Bは「分からぬ」と言つているのだが、その「分からぬ」こそ、やはり原義的に「非分離」だ。

非分離を言つているからこそ同一性が証され、その同一性ゆえに、われわれが本当に期待しているところの「わかつてくれる」ということが起つてゐる、あるいは起つてゐる。

Bが「分からぬ」と言つることで、AにとつてはBこそが話を「わかつてくれる」と直接体験されるのだ。

Cのほうは、きっと善人——世間的にはそう——なのだろうが、Aから見てそのように観測されるというだけで、AC相互の「存在」はまったく出会う見込みがない。

このとき、Aがどちらを選ぶのかはまったくわからない。

わかりやすさのために、いやらしい言い方をあえてするが、AがBCのどちらに「なびく」のかは、前もつてまったくわからない。

言つるのはただ、ACのやりとりはBに対して侮辱的にはたらくし、ABのやりとりはCに対して侮辱的にはたらくということだけだ。

そのことは、けつときよくAAのやりとりがどちらに行き着くかに尽きる。

Aにとつて、A自身を観測すること、自分のことが「わかる」ということ……その存在ではない形骸を、それでも「わかる」といつて、そのこと

とを「わたし」とするのか。

それとも、Aにとつて「分からぬ」ということ、観測外にある存在事象を「わたし」とするのか。

われわれにとつて、観測できないもの、「分からぬ」ものを、肯定的に捉えるのは困難なことだ。

観測できないもの、「分からぬ」ものを、さらには主題にまで捉えるというのは、困難どころか体感的に“意味不明”でさえあることだ。

しかし、単純な見方も未だわれわれの手元に存在している。

浦島太郎の存在は、浦島太郎という「話」だとして、それは何もおかしなことではないだろう。

話以外に浦島太郎はなく、浦島太郎が量的に観測されるなどということはないのだから。

つまり、浦島太郎という存在は、浦島太郎という「話」だとということになるのだが、ここでなぜ、Aさんという存在はAさんという「話」であつてはならないのだろう。

われわれは「分かる」ということが好きだ。

「分かる」は、「分からぬ」に対して侮辱的にはたらく。

「浦島太郎？」浦島太郎の話は、そりや知つてゐるけれど笑。あのさあ、それが何だつて言うの。おとぎ話なんか現実に何の関係もないじゃない。そんなことより、キミつてけつときよく勝ち組になれるの、そもそもそのつもりあるの。それとも、負け組のまま生きていくの。どつちなの」

彼の言つてることは分かる。分かるし、さらには、あまりにも分かりすぎる、とさえ言つてゐる。

むしろ本稿の言つていることのほうがずっと分からぬ。何を言つているかも分からぬし、なぜこのようなことが語られているのかといふことじたい、その理由や動機が分からぬ。

あなたはあなた自身のことを分からうとするだろうし、あなたにとつ

て分かることで、あなたは進んでいこうとし、あなたは生きていこうとするだろう。

つまり、あなたにとつて「好き」と想えること、「善い」と想えること、「価値がある」「無為じやない」と想えることで、生きていこうとする。同時にもちろん、悪いことや、無意味なこと、厭なことや嫌いなことは、なるべく遠ざけて生きていこうとする。

ふと気づくと、それらについて、

「何もそんな、これは形骸つてことはないでしょ？」

自分としては、むしろそこにパワフルな手ごたえさえ感じているのだ。

先に述べたとおり、このことは、通常の知性では取り扱い不可能なことで、むやみに深入りしようと精神に障害を負う。

あなたはいまここで語られていることについても、なるべく「分かろう」と努力している。そのことはおかしなことではない。

けれどもわたしが狙っているのは、あなたの読書体験なのだ。

あなたはあなたを分かりたがり、あなたはあなたを観測し、あなたは観測された「分かること」をあなただと言いたがるが、わたしはそうではない、あなたが観測できない「存在」としてのあなたを狙っている。

わたしはあなたの理解力に期待するのではない。理解力というのは力量のもので、量のものだろう。

わたしはあなたの体験にアクセスしている。

読書体験、知性の体験、ことばの体験、声の体験、それらの体験に量はない。

わたしはあなたに向けて、分かる「説明」と、分からぬ「話」を同時に与えているのだ。

あなたが、わざわざ冷淡な気持ちで、あざけりながらこの文面を目で追うというようなわけのわからないことをしていなかぎり（そんなヒ

マなことをする人はここまで読み進んできていないと思うが）、あなたは片面でさまざまな説明を理解しながら、もう片面では、語られている「話」と同一化している。

体験とは、自己との同一性で得るものであつて、「話」という事象もまた、自己との同一性で体験されるものだ。

何もかもを「分かった」として、それでは何もかもが分離されるだけで、同一性のものがなくなり、体験がゼロになるだけだ。

まして、その中で最も身近な、それじたい主題であるに違いない「あなた」そのものを、あなたが「分かる」と言い張るのか。

あなたがあなたをあなたから分離するのか。

あなたはあなたの体験をあなたとせず、「だつて分かるもん」と言い張つて、あなたの形骸をあなたと為すのか。

あなたはいま、あなたについて、読書という「状態」を認めるだろうか、それとも読書という「体験」を認めるだろうか。

読書状態を認めるのは簡単だ、それは誰にとつても分かる、ただの量的観測だ。

一方、読書体験を認めるには、「あなた」の存在が、「分かる」ということに根差していないと、それを認める必要が出てくる。

好ましい「分かる」ではなく、同一性というやつかいなものを見つけてはならない。

双方は、相互に侮辱的にはたらく。

ふたつのうち、あなたがどちらを選ぶかについて。

あなたはおそらく、自分はどちらを選ぶのか・選ぶべきなのか、またどちらを選びたいのかと、そのことについて、自分を観測するという方法と発想ばかりを立ち上げがらせがちだと思う。ほとんどの場合がそうで、どちらを選ぶかという「話」の中に立っている人はごく少ない。

これはとても困難なことで、だからこそむやみに突撃しても、本当に

精神を損傷するだけになるのだが、それでも懲りずに、怯まずにどうぞ。

あなたは読書体験について、「分からない」と答えていい。

すべての体験について、「体験は分かりませんが」と答えていい。

「分かる」などということに弛（たゆ）むな。

あなたの嫌惡するだらしなさの顔面はその弛みから発生している。

体験なのだから、体の真ん中から、「分かりませんが」と言い、二度と分かることのないよう生きろ。そのとき体の真ん中は、すでに進行方向を持つている。

## 自我と、使用できる記憶

われわれはおよそ、四歳以前の記憶を持つていない。このことを幼児性健忘というが、このことには文化差や言語による差があるらしく、たとえば日本とアメリカでは幼児性健忘の時期が違うそうだ。本当かどうかははじつさいの論文を調べていないので知らない。

なぜわれわれは四歳以前あるいは三歳以前の記憶を持つていないのか。なぜ当時の記憶は消えてしまうのか。これは本当には、「記憶がない」「消えてしまう」ということではないようだ。記憶はあるのだけど、それを使用できる形で引っ張つてくことができないらしい。

たとえば、われわれがPCを使っていて、そのPCにはさまざまデータが保存されていたとしても、そのデータがディレクトリに出てこないのは、データにアクセスのしようがないだろう。じつさいの操作でいうと、ウインドウズの「エクスプローラー」を開いたところで、どこを

どう探しても当該のファイルが見当たらないという状態だ。ディレクトリがないのでプロンプト入力することもできない。

仮に、0歳から二歳までの乳幼児を、毎日ビンタで張り倒して育てたしかに当時の記憶は取り出せなくなっているかもしれないが、かといって彼が明るく健やかな青年になっているとはとても想像しがたい。暗くて怯えた青年になっていて当たり前だ。だから幼児期の記憶が「ない」とは言えず、記憶は存在して彼の人格や精神の構築に大きく作用しているということになる。ただ、われわれが日常的に言う「憶えている」のような、引き出して使用できる記憶という形にはならないらしい。

それにしても、なぜ幼児期の記憶はそのように、使用できない形になってしまうのか。それについては、むしろ幼児期に注目するより、それ以降のことに注目するべきだ。

われわれは三歳か四歳かで、「自我」というシステムを神経回路に成立させる。「わたし」「ぼく」「おれ」といったものが出来上がるのだ。そしてこの自我というシステムは、観測して「分かる」という装置、分離して理解するという装置なのだが、分離するといつて何を分離するかというと、まず「わたし」と「わたしでないもの」を分離するのだ。

母親は母親として存在しているが、母親は「ぼく」ではないらしい。大きな乗り物としてバスや電車を教わるが、バスや電車は「ぼく」ではないようだ。お兄ちゃんが誕生日におもちゃをもらつたらしいけれど、そのおもちゃは「ぼく」のものではないらしい。お兄ちゃんのものなのだそうだ。ぼくが転んでひざを痛めても、パパはぼくではないのでパパのひざは痛くないらしい。

「ちゃんとお手伝いできて、賢いねえ」と、誰かが褒められているけれど、それはぼくのことではないらしい。褒められているのがぼくのことではないということは、何だか耐えがたく腹立たしい。あたらしいおも

ちやがお兄ちゃんのものだというのも腹が立つ。ぼくが転んでもパパは痛くないというのだってなんだか悲しいことだ。

でも、脚が速いといって褒められるのはぼくだし、そのことは誰にも譲らない。ぼくのおもちゃだつて、ぼくのものだから、他の誰かには譲らない。何もかもぼくのものならいのに、なぜかそのことを言おうとすると怒られるので、ぼくはやむをえず引き下がつている。あの子がソフトクリームを食べているのに、ぼくはソフトクリームを食べていいないというのはとてもつらいことだ。ぼくは指を咥えていろというのか。でも、なんとなくわかる。あの子はあの子で、ぼくはぼくということなのだろう。かといって、ぼくのつらいのがなぐさめられるわけではないけれど、それでもパパとママの言うように、なるべくじつと辛抱してみようと思う。

幼児というのはまさに、「ぼく」と「ぼくでないもの」を分離し始めた時期であつて、そのことの如実な体験を、わたしはある特殊な体験から思い知つている。

わたしは手品師だつたから、若い教諭にせがまれて、幼稚園で手品のショーやしたことがあるのだ。震災で避難所になつた幼稚園での、ボランティアにかかわつてのことだつた。

わたしは初め、そのことについてじゅうぶんに説明をして謝絶した。

それは、

「幼稚園児には、まだ手品はわからないから」

ということだ。

幼稚園児にはまだ手品はわからないということは、ターベルコースという手品の百科事典に書いてある。たしか、「手品というのは、五歳から一〇五歳まで愉しめる芸術です」というふうに書かれていたと思う。

わたしはその教えにのつとり、幼稚園児に向けて手品のショーやは無理だとしつかり言ったのだが、わたしの実演を観た教諭がそれでも「ぜひ、

なんとか」と言い続けるので、わたしはやむをえず言われたとおりにその手品のショーやをした。

その結果、わたしもまざまざと目撃したのだが、幼稚園児には本当に手品がわからなかつた。夢中になつて観てくれてているのは、園児らをほつたらかしにして前のめりになつている教諭たちだけだつた。

手の中にコインを握つたところ、コインが消えたとして、そのことを

幼児は「ふしぎ」とは体験しないのだ。

幼児らは、見慣れないコインをただ「見慣れない、金属の丸い板」と見ていて、ただそれに興味を惹かれているのみだ。それがたとえ手の中で消えたとしても、その開かれた掌に對して彼らは、

「さつきのやつが無い」

と無言で退屈がるのみで、興味を失つてそっぽを向いてしまう。

三歳のサルに手品を見せれば、サルは大きく反応しておどろくし、じつは三歳の犬だつて手品におどろくのだが、ヒトの三歳はまだそこまで発達が進んでいないのだ。

三歳のイヌに、ビスケットを見せて、そのビスケットを手の中に握りこみ、それを消してみせると、イヌはびっくりし、あわてて鼻でビスケットを探り始める。

鼻で探られると、どこに隠しているかがバレるので、

「あ、こら、それは無しだ」

と、わたしは思いがけず慌てさせられたということがあつた。消えたものの行方を考えるのではなく、ただちにいちばん頼りになる「鼻」で追跡しようと発想するのは、さすがイヌならではのことだ、わたしは感心させられた。

さておき、幼稚園児は、手の中にコインがあるとか無いとかを、そこまでたしかに「分かつて」いない。あるいは、一個しかなかつた赤い玉が、指先で二つに増えたとして、そもそも玉は一個しかなかつたはずと

いうことが幼児にはそこまでたしかに「分かつて」いない。だから玉が増えたとして彼らは何も思わないわけだ。

幼稚園児にとっては、園で飼われているうさぎが空に飛んでいつたり、太陽が西から上つたり、あるいは甕（かめ）の中の水がいつのまにかぶどう酒になつたりしても、そのことが「ふしぎ」ではないのだろう。

幼稚園児はただ「ぼく」と「ぼくでないもの」が分かり始めただけなので、たとえ白いハンカチが白いハトになつたとしても、そのことは何もふしぎとは体験されない。そもそも彼らはコインのこともハトのことも未だ「思議」せずに生きているのだから、彼ら自身が「不思議」を直接生きているところなのだ。そこに大人が「不思議」を供給してやる必要はない。

かくして、園児たちはそれぞれが好き放題に遊びはじめ、ただ教諭たちがウームとうなりながら、手品のシヨーにのめりこむことになつたのだった。

これが、小学生相手になれば、たとえ低学年でも、子供らは手品のひとつひとつに「うおつ！」と大げさな反応をする。ターベルコースに書かれていたことはまさに真実で、それは五歳から一〇五歳（九五歳だったか？）が愉しめる芸術なのだ。

余談が長くなってしまったが、われわれの記憶が、通常の「使用できる形」の記憶になるのは、簡単に言うと「分かつた上での記憶」ということになる。

それは特に、「わたし」が分かつた上での記憶だ。

「わたし」が、あさがおを育てた。

「わたし」が、あの子とよく遊んだ。

「わたし」が、気に入っているこの洋服。

「わたし」が、算数のテストで満点を取つた。

「わたし」が、お絵かきで表彰された。  
「わたし」が、マリオのゲームで遊んだ。

「前回のサッカーワールドカップ？」えーと、優勝はアルゼンチンでしょう。たしか、決勝戦の相手はフランスで、3対3の引き分けで、最後PK戦でアルゼンチンが勝つたんじやなかつたつけ。三位決定戦はたしかクロアチアとどこかだつたけど、忘れちゃつた

「長州藩は最終的に薩摩藩と同盟を結んだけれど、それ以前に長州藩は水戸藩とも密約を結んでいたんじやなかつたつけ。どちらとも桂小五郎のはたらきで、その桂小五郎がたしか後の木戸孝允だよね」

「二日目の朝に、漁港に行つて、海鮮丼食べたんスよね。あれ、違うか。そつか、あれ三日目の朝か。そうそう、そんで、借りている車が故障して、ロードサービス呼んだんスよね。でも直らなくて、レンタカー屋に代車を出してもらつたんだけど、タイヤがスタッドレスじやなかつたから、雪道でつるつる滑つて。あといまさらですけど、あのとき一緒に來ていたあの子、たしかおみやげ屋で二万円ぐらい使つていたんじやないスか笑。あれはいくらなんでも買ひすぎつしょ」

「元カレがさあ、最悪でさあ。あー、いま思い出しても腹立つ。アイツさあ、トイレのスリッパを脱ぎ散らかすんだよね。ひどいときには、もうスリッパ裏返つてんの。それがマジでキツいからやめてつて言つたら、『おれはそんな脱ぎ方していない』って言いだすの。はあ！？ マジありえなくね。だってわたしぜつたいそんな脱ぎ方しないし、家にはわたくしとソイツしかいねえんだつての。そもそもトイレ掃除だつてわたしがしてんだよ。全部あいつのせいなのに、そういうことマジで認めない人で、ほんとめっちゃストレス溜まつたわ」

われわれの一般的な「記憶」は、このように「分かつて」いる形で確保

される。

その「分かる」という分離・分割の機能が、自我由来なので、自我が形成される年齢以前は、記憶がそのような形では得られないということなのだ。

自我の形成以前は、「分からぬ」まま記憶しているため、それらはわれわれの知る一般的な記憶ではなく、自己と同一性の「体験」になつている。

そもそも、幼児期の記憶がもし消えるのだとすると、憶えた母国語も忘れてしまうし、水の飲み方や自分の家やトイレの流し方も忘れててしまうはずなので、それらは本当に忘れててしまうのではないのだ。

幼児は、まだ自我をたしかに形成しておらず、すべてのことを「記憶」ではなく「体験」に得ている。だからこそ、子供は読み聞かせられた童話を、記憶するのではなく体験するのだ。「赤ずきん」の話を聞きながら、その話を想像力に直接体験し、迫りくる惡意のオオカミに震え、赤ずきんちゃんの機転と無事を祈念するのが幼児だ。

幼児は「赤ずきん」を体験するのであって、そうした童話を「理解」するのではないし「記憶」するのでもない。

そうして考えたとき、すでにじゅうぶんな自我の発達を得ているわれわれ大人は、童話や寓話をよく記憶しているし、よく理解もできている気もする一方、それらをいま「体験」出来ているわけではないということに気づく。そして、そうした話を「体験」出来ているわけではないなら、われわれ大人にとつて童話や寓話はすっかり意味を失くしてしまつたということになる。

じつさいに、いまわれわれは（日本人に限定されるが）、「浦島太郎」の話を、じつに『思い出し、思い出し』で取り出すことができる。  
「えーっと、むかしむかし、あるところに、浦島太郎という人がいました。浦島太郎という、青年がいました、だつて。とにかく浦島太郎がいま

した。そして、浦島太郎が砂浜を歩いていたところ、近所のこどもたちが、カメをいじめているのを見ました。浦島太郎は、『こらこら、やめてあげなさい』と言つて、カメを助けてやりました。助けられたカメは、浦島太郎に感謝し、お礼に竜宮城に連れていきますと言いました。浦島太郎がカメの背中に乗つて海の中へゆくと、海の底にはきらびやかな竜宮城があつて、竜宮城には……あれ、何姫だつて。おり姫？ 違うか、織姫は七夕だもん。えーと、何姫だつたか忘れた。まあいいや、とにかくお姫様がいて、浦島太郎をもてなしました。タイやヒラメの舞い踊り。浦島太郎は時のたつのを忘れて楽しく過ごしました。そしてお姫様は、浦島太郎におみやげといつて玉手箱を渡しました。浦島太郎は、地上に帰り、玉手箱を開けると、玉手箱から煙が出て来て、浦島太郎はおじいさんになつてしましました。……あれ？ 玉手箱つて、『決して開けてはいけません』とか言われるんだっけか。でもそれもへんだな、開けてはいけないならおみやげに渡すのおかしいもん。まあいいや、とにかく浦島太郎は玉手箱でおじいさんになつてしましました。おしまい。と、これでいいんだっけ。さすがにラスト、『めでたしめでたし』ではないよね』  
これはまさに『思い出し、思い出し』であつて、彼の語りに付き添うわれわれも、一緒になつて記憶を探り探りしているのを体感できよう。  
そしてこれらは純然たる記憶の作業であつて、何ら作中世界の「体験」ではない。われわれは記憶から分かつていることを取り出しているだけだ。

われわれはこれをもつて、浦島太郎の「話」をしたとは言えない。ではわれわれはいま何をしたかというと、先の「観測結果を発表している」ということに準じるなら、へへ記憶の参照結果を発表した▽▽ということになる。

「前回優勝したのはアルゼンチンだよね」  
「桂小五郎が後の木戸孝允だよね」

「漁港で車故障したのって三日目の朝つスよね」

「あのときのことって元カレが悪いよね？」

「竜宮城にいたのは乙姫だつたか」

「子供のころわたしあさがお育てたんだよね」

こうした一般的な記憶は、取り出して使用できるという形になつていいが、この記憶じたいが何なのかというと、これは単にへへかつての観測結果vvvだということになる。いま、目の前で彼氏が悪いということを観測しているのではなく、過去に元カレが悪いということを観測した、その保存情報を参照・発表している。

われわれの色（しき）には、そうした自動バックアップ機能があるというだけだ。

それはそれで便利なもので、その機能がなければ生活に不便をきたすから、その機能じたいはあつてくれていいし、なければ困るものだ。「冷蔵庫に、牛乳はまだあつたはずで、卵も、あと四つぐらいあつた。でもたしか、棚にしようゆがもう無いんだよね。買わなきや。あと、そうだ、みりんだ。みりんがもう残りゼロだつたはず」

こうした記憶の機能が皆無では、われわれは買い物のときに困るだろう。

だがまさか、「冷蔵庫に卵は四つあつた」とか、「みりんがもう残りゼロだつた」とか、そんなことをわれわれは「思い出」とは呼ぶまい。それらは記憶であつて「話」ではないし、もともとが観測であつて「体験」ではないのだから。

われわれは童話「赤ずきん」の内容を、おおざつぱに思い出せるし、ウエブ検索をすればその詳細な記録を取り出すことができる。

そして、その内容を理解することは大人のわれわれにとって簡単なことだ。

また、

「この話って、けつこうスリリングで、聞いている側はドキドキしますよね」

と、理解すること、そう想うこと、「子供のころドキドキしたなあ」という記憶を思い出すようなことも、われわれにとつては簡単なことだ。

だがそれらはやはり、直接の「赤ずきん」の体験ではないし、直接の「赤ずきん」の思い出でもない。

原理的に言って、われわれの内部に、自我未然のこころがもう存在していないということではない。自我未然のこころはいまも残っている。けれどもいまのわれわれがそこにアクセスできなくなつたというだけだ。

アクセスは何によつて阻まれるのだろうか。

われわれが自我という看板の前で立ち止まることによつて阻まれる。

われわれが本来持つている「体験する」ということの機能は、自我の成立位置よりずっと原初のほうに存在している。平たく言つて、へへ自我未然が体験vvvなのだ。自我以降は観測であつて、量る、分かる、ということに終始している。

単純に言つて、たとえば落語家が話す「しじみ売り」という噺（はなし）を、記憶力の良い人なら一言一句まで暗記することができるだろう。けれどもそれをただ暗唱したらかといって、「しじみ売り」という噺が体験されるのではないことはあきらかだ。ただ暗唱するだけでよいなら、テキストデータを人工音声が読み上げればよい。

そうではなく、いちいちを体験するということ。ここに優れた落語家がいるとすれば、おどろいたことにその名人は、「しじみ売り」を記憶しているのではなく、その都度に「しじみ売り」を再体験しているのだ。何回も何百回も。それはへへ反復されるのではなくvvv、その都度に新しいものとして口にされて噺となる。

新しいというのは自我にとつて「分からぬ」ということだ。新しく

ないもの、すでに知られたものならば、自我はその既知のものを既知のイメージどおり分類・分別するだろう。しかし新しいものは未だ知りようがない。それで、自我は真の未知に向き合うならその「分かる」といういつもの機能を停止するのだ。岡本太郎が芸術を「常に新しくなくてはならない」と言ったのはまさにこれのことだし、萩原朔太郎が薬物に頼つてでも得ようとしたのもまさにこれのことだ。

芸術の（特に文学の）技法として異化という方法、「見慣れないもの」へ書き直していく手法が採られるのもまさにこのためだ。見慣れないものは自我がイメージをあてはめることができず、分類できない、つまり「分からぬ」……分からぬものに対しては、人はそれを受け取るならそれを体験する——想像力を以（も）つてそうする——しかないのであつて、そのことが芸術家においては方法論に織り込まれているのだ。

われわれのこころは、自我の発生によって、その原初へのアクセスを閉ざされる。それはじつに一般的かつ強固なことだったとして、それでもそのことは必ずしもわれわれの恭順と無抵抗を決定はしないだろうし、そうして堅牢に発達した自我がわれわれに対して必ず“支配的”であらねばならないということも道理はない。われわれは「分かる」ということを豊かにしなければまともに生きていけないが、だからといって「分からぬ」——分かる未然のこころ——にアクセスできなくなるということに必然性までは見当たらない。

ただ、自我未然のこころと自我以降のこころが、一般には相互に侮辱的にはたらくというだけだ。その相互に侮辱し合うというのも、言つてみればただ未成熟なだけであつて、双方が成熟してそれぞれの機能をもつて統合しあうようになれば、そのことは解決するのではないか。

ウミガメにまたがつて竜宮城に行こうとし、海で水死する者がいたとしたらその者はただの精神病だが、かといって、

「浦島太郎は現実じやないじやん」

と侮辱的に言うあるいは想うしかできない者も、大人なのではなくて、じゅうぶんに成熟を得られていないただの貧しい者だ。

観測領域に竜宮城が見当たらないのは当たり前のことだ。なのに、その筋違いかつ陳腐の極北たる発想を以つて体験領域の存在性を否定せんとする者がいたら、彼は成熟を得ないまま色（しき）に囚われた幼稚こじらせの精神貧者でしかない。

「浦島太郎は現実じやないじやん」と言う者があつたら、彼に向けては「じゃああなたも現実じやないだろ」と言わねばならない。

そもそも、浦島太郎は「話」なのだから、それが観測によつて量れないのは当たり前のことだ。

それをもつて、「現実じやないじやん」と、本人としては大人ぶつた、知能の高いふうを言いたがるのだが、お察しのとおりそのような陳腐な者が、知性において秀でているわけがない。

彼は浦島太郎について、現実がどうこうではない、本当には、「浦島太郎は色（しき）じやないじやん」と言つてゐるのだ。

もちろん当人には、自分がそうして本質的に何を高言しているのかの理解も自覚もない。

彼は色（しき）に囚われてゐるので、彼にとつては色（しき）だけが現実だと確信されてゐるのだが、色（しき）はパラメーター比率でしかないのだから、「存在」について言つたら本当には色（しき）のほうが「存在」はしていないのである。

わたしは意地悪を言いたくはないし、意地悪を言つことはまつたくわたしの目的ではない。

けれども主題に向けてこの知性的欠格のくびきを打破するためには、彼に向けて次のように致命的なことを言わねばならない。

「お前、何の思い出もなしに生きてゐるだろ」

これは、悪口を言いたくてそのように言っているのではない。構造上そのような推定を一方的に投げつけることが出来てしまうということを効果的に示すにはこのような言い方が優れた候補に挙がってきてしまうのだ。

彼の色（しき）は四歳から始まつた。自我が形成され、そのときからもう彼は、こころの原初・体験領域へのアクセスを閉ざされている。よつて彼は何の体験も得ないまま、二十年間を観測・分かる・感じる・想うといふことで過ごしてきた。そうして過ごしてきた彼の内部には、さまざまな記憶が保存されているにせよ、それらの保存はすべて当時の観測および当時の感想にすぎず、体験はいつさいレコードされていない。体験がレコードされていないなら、彼に思い出はないはずだ。もし体験がレコードされているというなら、こちらからは「そのレコードを再生してみて」と要求できてしまう。

もちろんわたしは、そんなことを言い放つて、彼を追い詰めたいわけではない。

もしそこで彼が、取り乱して、しどろもどろになりながら、それでも「赤ずきん」の思い出を話すなら、わたしはわたしの悪辣な言いようを取り下げる、

「失礼した。あなたにはちゃんと思い出があつた」と詫びるだろう。

われわれはおよそ、四歳以前あるいは三歳以前の記憶を持つていない。そのことを幼児性健忘というが、これは記憶がなくなつたのではなく、自我未然のこころの領域、体験領域にアクセスができなくなつただけだ。本当に記憶は「体験」という形で残つていて、いま現在も、そのころの領域は残つていて、アクセスは不可能ではない。われわれが、観測領域の支配に唯々諾々と恭順しつづけるのないがぎり、その領域はいまもわれわれのものだ。

## 夜は「在る」のか

夜を観測するのは簡単だ。

昼間に比べて、日光「量」が少ない。

日が沈み、明るさより暗さを「実感」するようになつてくる。それが一般に夜だ。

夜という「状態」になる。

東半球が昼なら、西半球は夜だ。

これらは、夜という状態が観測されるだけで、夜が「在る」とは言えない。

夜という「状態」は、夜という state (status) であつて、夜という existence ではない。

この問答は、初めから不毛に思える。

じうせ、観測されるなら量で、量ということは色（しき）なのだろう。色（しき）なら存在していない、ただの比率だ、ということになる。

一方で、たとえば浦島太郎は観測できないと言うけれど、じやあ浦島太郎が「存在」しているのかというと、そういう話は存在しているかもしれないが、

「かといって、それが自分の足しになるわけでもなく、浦島太郎で何をしたらしいのかさっぱりわからない」

ということに、一般的にはなるだろう。

浦島太郎が、話として存在しているとして、多くの人にとつては、

「でも、その存在じたいが正直どうでもいい、としか想えないんです」

となる。

浦島太郎で現実逃避して何かいいことになるというのか。

そのとおり、浦島太郎で現実を否定して、いいことになるのだが、何がどうなつてそんなことになるというのか、一般的には見当もつかない。

観測できないもの、量がないもの。比率ではなく、パラメーターではないもの。

パラメーターではないゆえに、「分かる」の対象ではないもの。

それが「話」であり「存在」だ。

こうしたものが、浦島太郎のほかに存在しているだろうか。

たとえば神仏などがそれにあたる。

神仏等について言及すると、宗教関係の人たちが目くじらを立てるかもしれないが、わたしは宗教方面にまったく関係のない者だし、関係のみならず関心もない。宗教方面に立場を得ている立派な人たちはまさかわたしのような塵芥のことを意に介するべきではないと思うし、またそのように格式の差で相互に保証されるものと信じてもいる。

よつて、わたしは神仏のことを言うのであって、宗教のことを言うのではない……神仏に直接叱られた場合はともかく、宗教者のお叱りに従う謂ではないと思うので、そのようにご了承願いたい。

神仏は、宗教者の独占物というわけでもあるまい。

ともあれ、神仏に量があるというのは聞いたことがない。○○如来が

何グラムという話は聞いたことがないし、それがたとえ何グラムであつたとしても仮性に相関はないだろう。さすがにお釈迦様でさえ「その身長がイケている」とまでは言われていない。

仏様は観測できないし、創造主や救世主も観測はできない。

そもそも観測できるなら何もむつかしいことはなくなる。念佛を唱えるたびにアブリの画面が光つてゆき、五回十回と唱えたところで「救済

手続きが完了しました」と出るのなら、誰でもさっさとその信仰と易行を済ませるだろう。しかしそんな課金アプリは百パーセント詐欺に決まつている。

また、観測ができてしまうなら、かつてあの人気が救世主なのかそうでないのかということで揉める必要もなかつたはずだ。

こうしたことは、

「あれは幽霊だった」

「ただの見間違いだつて」

「いいや、あれは幽霊だった」

「そんな気がしただけだろ、気の迷いだよ」

「いいや、幽霊だつた！ だつて何かスゴかつたもん」

「ああそうか、じゃあもうそれでいいよ」

というのと同じで、観測が出来ないのだから最後まで誰にも分かりようがないのだ。

神道においては、先祖の御靈（みたま）を祀るというが、だからといって自宅にしつらえた神棚に、いつもゴリゴリの「御靈」が観測可能な象で居座つていたら、家人はおつかなくておちおち暮らしていられないだろう。

靈というのは観測不能が大前提だ。

ヨハネの福音書 14:16-17 では次のようにある。

「わたしは父に、もう一人の助け手を送つていただくようお願いします。その助け手は、いつもあなたがたと共におられます。」 その方とは聖靈、すなわち、すべてを真理へと導いてくださる靈のことです。世は、この方を受け入れることができません。この方を求めもしなければ、認めようともしないからです。しかし、あなたがたはこの方を知つていいます。あなたがたと共に住み、あなたがたのうちにおられるからです。

靈」というと、われわれはただちに、「ポルターガイスト」「地縛靈のた

たり」「心靈写真」「ギャー！」みたいなことを連想するが、これはあきらかに安物のエンタメ文化習慣がそうさせているだけであつて、このパターンに尊重を向ける気にはさすがになれない。

なぜそんな安物のパターンが入り込み、そんなものがわれわれにおいて支配的なのかというと、それは単にわれわれが靈という国語を正しく捉えられていないからだ。靈という語はへへ観測不能かつ非力動性の一切を指定するものvvvとして用意されているのに、あろうことかわれわれはそれを「靈狀態キター！」というような感覚で捉えているのだ。

観測不能の意を、「靈狀態ですよね！」とわざわざ力強く観測して言い張ろうとするのは、知性的欠格、つまり純然たるアホに違いないが、それほどまでにわれわれは「分かる」ということが好きということでもある。

「靈」は、状態ではなく存在を指定する語なのだが、しようがない、どうしても「状態」だけを認めたい人は、せいぜい「靈モード！」というふうにでも捉えておけばいい。そして靈といつても、すべてが惡靈というわけではないはずなので、「聖靈モード、オン！」というふうにでも捉えておけばいいだろう。

それでじつさいに聖靈モードになるのであれば誰も文句は言わない。

それで、夜は「在る」のかということについて。

わざわざ靈という語を導入して、ここで「靈なる夜」あるいは「夜なる靈」を仮定すれば、その夜は「在る」ということになる。

なぜなら、「靈なる」それは観測不能であり、観測不能ということは体験によってそれを受け取るしかないとことだからだ。

「靈なる夜」という仮定は、まさにその夜を「体験」するということであつて、そのとき夜は「在る」ということになる。

夜が、ユニークなものとして「存在」し、そのかけがえのない「体験」が得られるということになる。

それはさすがに、日光量がどうこうとかいう、「状態」としての夜ではないだろう。

このことは、「夜」のみならず、あなたは「在る」のか、というテーマにも引き当たる。

「靈なるあなた」、あるいは「あなたなる靈」を仮定すれば、それにおいてあなたは「在る」ということになるだろう。

パラメーターではない、あなたじたいを「体験」できるという、あなたが存在するのだ。

ここでいいかげん、靈というと「ギャー！」しか連想できない人は、もう靈長類という分類を降りて、げつ歯類か何かになつてカピバラと一緒に暮らせ。

靈長類の称号がもつたいないだろう。

靈なる夜であれば、その夜は在るし、靈なる場所であれば、その場所は在る。

靈なる声であれば、その声は在るし、靈なることばであれば、そのことばは在る。

靈なる姿であれば、その姿は在るし、靈なる風であれば、その風は在る。

あなたは、どこかに旅をするとして、その旅先の地靈にまみえることもしないつもりなのか。

それではどこを歩いているのか、「在り」もしない土地を歩いたのか。「旅の道中、どうだつた」

「旅状態でしたね！ 日常とは違う状態ですよ。ドーパミン量が多く、テンションパラメーターが大です」

これではアホではないか。

靈なる夜が与えられた場合、その夜はますます観測不能になっていくが、観測不能のくせに、まるで指先でその実物に「触（さわ）れそう」なほどに、それを体験するのだ。

夜そのものを、指先で撫で、指で梳かすことが出来る。もちろん、触ったとして、重さはないので感触はない。

感触はないのに体験はある。

なんだこれは。

夜が「在り」、何もかもが「在り」、ずっと向こうまで、果てしなく「在る」がつづいているように体験される。そして何もかもが「呼んでいる」ようにも体験される。

また直後には、自分がそのすべてのものを、呼び込んでいるようにも体験するのだ。

海も山も人も川も、石ころも外灯も、吹き込む風さえも、すべて生きている（命がある）というように体験される。

はるかな過去さえも、足許に、風に、いま息づいている。

靈なる夜が与えられるといって、それが抽選で当たるわけでもなかろうからこそ与えられるものなのだろう。

これは何なのかといつて、人は本来、そうして「話」の中を生きているということだ。

本来、量や状態を観測するだけの存在ではないということ。

量や状態を観測して、あれこれ感想しているのは、人ではなくて自我だ。

わたしは「話」の専門家なので、一方的に申し上げるが、人が話の中を生きているということはそういうことであつて、そうしてすべての「存在」を体験する中を生きていなければ、とてもじゃないか「話」なんて出来ないのだ。

なんなんだこれはと言つて、わたし自身が、その「なんなんだこれは」を言い続けて、何十年も生きている。

これが何なのかには「分からぬ」のだ。

これが何なのかについては、せいぜい、同一性においてこれが「わたし」なのだろうと言うしかない。

分離・識別できるボクちんが「わたし」なんだよというような、寝ぼけたことをまさか言つていられない。

靈なる夜、靈なるうんぬんと言うなら、それはもう聖靈の嵐なのだ。

わたしはもう長いこと、「ひょえええ」と畏れおののきながら生きている。

もちろんこれらのことが、観測主義の側からは、侮辱の対象にしかならないということも重々承知している。

承知も何も、わたしがそれを解き明かしてわたしが説いているのだから、わたしはそのことを知つていて決まつていてる。

体験の機能は、観測の機能の未然にあり、機序としては原初に位置している。

靈という語は、観測不能かつ非力動性の一切を措定するものなので、観測の未然にある「体験」は、すべてを靈なる○○として体験するということになる。

人の、自我以降はどうあれ、自我未然の原初は靈的だつたということは、直観的に違和感がないではないか。

わたしが歩くとき、靈なる夜がやつて来、靈なる道が息づき、靈なる風が吹き込んでくる、と、そのようでなければ、正直なところ話にならない。

それは何も特別なことではなく、この世界のこととして当たり前のことを体験する中を生きていなければ、とてもじゃないか「話」なんて出来ないのだ。

量と観測と感想だけを支配者として崇め奉るのでなければ、靈なる夜

が「在る」のは当たり前だ。

そんなわけなので、わたしはオカルトの文化習慣に用事がなく、同様に、スピリチュアルの呼びかけにも用事がない。

夜が「在る」のだから、そっち方面に用事はない。

占いの館に入ることは、わたしにとつては何ら靈的ではなく、それよりは路地裏に吹き込む一陣の風と、そこにそよぐ椿の葉のほうがよほど靈的だ。たえまない聖靈の嵐に「ひよえええ」と畏れながらわたしはずっと歩きつづけている。

## 自我の真ん中と「この人」の真

### ん中は、位置が違う

バス通りを外れていたら、いつまで待っていてもバスは来ないだろう。待ちぼうけだ。

どれだけバスを信じ、本気でバスに乗りたいと願い、バスを念じていたとしても、バスはやつてこない。

「バスなんて存在しないのだろうか」

違う。

それは、バスが存在しないのではなく、バス通りを外れているだけだ。

バスにはバスの通り道がある。

「体験」、その靈なる○○の通り道があるとすれば、それは「体」の真ん中だ。

自我の中を、そのバスは通り抜けない。  
体の真ん中を通り抜けていく。

体の真ん中は、いわゆる正中線ということになるが、正中線の各所を捉えていくのはむつかしいので、さしあたりメインのバス停を捉えるべきだ。

メインのバス停、それは横隔膜のいちばん奥だ。

その他、いわゆる丹田を捉える方法などもあるが、それはあまり「話」ということにつながってこないので、さしあたり横隔膜のいちばん奥を捉えるのがいい。

体験はそこを通り抜けていく。

のぼりもくだりもその通りを抜けていく。

顔面・頭部のロータリーには、「体験」は来ない。

顔面・頭部のロータリーには、「観測」「量」「状態」「分かる」「感じる」「想う」が来る。

つまりそちらは、色（しき）の通りだ。

靈の通りではない。

靈といって、オバケではないのだが、このことにオカルトやスピリチュアルの連想を混ぜ込んでしまう人は、もういろいろあきらめてくれ。海の靈というのは、オバケではなく、ただの海の体験であつて、もし海の靈がないなら、そこにあるのはただの実存、ただの巨大な塩水だまりだ。

体の真ん中、横隔膜のいちばん奥に、「体験する」という機能がある。ただしそれは、体験されるのであって、「分からぬ」ものだ。

「分かる」は、観測であつて体験ではないのだから。

浦島太郎という寓話の記憶を、「むかしむかし、あるところに」と思い出していくことは簡単だが、そうして記憶を思い出したとしても、その胸の奥に、砂浜の波音は響いていない。

横隔膜のいちばん奥に潮験は体験されていないのだ。

潮験が体験されるとすれば、その器官はわれわれの機能の原初、観測未然の領域にある。

それが横隔膜のいちばん奥だ。

この話をするにしばしば、

「横隔膜ってどこにあるんですか」

と訊かれる。

横隔膜は、肋骨の下だ。

肺の空気を出し入れするはたらきをしている。

焼肉で言うとハラミだ。

現代人は、日常、横隔膜をカチカチに硬直させて暮らしているから、

まずそれをやわらかくしなくてはならない。

やわらかくする方法は、特ないので、「やわらかく」と思うしかない。

横隔膜のやわらかい人を見つけて、その人を見本にするしかない。

横隔膜は、やわらかく、広げられ、ゆったりと押し下がっているほうがいい。

横隔膜が、カチカチに硬直し、引きつって持ち上げられているのはよろしくない。

そうして、横隔膜をやさしいものに整え、そのいちばん奥に、「体験」

が通るのがいい。

体験はどこからやつてくるか。

空間からやつてくる。

(地面のことはいつたん忘れよう。ただし、膝は抜けて、足の裏は均一でよろしく)

体験の通り道は、基本的に、頭頂部から頭上の空間に抜けていると思つていい。

のぼりもくだりも。

言い換えれば、浮身も沈身も。

体の真ん中を通って、頭頂部から外の空間へ、抜けていくし、外の空間から頭頂部を通り、体の真ん中へ入つてくる。

空間が体の真ん中を通り、「体験」されるのだ。

空間とつながつたままだ。

体の真ん中（横隔膜の最奥）が空間とつながつたまま、「体験」が得られる。

これは魂の現象だ。

ものすごく端折つていても、初学の人にとっては複雑だろう。

しかも、これはどうやら本当に魂の現象、靈なる○○の体験ではないのかと思えるほど、このことは初学者にパニック症状をもたらす。

体調がおかしくなり、精神がおかしくなり、本当に精神に「恐慌」が起ころのだ。

何も大したことはしていないのに、精神恐慌が起ころる。

「どうしたの」

と訊いても、

「わからないです」

と当人が言う。

しゃがみこみ、膝を抱えて、震えていたり、泣いていたり、怒り出したり、思考が定まらず、感情も定まらず、胸が苦しく、とにかくもう「パニック」だ。

あまり力任せにいじくると、クンダリーニ症候群、のようなこともふつうに起ころる。

だから、ほどほどかつ、半信半疑かつ、おつかなびっくりでやるのが

いい。

いや、やるのがいいと言われても、ふつう、やる方法が無い。

隔膜のいちばん奥を「わたし（存在）」としてはたらかせていくという方法は、当たり前のことであって、奥義というわけではない。

そんなこと、ふつうの人は出来ませんと言われてしまうと、それはそのとおりなのだろうが、やれ「話」とか「色（しき）」とか、ファイクションがどうこうとか言い出せば、この「体の真ん中」を使えないでは話にならないのだ。

それでいて、率直に申し上げれば、この「体の真ん中」の事象とエネルギーをいきなりMAXで食らわせれば、一般の人はそれだけで重篤なパニック症状に陥るだろう。

重篤といつても、数日ぐらい具合が悪くなるだけだが。

とはいって、そのパニックから当人の自我が暴れ出し、当人が魂の現象と大喧嘩してしまうと、救急車を呼ぶ騒動もありうるし、本当に数ヶ月～年単位で入院になってしまふというようなこともある。

このときに起くるパニックは、本当に苦しいし、パニックの予兆だけでも苦しいので、対症療法の処方箋を授けておく。

まず、ワيدショーを観なさい。

「ミヤネ屋」などを観ればいい。

そして、「めちゃ知っている」ことを考えろ。

たとえば、ファミリーマートとセブンイレブン。

あなたがおにぎりを買うとしたらどちらで買うか。

あなたはそういうことを「めちゃ知っている」。

めちゃ知っているものに集中すれば、パニックの苦しさは遠のいていく。

あなたはふだん、だいたい何足ぐらいの靴下を使いまわしているだろ

う。

タンス、衣装ケースの中に、何足ぐらい入っているだろうか。

だいたいでいい。

あるいは、高校生の男の子が、付き合っている彼女にアクセサリーをプレゼントしたいという。

付き合って三か月ぐらいで、初の誕生日プレゼントということなのだが、金額的にはいくらぐらいのプレゼントが妥当だろうか。安すぎるはいまいちだが、かといって高すぎるのも、年齢や交際のていどとして不相応だ。

三千円では安すぎるか、三万円では高すぎるか。

なんとも悩ましいところ。

あなたが「めちゃ知っている」こと。

人々は、この「めちゃ知っている」ことの中で暮らしているのだ。

あなたは、ポテトチップスというと、カルビーと湖池屋、どちらが好みだろうか。

人はポテトチップス「のりしお」をバリバリ食べながら、パニックにはならない。

「めちゃ知っている」へのアクセスを、方法として手元に残しておくことだ。

めちゃ知っているし、よく分かるし、よく分かっていること。

ワيدショーで、不埒な犯人について、

「断じて許せませんね」

とコメントされることは、誰にとってもすごくよく分かることだ。

この「めちゃ知っている」ことの中で、人々は生きているのだし、この中に生きているうち、人はさしあたりパニックにならない。

そうした、「めちゃ知っている」ことを眺めているうち、余力が出てきたら、そのときの自分の身体性にも目を向けてみる。

「めちゃ知っている」にアクセスしているとき、あなたは全身のうち、どの部分をはたらかせて いるか。

あなたはふだん、だいたい何足ぐらいの靴下を使いまわしているか。

「えーっと？ 何足ぐらいだろ。けつこうあるよ」

それだけつきよく、

「よくわかんない。たぶん、十五足ぐらい？」

となつたとして、もちろん靴下の数はどうでもいいのだ。

その「えーっと」のとき、あなたは身体の「どこ」を使つたか。

たいてい、顔面・頭部に意識が集まる。

顔面の中央、やや上よりぐらいだろうか。

少なくとも、胸に手を当てて靴下の数を考える人はいない。

そうして、顔面・頭部に、自我・観測という色（しき）の通り道がある。

それはそれでよくて、ただ、そちらの通り道に浦島太郎をリピート再生しても、それは浦島太郎の「話」としては体験されないとということなのだ。

「わたし」がふたつ存在してしまっている。

体験の「わたし」と、観測の「自分」、ふたつの「わたし」が存在して いる。

そのふたつは、へへ具体的に場所が違う▽▽のだ。

さらに困つたことには、そのふたつの「わたし」は、相互に侮辱的には たらくのもある。

先に述べたように、その侮辱性向が收まらないのは、単なる未成熟ゆえのことでしかないのだろうけれど、そなは言つても現実的にその成熟を獲得するのはそう容易なことではないので、さしあたり「相互に侮辱的にはたらく」という性質のものだと捉えておくのがよい。

観測者は体験者を許さないし、体験者は観測者を歯牙にもかけないのだ。

このことは、どちらの「わたし」が主たるものなのかという、権威の抗争として起こつて いる。

ファミリーマートやセブンイレブン、あるいはカルビーや湖池屋といった、「めちゃ知っている」「すごい分かる」の勢力をもつて、浦島太郎に 対抗している。

竜宮城とかいう架空の城など、ローソンの実たる権威に及ぶべくもないでしょ、ということだ。

一方で浦島太郎は、

「ローソンは、あなたの『話』ではないし……」

ということで対抗する。

そういう抗争だ。

どちらが主であるかという、権威を争つて いる。

とはいえあなたは、概念的には、自分の本質が「話」の存在であるとい う説に対し、第一に拒否的ではない。

むしろ自分の本質は何かしらの「話」であつてほしいし、そういう「存 在」でありたいと、みずから求めるかもしれない。

にもかかわらず、なぜここで抗争が起つて、ここでパニックが起つて いるのか。

色（しき）の拠点が顔面・頭部だったとして、事実、それが「自分」な のだと、われわれはそれぞれに何十年も生きて いるのだ。

それが突如、そうではない、別の箇所に「わたし」があるのだなどとい うことになれば、その人の全身全霊は「政情不安定」に陥る。

二百五十年間も、江戸に日本の「主」がいると思われてきたのに、突如 そうではない、京都にこそ日本の「主」がいるのだということになれば、 それは政情不安定になるだろう。

たいへん安っぽい捉え方だが、わたしが捉えていることは、「顔面幕府 と横隔膜天皇」というような構図で捉えても、ぎりぎり本質から逸脱し だ。

ない。

ただしそうして、イメージしやすくなつたからといって、それが実現しやすくなるわけではないので、やはり浮かれるようなことではない。

「分かる」と「分からぬ」。

顔面・頭部に生じる観測は「分かる」。

横隔膜最奥に得られる体験は「分からぬ」。

わたしがここで唱えている「話」というのは、われわれの体が、その「体験」ではたらくことだ。

自分で挙動せず体験で挙動する。

理解やパラメーターの中を動かず、話の中を動く。

そんなことがありうるのだろうか。

話というのはそれじたいがフィクションのはずだ。

フィクションの中を具体が動けようはずがないだろう。  
具体は何よりもノンフィクションの存在なのだから。

と、一般にはそのように思い込まれていて、本当にそのとおりだったなら、誰もパニックにはならないだろう。

けれどもじつは、穩やかでないのだ。

あなたが両手で、棒切れをガッシリ持つていていたとする。

両端を握りこみ、両足を踏ん張つて、盤石の構えだ。

わたしが片手の指先で、その棒をつまみ、押し込んだとしても、あなたはビクともしないだろう。

あなたは両手でガッシリ持ち、こちらは片手の指先でつまんでいるのだから、「力」のパラメーター差はあきらかだ。

しかし、わたしが「分からぬ」の中を動いたら。

わたしが「体験」で挙動し、「話」の中を動いたら。

あなたはストーンと押し込まれてしまい、そのまま尻もちをつく。

「なんですか？」

尻もちをついた当人のあなたがそう疑義を言うだろう。

このことは、不思議でも何でもない。

本当に知り抜けば、これは当たり前のことであって、不思議なことではないのだ。

わたしは逆にあなたに言おう、

「なぜあなたは、『力』で体験を止められると思うの？」

力は観測できるものだから、観測された力に対抗して「止める」ということはできるだろう。

けれども体験や話は観測不能のものだから、あなたがどれだけ「力」を準備していたとして、観測しないうちに動きは終わり（話は終点に至り）、そのときにはあなたがストーンと座り込んでいるのだ。

どれだけゆっくりやつても変わらない、結果は同じだ。

やればやるほど、現象はあきらかなのに、あなたはどんどん「分からぬ」になつていく。

「分からぬ」をやつているのだから、どんどん分からなくなつていつて当たり前なのだが、あなたは具體まるごと「分からぬ」になつていたという経験がないので、パニックになる。

パニックの中で、あなたはこのことに侮辱的な態度を噴出させる。

もう少し詳しく説明すると、そのときあなたは、自分の力でわたしの力をちゃんと止めているのだ。じつは、「力」は成り立っている。

が、わたしが挙動すること、あなたがストーンと座り込むことは、体験であつて力ではない。

あなたは、グイッと来られた力については「分かる」から、それを止めることができる。

けれどもそれは、あくまでわたしがあなたと分離しているからこそその「分かる」にすぎない。

そこでわたしが、あなたと同一性のものとして挙動したら、それは「分からぬ」のだから、あなたとしては止めようがない。あなたは分からぬうちにストーンと座り込んでいる。

あなたはそこで、自分の体験についてどう想うか。

あなたは、まともな「記憶」に残っていないのだから、想いどう想うといつても、想いがない。

自我未然、観測未然の領域、「体験」にそれは起こっているのだから、幼児性健忘と同じで、取り出して使用できる形の記憶には残らないのだ。

じゃあ何が起こったのかというと、

「わたしが、棒をつまんで、すうっと進みました」

という「話」があつただけだ。

「話」を「力」の量で止めるることはできない。

（「止める」ではなく、単独でガチガチに力む・暴れるということでなら、事象を重く遅くして抵抗はできますが、それは「止める」という行為にはなつていませんので、恣意的に逸脱した一種の現実逃避となります）（便宜上、「動く」「挙動する」と言っていますが、じつさいには体験により具体が「変化する」ということであつて、一般的な力動性はすべて排除されます。自分で観測できる力動をするとそれは相手も観測できるので止められます。そうではなく、たとえば春・夏・秋・冬の変化を力では止めようがないVVVということのように、その変化ははたらきます。春夏秋冬の境目は分離されていません）

一般にはまったく知られていないことだが、自我の真ん中と「この人」の真ん中は、位置が違う。

これほどまでに、「一般には知られていない」ということが他にあるだろうか。

わかりやすさのために、「自我の真ん中」「この人の真ん中」という言い方をしているが、じつさいには自我には真ん中というものはない。

主題は、「この人」の真ん中のほうだ。

「この人」の真ん中は、体の真ん中であつて、体の真ん中というと、さしあたり横隔膜のいちばん奥を捉えればいい。

バスを待つには、バス通りで待たねばならないように、「話」を取り扱うなら、あなたは体の真ん中でそれを受け取らねばならない。

一般には知られていないが、人には本当に、ふたつの「わたし」があるのだ。

バスを待つには、バス通りで待たねばならないように、「話」を取り扱うなら、あなたは体の真ん中でそれを受け取らねばならない。

体の真ん中（横隔膜の最奥）に拋し、空間とつながり、体験で挙動する「わたし」。

このふたつは、目の前で実演されると、びっくりするぐらいの差がある。

それは、初対面の、見ず知らずの他人をさえ、

「こんなに違うのか」

と驚愕させ、呆然とさせるものなので、あなたはさしあたり、「いまの自分はどちらだろう？」などと悩む必要はない。

あなたはただ、横隔膜の最奥を開拓する、その気概と勇気を持てばいいのだ。ただしそこには常に、心身を損なわないでいどに「ほどほどに」という忠告が添えられていてほしい。

## 色（しき）の不連続性と「色々」

年長者が、生きてきた過去を振り返ったとき、誰でも、

「色々あつたねえ」

と回顧する。

けれども本当に色々あつたのかは定かではない。

別の視点に立てば、人が生きるというのは、存外「特に何もない」とも言いうる。

長い時間——あるいは短いかもしれない時間——を生きていくのだから、できれば「色々」あつてほしいものだが、かといって願望を事実とすり替えるのではいささか往生際が悪いというものだろう。

世の中は色々と変わっていく。

これを読んでいるあなたが、まだ未来しか知らない若い人だとすれば、あなたがこれから後に知っていくことは、多くの人の価値観や考え方が、まさに「色々」変遷するということだ。

そのことは、途中であなたに恐怖心さえ与えるかもしれない。

「運命の出会い」と言って、プリクラを撮り、互いの名前のタトゥーを入れ合いつまでしたアツアツのふたりが、交際二ヶ月であつさり別れる。

二ヶ月前に自慢していたあのアツアツは何だつたのかという話だ。

あるいは、「ウチは、自分の身体いじりたくないし、きれいなままでいい」と言っていた少女が、借金を抱えるとすぐにタトゥーを入れ、咥え煙草で性風俗の控室にあぐらをかいて座り込んでいる。

はたまた、「ガンガンやつていきましょよ！」と、熱く言い合つた若い彼が、二週間後にはもう職場に来なくなる。

先日まで「そういうものだし、そういう業界でしょ」と言っていたタレンツ事務所の社長が、なぜか今日になつて「悪逆非道の親玉だ」と激しくバッティングを受ける。

「握手券を添付して音楽CDの売り上げをかさ増しするなんて、やり方が外道すぎて認められない」と蔑まっていたのが、二年後には国民的アイドルになつて大手を振つて歩いている。

数か月前まで「天才」「第〇世代」と奉られていた芸能人が、もう今月には忘れ去られていて、メディアに露出しても「オワコン」と嘲笑されている。

親が、年を取り、夜な夜な「孫の顔が観たいわな！」と長女に泣きついたのに、夜が明けてきようになると、当人がそれを覚えていない。

各種のメディアで、「〇〇による環境破壊」「××による健康被害」がまがまがしく言われて、人々は青ざめたのに、三年が経つと、「あれってどうなつたの？」と、けつときよく何もないまま忘れられていった。

あと二十年で石油は涸渇すると言われたのに、四十年経つてもまったく涸渇しない。

しかもその昔の発言について誰も訂正や説明をしない。

「これぐらいのミスや弱さで、彼をこんなにも叩くのはやりすぎです！」と、気高い誰かが言う。けれども周囲から風当たりの強さが二週間続くと、「彼がそれほどのことをしていたとは、これは同情の余地がありません」と話が変わる。

戦中は、「神州不滅、米英撃滅」と言つて竹刀を振り回していた人が、戦後ただちに「この戦争はおろかで、初めから負けるとわたしは思つていたんです」と言い出す。

(当時そういう人はたくさんいたらしい)

「そんなことで、わたしに気を使わなくていいよ」とはにかんで言つていた人が、半年後、「あのさあ、ちよつとはわたしに気を使おうと思わないの!?」と牙をむいて怒鳴る。

今月中にやります、と潰刺と言つていた人が、後日「今月中なんて言つていませんよ、今月中なんてぜつたいに無理ですもん」と言い出す。遺産分与は要らないよ、最後まで世話をしてくれたあなたが持つていてねと言つていた人が、後日、きゅうに代理人を立てて遺産分与を請求してくる。

「わたしが告白したら、あなたは『いいよ』って言つてくれたじゃない。あれをどうするつもりなの？」

しかし、彼は告白されていないし、もちろん「いいよ」と答えてもらいない。

なんだこれは、頭がおかしくなったのだろうか。

これらのことは、へへ「連続性がない」▽▽と説明される。

きのう言つたことと、きょうのことが連続しておらず、先月の価値観と、今月の価値観が連続していない。

当人としては、どうやらふざけているのではないか、また当人の自覚としては、悪意はないということらしい。

金曜日の夜、男性とお酒を飲み、仕事のストレスが溜まっていたせい

で、勢いがついで深酒になつた。

「ねえいいじやん、しようよ。連れてつて。何、わたしそんなに魅力ないの？ それともあなたがそんなにいくじなしなの？ あはは」と男にしなだれかかる。

いいのかよ、と男が数度確かめるが、彼女は、

「え、だつてわたし、そんなにお堅いタイプじゃないし。そりや、誰とでももつてわけではないけどさ……これまでにもこういうこと経験あるし、そんなのいちいち何とも思わないよ。ね、行こ」と笑つて言う。

それが後日になつて、メールが着信し、

「あのさ、あれつてどういうつもりでわたしのこと抱いたの？ いま考えてフツーにありえないんだけど」

彼が返しあぐねていると、

「これって犯罪じやない？ つていうか、それ以前にマジで許せないん

だけど」

と連投。

それで彼からは、

「返信遅くなつてごめん。なんかすごい怒つている？」

「当たり前でしょ」

「なんで怒つているの」

「なんでとか……自覚ないわけ？ そこがマジでいちばんキモい。ちょっとホントにマジで無理なんだけど」

そして彼は、彼女と面談し、

「あれはお前のほうからしつこく誘つてきて、しかもいくじなしとか言つて煽つてくるからじやないか」

「わたしそんなこと言つてない。ぜつたい言つてません。そんなこと、わたしが、言うわけあるかボケ！ マジで腹立つ、お前殺すぞ！」

彼女は何やら激怒し、泣き出す。

怒りに震え、テーブルの上にあるものを投げつけたいが、それをなんとか堪えている。

何が起こつているのか。

ここで起こつてていることについて、理性的に捉えようという試みは、無意味ではないが、ほとんどの場合で徒労に終わる。

何が起こつているのかというより、ただ連続性がないのだ。

金曜日の夜にイケイケでOKだったものが、土曜日に「あーあ、やつちやつた、まあしようがないかあ。すごい酔つていたしな」となり、日曜日に「なんかマジでブルーかも。後悔だわ。なんか吐きそう」となり、月曜日に「そりやわたしもスキを見せたのが悪いけれど、それにしても腹立つわ」になり、火曜日に「わかった、これふつうに犯罪だわ」となる。

こうしてまさに「連続性がない」のだが、このことは何も特殊なことではなく、むしろこれは色（しき）の特徴がオーソドックスに出たものと見てよい。

色（しき）というのは、まさに「色々」変わるものだ。

色（しき）は、自我であり観測だが、観測というのはパラメーターを観測するのだ。

「へへパラメーターがきのうと今日とで同じ数値という保証はないvvv。

株式相場はどのようであるか。昨日には堅牢だった銘柄も、一晩寝て起きたら、朝にはもう数値が変わっていて当たり前ではないか？

たとえば、未成年が煙草を吸つたという報道を聞きつけて、それについて、

「そんの大騒ぎすることじゃないでしょ。誰でも経験あるし、背伸びしたがるというか、そういうことをしたがるお年頃じゃない。だから、指導室に呼び出されて正座させられて終わり、でいいでしょ。わたしの同級生なんかその年齢でフツーに大麻吸つてているコいたつての笑」

つまり、赦す向き、公序良俗のパラメーターが勝つ。

けれども、ヒマなメディアがそのことをねちねち攻撃していると、それに賛同するヒマな人たちも集つて来、炎上がつづくので、自己保身からパラメーターが変動してくる。

つまり、処罰する向き、maniac な正義のパラメーターが勝ち始める。

「退学かあ。未来ある若者としては、将来を失わせるのはかわいそうだけど、逆に当人たちにとつては本当の勉強になつたかも。部活の試合を控えてのことだつたし、公立で税金も使つているわけだから、やっぱ立場をわきまえないといけないってことなんだよね。けつきよく自業自得なんだよ」

このことは、傍で聞いているわれわれが、特にこうして変遷を抽出して捉えると、違和感がすさまじいのだが、当人においてはこの変遷——あるいは豹変——はまったく違和感がない。

先週の金曜日に言つていたことと、今週の火曜日に言つていることが、まるで逆で連続性がないということに、当人は、

「いやだから、それはさ」

と言い、当人としてはまつたく違和感がないのだ。

なぜ違和感がないのかについては、次のように知る必要がある。

「へへそもそも金曜日に彼女が言つていたことは、彼女の「話」ではないvvv のだ。

金曜日に彼女の口から出たものが「話」だとしたら、それが火曜日になつて書き換えられているのはおかしい。

それは「話」としてはありえない。

先週の浦島太郎は竜宮城に行つたのに、今週の浦島太郎は「竜宮城はけつこうです」と辞退していらさすがにそれはおかしい。

けれどもそうではなく、彼女が金曜日に口にしたのは「観測結果の発表」なのだ。それは気象予報士が金曜日の大気の状態について観測結果を発表するということと大差ない。気象予報士は火曜日にはまた火曜日

の大気の状態について観測結果を発表するだろう。これについて、困つたことに、へへAさんの言つことをどれだけ聞いても意味がないvvv という単純なことが言えててしまう。

われわれは、「話を聞いている」つもりでいる。

Aさんの、仕事にかかる考え方、これからやつていきたいこと、元カレと別れた理由、俳優の〇〇がなぜ好きか、「美容にはお金をかけるべき」という主張や、将来こどもは何人欲しいというようなこと、「恋愛は遊びであつてもいいけど、結婚は、やっぱそれ以上のもの？」逆にそれは、女としては夢なんだと思う。夢みたい、じゃなくて」、「一見面倒でも、こういう人間関係つて、やっぱりやつていかなきやいけないんだと思う」「あの人は、横暴で、他人を振り回すところあるけど、やっぱマインドの強さがすごくあるから、わたし根っこであの人のことリストしてんだよね」「これからもつとさあ、こういう小旅行増やしていくよ。なんかすごい楽しい。休暇つて、単純にこういうので良かつたんだつて、

なんかすごい癒される」「わたしが△△くんと、どうにかなるって？いやあ、さすがにそれはないよ笑。わたしあああいうタイプ、嫌いじやないし、じつさい金曜日に飲みに行こうって話にもなつてているんだけど、なんかああ見えて彼って、そういう関係になつたらすごい粘着されそじやん笑？だからわたしはバス。少なくともいま、そういうことに入り込むつもりがわたしにまつたくないから」……こうしたものをして、われわれはAさんの話を聞いていると捉えているのだが、これらはじつは「話」ではないのだ。

色（しき）というのは、その字義のとおり、そのときそのときで「色々」変わる。

Aさんは、そのときごとの自分の色（しき）を観測し、その観測結果を発表しているだけなので、その瞬間のパラメーターに特に用事がないかぎりは、われわれはAさんの言うことを聞いていてもしようがないのだ。（たとえば、「今」何が食べたい？　というようなことについては、そのときかぎりの観測でかまわない。ただしレストランに着くまでの十五分間のうちその色が変わってしまうことはいくらでもありうる）あなたが数度にわたりこのようなものを目撃、体験していくと、あなたには次第に「人」というものが何なのかわからなくなつてくる。これまで思っていた「人」というものが、解体され、まるでそんなものから無かつたかのように、失われていくように感じられるのだ。そしてこのことは、最大の危機としては、自分自身のこととして降りかかるつてくる。

きのうと今日とに連続性がない。

自分でわかつてしまう。

先週金曜日に言っていたことと、今週火曜日に言っていることが違う。

しかも、全力で、確信をもつて、燃え立つように違う。

その焼けつきの中で、自分自身が不審になつてくるのだ。

なんでわたし、先週と今週とで、言っていることがコロコロ変わるんだろう。

（ひょっとして、いま言っていることも、来週にはコロコロ変わってしまうの？）

あなたは首を横に振り、強く、

（そんなことない。あるわけない）

と思念する。

来週の自分が、今週の自分とまったく接続していないなんて。

今週のわたしと来週のわたしに連続性がないなんて。

それじゃあまるで、そこにいるのは、ただの一匹のモンスターじやない。

否定しようと思つているその想念に対し、なぜか自分の体内から、

「グゲゲゲッ、あははつ」

という狂つた笑い声が起こつてくる。

何これ、と一瞬青ざめて思う。

けれどもそれを上回り、笑いの衝動が起こり、そのドーパミン量が勝

る。

「あははつ、もう何でもいいや」

ほんの僅か、

（わたし、どうしちやつたんだろう）

という危機と不安の想いもある。

けれどももう、抵抗できる段階は過ぎてしまつていて

自分が何かに乗つ取られていく。

色（しき）だ。

色（しき）に自分が乗つ取られていく。

ただただ、量的に強烈な何かが、自分にのしかかってきて、その「量」

じたいが、

「わたし」

と言い張りだす。

ふと、これの支配を受容したら、もう何もかもが終わりなのじやないかという直観も走る。

けれどもそのまま、何の引っかかりもなく、スムースにその乗っ取りは完了する。

「帰つて推しの動画でも観ようつと」

両腕と両足を振り回し、あなたは自覚的には上機嫌で、さらには一種のハイで、帰つていくことになる。

それ以降、あなたはもう「話」というものと、根本的な縁がなくなる。

「浦島太郎」

と言われると、

「あ、今日中に済ませなきやいけない振り込みがあつたんだつた」

と思いつ出す。

でもよくよく考えると、その振り込みは、明日でもよかつたし、明後日でもよかつた。

「で、なんだつけ。浦島太郎笑、だつけ」

何であれあなたはごきげんだ。

ところがしばらくして、窓の外に小雨が降り出す。

「え、雨じやん。えー、雨、いますごくイヤなんだけど。夕方に買い物に行こうと思つていたのに」

はあ、とため息をつく。  
ため息と共に、

「なんかもう、いろいろ無理になつた」

深く暗鬱になり、ごきげんだつたあなたはどこかに消えた。

「あ、冷蔵庫にアイスクリームあるよ」

と言わされて、アイスクリームはすなおにもらう。

食べて見ると、

「ひさしぶりにおいしい。こんなにおいしかつたつけ」となる。

食べるほどに、

「あー、やっぱアイスだ笑。アイス食べないと」

よくわからないことを言つて笑いだす。

あなたはごきげんになり、暗鬱なあなたはどこかへ消えた。  
これぐらい、連続性がなくなつていく。

ある色からある色へと、常に移り変わつていく。

このときまさに、あなたは「パラメーター」なのであり、完全に、話と

いう存在ではなくなつた。

それでも人は、生きものとして、なるべくその色（しき）の変転が、快適になるように、コツを見つけていき、慣れてもいって、その中を生きていくようになる。

それで振り返ると、

「色々あつたなあ」

と想う。

きょうも世の中が、人々が、メディアが、SNSが、世論が、「色々」なことを言う。

先週と連続していない人気を言い、先月と連続していない価値観を言い、昨年と連続していない糾弾を表明する。

人は、都度にそれに順応していくほうが快適だということを、生きものとして覚える。

それがわれわれの生の「色々」だ。

ショート動画をフリックしていくと、次々に「色々」出てくるだろう。  
その都度に塗り替えられていく。

順応が速くなつていく。



Aさんは、

「ガンガン、ですか笑」  
と茶化し、侮辱的に答えるだろう。

三日前にAさんが応じていた態度や言動とはすでに異なつてしまつて  
いる。

なぜAさんは三日前と連續性を持つていないのである。

それは、もともとからAさんが「ガンガンやつていく」というような  
「話」は、成り立つていなかつたからだ。

Aさんがガンガンやつていくというような「話」はなく、ただそのと  
きそういうパラメーターの按配で、そういう色だつた。  
みんなでそういうふうにチヤホヤしたのだ。

その後、あてがわれる量が増減し、パラメーターが力動したら、色は

変わるので、三日後に、三日前の色はもう継続していない。

ただそれだけのことだ。

そこでみんなでAさんをチヤホヤしつづければ、Aさんの「ガンガン  
やつていく」は継続可能じやないのかとも思えるのだが、残念ながら薬  
物依存症者からよく知られているように、そうしたことの「快」あるいは  
は「快感」には耐性がついてきてしまうものだ。

常にきのうより今日のチヤホヤのほうが大量でないと、それは効かなくなつてしまふ。

三日前のそれは気持ち良く、快感だったが、三日後に同じものを投与  
されても、

「うーん、こないだほどじやない」

となる。

気持ち良さが、こないだほどじやないなら、もう「アツい展開」ではなくなつてしまふ。

このようにして、人の色（しき）は「快」「快感」のほうに従うのだが、

この現象を「自己愛」という。

わかりやすさのために、この自己愛という現象に、「オホホホホ」とい  
う笑い声をくつづけてみる。

たとえば未成年者が喫煙をしたという報道を聞いたとき、Xさんは次  
のようないい声をくつづけてみる。

「そんな、背伸びをしたがるお年頃のことに、いちいち目くじらを立て  
て騒ぎ立てるとはありません。指導室に呼び出して、正座でもさせて  
懲らしめればそれで十分ですわ。若者たち、どうぞ恥をかかされながら、  
それでも青春の中を突き進んでください。オホホホホ」

けれどもここで思いがけず、ヒマな人たちによる本件の炎上は粘つこ  
く、メディアも他にネタがなかつたので、本件をしつこくつづき続けた

とする。

ヒマな人たちにより視聴率はあがり、視聴率があがるということは、  
その報道がさらに広まるということだ。

すると炎上の火の手は、わずかにこちらにも及んできかねない気配に  
なる。

Xさんのコメントは、

「世間はこうしたことに厳しくなつてているんですね」

というふうに変化し、ここにオホホホホは消える。

そして翌週には、

「退学処分というのは、いささか酷のように思えますけれど、彼らにと  
つてはなによりも生身の勉強、本当の勉強になつたと思います。彼らの  
ことを、知れば知るほど、どうやら悪質で……彼らは公立学校の生徒で、  
世の中にお世話になりながら勉強させてもらつている身なのだという、  
立場を弁えねばなりませんでした。とはいえこうして誰しも、自業自得  
の中から学んでいくものかもしませんね。頑張れ若者たち！ オホホ  
ホホ」

このようにして、Xさんの思考や発言には連続性がないが、それはそもそも、ここにあるのがXさんの「話」ではないということだ。  
Xさんの、そのときごとの色でしかない。  
あるいは他の例。

「握手券をつけて、CDの売上をかさ増ししようだなんて、いやしくもアーティストにあるまじきことですわ。そんな悪だくみをして、いつときの人気を得たとしても、スターダムには登れませんし、文化の殿堂には入れさせてもらえないのです。早くそのやりようを取り下げる、みずから足で一歩ずつ進まないと、やがてとつぜんハシゴを外されて、どんなでもないことになりますわよ。オホホホホ」

これが二年後には、

「知れば知るほど、みな一所懸命で、純粹な子たちでした。まるで身をなげうつように、これまでの垣根を取り払って、真に人々に必要とされる表現者となつたのですね。そりやあもちろん、初めは誰も知らないそのやり方に違和感があつて、ほうぼうから悪しげまさに言われることもありましたけれど。それでも、彼女たちは彼女たちのやり方で、ついにその栄光の舞台に駆けあがつたのです。あっぱれ！ いまや国民的スター」といつて、彼女らのことを思わない人はいないでしよう。オホホホホ」となる。

このように、Xさんの思考や発言、また意見に連続性がないのは、もともとそこにXさんの話があるわけではなく、Xさんがただ自分の快、へへただ「オホつく」ということに向かつて拳動しているだけvvだからだ。表面上、何が正論かを手探りするような、しどろもどろの手続きがあるけれども、その手探り作業のゴールは正論や何かの話に到達することではなく、ただ自分が「オホホホホ」となることなのだ。  
オホホホホと、自分が快、快感、快適になることに向かつている。  
この指向の原理を自己愛という。

この自己愛について、当人は違和感がないので、  
「世の中を生きていくというのは、そういうものですね」と、むしろニッコリほほえみ、一種の自負さえ見せるかもしれない。  
それについてはわたしとしても、「世の中」を生きていくといふのはたしかにそうかもしれませんねと、同意するところがある。

けれどもわたし自身については、そうでありたくないのだ。  
わたしは、わたしという「話」を生きたいのであって、わたしを快適にするために生きたくはない。

自分の「快」を増大するのがわたしの生です、というようなことになりたくないのだ。

わたしの体の真ん中は、いまも、うらびれた泥の上であわれに眠ることを求めている。

風邪さえひかなきや別にそれでいいんだけどね。  
(風邪をひくと文章が書けなくなってしまう)

自己愛は、自分の快・快感・快適を志向する。

だからもし、わたしがわたしという「話」を生きるということを、妨害・阻害・破壊するものがあるとしたら、それはわたしの自己愛だろう。  
もちろんあなたでも同様で、あなたの話を破壊するものがあるとしたら、それはあなたの自己愛だ。

あなたの「話」とあなたの自己愛は、相互に侮辱的にはたらく。  
陽の当たるとき、誰かを物陰に追いやり、自分がその陽だまりに立つ。  
それによって、自分は快で、物陰に追いやられた者を見て「オホホホホ」となる。

次に、天気が変わり、風当たりが強くなつてくると、誰かを物陰から追い出して、こんどは自分がその物陰に隠れる。  
それによって、自分は快で、風当たりにさらされている者を見て「オホホホ」となる。

このようにして、立ち回りが発生し、当人としては「色々」あつたと感概されるが、じつさいにはそこに「非連續性」が確かめられるだけだ。

ひとつの話でありつづけられない。

多くの人が、十年前の自分とは違う意見の持ち主になつており、五年前と違う感性の者になつており、二年前に自分で主張したこととはすつかり背反する当人になつており、去年支持したものは「オワコン」になつて完全に忘れ去つていい。先月見つけた自分の生き方はすつかり消え去つていいし、先週のやる気や戒めは今週に継続されているわけもなく、ついには、昨夜誰かに感情的に言いつけたことを今朝になるともう忘れているということになつてくるのだ。「そんなの、三つ前のショート動画のことなんか誰も覚えていないよ」ということと同様に。

陽当たりや風向きの変わることに自己愛は節操もなく応じて立ち位置を変える。立ち回りをする。そのときごとに快を求め、そのときごとに感情たっぷりにそれを「絶対正しい」なんて思つたのだ。

このようにして、われわれは自己愛によつて、非連續性の当事者となる。

けれどもさしあたり実感的には、そのように何もかもが碎け散つていいというようなことはなく、われわれには平常の日々が続いている。

また、そもそも「分かる」というのも、分離・分割・分解なのだから、そちらでだつて万事がバラバラのコナゴナになるはずだ。

父と子は分離し、母と娘は分解され、バラバラのコナゴナになるはず。けれどもわれわれの日々と暮らしに、そのような生々しい「バラバラ」などは、さしあたり見当たつてこない。

きのうに引き続き、母親と長女は、きょうも母親と長女のままだし、学校の同級生は同級生のまま、会社の同僚も会社の同僚のままだ。会社のチームもまとまりとして機能している。飲み友達は飲み友達のまま、いつも飲みに行く居酒屋もいつもどおりだし、居酒屋のグループ店舗は隣駅にもある。

ディズニーランドが好きな彼女は、きょうもあいかわらずのディズニーフリークだし、きのうテレビ番組で見たコンビのお笑い芸人は、きょうも勿論同じコンビでテレビ番組に出演している。

日々はちゃんと連続しているし、人々は分離されていないのではないのか？

こうした現象を、一般に「関係」あるいは「関わり」と言う。

母親と長女は、親子、血筋、また家族として人間関係を持つており、そうした人間関係にあることが、われわれの感覚として「つながつていい」と感じられる。この場合は親子のつながり、血筋のつながり、家族のつながりだ。

だから、母親と長女は、一晩眠つて翌朝「おはよう」とあいさつしても、きのうと同じ母親と長女のままだと信じられている。

連続性がないなら、きのうと今日はバラバラで、すべてはコナゴナのはずだ。

連続性がないなら、きのうと今日はバラバラで、すべてはコナゴナの

# 覺 関係・関わりと、つながりの錯

きのうも今日も、そうした「関係」は同じで、続いている、継続されているとわれわれは信じている。

一方、会社のビルの、いつものフロアに、なぜかウサギがずっと跳ねまわって暮らしていたとしても、ウサギは所属が違うので、「同僚」という関係にはならないだろう。

ここで、じゃああなたはそのウサギと「つながっていない」のかと言わると、何だかよくわからなくなる。

つながっていないと言われると何となくさびしいが、つながっているのかと言われると、何もつながっているわけではないので、

「まあ、無関係といえば、無関係ですね」

ということになるだろう。

一方ここで、

「あ、おれは、あのウサギにちよくちよくエサやっているから、無関係つてことはないと思うな」

といふこともありうる。

その場合、ちよくちよくエサをやっているという「関係」があるといふことになるし、また、そのようにしてウサギと「関わっている」という言い方もされる。

すると、彼とそのウサギは、何かしら「つながっている」というふうに、われわれには漠然と信じられる。

一般にはたとえば、こうしてわたしが書き、あなたが読んでいるのだから、ここにも「書き手」「読み手」という関係があるのだと言われる。それはときに「仕手」「受け手」と言われたり、あるいは「供給」と「需要」と言われたりする。また、「生産者」と「消費者」などと言われることもあります、「著者」と「読者」などと言われることもある。

それらすべては、関係・関わりを指している。その関係・関わりへの信奉は、日々の蓄積によってわれわれに慣れと刷り込みをもたらし、

「同僚とは、毎日会って、毎日一緒に仕事しているんだから、そりやあつながりがあるよ」

というふうにわれわれに信じさせてくるのだが、そうした「つながり」は本当にはどのように実在しているのだろうか、それとも本当には存在していないのだろうか、考えてみればよくわからないものだ。

いま、あなたは読み手であって、わたしは読み手であるあなたに対しても書き手として「関わっている」というふうに、言い張るなら言い張ることはできるだろうが、ここでわたしとあなたが「つながっている！」のかというと……それは果たしてどうなのだろうか。

あなたがこの書物を閉じて、その後二度と思い出さないということはいくらでもありうるのであって、それをもって「それきり」になるのであれば、あなたとわたしはやはり「つながってはいない」と捉えるべきなのではないだろうか。

しかし一方では、何らのつながりもない奴の書き話を、こんなに長々と読み聞いているのだとすると、それはそれでおかしなことだとも思える。何らのつながりもないのだとしたら、そんな分離的な奴の「話」がここまで聞こえてくる・聞き取られてくるというのもやはりおかしなことだ。

われわれが、こうした「関係・関わり」を、習慣のまま、「そういう『つながり』でしょ」

と捉えることには、やはり大きなエラーが含まれてしまう。

というのは、字義として、「関」という字はむしろ閉ざされ・分け隔てられているものを意味するからだ。

「関」といつて、たとえば歴史的に有名な「箱根の関」と言えば、言わずもがな江戸幕府が箱根にもうけた厳しい関所のことを意味する。「入り鉄砲、出女」という当時の慣用句がいまも知られているように、幕府は箱根の関所で鉄砲の流入と大名の奥方の流出を取り締まつた。

このとき、東海道は箱根の関所で「隔てられている」ということが明らかだ。もし、日本の西南と江戸とを「つながった」ままにしておきたいなら、東海道に関所など設けずそのままにしておけばいいのだが、江戸幕府は西南雄藩を信頼していなかつたので、そこにフィルタリングのための関所を設けた。仮に江戸に鉄砲を持ち込もうとする者たちがいたなら、彼らにとっては箱根の関がまさに「関門」になつたわけだ。

あるいはさらに身近に、肘関節や膝関節のことを考えてみる。肘関節は、前腕と上腕の結節点にあり、前腕と上腕という二つの節（ふし）がそこで関わっているので、まさに「関節」と言われるのだが、それにしても前腕と上腕、尺骨と上腕骨は「つながって」いるだろうか。もし二本の骨が「つながって」いたら、われわれの腕は動かなくなつてしまふだろう。大腿骨と脛骨も同様で、じつはそのふたつの骨が本当には「つながっていない」「分かたれている」からこそ、われわれはその関節によつて膝を曲げる・動かすことができている。

よつて、「関係」「関わり」を、「つながっている」の意で捉えるのは、単純に誤りなのだ。おどろいたことに、たとえば「人間関係」という語は、その関わりによつて人間たちがむしろ「隔てられている」ということを意味している。

本来は「隔てられている」という意味の「関」だが、それでも「関わっている」ということは、「無関係ではない」ということだから、どうしてもやはり何かしらが「つながっている」と感じられてくる。このことは大きな誤解があり、それ以上に大きな思い入れと、さらには大きな「仕組み」があるので、このことはにわかに解除できるものではないのだが、その前提で申し上げるなら、「関係」においてやはり人はつながっているのではなく、人はそれに「呪縛」されているのだ。

本稿内で、「呪」の本質をこまかに解き明かしていこうとすることは、あまりに本旨から逸脱していく妥当ではない。もし、投げやりなほど端

的に言うのであれば、人間における呪とは、人間道の血に宿する因業のうち「識」が塗り重ねられることにより、その因業に縛りつけられるということを指すのだ、ということになる。この呪は人間道のそれであつて、たとえば畜生道の因業を用いた犬神などとはやり方や生じ方が異なる（このとき畜生道の因業は「取」）。あるいは「むしばみ」を濃縮する蟲毒などの呪もやり方や生じ方が異なる。

このとおり、こちらの話は逸脱になるし、また、うかつに呪術のやり方などに肩入れなどしないほうがよいのだ。呪いは、無い者にとつては無いのであり、単なる趣味からその術を「ある」とはしないほうがよい。人が呪術から力を得ようとすると、その理由の第一は「祝福が得られないから」であつて、呪術は常に祝福の代用なのだ。よつて呪術を「あると期待するということは、どだい祝福を「無い」と否定することと同時に成り立つ。そのような不穏なことは、たとえ都市伝説じみた趣味のこととしても推奨できる気がしないので、ここでは単純に、説明なしに「呪縛」という言い方をそのまま通していく。

人は関係・関わりでつながっているのではなく、「関」で隔てられているところを、呪縛で括りつけられているのだ。

たとえばここに、百人の中年男性を集め、いつせいにあなたに「関心」を向けさせることにしてみよう。

あなたはアイドルでもなく芸能人でもなく、一般人で、週末の休日、近所にある蕎麦屋に訪れ、ざるそばを食べることにした。そこは以前から気になつて、立派な店構えの蕎麦屋で、併まいの気品からやや気後れはするものの、おいしいものが食べられるのではないかとあなたは期待していたのだ。あなたはざるそばを一枚注文し、やがてあなたのテーブルには、冷水でよく引き締められたざるそばがやつてきた。あなたはそのそばを箸でつまみあげ、半分ほどをつゆに浸し、いざすすりあげようとするのだ。

その一部始終を、百人の中年男性がジッと見つめ続ける。ありつたけの関心を向けて。何人かは望遠レンズであなたの手元・口元を撮影していてもよい。

それらのことは、物理的にはあなたに作用しないはずだ。あなたにかかる力は一ミリグラムさえ観測されない。けれども彼らの野放図な「関心」が、あなたに何の呪縛も与えないとはまるで言えないだろう。あなたはまるで、「わたしの自由を侵害されている」というふうに感じるはずだ。

あなたは、「関わってこないでください！　あなたたちとわたしは、まったく無関係のはずです」と怒るだろう。

もしあなたの言うように、ギラついた百人の彼らが「無関係」なら、あなたは何も気にせず好きに蕎麦をすすればよいのだ、ということになる。たとえば窓の外にスズメが四羽いたとして、そのスズメたちはあなたにまったく「無関係」なので、あなたは何も気にせず蕎麦をすることができるだろう。それと同じように、百人の中年男性たちのことも、「何も気にせず」にいればいい。彼らと何ら「つながって」いるわけではないのだから、あなたには何の作用もかかってこないはずだ。

けれども、それはただの理屈であって、じつさいには中年男性たちから向けられる、血眼（ちまなこ）になつて濃厚な「関心」とその視線は、あなたにとつて粘つこく、重苦しく、「まとわりつく何か」と感じられ、そこには不衛生さと生臭ささえ錯覚されてくる。とても食事などできる状況ではない。まして本来は清らかに引き締められたはずの冷たい蕎麦など、これでは台無しの極みだ。

その中に、ひとりだけ、あなたの食事にまったく関心を向けない者が

いる。それは誰であろう、あなた自身だ。あなたはあなたが蕎麦を食べるとき、まさか自分の手元や口元に「関心」は向けない。

なぜあなた自身はそこに関心を向かないかというと、あなたはあなた自身と「隔てられていない」からだ。あなたはあなた自身に関所を設けるというようなわけのわからないことはしない。だから字義として「関心」は向けようがない。

先ほどから邪悪なほどに感じられている「関心おじさん」たちは、ちょうど関所の向こうから、あなたをジッと見ているのだ。それを「関心」と言う。彼らは関所の向こうにいるので、あなたに直接の危害を加えてくるわけではない。そこはちゃんと隔たれている。彼らはあくまで、「関心」を向けるということのみに留まりつづけている。

けれども、隔たれていたとしても、通常は「呪縛」が掛かるのだ。これが「関」という現象だ。

「関」によって、われわれはむしろ隔てられているのであり、その隔絶を超えて「呪縛」という現象に入り込まれるので、われわれはそれを「つながっている」と感じてしまう。

翌日、あなたはいつもどおりオフィスに出版社し、しばらく作業しているうち、ふとひとつ違和感に気づいた。

「あれ？　あのコはどこに行つたの？」

いつもフロアのどこかで跳ねているウサギが、きょうはいない。

このとき、百人の「関心おじさん」たちと比べて、あのウサギは本当にあなたと「つながっていなかつた」のだろうか？

われわれは日常、様々な「関係」を、そのまま様々な「つながり」だと思つていて、その思い込みには決定的なエラーが含まれている。

本当は、「関係」はむしろ「隔たり」なのだ。

われわれがよく知っている、人間関係その他の「関係」「関わり」は、色（しき）であつて話ではない。

ただ、それは色（しき）なので、われわれにとつてよく分かり、強く感じられる。

強く感じるからこそ、われわれはそれを確信さえする。

われわれは、呪縛される量が多いほど、その「つながり」が深いのだというふうに感じ、そう誤解し、そう確信するのだ。

それで、誤ったまま、何かしらの「つながり」を求め、何かに関わろうとするようになり、誰かと関係を持とうとし、誰かに関心を向け、また自分も誰かに関心を向けてほしいと欲するようになる。

その結果、みずから呪縛を重ね、やがてそのことを「呪われた地獄」のように感じるようになるのだ。

「関係」「関わり」「関心」、みずから欲したそれなのに、なぜこんなに地獄なのか？

あなたが求めたのは何かしらの「つながり」だったが、あなたが呼び込んだそれはつながりではなく隔たりで、つながりと思えたものは呪縛だったからだ。

呪縛にがんじがらめにされたあなたは、何のつながりを得たわけでもないのに孤独なまま、ただその呪縛の重さに押しつぶされ、すべての精神運動を抑制されてしまふのだけれども、そうはいつても何らの関係呪縛にも頼らずに宇宙の真ん中にただひとり立てるかといふと、そんなおつかないことへの勇気と器量も持たないので、まあ、「そんなもんよ」

と気軽にふてぶてしく、凡人としてのしたたかな歩みを進めていかねばならないのだった。  
じつさいそんなもんだ。

## つながりという、まったく不明のもの

わかりやすさのために「関係者」という言い方を用いよう。「当店をご利用の関係者以外、立ち入りを禁じます」というような看板はどこにでもある。

「あなた」はじつは、万事に対する「関係者」のあなたと、そうではない「話」のあなたという、ふたつの事象として現れる。

それぞれは別のあなたなのだ。

そして、関係者のあなたは、あなた自身にとつてこれ以上なく「分かれる」が、関係者ではないあなた、「話」のあなたは、あなたにとつてこれ以上なく「分からぬ」のだ。

本当に分からぬ。

どれだけスピリチュアルふうにしても無駄だ、本当に分からぬ。

この文章を読んでいる大半の人は、じつさいのわたしに会つたこともなければ、じつさいのわたしを見たこともない、その声も聞いたことがない、完全な非関係者のはずだ。

わたしにはじつさいに接触したことがないその人は、仮にわたしと接触したとして、その接触が重なつてのべ何日間で、わたしのことを「つながりのある人」とするのだろうか。

三年近くが経ち、千日ほど経つてからなのか、それとも三ヶ月と少し、百日が経つてからなのか。

あるいは三日間か、はたまた三時間でじゅうぶんか。  
三分、あるいは三秒。

それよりも短ければ、それはもう「接触した瞬間」ということになりそうだし、それよりも短くしようとすると、もう「接触する以前から」という、時間軸と因果律を逆行したものになってしまいます。

仮にあなたとわたし、「つながり」のある人になる場合、「いつ」、どのようなパラメーターが閾値を超えて、ついにその「つながり」のある人というやつになるのだろう。

あなたが中学生や高校生なら、担任の教師に毎日のように会うだろうし、あなたが大学生なら、週に三回もアルバイト先の店長に会うかもしれない。

あなたが社会人なら、週に五回も課長に会い、メールやスラックなど多くの文面や指示を受け取つているだろう。

それで、あなたと課長は日々、「つながり」を増しているのだろうか。週に五回、濃厚な接触をしているのだから、他の誰かよりも「つながり」の進行は速そうなものだ。仮にその「つながり」というやつが単純接触原理で比例的に進むものなら、あなたは三年間も勤務すれば課長との「つながり」を他になく深いものにすることになるだろう。あなたと課長は同じ会社の、同じ業務の「関係者」だ。

けれどもじつさいには、何年経つても、

「あの課長、いつも何言つているか、わづかなんいんだよね」ということがありうる。

あるいは、若いふたりが想い合つて交際したとして、それが半年ほど

経つて「別れましょ」ということになつたとき、お互いに、「あの人のこと最後まで、けつきよくよくわからなかつた」

ということがありうる。

あなたは、手元に余分なサンドイッチがあつたとして、それを「つながり」のない人に分け与え、一緒に食べるというようなことを望まない

はずだ。

それはもちろん、あなたがサンドイッチをケチつているわけではなく、ただつながりのない人に対し、そうしてつながりのあるふうのことをするのが厭だ、気色悪いということにすぎない。

これまで何年も一緒に仕事をしてきている課長がいたとして、それでも自分のサンドイッチを分け与え、一緒にベンチに座つて食べるかというと、

「それはすごくイヤです笑」

という人が多いはずだ。

この、誰にとつてもわかりやすいことが、なぜか、よくよく考えるとまったくわからないのだ。

極端な話、たとえばあなたの目の前に、古代ギリシャから青年がひとりテレビポートしてきたとして、あなたはそのことに「うわあっ」とおどろくにせよ、その青年にサンドイッチを分け与え、いつときベンチに並んで食事を共にしようということには、そこまで「イヤです」とは感じない。

おかしな話だ、「つながり」の有無でいえば、古代ギリシャからテレビしてきた青年ほど、あなたとつながりのない人はいない。これほど互いに「関係者」から遠いこともないだろう。

にもかかわらず、あなたはきっと、数年来の課長と隣り合つてサンドイッチを食べるよりは、その古代ギリシャの青年と隣り合つてサンドイッチを食べるほうが、

「ぜんぜんイヤじゃないです」

なのだ。

あるいは、会社の課長と隣り合つてサンドイッチは、「キツいですね笑」

ということでも、あなたの目の前に学生時代の先輩が現れ、かつてのままの調子で、

「おうお前、こんなところで何やつてんだ」

と言い、あなたのサン・ディッチを勝手に取り上げて勝手に食つたとして、あなたはやはり「わあつ」とおどろくにせよ、そうして隣でサン・ディッチを食われるということは、まったく厭ではないし、それどころか、

「そもそも厭とか、そういうこと考えなかつたですね。そういう発想じたいが出て来ないです」

では、この先輩は、あなたに對して何かの「関係者」なのかというと、

それはたしかに過去の部活動か何かの関係者ではあつたはずだけれども、われわれはそのことをいちいち「関係者」というふうには捉えない。あのときの先輩は、ただのあのときの先輩だ。

関係者なんて言いようとしたら、先輩は、

「あ？ 誰が関係者だ、てめー」

と言つて笑うだらう。

われわれは、たとえばボン・ジョヴィの唄つているところの姿と、その声を受け取ると、数分で彼のことを「わたしの知つてゐる人」にする。だから若き日のボン・ジョヴィがやつてきて、あなたのサン・ディッチを勝手に取り、となりに座つてそれを食べたとしても、あなたはそれを厭とは感じないので。

だからといって、あなたとボン・ジョヴィに「つながり」があるのかどうかと、あなたとしては首をかしげるしかなくなる。

あなたはボン・ジョヴィと何の関係者でもない。

あなたは数年来の関係者である職場の課長のことのほうこそを、親しく・よく知つてゐるはずだ。

あなたは個人的にボン・ジョヴィのことを「親しく」は知りようがないはず。

にもかかわらず、われわれはふと、このようにも思う。

わたしは、ボン・ジョヴィのことはなぜか、すでに「本質的」に知つてゐる気がする。

一方で課長のことは、わずかも「本質的」には知らないし、また、そのように知ろうとはそもそも思わないのだ。

あの課長のことを別に「本質的」に知る必要なんかないもの。

このように、少しでも追究してみると、われわれは、自分に起つて「つながり」の現象がどのようなものなのか、じつはさっぱりわかつていないので。

そして、わたしはこの学門の専門家として申し上げるが、この「つながり」という現象は、本当にまったくわからない。

絶望的にわからない。

わたしは専門家なので、そのときごとに何がどのように起こつているのかを視認できるが、あなたにそれを視認しろ・わかるようになれといふのは、あまりにも無理というか、率直に言つて不可能なことだと思う。一般の人が視認できるようなことではない。

要するに、わたしがあなたの前に現れたとき、ひよつとするとあなたはなぜか、わたしのことを「初めから知つてゐる人」のように体験するかもしれないということ。

初対面で、会つて数分なのに、なぜか「ずっと前から会つてゐる」というように錯覚する。

はたしてそれは錯覚なのかどうか、そのときあなた自身が、「錯覚ではないです」と言い出しかねない。

われわれは関係・関わりを「つながり」だと思つてゐるし、関心を向けることでつながりが強化されるものと思つてゐる。

だが本当はそうではなく、関係・関わりはむしろ隔たりで、関心といふのはその関所の向こうからジロジロ見つめるだけの、ただの性質の悪

い趣味だ。

相手のことを分かるというのも、分離・分割・分解であって、すべてはバラバラになっていく。

そしてそれでよいのだ。

「玉子豆腐の入った椀」と、「表参道に植えられてある街路樹の本数」はまったく無関係でバラバラのままであるのは、われわれの感覚でいうと「無関係」ということだ。

「バラバラなのになぜかそれをつないでやまないものがある」。まつたく無関係でバラバラのままであるのは、われわれの感覚でいうと「無関係」ということだ。

「バラバラなのに、なぜか「つながり」がある。」

この人が勝手にサンドイッチをつまみあげて食べちゃったということが、悪いことなのか悪いことなのか、そのことさえ分離しない。そのことさえ分からぬ。

悪いことをしても善いような、善いことも悪くやるような、知らなくとも知っているような、無関係も関係であつてよいような、つながつていなくてもつながつていよいよ、わけの分からぬ体験になる。

徹底的に「分からぬ」。

ひとつひとつにあるのはせいぜい、困るか・困らないかということぐら이다。

つながりという現象は、それぐらい完全に不明のものだ。

ただしそれは、ファンタジックに起こるわけではなく、理のとおり、当然・必然のこととしてのみ起ころ。

こんなものを直接体験するとしたら、そのことが混乱・パニックをもたらさないわけがない。

われわれはどうしても、そのつながりを「分かろう」とする。

だが語義としては、つながりとは「分かれていない」「分かっていない」ということを指す。

このことに深入りしすぎると、先に述べたとおり、本当に精神を損傷することがある。

一般的の感覚や一般的の知性で取り扱えるしろものではないのだ。

とりあえず誤りのないこととして言っているのは、バラバラのものを悪しとして、それをつながらせようとする発想と行為は、われわれの色(しき)のはたらきだということだ。

われわれは、関係・関わりを「実感」できるが、それは「つながり」ではないということ。

実感できるそれは、呪縛というバインドであり、つながりではない。

つながつているものなら縛りつける必要はない。

縛りつけられていらないなら、それらはバラバラのはずで、そのとおりバラバラのままなのだが、なぜかまつたくわからない現象で、それらがつながつているということが体験されてしまう。

先の章で、夜は「在る」のか、という問い合わせを示した。

それに引き当てて言うなら、ここにある問い合わせは、つながりは「在る」のかという問い合わせだ。

何が「夜」かといつて、日光の量というバラメーター比率を捉え、そのバラメーターが低くて暗いと「感じる」ときが夜という「状態」なのだということであれば、その夜は「分かりやすい」けれども、その夜は「在る」とは言えないと述べた。

われわれは、関係や関わりを実感することができ、その関係の深さも、量的に観測することができる。

そうしたことはわれわれにとつて「分かりやすい」のだが、もしその分かりやすいものを「つながり」と言い張るのであれば、やはりそのつながりは「在る」とは言えないものだということになる。

そうではない靈なる夜ならば「在る」と言いうると述べたが、それに引き当てるならば、やはりつながりというのも靈なるつながりといふこと

とになってしまふ。

ただ、もしそれを本当に靈なるうんぬんと言うのであれば、それは本当に「分からぬ」のだ。「靈」は「観測できない」「非力動性」を指定しているのだから。

非力動性とは、「グッと“来ない”」ということを意味している。

そのようにして、絶望的に「ミリも「分からぬ」」上に、それでいてその事象は理に従い、主体的・必然的にのみ起ころる。

ファンタジックには起こらないし、願望的にも起こらない。

主体性において、当たり前にのみ起ころる。

そのとき、「こいつには関係が必要ないのだ」と捉えていい。

この人が書いて、わたしが読むんだよね、それが著者と読者だよねといふようだ。関係・関わりによる結合が必要ない。

あなたとわたしはバラバラで、バラバラはまつたく結合されないまま、それなのになぜかここに「話」はひとつものとして聞こえてきてしまふ。

課長から送られてくる業務のメールとはまつたく異なる、理解も応答も必要としない「話」という存在、それが聞こえてきて体験されてくるという現象がある。

あなたは通常、人とのつながり、あるいは何かしらの「物」とのつながりを、距離あるいは距離感という感覚で捉えている。その感覚は、まつとうなものだから、否定しなくていい。誰でも知っているように、距離感が勝手に近すぎておかしな人は困るものだし、かといつまでも距離感がMAXの人も困りものだ。

だが、距離感といつて、距離は量だし、感は実感だ。仮に、わたしの本質が「話」だったとして、同様に、あなたの本質も「話」だったとしたら、話と話のあいだに距離なんてものは存在しない。話と話は、遠いといふこともないし近いといふこともない。

あなたのとなりに浦島太郎が座り、ふたりで一緒にサンドイッチを食べたとして、それをどう感じるかというとき、「どう感じるこどもできない」のだ。そのとき、浦島太郎との距離は何メートルだったとも言えない。

ただそのようにした体験したとしか言えなくなる。

課長からのメールは、関係者からのメールということであつて、その文面には、さまざまな事情がそれぞれどのように関係しているかが、分かるように書かれている。

あなた自身も関係者だから、そのメールの内容は分かる。あるいは分かる「はず」だが、なぜか一方で、

「根本的によくわからん」

という違和感も残したまま、多くの人はそうしたメールのやりとりをしている。

課長からのメールなんて、たかが数行のことと、しかも内容はふだんからよく分かっている業務のことのはずだ。

にもかかわらず、それはどこかずつと読み取りづらく、あなた自身とは「つながらぬ」文章だ。それを次から次へと読み取っていくことは、正直にいつてストレスと呼んでいい負担がある。

課長からのメールに比べれば、ここに書き話されていることのほうが文章量としてはるかに膨大なはずで、内容も知的にずつとむつかしいはずなのに、あなたはここにある「読む」という体験を、ストレスと呼ぶべき負担には感じない。

あなたはこの文章を、数日のあいだ手元あるいは枕元に置くことに、一種の誇りや安心のようなものを覚えるかもしれないが、まさか課長からのメールを手元や枕元において、そこに誇りを覚えるというようなことはない。

これはいつたいどういうことなのか。

文面が「在り」、つながりが「在る」のだ。

あなたが、なぜか「在る」文面を手元や枕元に置き、そのことになぜか誇りさえ覚えるとき、あなたは自分とその文面とのあいだに「距離」というような感覚を認めないはず。

冊子やpdfを、抱きしめる必要はないし、遠ざける必要もない。

その誇りの中にいるとき、あなたは何一つについても「関係者」ではない。

「関係者」のあなたと、そうではない「話」のあなたという、ふたつのあなたがあるのだ。

無関係でバラバラというのが正で、これを結合しようとする力動的はたらきかけは、関係・関わりと呼ばれ、その結合はつながりではなく呪縛だ。

無関係でバラバラというのが正で、そのまま、無関係でバラバラのまま、さらにはそのバラバラを増すかのごとくなのに、なぜか「つながり」が体験されるという事象がある。

無関係でバラバラというのが正で、繰り返す、無関係でバラバラというのが正だ。

それを、変化させず、解決もさせず、さらには押し広げさえするかのようなのに、「もう解決は要らない」「つながりは得られた」ということをもたらしてしまう、まったく分からぬ事象がある。

無関係でバラバラの、まるで体を為さないものを、「なんとかしよう」「つなげよう」「ひとつにしよう」と力動する、その衝迫を持つあなたがいる。

それは「関係者」のあなただ。

「関係者」のあなたに告ぐ、「つながり」はたしかにあなたの求めるべきものだが、それはあなたの力動で為せるものではない。

あなた自身もそうだし、他の「関係者」にも惑わされるな。絶望的に分

からないもの、それがつながりだが、なぜあなたはそれが分からないということが、イコール得られないということなのだと、勝手に思い込んで焦っているのか。

## 関係力グラビティ

「関係」の力は引力のようにはたらく。グラビティは「引力」だ。

関係力は引力のようにはたらくし、関心という力も同じ、引力のようにはたらく。

われわれはこの引力のはたらきに無知で、無警戒だ。  
われわれはこの引力に「されるがまま」になつていて。

引力に、されるがままになるということは、そちらに傾き、そちらに転がっていくということだ。

それは何ら自分のコントロールではないし、自分の推進力でもない。自分の進行方向ではない。

ただの引力だ。

関係・関心の力は、そうしたグラビティ、引力としてはたらく。

このことは思いがけず、実験してみると体験的に証明することができ

る。

たとえばあなたは、これから数時間後には喉が渴き、何かしらの飲み物を口にすることがあるだろう。

そのとき、飲み物に関心が湧いているので、飲み物を目の前に置いたら、当たり前だがその飲み物に「ぐいっ」と引かれる。

そこで、ふだんはまったくやるはずもないことだが、その目の前の引力に逆らうように、自分の身をまっすぐに立てるということをしてみる。

身をまっすぐ立て、体の真ん中、横隔膜の最奥、「この人」の真ん中に

帰ろうとする。

（かといって、のけぞつてふんぞり返らないよう。居丈高にならぬよう。斥力ではなくただ世界の中にまっすぐに立つ）

すると、傾きは解除されていて、転がろうとしていた坂道はもとの水平の原に戻る。

それが本当にわれわれの仕組みなのだ。

水は低きに流れる、のではなく、関係・関心のあるほうに引力がはたらき、われわれはその引力の方向を物理的に「低い」と位置付けるだけだ。

身・体をまっすぐに立て、自我の真ん中ではなく「この人」の真ん中、体の真ん中に帰っていくと、じつはそのような傾き・引力は合理的には発生していないということがわかる。

あとはあなたが、こんな馬鹿げた実験を、本当にやることがあるのかどうかだけの問題だ。

冷蔵庫を開けて麦茶を取り出すかもしれないし、牛乳を取り出すかもしれないし、水道からコップに水をそそぐかもしれない。

飲み残しのペットボトルをバッグから取り出すかもしれない。

飲みたくて取り出し、喉が渴いて取り出したのだから、飲み物に関心が向かっているのは当たり前だ。

別にそれが悪いわけではないが、そのまま飲み物をぐいぐい飲んでも、そのことはあなたの「体験」にはならないというだけだ。

なぜならそれは、あなたの推進力ではないし、あなたの進行方向でもない、ただの引力方向なのだから。

何かに「ぐいっと」、引き寄せられる。

それはそうだろう、引力なのだから。

魅力の強いものに出くわせば、関心が湧き、ぐいっと引き寄せられる。

己で己の進行方向へ踏み出しているのではない。

重心方向への、引力のはたらきなのだから、傾斜角がどうであれ原理としては落下であり、『falling』だ。

引力に引き寄せられ……さらにそうしたことが、その先うまく進んでいくためには何が必要だろうか。

それは当然、向こうもこちらにぐいっと引き寄せられてくればいいのだ。

向こうもこちらへの「関心」を持ってくれば進行する。

あなたが彼に関心を持ち、彼もじつはあなたに関心を持つていた。

そうして、互いに falling、惹き合つたとして、進んでいくとして、いつたまにをしたらいいのか。

そこからいいたいなにがしたいというのか。  
ふたりはある種の「関係」になりたいと望む。

互いに関心を強くして、互いにぐいっと引き寄せあうだけでも快感だが、そこからさらにある種の「関係」になれば、その快感はさらに大になる。

それから、寝ても覚めても、彼女のことを考えている。  
昼も夜も、彼のことを考えている。

ふたりはそういう「関係」なの。

ところがじつさいのところ、そうしたことから得られる快感には耐性がついていくもので、数か月もしないうちに、

「なんか、冷めたかも」という気がしてくる。

そうした経験のある人は多いはずだし、ふだんはこうした経験があつたことさえ忘れているはずだ。

「なんかさ、以前にあつた、あのときめきというか、ドキドキの感じがないのよね」

「あーわかる、でもさ、それってけつきよくそういうもんじやない?」

「そうかもしれないけどさ、でもさ、じゃあわたしが彼と付き合つている理由って何? つてなるんだよね笑。最近は正直、ちょっと束縛のほうがダルいって思うことが多いんだけど」

「それはさあ、もう、いわゆる潮時ってやつなんじやない?」

(※「潮時」の本来の意味はどうやら違うようですが、ここではよく言わわれがちなものとして用いています)

関係・関心は引力としてはたらく。それも、われわれの「自我」のほうに引力としてはたらく。体の真ん中、「この人」の真ん中には、じつは引力としてはたらいていない。

つまり、ここでは彼女に、誰かと好きあつたというような「話」や、誰かと愛し合つたという「話」、誰かと結ばれたという「話」は存在しておらず、じつはそもそもから誰かと「出会つた」という話さえ成り立つてない。

彼女は十年後、「それってどんな人だっけ笑」と、かつては熱愛した彼のことを思い出すことさえできなくなつていて。

彼女は、浦島太郎のことを忘れる事はないが、熱愛した彼のことはきれいさっぱり忘れるのだ。

浦島太郎には引力がない。

われわれは、浦島太郎と何の関係も持たないし、浦島太郎に何というほどの関心も湧かせないからだ。

それでも、ふと気づくと「あの人」が、自分の中にずっと居るのだ。

それが「話」だ。

彼女はその先も、本当に出会つてさえいない異性に、関心を向け、また自分も関心を向けられ、引力から関係を持ち、「熱愛」状態にfallし、その状態にある自分のとめどない快感を「無敵」というように感じる。彼女はそのことを繰り返していく、やがて中年になり、初老になり、老年になっていく。

年を取ればとるほど、魅力パラメーターは減つていくから、関心を向けてもらえることは少なくなり、その引力は弱まっていく。するとこの人の関心は、別のこと、たとえば財物や政治、あるいは健康などのテーマに移つっていく。

百貨店の外商と「関係」のある人になりたいと望み、町議会と「関係」のある人になりたいと望み、ひざの軟骨保持に効き目があるという触れ込みの食材に「関心」が向くようになるのだ。

(※身体のケアにはどうぞ関心を向けてください)

われわれの自我は、そもそもが「分かる」ための装置であり、われわれの体内にそれは四歳児のころにしつらえられたものだ。

「分かる」ということは「分かたれる」ということであり、それによつてわれわれは、「自分」と「自分でないもの」を知ることになるが、その分かたれたもの同士を引力で結びつけ、呪縛しているものが「関」だ。われわれは、自身にそのようにしつらえられた呪縛引力の仕組みに無知で、その作用に無警戒だ。

この引力に「されるがまま」になることで、日々はそれなりに「めくるめく」ものになるかもしれないが、そのぶん、あなたという人の真ん中、あなたの体の真ん中は、何らの体験も得ないままになり、ともすればあなたは何十年という時間を「体験ゼロ」のまま過ごしてしまうことになりかねない。

あなたがいま二十歳だったとしたら、あなたは、街中の電柱にどのような看板・広告が貼りつけられているかを知らない。

もちろんあなたがそのことを確かめようと、いまから目視しに出掛ければ、あなたはその実物を視認することはできるのだが、あなたはそこに引力を受けないので、あなたはやはり本当にはその「界隈」を知ることはできない。

街中の電柱には、不動産の広告が貼りつけられており、「築〇年、〇L DK、〇千万」という数値が書き込まれている。

あなたはそんなものを見ていないし、見たとしても引力を受けない。あなたの若い友人らも、あなたと同様に素通りだらう。

けれども十五年後、ふとあなたの友人が、おしゃべりをしている途中で気も漫（そぞ）ろになる。

（どうしたのかな）

とあなたが目を遣ると、友人はその電柱広告に見入っているのだ。  
「何を見ているの？」

「あ、いや。このあたりで、〇千万で家買えるんだ、ふーんって思って」

それから十年後、電柱に添えられた「△△形成外科 一五〇m先右折」という看板に引き寄せられるようになり、薬局前に掲げられているノボリ旗、「滋養強壯」「ご相談ください」という字句に引き寄せられるようになる。

二十歳のあなたは町内会の掲示板などまったく覗き込んだことがないだろう。

町内会の掲示板よりは、「短期間・高収入！」を謳うホステス業への呼び込みのほうが、あなたに引力を仕掛けるはずだ。

目の前の誰かが、郷土史をまとめる会の主任で、すでに多くの実績がある人だと聞いても、あなたはそのことに引力を受けない。

若いあなたはそうしたことの関係者になりたいと感じないからだ。

それよりは、同じく目の前の誰かが、再生数・登録者数が数十万におよぶYoutuberだと聞いたほうが、あなたはそのことに引力を受ける。

そしてここに受ける引力とその作用は、当然ではあるが、何一つあなたの主体性のはたらきではない。

膝の悪い人が形成外科の看板に引力を受けるのは何ら悪いことではなく、ぜひ健康を志向されて膝の快癒を得られればよいと願うが、それでもそれは生きもののやむを得ぬはたらきであって、その人の主体性のあらわれではないのだ。

あなたがどれだけ、「めくるめく」ショート動画群に引力を受け、引き込まれたとしても、そこにあなたの「体験」はない。

「推し活」と言って、何かの引力にぞっこんになり、たくさんのファボをつけ、時には投げ銭をして「関係者」の気分に浸つたとしても、そこにあなたの「体験」はない。

あなたは本当には、この世界でひとり棒立ちになつて、すべてが水平だつたとき、へへ何をどうしたらしいかわからないvvのだ。

それで常に、そのときごとの引力に首つたけになり、ひとときの安心を得るかわりに、みずからの体験を失いつづけている。

「関心」といつて、あなたにはあなたにとつて好ましい関心もあれば、好ましくない関心もある。前者はたとえば「推しの新作はまだかな」「この関連動画も面白そう」という関心。後者はたとえば「また母親から電話かかるてくるのかな、面倒くさい」「うわ課長から説教メール来た、うざい」という関心だ。どちらにせよ引力がある。

「関係」にもまた、あなたにとつて好ましい関係と、好ましくない関係がある。たとえば飲み仲間の〇〇ちゃんはこちらの話をいつもニコニコして聞いてくれるというようなことが前者で、一方、課長に業務を押しつけられて今週もまた不快感を覚えるだろうというようなことが後者だ。こちらもやはり、どちらにせよ引力がある。

好ましいものは「気になる」し、好ましくないものも「気になる」のだ。

このあたりで、いいかげん「引力」が何なのかわからなくなってきたという人は、あなた自身の「浦島太郎への無関心ぶり」を思い出せ。浦島太郎が「気になる」なんてことがあるだろうか？ 浦島太郎には何の引力もないということがよくわかるだろう。

引力に引き回されているうちあなたは、とても浦島太郎の話なんかまともに聞く気になれない。

われわれはこうして、関係・関心の引力によって、好悪それぞれの方へへへ引き回されるvvのみで日々を過ごし、体験という体験は得られず、最終的にはそうした引力の支配を呪うことになる。

引力それじたいが呪いであるから、その果てにわれわれも呪いで報いることになるわけだ。

だが本当にはそうした呪いの支配がわれわれにあるのではない。そうではなく、本当はわれわれにへへ主体性の支配がないvvということなのだ。主体性による統治が為されていないので、胡乱（うろん）が好き放題に入り込み、好き勝手に収奪をしていく。好ましい関係・関心であれ、そうでない関係・関心であれ、それらが支配的に振る舞うのはけつづきよく呪い・呪縛なのであり、この支配は主体性の統治がおよんではないことによって生じている。

汗をかいたところで、冷えた麦茶を取り、一気に飲み干せば、單純で健全な快感がわれわれに与えられる。その快感のさなか、われわれはまるでへへ何をどうしたらしいかわかっているvvふうの存在になる。

「ありのままでいいのさ」

けれどもその無敵のようなさわやかな笑みの主も、たかが浦島太郎の話さえそれが何であるのかを捉えられていない。

それは「ありのまま」ではなく「されるがまま」なのだ。

われわれはこの引力のはたらきに、無知で、無警戒だ。

それどころか、恣意的なまでに無抵抗だ。

われわれはけつづきよくその呪いに依存したくて、「この人」の真ん中を放棄したがっているのかかもしれない。

「引力」は本当にある。

実験すると、本当にそれは体験され、「引力だ」と確かめることができる。

冷蔵庫から出した牛乳でもそうちだし、スマートホンで開いたショート動画の再生ボタンでもそうちだ。

あなたはひよつとすると、そうして「何の引力に引かれるか」「どの関心に連れていかれるか」ということこそが、「わたし」という存在なのだと思つてはいるかもしれない。

本当はそうではない。本当は、あなたの体の真ん中は、引力のない水平の原に立つてはいるのだ。そのことを発見したら、あなたはずいぶんおどろくかもしれない。

へへ空間を広く取つて体を真つ直ぐに立てるvvだけで、その引力はずいぶん遠のく。そのことはあなたをおどろかせると思うが、同時にそれ以上の恐怖をもたらし、あなたはむしろみずからその「わたし」という存在を固辞するかもしれない。

あなたが部屋にいるにせよ外出しているにせよ、横隔膜をやわらかくして、空間を広く取り、体を真つ直ぐに立て、スマートホンに表示されている再生ボタンを眺めるならば、決してあなたの体の真ん中がその再生ボタンに引きこまれてはいるわけではないということに気づけるはずだ。

あなたが体の真ん中を放棄し、あなた自身が顔面・頭部にある「自我」に取り込まれていくと、広かつたはずの空間はサッと消え去つて失われ、そのとき体は崩れ、目の前のスマートホンに「意識」が傾く。それでは再生ボタンを「押したい」と引き込まれてはいるのだ。そのときあなたは再生ボタンを「押したい」と引き込まれてはいるのだ。それには、にぎやかな動画サイトの界隈と「関係」を持ちたがつてはいる。それでいまさら、いつものように再生ボタンを押してもぜんぜんかまわない

が、あなたがここで聞いたことも、いつかのためにこつそり覚えておけばいいと思うのだ。

## 魂魄

靈なる○○、などという言いようは、どこまでもいかがわしいものだ。

あくまでそれは、観測不能の体験を肯定するひとつ古語にすぎない。

もう少し詳しく解説すると、日本語には古くから「魂魄（こんぱく）」という語がある。「魂魄この世にとどまりて」というような、見栄を切つたセリフが有名だ（「四谷怪談」によく知られている）。

魂魄（こんぱく）といって、コンは魂だからなんとなくわかる一方、ハクのほうは魄という字でよくわからない。だからこれらは、「靈魂」「気魄（きはく）」というふたつの熟語に捉えなおすと、いちおうわかつた気になれる。靈魂というとわれわれにとって「そういうやつ」だし、気魄というのもわれわれにとって「そういうやつ」だ。そもそもトルストイの言うように、本来の語をもつて捉えられない語を、他の語に言い換えても捉えやすくならないのだから、魂魄についてはこれでよろしい。魂魄といって、それは「靈魂と氣魄」のことだ。

それで、靈魂と氣魄といえば、魂魄のほかに「靈」「氣」のふたつの字があらたに出てきてしまうのだが、ではこれらは何なのだろうか。「氣」のほうは、あまりに日本人のわれわれに親しみがある。「気になる」「気が散る」「氣力がない」「人気者」「活氣がある」「天気が良い」「元気であります」「病氣はいやだな」「氣をつけよう」、こうした「氣」を用いた慣

用表現を禁じるなら、われわれは日本人としておおいに会話に困るのではないだろうか。それぐらい、われわれ日本人にとつて「氣」の存在は大前提になつていて。そしてその「氣」なるものを、定量的に取り扱えると言い出すとオカルトになるので、われわれは怪しげな、健康志向以上のことを謳う氣功術からはそつと距離を取る。

ところで、「あの世」には幽靈がいるだろうか？ 「あの世」もしくは「この世ならざるところ」には幽靈がいるだろうか。われわれにとって、「あの世」はただちに「おばけ！」「幽靈だあ」というイメージに結びつくが、たとえばお釈迦様がさまざまな仏国土（代表的には極楽浄土）の存在を教えられ、そうした教えを信じていくのが仏教だけれども、その仏教がわざわざ「おばけが出るぞ」と喧伝しているふしはない。簡単に言つて仏教は幽靈に否定的だ。もし幽靈に肯定的なら、お坊さんは怖くて墓場を歩けないのではないか。

このことを整合させて捉えるには、つまり次のように言うしかない。あの世に幽靈がいるのは当たり前であつて、あの世にいるものをわざわざ幽靈とは言わないのだ。あの世にいるはずのものが「仮に」この世に現れてしまつた場合、その体験をわれわれは「靈」と呼んでいるのだ。先に示した伝統芸能でのセリフ、「魂魄この世にとどまりて」は、反語的に魂魄は本来あの世に行くということを示している。もしくはあの世にあるということを示している。逆に、あの世にのみあるはずの魂・魄がこの世に現れたとき、それらを体験的に靈・氣と呼んだわけだ。それでそれぞれが靈魂・氣魄という熟語になつていて。

よつて、魂が体験あるいは体現されてしまつたとき、それは靈なる○○と捉えるべきで、同様に魄が体験あるいは体現されてしまつたとき、それは氣の○○と捉えるべきだということになる。

それで、ここまで話はまだわかりやすいのだが、例によつて困つたことに、ここからの話はまだわかりやすいのだが、例によつて困つた

が用意されている。魂魄という語が、そもそもあの世のもの、この世では観測されないものということで成り立っているのはそれでよい。観測不能という意味で「鬼」の字がくつづいているのだ。われわれは子供のうちにも「鬼ごっこ」という遊びをするが、われわれは何かしらの機材で「鬼バラメーター」を観測してそれを鬼と呼んでいるのではない。

問題は、魂魄といつて、魂のほうが「分からぬ」の事象を担つており、魄のほうが「分かる」の事象を担つているということだ。

魂魄という熟語の、偏のほうを注目してみると、それぞれ「云」と「白」がついている。「云」のほうは「雲」の意であり、「白」のほうは「明白」の意味なのだ。「雲」はつまり「分かたれておらず、つかみどころがない」ということを示していて、「明白」のほうは「はつきり分かっている」ということを示している。

だからわれわれは、魄の現世への現れたる「氣」については、平氣で大量に国語の中に導入しているのだ。「色氣たっぷりの彼女が気になつて、気がつけばその気にさせられて元気になつた氣がしているけれど、彼女は氣難しいから氣をつけてね」というような言い方が平氣で出来てしまふ。

一方で、われわれの日常会話に「靈」なるものはまず登場してこない。たとえば「元氣ですかーツ」という言い方は日常的に快くありえても、「元靈ですかーツ」というような言い方はカルト宗教を除いては日常的にありえない。これは、魂の現世の現れたる「靈」については、われわれにそれを取り扱える徳性が与えられていないということだ。

われわれには「分かる」という明白さへの装置が自我として与えられているけれども、そうではない「分からぬ」ということへの装置は十全に与えられていない。

たとえばあなたが、お芝居で「浦島太郎」を演じたとする。そのとき、あなたがその役を演じるにせよ、あなたはあなたであつて浦島太郎とい

う当人ではないはず。そのことはわれわれにとつて「明白」なのだ。もしこのことが「分からぬ」なつて、「わたしは浦島太郎です」「わたしはキリストの生まれ変わりです」と言い出したならば、われわれはそれを「気がへんになった」「気が狂つた」「気が違つた」と明瞭に捉える。山田太郎さんが浦島太郎を演じたとして、演じ手はどこまでも山田太郎さんでしかありえない。そのことはわれわれにとつて明白でなくてはならないのだ。

ところがわれわれに、秘されてもいない秘密の衝動があつて、われわれはその演目「浦島太郎」に、山田太郎さんというノンフィクション上の存在を見るのがいやなのだ。同じ浦島太郎を演じるのであれば、それは完全な浦島太郎であつてほしいと、むやみに望むわけのわからない衝動をわれわれは持つていて。

そして困つたことに、どうやらこのことはわれわれにとつて実現不可能なことではないらしく、たとえばアメリカの古いテレビドラマ「刑事コロンボ」を観ると、そこに映し出されているのはどう見てもロサンゼルス警察のコロンボ警部補であり、そこにピーターフォークという俳優がいるようには見えないのだ。そこに映し出されているのがしょせん刑事ドラマでしかないということは、努力すれば認識可能ではあるものの、どうしてもどこか、コロンボというロス市警の警部補が、そのようなテレビドラマの主演をしているのだというふうに見えてしまう。

コロンボ警部補の存在は、あくまでそういう「話」でしかないはず。浦島太郎と同じはずなのだ。けれどもわれわれはまさか、先ほどの山田太郎さんを見つけては「浦島太郎さん」と呼びかけることは、意図的な冗談を除いては無い。一方、ピーターフォークを見かけては、「あ、コロンボ警部だ!」と呼びかけかねず、むしろ率直なところそちらの呼びかけのほうが自然だというふうにわれわれは体験してしまう。

(原題はコロンボ警部「補」ですが、日本語訳ではおそらく語呂のため

コロンボ「警部」と訳されています)

つまり、われわれはそれをフイクション・ただの「話」と明白に分かつていながら、そこにピーターフォークとコロンボ警部の「同一性」も体験してしまうということだ。

ピーターフォークはノンフィクションの人物で、コロンボ警部はフイクション上の人物だから、それは人物が違うという以前に事象じたいが違うのだが、困ったことに、そうしたノンフィクション上の事象とフイクション上の事象に「同一性」をわれわれは体験してしまう。このように、「明瞭に別個でありますながら、同一でもある」という矛盾した事象を、われわれの知能は取り扱えない。ただ、取り扱えないくせに、知性にはそのまま体験されてしまうのだ。

ピーターフォークとコロンボ警部は別個の事象だが、

「いや、彼はコロンボ警部だよ」

と言ひ得てしまう。

われわれは一般に、フイクションとノンフィクションについて、「フイクションは空想で現実じやない」「ノンフィクションは現実でしょ」といふ、投げやりな捉え方をしている。そして、それが投げやりで知性のない捉え方なのだと、一般には誰からも教わらない。

フイクションは非現実、ノンフィクションは現実、ひとまずそれでよいとして、ではわれわれの言う「現実」とは何なのかということだ。われわれの言う「現実」とはつまり「量れる」ということ、定量化できるといふことにすぎない。この場合の定量は、われわれが個人において「想う」「感じる」という量も、不分明なまま認められることになつてている。「強く想う」や「うつすら感じる」も認められているということだ。

魂魄といって、それらは鬼の字がついているから、何であれこの世ならざるところを指している語に違ひない。そしてそれがこの世ならざるところと言われば、それはどのようにも「量る」ことはできない。

いのだ。量れてしまう・観測可能なものであれば、それはこの世ならざるものではないのだから。

それは量れないものでありながら、なぜかわれわれはそのことについて「かんがえる」ということが出来てしまう。このときの「かんがえる」には、「稽（かんが）える」という字が当てられる。われわれは魂魄のことを量ることはできないが、稽（かんが）えることは出来てしまうのだ。稽（けい）の字は、「稽留」などの語にあらわれて、「つなぐ」「つなぎとめる」の意味で使われる。

つまりわれわれが、なぜか魂魄のことを稽（かんが）えることが出来るせいで、われわれはその魂魄につなぎとめられ、そこに“連絡”を得ることができるようなのだ。

そして魂魄の側では、「分からぬ」と「分かる」は矛盾しない。

魂は「雲のように分かたれない」という徳性のまま、一方で魂は「明白に分かたれる」という徳性のまま、双方が同時に成り立つてしまう。われわれが、四歳児以降の自我によって、すべてのことを「分かり」「感じ」「想つた」とき、この稽の連絡は断たれる。

「いや、どこまでいっても、ピーターフォークさんは俳優で、刑事コロンボは作り物だと“思い”ますけど笑」

このときの想う・感じるの量、その定量性、「量る」という色（しき）を、われわれは現実と呼んでいるのだ。

「たしかにあの演技はもう、現実とかを越えているって“感じ”ますよね！」

このように、このことは一般の知能では到底取り扱えず、かといつてまともな知性があるとよもやこのことに唾を吐こうとは踏み切れないのでは、このことにむやみに深入りすると精神機構を損傷するのだ。

われわれは「氣」を取り扱う徳性は与えられていても、「靈」を取り扱う徳性は与えられていない。

よつて、与えられていない徳性をひねりだそうとして、「分かる」の機能を無理にいじくりだと、結果、「気がへんになる」し、「気が狂う」のだ。

以下、まとめるところとなる。

魂魄はある世のものだ、だから鬼の字がついている。

魂魄があの世にあるとき、それを幽霊とは言わない。

あの世にある魂魄について稽(かんか)え、何かしらの連絡が得られてしまうとき、あの世にあるはずのものがわれわれの体に体現・体験されることがある。

そうして、あの世のものが体験的にこの世に現れてしまふので、それらの現象を靈・氣と呼ぶ。

これらのこととを熟語にして、靈魂・氣魄と呼んでいる。

「分かるもの、明白に分かたれるもの」を担つてゐる。このふたつは背反せず、同時に成り立つ。

魂魄の領域でのみ、「分かる」と「分からぬ」は背反せず、そのままを体験することができる。

その領域への“連絡”は、体の真ん中に得られ、またその“連絡”は、  
自我によって断たれる。

その連絡じたいを稽といい、稽を断たれればすべてはひたすら観測によって得られるパラメータ、またそれをどう「想う」か、どう「感じる」かということの一切になり、それら色(しき)を、われわれは現実と呼んでいる。

「分からぬ」と「分かる」は、いつまで経っても整合しないのだ。なぜならそもそも、「分からぬ」と「分かる」をそれじたい分離して捉えてるのは、そのふたつを分かつているというはたらきであつて、これのみを追跡することはそれじたい「分からぬ」を見失うことに該当する。

一方で、「分からぬ」のみを追跡するならば、すべての語や概念は分離されないのであって、ただひたすら何もかもわからない者に墮していくのみ。

それでいてたいていは、他者に頬を打たれたら、他者に頬を打たれた  
ということが「分かって」いて腹を立てるのだから、けつきよくは自我  
がないフリしているだけの近所迷惑な三文芝居にしかならない。

がないフリしているだけの近所迷惑な三文芝居にしかならない。

魂魄を稽（かんか）えることでわれわれにもたらされるのは、けつきよくのところ自我以降と自我未然、四歳児より前とそれより後が、どのように統合されるかという問い合わせだ。声高に現実を言いふらすのは回

答の先延はしたろうし、気狂いになるのは回答の拒否でしかない。せん、われわれの知能は、それが知能であるという時点で、「分からない」と「分かる」を統合はできない。そこでまともな知性は、唯一のありうる可能性を、魂魄への稽、その“連絡”に合理的に見い出す。「分からぬ」と「分かる」を統合する仕事はわれわれ自身には無理で、そもそもそれが可能なだけの徳性を与えられていないのだから。

われわれにはその仕事は為せないが、連絡した先にそれが可能なのであれば、連絡した先からその体験だけは直接与えられるということがありうる。だからこれらのことについてわたしを問い合わせるというのはたいてい無意味なことで、けつきよくのところわたしがこうして書いている「話」も、わたしの得てている連絡の先から体験として得られているものにすぎない。これはわたしのつながりからもたらされている話であつて、わたしの感性や想念からひねり出している言ではない。

# 話の進行

われわれはいわゆる現実において、関係・関心の引力、そのグラビティのほうへ進行している。ただしそれはただの引力でだから、われわれの自発的的意思の向きではないし、われわれの主体性の現れではない。

それはただの引力の方向であって、われわれはみずから「進行方向」ではないほうへでも、いくらでも傾き、転がっていくのだ。われわれはそうして関係・関心の引力に寄せられていくごとに、それぞれ好悪を感じ、また好悪を想う。

われわれは、そうした引力のない水平の原に立たされると、じつはへへ何をどうしたらいいかわからないのだ。たとえば浦島太郎といつて、われわれは浦島太郎を海辺とカメとに関係づけ、彼がすっかり海辺でカメを助けるものと「思い」込んでいるが、この浦島太郎がとつぜん水平の野原に立っていたら、その話がどのように進行するのかわからない。東西南北、好きに進んでよいが、どちらの向きにも傾きはない。

あなたはこのとき、いわゆる創作意欲を刺激されて、

「わたしの場合、この浦島太郎は……」

ということを、むしろ勇んで考え始め、語り出すかもしれない。わたしはそうしたあなたの意欲を、あなたの可能性そのもの、あるいはあなたの存在そのものかもしれないと思い、じつに尊重したく思うが、それでいてその種の衝動が、あなたにこれまでそうそう豊かな実績をもたらしてきてくれたわけではなかつたということにも、あなたは経験として思い当たるところがあるだろう。浦島太郎といわざとも、あたらしい名前があたらしい誰かを用意して、あなたはその傾きのない白紙の上に立たせればいいわけだ。あえて安っぽい言い方を用いるなら、そこであな

たの想像力は無限であるはず。ところがあなたの浦島太郎はここで、なぜか急速に既知のマンガのようなありふれたイメージに転じていき、ただのそういう「キヤラ」のようになっていき、果ては何かの「パターン」や「ネタ」に収束していこうとする。別にそれが悪いということではないが、他の誰でもないあなた自身がそのことに失望する。あなたは自分がいつのまにか、そうした自分の知る典型的な陳腐化の作業の中に自分がいるということに気づき、そのことがあまりに無意味で退屈に思えて「やめた」とその作業を放棄し、忘れてしまわざるを得なくなるのだ。

このことは、作中の登場人物のみならず、あなたという実在の人物にも当てはまる。たとえばあなたの目の前に、四つの学門の書を置いてみる。そうしたことは、学生時代、試験前には多くの人が経験していっているはずだ。来週には試験があるという関係上、いちおうはそれらの書物に引力を受けてはいるのだが、好惡でいうとその引力はあなたにとつて好ましいものではない。それよりは、読みかけのマンガ本が放つてくる引力のほうが好ましいのだが、さすがにこのときは試験という関係のほうが重いので、葛藤を経て、試験の引力が勝ち、

「しょうがない、やるか」となる。

ところがやりはじめるも、そうしたお勉強はしばしば「分からない」ということの連続で、あなたはますますその書物から関心を遠のかせる。そんなときふと、あなたは自分の部屋の散らかりようが「気になる」。それがいつたん気になり始めると、部屋の散らかりように向けられる「関心」は増大していくようで、その引力はまったく無視できないものになつていく。

あるいは、このときになつてきゅうに、  
「このデスクライトと、本棚の位置がなあ」と、その位置関係が気になつてくる。

またさらには、当然あるいは「いつものこと」のように、  
「なんでこんな勉強しないといけないんだろ。これって、生きていくの  
に関係ある？」

と、自分の生とその学門の関係について想いが湧いてくる。  
そうこうしているうちに、

「しようがない、まず、部屋の片づけをしよう。気が散つてしまふがな  
いもの」

ということになっていく。

われわれはこうして、ふだんを「引力に引き回される」ということで  
過ごしており、そのありようをしだいに、  
「意志が弱い」

と思うようになってくる。

そして現代であれば、そこから強い意志をもたらす引力、  
「何か、はつきりとしたモチベーションがいるんだよね」

というようなことも想い始めるだろう。

要するに、へへあなたの浦島太郎は引力のほうにしか動いてくれない  
VVVのだ。そして言わずもがな、それは主人公・浦島太郎の主体性たる動  
きではなく、ただの引力の作用でしかないということになる。

あなたの浦島太郎は、燃え立つ創作意欲とは裏腹に、華美な引力ある  
いは陰鬱だつたりグロテスクだつたりする引力に引き回されるだけで、  
いつまで経つても浦島太郎の「話」を始めてくれない。

白紙の上に立つた主人公が、どう動いていくものか、あなたは単純に  
言つて「話の進行」を知らないのだ。

話の進行といって、それを語義的に靈なる○○と捉えるなら、靈には  
重力がはたらかないはずだ。ベランダからドスンと落ちるような靈は靈  
ではない。

そうした、引力の作用を受けない事象が、何の作用によつて「進んで」

いくのかを、あなたはまったく知らないし、平たくいつて見当もつかない……

では、話はどのように進行していくのだろうか。それは、「話」のほう  
に進んでいくとしか言えないのだが、それはともかくとして、その進行  
はとにかくわれわれの日常、その色（しき）における引力方向ではない  
ということを、確実なこととして申し上げておく。

このことを、人それぞれ、どこまで求めるものはわからぬけれど  
も、数的割合として、あまりにも多くの人がこの「引力」という第一の段  
階で、自分の話を見失うのだ。関係・関心の引力に寄せられて動いた場  
合、その時点でもう「話」ではなくなつていて。

華美な演出がほどこされた、たとえばいわゆるイケメンが現れ、それ  
に対して女の子が「わわわっ！」となつたりするなら、もうその時点で、  
そこに「話」はないのだ。

そんなもの、見るからにただの色（しき）の権化であつて、そこは、  
「そんな話はない」

と初めから申し上げているとおりになる。

そうではなく、話はへへ同一性に向かつて進行するVVVのだ。

何に対する同一性かと云うと、主題に対する同一性だ。

主題が体験されるということ、あるいは主題が体現されるということ、  
それが「話」なのだ。

体の真ん中、「この人」の真ん中が、その主題との同一性に至る、その  
過程および始末を、われわれは「話」と呼んでいる。

浦島太郎が海辺を歩いているのは、主人公が浦島太郎との同一性に至  
るために歩いている、と説明される。

（注・この理論は、既成のものではありませんので、検索しても出てき  
ません）

浦島太郎が山間ではなく海辺を歩いているのは、「そういうイメージだ

から」「そういう設定だから」ではなくて、浦島太郎が浦島太郎との同一性に至るためなのだ。

時と場所が「むかしむかし」「あるところに」であるのも、その主題への同一性のためであって、それを西暦〇年と指定したり、場所が北緯X度・東経Y度の△△海岸であるなどと指定したりすることは、浦島太郎という主題に寄与せず、むしろ主題を損ない、主題を妨害する。

たとえば、桑田佳祐が唄うのは、主題として「あの海」のことだから、「砂まじりの茅ヶ崎」と唄つてよく、それがいつのことなのかについては、「人も波も消えて 夏の日の思い出は」と続くのだ。

桑田佳祐の歌を「むかしむかし、あるところに」とすると、主題を漂白してしまうし、浦島太郎の話を「砂まじりの茅ヶ崎」とすると、主題に別のものを上塗りしてしまう。

昔話にある「桃太郎」が、桃から生まれて、やがてきびだんごをアイテムに、イヌ・サル・キジをお供にして鬼退治に行くというのは、やはり「そういう設定」ということではなく、これは桃太郎という話の主題がアニミズムを含むということなのだ。

古代、日本の魂は「桃」に魔よけの力があると信奉している。きびだんごという食べ物にも靈力が宿つていよいよ捉え方は、伊勢神宮に食物のカミを祀ることや、われわれが昔から食物に「いただきます」と合掌・礼拝を向けることに対するやかに通じていよう。

桃に魔よけの靈力があり、きびだんごといった食物にも靈力があり、イヌやサルやキジなどの動物にもそれぞれの靈力が宿つていよいよ。そして万物に靈力あるいはカミが宿つているという捉え方を、日本では八百万神（やおよろずのかみ）と呼び、文化学的には淡白にアニミズムと呼ぶ。またそのアニミズムの中で、イヌ・サル・キジはおそらく十二支や方角、陰陽五行への接続も具えていよい。陰陽五行はわれわれのふだんの暮らしではあまり言われなくなつたけれども、われわれがカレンダー

として常用する曜日はこの五行に由来している。木火土金水（もつかどこんすい）、これに昼と夜を意味する日月を加えてわれわれの知る「曜日」は成り立つていて。

とはいって、これらのことと詳しく述べていくことは、そうした専門の研究者を除いては、単にわれわれに軽薄な「わかつたふう」をもたらすだけに違ひない。それよりも「話の進行」だ。「話の進行」はどのように生じ、どこへどのように向かっていくのか。

桃太郎は、精製されたモモのジュースから湧いて出たのではない。桃太郎は、たしかな靈体として川上から現れた桃、その体の真ん中から生まれてきたものだろう。その桃がふんわりしたイメージの存在でなく、たしかな「体」を具えたそれであつたことを、われわれのよく知る「どんぶらこ、どんぶらこ」という異化表現が示しているのだ。それはたしかな体を具えていたがら、同時に通常の桃とは大きさも異なり、まして果樹から収穫されたものでもない。

主人公の「体」が、魔よけ・魔を打ち祓うという主題そのものとの合一に向かっていく。そのために、主人公の桃太郎は「すくすく育つた」のだ。そして、桃太郎單一で鬼を退治することでも桃太郎の話は成り立つだろうが、桃太郎は同時にアニミズムじたいの体現者でもあるから、山里の靈なる動物たちも従えて寓話を形成していくというわけ。また、彼らが討伐に行く鬼たちは、靈なる山里とは隔絶され、きっと魔界を為しているであろう「鬼が島」に棲んでいるのだ。そこで主題と同一化を果たそうとする主人公の体は、鬼ヶ島を目指して討伐の「旅」に出ることになるが、子供にも追随しうるものとして桃太郎の話はここまで。彼らの「旅」はそこまで膨らまされはしない。ただ仮に、桃太郎の話を大きな叙事詩にするのであれば、彼らが鬼ヶ島に向かう「旅」には、もつとさまざまな局面がありえてもおかしくなかつただろうと、創作の視点からは

浦島太郎について。浦島太郎が何を主題にした話なのかは定かではない。そもそもこれという原本も存在しておらず、さまざまに浦島太郎の話が数十も存在している。いくつかの説によると、もとは竜宮城で三年間、浦島と乙姫は夫婦生活をしており、そこには性生活の描写まであつたというようなことも言われるし、あるいは玉手箱で老人になつた浦島太郎は、その後乙姫と結婚したのだというような、いかにも近現代ふうのハッピーエンドへの説もまことしやかに唱えられている。

浦島太郎の原本がどのように書かれていたのかはどこまでも不明だ。ただ言いうのは、玉手箱から吐き出された煙によって浦島太郎が老人になるというラストシーン、あれについては誰だって戸惑いが残るだろうということだ。浦島の老化シーンはまるで、何の咎もないはずの浦島が玉手箱の開封によって急遽罰されたかのようにわれわれには受け取られ、それまで浦島太郎の善性を信じていたわれわれを困惑させる。

浦島太郎がカメを助けるとき、カメが子供らの集団暴力によっていじめられていたということは、われわれに肉体的な事象への呼びかけをもたらす。さらに、子供たちははじめ浦島の諫めを聞き入れず、なおも力メをいじめたので、浦島は子供たちに「おあし」を——お小遣いを——やつて子供らを引き下がらせたという描写もある。子供らがそうして金子（きんす）を受け取つてはじめて引き下がるというのであれば、その描写もやけに生々しいものとしてわれわれには体験される。

浦島がもし玉手箱を開封しなければ、浦島はその後も、時空を超えて存在することができたのではないか？ 乙姫は浦島に、「人にとっていちばん大切なものが入っている」と言つて玉手箱を手渡し、けれども同時に「決して開けてはなりません」と言いつける。特に、「竜宮城にふたたび来たいとあなたが望むのであれば」と言い添えて。

結果、浦島が玉手箱を開封したとき、そこには分かりやすい物品は何も入つておらず、ただ代わりに封入されていたのは何かしらの「雲」だ

った……これがまるで、現代のわれわれには封入されていた毒ガスが噴出したように思えるから、浦島はそのガスによって老化したというよう受け取られてしまう。あるいはせいぜい、そのときまで掛けられていた「竜宮城マジック」が解除され、浦島は実時間の経過にふさわしいだけの加齢を一瞬でこうむつてしまつたのだと受け取られる。

この話についてたしかな説など誰も唱えようがないだろうけれども、それでも最後までわれわれに引っかかっている疑問、納得のいかなさは、なぜそのようなしろものを乙姫が浦島に手渡したのかということだ。決して開けてはならないものなら初めから手渡さなければよいし、せめて厳重に施錠でもしておけばよかつた。また、そこから実際的には老化ガスが噴き出すのであれば、乙姫が言つた「人にとっていちばん大切なものが入つている」という口上は内容物にそぐわないだろう。

### 乙姫は玉手箱について、

「これを開けるとあなたは一氣におじいさんになつてしまします」と前もつてその危険性を伝えておけばよかつたではないか。

これについてわたしが体験に読み取るのは、乙姫は玉手箱の中身についてへへ言及することが出来なかつたVVということだ。なぜか？ それは、玉手箱の中身について言及するということは、それじたいが玉手箱を開封するのと同義だからだ。よつて玉手箱の中身について言及したとき、やはり浦島はたちまち老人になり、その加齢によつて当然に死去してしまつただろう。

玉手箱の中には、まるで「魂」が入つていたかのように、わたしには体験される。なるほどそれが魂ということであれば、それが「人にとっていちばん大切なもの」という口上にも整合しよう。そして先の章に述べたように、魂とはこの世ならざる世界のはたらきのうち「分からぬもの」のほうを担つているものだ。その「分からぬもの」が玉手箱のうちに収められているうち、それはいわゆるシュレーディングガードのよう

に浦島には観測不能のものでありつづける。しかし浦島はそれを開封して内部の魂を「観測」した……そして観測されたならばそれはもはや魂ではない。ただの不明の煙を浦島はその顔面に浴び、その煙はたちまちどこかへ雲散霧消していった。

そして浦島は、時空を超えて在りつづける魂を失い、ただちに地上・現実の支配する世界に戻ったのだ。そこで、浦島はこれまで免除された加齢の量を一気に引き受けることになり、たちまち老人となつたし、同時にその魂を失つたことで、竜宮城へアクセスする手段も失つてしまつた。

浦島太郎の主題は何であつたか。また、浦島太郎の体はどのようにわれわれに明視され、その体はどのように主題との同一性に至つていったか。

浦島太郎は漁師として描かれることが多く、われわれの脳裏の記憶にも、彼は釣り竿と魚籠（びく）を持った姿で絵本に描かれている。すなわち彼はふだんタイやヒラメを漁（すなど）り、それを糧として、食用にもするし売り物にもして暮らしているのだが、その彼が竜宮城でタイやヒラメの舞い踊りを鑑賞するということには、われわれに肉体生存についての一通りでないインパクトを与えてくる。あるいは乙姫が浦島を饗応したとき、乙姫は浦島にどのような食事を供しただろうか。まさか海底にありながら野ウサギの焼き物を供したとは思えないし、やはり浦島はそこで海産物を供されたように思われてならないのだ。子供らがカメを暴力的にいじめていたということ、および、子供らは「くそ餓鬼」としてわれわれは浦島太郎の主人公を肉体的な存在として受け取ることが可能なのだ。それでいてもちろん、そこに靈なるものが重なつてこないのであれば、それらの描写はわれわれにただ主題のない陳腐なグロテスク・リアリズムをもたらすのみ。

桃太郎が靈なる体となつて鬼ヶ島という魔界に向かつたということに引き当てるなら、浦島太郎は靈なる体となつて竜宮城という蓬莱郷へ行ったということになるだろう。そして浦島太郎は、竜宮城に骨をうずめるまでにはせず、或る日郷愁にかられ、桃太郎と同じように自分を育ててくれた親や里村のところへ帰つていった。ただし、桃太郎の場合は魔界からの帰還だが、浦島太郎の場合は蓬莱郷からの帰還だ。よつて浦島太郎のラストは、桃太郎のラストのように「末永く幸せに暮らしましたとさ」とはならなかつた。浦島太郎のラストが「末永く幸せに」となるためには、玉手箱が未開封のまま、すなわち浦島が竜宮城とのアクセスを得たままでいる必要があつただろうし、そのとき彼はむしろ蓬莱郷たる竜宮城のほうへ“帰つて”いかなくてはならない。

ここで唱えている浦島太郎の読み解きは、まったくわたし独自のものなので、他に検索してもそうは出でこないし、わたしに何ら社会的な権威があるわけでもないので、まったくアテにはならないものなのだが、仮にわたしが唱えているこの説に則るのであれば、浦島太郎の話はわれわれに「魂を観測するべからず」という警句を鋭く与えていくことになるだろう。観測した魂は、そのときすでに観測という行為によつてこそ魂ではなくなつており、もはや時空を超えて存在する命は消え失せ、またその命が体験する蓬莱郷とやらもどこか空想の世界へ霧散している。

ともあれ、本稿が唱えている主旨は浦島太郎についての読み解きではなく、話と色（しき）、そしてこの章では「話の進行」がどのようなものについてだ。浦島太郎は、魂の世界の体験者として描かれ、その後、魂の世界の喪失者をショッキングに体現する。観測されないうち時空を超えて存在する——かもしれない——魂を主題とし、その魂に主人公の体が同一性を得ていくために「話」は進行していく。そのために話は浦島太郎の体を肉的に描き出し、一方で主題の世界たる竜宮城を靈なるきらびやかなものに描き出す。もちろん人語の通じるカメや、乙姫のありよ

うなども桃太郎と同じアニミズムを現わしているだろうが（乙姫は女性としてのアニマ像に引き当たれよう）、そのことを詳述することは本稿の趣旨から逸脱するので、アニミズムやそれと通じてあるアニマ像などについては他の解説書を参照されたい。

話の進行は、主人公の体が「主題」と同一性に至らんとする向きで得られていく。そこに、動力というような動力はないが、動力なしに進行する「話」のはたらきは、われわれが知る量的な動力よりもなぜかはるかに力強いものだ。

ただし、最後に水を注しておかねばならないのは、これらのことが「分かった」として、そのことは解体の向きにはたらくのみにすぎず、それでは話の進行を獲得することにはなってこないということだ。これは「分かる」ことではなく「体験する」ことだから。

あなたの自我が、このことをどう詳しげに理解しようとも、そうではない、「話」とは——「あなたの話」とは——あなたのへへ体の真ん中▽▽がどうのようないまの主題を体験するかであり、あなたのへへ体の真ん中▽▽のようないまの主題の体現に向かうかなのだ。

ゼロ歳から三歳ぐらいまでの記憶は誰にもほとんどない。ただしそれは本当に、「使用できる記憶」の形でそれが得られていないというだけであって、その記憶じたいが存在しないということではない。なぜなら、仮に本当に記憶がゼロになってしまうのであれば、憶えたはずの母国語も、親の顔と声も、水の飲み方もトイレの使い方も、すべて忘れてしまうはずだからだ。

じつさいにはそんなことはなく、たとえば二歳児が水道の蛇口をひねつて水道水を使っていたら、彼はその十年後にも蛇口をひねるという行為と水道水の使い方を覚えているだろう。あるいは、三歳になつて赤信号を覚えたのに、それを六歳になつて忘れて車道に飛び出すということもない。

あるいは、ゼロ歳から三歳までのあいだ、両親がその乳幼児の頬を叩き続け、いじめぬいたとして、そのことが四歳以降にはすっかり忘れられて、その後は明るい性格になつて健やかに生きていくなどということはどうてい信じられない。じつさい、乳幼児のころに何をされたかは明確には覚えていないかもしれないが、おそらくは何かに怯え続け、傷ついたままでいる、暗い子として育つていくはずだ。

だから、四歳より前の記憶が「ない」ということはまつたくない。

記憶にないどころか、ことわざにある「三つ子の魂百まで」ということわざは、むしろ三歳時点のある種の記憶——体験——のほうに永続性がありうる旨を言い伝えているだろう。さらには、三歳児を宮に参拝させることができが当人にとって無意味ではなく、それどころか「三歳だからこそ」と直観されているところがあるからこそ、日本には七五三の文化があるのだと言えよう。

## 同一性

先の章で述べたとおり、われわれは四歳より前の記憶をほとんど残していない。

自分が幼児だったころの写真を親に見せられて、「このころあなたはとても甘えん坊だったのよ」

と言わても、当人としては心当たりがないので「フーン」と他人事のように答えるしかないという具合にだ、これは誰でも知っていることだろう。

四歳よりも前でも、われわれはさまざまことを「体験」はしており、それは自我の捉える記憶とは違う形で、われわれの中に息づいているのだ。

ゼロ歳から三歳までのあいだ、自我がまだ形成されていないなくて、「分かる」という機能は具わっていないかも知れなけれども、ゼロ歳児にも「体の真ん中」はあるし、三歳児にも「体の真ん中」はあるのだ。だから自我は未形成でも体の真ん中に「体験」は得られる。

たとえば、母親のふところに抱いてもらうと、やわらかくてあたたかいとか、湯気の出ているみそ汁をあわてて飲もうとすると熱くて火傷するとか、それを「フーフー」すると適温に冷めていくとか、公園で走り回つてつまずいてこけると膝を打つて痛いとか、ソフトクリームは甘くて冷たくてやわらかくておいしいとか、悪いことをして物置に閉じ込められると暗くてさびしくてとても怖いとか、夏は暑くて冬は寒いとか、ザンカの花びらを引っ張ると花びらは取れてしまうとか、カマキリを触ろうとするとカマで挟まれてけつこう痛いとか、大好きな犬をたくさん触ったあとは手が臭くなるとか、毎日無数のことを「体験」している。

「体」が存在している以上、「体験」は得られていて、むしろ乳幼児の場合、「分かっていない」というよりへへ体験しかできないvvと捉えるべきだ。

だから桃太郎にせよ浦島太郎にせよ、われわれは子供が幼児のうちに

その「お話」を読み聞かせる。

三歳児がそうした昔話を気に入り、毎夜のように、

「これ、読んで」

とねだつてきたとして、もちろん当人はそうした自分ことを、

「おれ、昔話フリークでさあ」

と思っているわけではないし、

「この、赤ずきんにオオカミが迫つてくるところのスリル構築、すごくいいんだよね」

と思っているわけではない。

三歳児はまだ「分かっていない」のだ。それが昔話だとか寓話だとかいうことも「分かって」はおらず、それがファイクションという分野だとも「分かって」はおらず、赤ずきんにオオカミが迫つてくる危機のシンがスリルだとも「分かって」はない。

誰の目にもあきらかなように、三歳児はお話をただ「体験」するのだ。理解はまだおぼろげでストーリーというような概念もまだ分かってはないだろうが、そんなことよりも彼は直接の体験を革新しくする。

われわれは大人になると、「分かる」ということに膨張した権威を置き、そのことで威張り散らそうとするのだが、ではそれで青空に見上げる太陽について、われわれ大人のほうが三歳児の見上げるそれよりその存在に近く親しいのだと言い張れるだろうか。われわれは太陽が恒星と呼ばれる天体だということを知つており、そのエネルギー源は水素がヘリウムになる核融合、表面温度は六千度でコロナの温度は百万度、大きさは地球の百三十万倍もあり、地球からの距離はおよそ八光分だと「分かつて」いるとして、そのことは三歳児が見上げる太陽の真新しい体験に「勝る」のだろうか。あるいは青空は太陽光が地球大気に乱反射してその色合いを示すのだとして、それでわれわれの見上げる青空は三歳児が見上げるそれより真に迫つて青いのだろうか。

幼児は自我が未形成なので、「分かる」という能力については大人よりも劣るけれども、逆に言えばわれわれ大人はその「分かる」という自我の能力のせいで、「体験する」という能力については幼児に劣つていると言わねばならないのではないか。

じつさい、たとえばあなたが三歳児と共にどこか別の国に移住するとして、あなたが当地の言語に対して勉強熱心になつたとしても、連れている三歳児とどちらが早く「ネイティブルベル」になれるかというと、三歳児に勝てる自信はないのではないか。われわれは当地の言語を目前

の母国語で「理解」して習得しようとするだろうが、三歳児は当地の言語を直接「体験」して習得していくだろう。

われわれは三歳児に向けて、

「まだ何もわかつていなーんだよね」

と、その自我機能の未成熟をまるで上位の立場から傲（おご）って指摘するふうでいるが、その態度はいかにも浅はかで愚かしいものだ。三歳児はまだ何もわかつていなーにせよ、『何もしていなー』わけではまったくない。むしろ体験ということに主眼を置くなら、体の真ん中で『何もしていなー』のはわれわれ大人の側なのではないか。

かつて、ディエゴ・马拉ドーナというサッカー選手がいた。すでに故人だが、いまでもアーカイブを観ればその姿は映像にまぶしく残されている。

『ディエゴ』がサッカーボールとたわむれている姿を観ると、まるでディエゴはサッカーと分離できない存在に見える。

誰でもサッカーという球技は知っているし、男性ならそのほとんどは、遊びついどであれその球技をプレイしたことがあるだろう。

そして、誰でも志を立て、たとえばサッカーボールを一万回蹴れば、サッカーあるいはサッカーボールを「蹴る」ということについて、一定の習熟・レベルアップを得るはずだ。

けれども、われわれが志を立ててサッカーボールを一万回蹴つたとしても、そのことでわれわれはサッカーとの「同一性」には至らないものだ。上達はするが、「わたし」の存在と「サッカー」の本質が同一性におよぶということにはなつてこない。

われわれの場合、ただただサッカーのことが「分かつてくる」だけだ。脚の振り方、ボールの芯の捉え方、サッカーボールの性質などが「分かつてくる」だけ、あとは脚力等のバラスターが上昇してくるだけだ。まだ初心者だったころのディエゴが、われわれと並んで一万回もサッ

カーボールを蹴つたら、彼は上達していくのではない、サッカーとの同一性に及んでいくだろう。

仮に三歳児が、「赤ずきん」の話を、際限なく一万余でも聞きたがったならば、その三歳児は塗り重ねられる「体験」の果て、「赤ずきん」という話との同一性に及んでいったであろうようだ。

「同一性に及ぶ」ということ。そのようなことは、あまりに一般のわれわれから縁遠いことだ。それについてせめて、われわれにとつて手がありになるのはそれぞれの母国語だろう。

あなたに、

「自己と母国語の同一性がわかりますか」と訊いたとして、あなたは、

「どういうことか、よくわかりません」と答えるかもしれない。

けれども、その「よくわかりません」も、母国語で捉え、母国語で言うのであって、母国語よりもたしかにそのことを捉えて表現する方法は存在しない。

あなたが仮に、自己を母国語から「分離しよう」としたとして、その「分離しよう」という思いがすでに母国語なので、分離は出来ないのだ。このことは、あなたの存在が、母国語との同一性に及んでいると説明される。

逆に、同一性に及ばず、自己から分離されていると感じられるときのことを、同一性の反対で「疎外」と言う。

あなたがサッカーボールを一万回蹴つたとして、あなたはサッカーとの同一性に及ぶわけではなく、あなたはむしろサッカーとの「疎外」を体感するだろう。

あなたに一万回サッカーボールを蹴らせるることは簡単なのだ。たとえば、キックの一回ごとに、あなたに一万円の報酬を支払うというふうに

すればよい。一萬回蹴れば一億円だ。あなたはこのチャンスを逃しはしないだろう。

もちろん一回ことに、全力で真剣に蹴っているか、手抜きしていないのかのチェックはする。それは審査員に見張らせていればいいだけだ。

そうなれば、いくらあなたがおっくうがりの体质でも、一日百回のキックで百万円、百日で一億円のその行為をするだろう。その結果、やはりあなたはそれなりのキック技術、シューート技術を高めるには違いないし、そのための脚力や体力も少しはつくに違いない。

だが、そのことでやはり、あなたとサッカーの同一性などということは起こつてこない。

なぜならここに、

「わたしはサッカーなんです」

などという、そんな話はないからだ。

それに対照して言うと、ディエゴは本当にサッカーだった。

の時点で「芸人」ではなくなってしまうだろう。あるいは現代のいわゆ

る「アイドル」が、事務所を辞したらやはり「もうアイドルじゃないです」ということになるだろう。けれどもそれはよく考えると奇妙な話だ。

立川志の輔が事務所を辞したり、立川一門を辞したりしても、彼はやはり落語家——少なくとも漸家——でありつづけるだろうし、往年の横山やすしのような人が事務所を辞したとしても、やはり「やつさん」は漫才師でありつづけただろう。

桑田佳祐やボブディランは、音楽事務所に所属しているからミュージシャンなのではないし、岡本太郎はコンクールで受賞して画壇にいたから芸術家なのではなかつた。

お笑い芸人が事務所を辞めたとたん、芸人でなくなるのなら、彼はもともと笑いや芸事に「疎外」されていたのであって、笑いや芸事に同一

性を得ていたのではなかつた。あるいはYoutuberが一切の動画サイトからBANされたとたんにエンターテイナーでなくなるのだとしたら、彼はもともとエンターテイメントに「疎外」されていたのだということがある。

平易に言って、コンビニエンスストアでアルバイトをしていた人は、そのアルバイトを退職すれば、そのときからもう「コンビニの人」ではなくなるだろう。ほとんどの場合、コンビニエンスストアでアルバイトをする人は、何もコンビニエンスストアとの同一性に至らんとしてそのアルバイトをするわけではなかろうから。

一萬回、レジ打ちと品出しをしたからといって、「わたしはコンビニなんです」ということにはならない以上、一萬回、サッカーボールを蹴つたからところで、「わたしはサッカーなんです」ということにはならない。ということは、一萬回「ネタ」をやつたとしても、それで「わたしはお笑い芸人なんです」ということにはならないし、一萬回ファンと握手したとしても、それで「わたしはアイドルなんです」ということにはならない。

話と色(しき)の差分、体験とそうでないものの差分は、じつにここに現れる。われわれにとつてサッカーボールを一萬回蹴ることは練習「量」だが、ディエゴにとつてはそれは量ではなくなるのだ。ディエゴは自身がサッカーという「話」で、桑田佳祐は彼自身が歌という「話」なのだ。立川志の輔はらくじという「話」で、岡本太郎は芸術という「話」だ。^^話に量はないvv。もちろんそれぞれが尋常でない練習量を経ているのは事実だろうが、彼らにとつてそれは量ではなくなつてているのだ。われわれにとつて、^^外国語の勉強量は存在しているけれども、母国語の練習量は存在していないvvように。あるいは三歳児が、きのう読んでもらつたばかりの絵本も、きょうにはまったく足りないというように。

練習量が、量を超えたとき、はじめてわれわれはそこに「体験」を得始

める。それは自我の障壁を越えた証だ。自我の障壁を越え、体の真ん中に届き始めた。体の真ん中に「それ」が届き始めたので、自己と「それ」の同一化が得られだす。

仮にあなたのサッカーの才能と実績が、ディエゴ・马拉ドーナのそれに遠く及ばなかつたとしても、あなたとサッカーの同一性は得られうる。あえて言うなら、どこかしら「へっぽこ」でも、何かとの同一性は得られうるのだ。

たとえばあなたが自分の描く絵画との同一性に及ぼうとするとき、あなた

の画力が美大生主席のように秀でている必要はない。じつさい単純な画力で言えば、セザンヌは美大に合格できないんじやないかということらしい絵が下手だ。もちろん一般人よりは上手だが、さすがにそんなもの一般人と比較することに意味はない。

画力がどうであれ、「セザンヌは絵だ」と、その絵画から言い得てしまう。セザンヌの絵画はセザンヌの話であり、セザンヌは絵だということじたいがひとつ的话だ。セザンヌ当人とその絵画は同一性に至つており、じつさいわれわれはその絵画を観たときに、

「セザンヌを観てきた」と言う。

一方、美大で主席の○○くんの絵画が展示されていて、それを、「○○を観てきた」とは言わない。

画力はただの力量・パラメーターであつて、それじたいは体験を為すものではないからだ。

じつさいもう画力といえば、生成AIがすべての美大生より優れてしまつたので、人同士で画力を競い合うことには、競技以外の意味はなくなつてしまつた。

いまわたしがこうして書き話している文章じたいもまさにそれであつ

て、いまあなたが読み聞いているこの話も、あなたにとつて、「この人を読んでいる」

「九折空也を読んでいる」

ということでなければ、体験としては意味がないのだ。

あなたの目の前に文章の束をドサッと放り投げ、あなたが数行読むうちに、

「九折さんだな」

と体験されるのでなければ、当のわたしが、わたしの書くものと同一性に及んでいないのであって、そのときはわたし自身、そのみじめさとあわれさを——さらにはその醜さと無様さを——引き受けなくてはならないということになる。

もちろん、そんなみじめなことはありえなくて、わたしはこれを書き話しながら、文学がおれで、この話がおれで、この学門がおれで、この体験がおれだからということを——おれが「在る」ということを——確かめながら書き進んでいる。

どのようにしてそんなことをやればいいのかといつて、何度も言うよう、体の真ん中だ。

文章量はとっくに消えているので、あなたは日常にないページ数を進んでいるだろう。

わたしの書き話す内容を、あなたはなるべく理解しながら進んできていると思うが、それはそれでよいとして、わたしが本当に狙っているのはそこではない。

わたしはあなたの、理解する機構を狙つてはいない。

わたしは、四歳児以降のあなたを狙つているのではなく、それより前、あなたにまだ「分かる」というような機能と記憶さえなかつたところを狙つているのだ。

体験するしかなかつたときのあなたを狙つてゐる。

そのあなたは、膨らんだ自我の底に埋もれてしまつてゐるだけで、存在していなかつたわけではないからだ。

そうしてけつきよく、わたしが何をやつてゐるか、どういう現象がどうのようにはたらいてゐるかは、一般にはまつたく分からぬ。

本当に分からぬ。

同一性が分離するわけはないのだから、本当に分からぬ。

ともあれ、このように、体験とは同一性のことだ。

体の真ん中が主題との同一性に至ることだ。

それは同時に「話」もある。

一方、自我は「分かる」ということ、分離と分解だから、自我で同一性に及ぶことはできない。

自我はむしろ同一性を切り離すことにはたらく。

よつて、自我によつて理解されたことは、同一性の反対、「疎外」になつていく。

人々は一般的に、自我の意識を「わたし」だと思つてゐるけれど、それを「わたし」とする場合、へへ「わたし」とは万物から疎外されてゐるもののVVと感じられるのだ。

その体感は強固で、かつ定義的だ。

じつさいわれわれの自我は、四歳のころに、

「わたしと、わたしでないもの」

を分離することで得られてきたのだから。

万物との、同一性どころか疎外によつて確立されてきた「自我」は、それじたいの機能は正しいとしても、一般にはとんでもない勘違いを内包してゐる。

それは、自我は「わたし」ではないどころか、自我は「他人」だという

ことだ。

## 罠

われわれは、この勘違いにおいて、サッカーボールを蹴れば蹴るほどサッカーに疎外され、漫才をすればするほど笑いに疎外され、唄えば唄うほど歌に疎外され、絵を描けば描くほど絵画に疎外され、文章を書けば書くほど文学に疎外される。量的に重みは増していくのに、体験からは遠ざかっていくのだ。

一般に「わたし」と誤解されている自我は、誤解されているゆえに、わたしと主題との同一性に至るのではなく、ついに他人との同一性に至る。へへ自我はそもそも他人VVなのだ。

え、なんでわたしが他人になるの？

そんなバカなというようなことが本当に起ころる。

いまからこの章に書き話すことは、わたしの本意とするところではない、ただの「罠」だ。前もつて「これは罠です」と教えられでいるのであれば、ここからの罠は罠としてとともに機能しないだろう。

一見よく出来てゐるふうの道筋にも、「ここはくくり罠の道です」と前もつて看板が立てられてゐるので、あなたはその罠を踏み抜きはしないだろうが、かといってあなたはどのよう、この罠に反論を示し、罠ではない別の道を見い出し、それを拓いていくだろうか。あなたはその罠の手前で立ち止まりはするものの、他の方途が果たしてあるのだろうかと、途方に暮れて考えさせられる。

そのようにして、この罠は、罠と知らされていてもなかなか考えさせ

られるところがある罠なのだ。

あるいは一部の人は、ここでわたしがどれだけ「罠」と前もって明示し、じつさいにその罠の設置を見せつけたとしても、あえてそのとおりに踏み抜いて、この罠の道をこそ往こうとするのかもしれない。それはもう、そこまでするからには、何がなんでもそれが当人の道ということなのだろう。われわれは互いにそのとき、互いの無事と達成を祈つて見送るしかないのであって、われわれがそこで相互に諍（いさか）いを起こす謂（いい）はない。何が正しい道なのかなど誰にもわからない。これは罠だと言い張つてゐるわたし自身こそが、別の道で罠にかかり、深い陥穰に嵌（はま）つてゐるという可能性もまったく否定はできないのだ。

「なんかさあ、オレ、気づいたんだけど」「なあに？」

「やつぱりさ、自分のやるべきことを、やつていないと、なんかダメだよね」

「どういうこと」

「なんかさ、自分のやるべきことやつていないと、根本的に、自分のことを、カスだ、つて思つちやう。自分で自分を軽蔑してしまう」「あー、それはわかる笑」

「なんかさ、何もやつていない自分のことを、何してんだコイツって、不気味というか、醜いというか、気持ち悪いって感じるんだよね」「まあね、わたしたちはパンダじゃないから、缶食つて寝転がつているだけで暮らすつてわけにいかないもんね。たまに、あーもうわたしパンダになりたいとか、イルカになつて無意味に海泳いでいたいとかつて、思うこともあるけど」

「わかる笑。そんなんだよ、パンダとかイルカとかは、自分自身のことを考えて、『なんだコイツ』とか思つたりしないだろうからね。気楽でうらやましいよ。そのへんの石ころかとか、木の根つことかもそうだ」

「たしかに。自分のこと考えたり、責めたりするのって、人間だけなのかも」

「そなんだよ。それで、オレ気づいたんだけど、ペットボトルとかペーパーナイフとか、そういうモノはさ、初めつから意味あるじやん？」「え、どういうこと」

「ほら、ペットボトルはもともと容器として作られているんだし、ペーパーナイフは、もともと封筒を開けるつて用途のために作られているじやん。でも、オレはどうかというと、オレは、何かのために作られたわけじやないんだよね。オレは、なんか知らないうちに、両親のあいだに生み落とされてきたつていうだけで笑」

「うーん。まあでもそれは、ご両親の、愛の結晶つてやつなんじやないの」

「それはそなめられないけれどさ。でも、かといつて、父親も母親も、何も『オレ』を産もうとしたわけではないんだよ。あくまで子供を産もうとしたのであって、前もつて『オレ』を産もうとしたわけじやない。結果的に、生まれたのがオレだったというだけだよね」

「そつか、そりやそうよね。産まれる前は、まだその『オレ』はいないんだものね」

「そな。だからさ、オレたちつて、前もつて用事があつて作られた存在じやないから、究極で言えば『余計なもの』なんだよ。そこがペーパーナイフとは違うんだよね」

「『余計なもの』？」

「えつとさ。まず、もともとこの世界があつたとしてだよ。そこに別にオレが産まれてこなくとも、別にこの世界は何も困らなかつたわけじやん？ そこにオレが、何か知らんけど生まれ落ちてきたわけ。そこで、なんできみが生まってきたのつて訊かれて、オレは答えられないし、他の誰も答えられないんだよ。もしオレがペーパーナイフだつたら、オ

レは封筒を開けるために作られましたって言えるんだけどさ」

「そつかあ、それはたしかにそうだね」

「まあ、だからって、それでオレがオレを卑下するわけじゃないんだけど、いちおう理論上、オレの存在は“余計なもの”としてスタートしているってことなんだ」

「そう言われてみたら、わたしもちよつとわかるかも。わたしもときどき、わたしってなんでこの世界にいるんだろうとかって思うことがあるし、わたし自身、この世界に対して邪魔な存在なんじやないかなとかって、思うことある」

「そうそう。だからさ、だからこそなんだけど、自分ってもともと“余計なもの”として生まれてきているのにさ、さらに何もせずに寝転がつてばかりいると、ますますキモいというか、いつそのことグロいんだよ。

「そんではさ、言つちや悪いけど、何もやつていない人のことって、オレたち直観的に『無理』とかつて思うじやん。付き合えって言われても無理、友達になれって言われても無理。飲み会に来られても困るから正直来ないでほしいって笑。そういう無理な人つて實際いるわけで」

「それはわかる笑。本当に何もやつてきていてなくて、それでいて何かおいしい思いだけ期待している人とか、生理的にゾゾゾつてなつて、マジ無理つてなる。そつか、あれつてグロいから無理なんだ」

「そうなんだよ。それでき、それだけじゃなくて、何かさ……オレ、まじまじと思ったことがあるんだよ。『この世界つて、何?』つて。なんかその瞬間、見慣れている周りの風景が、じつは見慣れているだけで、本当は何もかもわけわかんない世界なんじやないかって見えてきて」

「なんかね、その瞬間はすごかつた。ハンパじゃなくゾツとした笑。オレ、この世界はもともと、ちゃんとした意味がある世界だと思っていたんだけど、本当は意味なんかなくて、じつは何の意味もないままに、草

木がニヨキニヨキ生えたり、虫がブンブン飛んでいたりするんだよ。なんかその瞬間は、マジで世界のヴェールが剥げたんだよね。この世界を、マジで直接、生（ナマ）で見た感じ。それはもう、わけがわからなさすぎて、キモくて、グロかった」

「そ  
う  
なん  
だ

「それで、逆に、オレは何をちゃんとやらなきやつて思つたんだよ。うまく言えないけれど、そのときに見たあの無意味な世界？あれにつながつて、キモい人はキモいんだつて、なんかわかつたんだ。何もしていない人つて、あの無意味な世界の実物だからグロいんだよ。なんかブヨブヨしていく、怪物みたいなんだよね」

「怪物っていうのは、ちょっとわかる。それでそのとき、ペーパーナイフはグロくないんだ？」

「えーっとね、たとえばペーパーナイフが机の中へ眠っていたとしても、それは別にグロくはないというか。それは、ペーパーナイフがもともと用途から作られたものだからだね。ペーパーナイフって、机の中で寝ていても『何コイツ』ってならないんだよ。ペーパーナイフは、ペーパーナイフですっていう本質を失うことがないからね。でも、『無理』なおじさんが、ずっと部屋で寝転んでいると、オレたちは『何コイツ』ってなるんだよ。嫌悪のまま、あなたの『本質』は何ですかって思はざるをえない。その人、『本質』がないままずつと部屋に寝転がり続けているんでしょ。それで、メシも食うしトイレもする。オナニーとかもするだろうし、何の本質もなしに、たぶん美女と付き合いたいみたいなことだけは思つてたりするんだろ。そういうのって、まじまじと見つめて、冷静に考えると、マジでグロくて無理じゃん」

「うわー、そういうおじさんはマジで無理。なんかこう、扁桃体に直接  
くる感じで無理だわ。机でペーパーナイフが寝ているのはぜんぜんかま  
わないけど、そのおじさんがわたしのベッドで寝ていたら、マジでベツ

「ドごと焼却処分にするしかないと思う笑。なんでだろうね、たとえば、わたしむかしハムスター飼っていたけど、ハムスターなんかはんたべてウンチして、それだけでかわいいのにね」

「そう、それはね。それについても、オレ考えたんだけど。それはけつよく、オレたちがハムスターと違つて、自由な存在だからなんだよ」

「自由？ え、待つて、自由といえば、うちのハムスターのほうが毎日すごい自由に暮らしていた気がするんだけど笑」

「いや、じつは本当はそうじやなくて。ハムスターはさ、人間と違つて、自分自身について考えるなんて出来ないんだよ。よくも悪くもさ。

オレたちは、何か自分の本質になることをやらなきや、やつていかなきやつて思うし、それで自分の本質になることつて何だろうつて、ずっと考えたり、それを探したりするわけじやん。でもハムスターはそもそもそんなことできないんだよ。ハムスターは、自分の本質を考えて、自分の本質を探して、それに向かっていくなんてことはできない。だからじつは、ハムスターには自分が選んで何者かになつていくなんて自由はないんだよ。ペーパーナイフが、もともと封筒を開けるという本質を与えられて生み出されているぶん、もうそれ以外の何かになる自由はないということみたいに」

「えー、そうなんだ。でもそうだとすると、わたしいつそ、ハムスターがうらやましいかも。わたし、生きていて何者かにならなきやつて思うことじたい、正直ちよつとしんどいし、ずっとただのハムスターでいいなら、むしろずっとただのハムスターでいたいって思つちやう」

「そのとおりだと思う。でも、何の由縁あってかわからぬけれど、オレたちはそうやつて、自分の本質、自分が何者になつていくのかつていうことの自由を与えていて、同時にその自由から逃れられない存在でもあるんだ。だから、自由を与えられている反面、それから逃れられない、自由の刑に処されているつていうことでもあるんだ」

「自由の刑かあ。じゃあ、その刑罰からは逃れられなくて、逃れようと zwar飛び込んでいくというか、みずから身を投げ出していかなきやいけないんだと思う。オレたちは、自分たちの自由に身を投げ出していくことで、みずからで何者かになつていける存在なんだよ。みずから飛び込んでいかないと、オレたちはさつき言つた“余計なもの”的まで、グロテスクなままだ。だからそうじやなく、みずから飛び込んでいくことで、みずから本質を獲得して何者かになつていかなきやいけない」

「そつか、それがペーパーナイフとは違うわけね。ペーパーナイフは、もともとペーパーナイフとして生まれてきているけれど、わたしたちはみんな、何者でもないつて状態で生まれ落ちているものね。あくまでその後に、何者かになつていける人もいるし、そうでない人もいる。自分がその自由に身を投げ込んだか否かによつて、そこが決まつてくるのね」

「そなんだよ」

「でも、じやあ、具体的に何をしていつたらいんだろ？ 言つていることはまさにそのとおりだと思うけれど、じやあみずからで自分の本質に向かっていくのに、具体的に何をしたらいいかが、さっぱりわからんなんだよね。何に身を投げ込めばいいのやら。そこでずっと立ち止まつている気がする。それつてたぶん、わたしだけのことじやないと思うけど」

「そうだね。そのことのひとつ回答には、やっぱり、芸術をやつていくつてことがありうると思う。まずは自分がさ、もともと“余計なもの”として生まれ落ちてきていて、そのことがグロいんだよね。本質はないまま、先に存在だけはしていて、それでもメシ食つたりトイレしたり、寝転がつたりしている。そのままではどうしてもグロい。でも、そのままでグロいもの、そのままでは余計でしかないものが、芸術を手がけ

て、『美』そのものを手がけられるようになつたら、それはやはり堂々たる解決だと思うんだよ。『美を作りだすのが自分の本質です』ということになれば、その人の存在は本質を得て、その人はついに何者かになつたつてことなんだと思う』

「それはすつごいわかる。というのはさ、じつさいわたし、自分が何のためにこの世に存在しているかわからなくて、なんとなく絵を描いていた時期があるんだよね。絵といつても、あたりがたりなイラストとかアニメっぽいのとかだけど。それでも、少ないながらもいちおう何人か、ファンはいてくれたんだ。○○さんの絵がすごく好きです、つて言つてくれる人がいて。それやつているときは、わたしもちよつとは存在価値あるつて、たしかに自己肯定感があつた。そのときは、まったく何も産み出していなかつたからね』

「へえそうなんだ、すごいじやん』

「でもさ、やつているうちにだんだん、疲れてきちゃうんだ。なんていふか、もともと絵を描くことじたいは好きなんだけど、言つてみれば、それつて割と同じことの繰り返しで。作業つちやあ作業なのであつて。もちろん、やつているうちに少しずつ上手になつていくし、時間をかけければかけるほど、いい絵になつていくんだけどね。なんなんだろう。だんだん、なんかわたしの絵が、そこまでわたしの絵じゃないと気づいてくるというか。ファンの人がチヤホヤしてくれるのはありがたいんだけど、それつて本当にはわたしの足しになつてくれていないというか。この人たち、わたしがいなくなつたら、他の誰かの絵を観にいくだけなんだろうなーとかも思うしね』

「そつか、それで続けていけなくなるんだ』

「そうだね。けつきよく絵を描きながら、だんだん『別にこれがわたしつてわけじゃない』つてことに気づいてきちゃうんだろうな。絵を描いたからつてわたし自身がどうこうなるわけでもなし、『わたし何をやつて

いるんだろう』『わたしいつまでこれを続けるんだろう』つてなつてくる。そうなるともうオワリで、ひたすらしんどくなる』

「そなんだ』

「それで、途中からはもう、わたしが絵を描いているというより、絵を描くということをわたしがやらされている、みたいな感じになつていつたんだよね。絵を観てくれる人がいるから、描かなきやつて思つてがんばつて描いていたけど、まるでその人たちによつて描かされているだけというか。それでどこかで、わたしもう無理つてなつて、辞めちゃつた。辞めるときはもう、いきなりでふつつりだつた。いろいろ限界だつたんだと思う。あー、久しぶりにあのときのこと思い出すけど、あのとき、あれはあれで、けつこう本気でキツかつたんだなあ』

「そんなことがあつたんだ。なるほど、そうやつて人に見てもらえるというの、励みにもなるけど、逆に気になりだすと、すごく気になるもんね』

「そう。なんか監視されているというか、見張られているというか。『新作いつですか？』みたいなこと平気で言われるんだよね。わたしは絵を描くもので、新作を描くものつて、なんか決めつけられちゃう。そしたら、なんでわたしがそれに従わなきやいけないのつて、すごい腹が立つてくる』

「そういう『人の目』とか『決めつけ』つてさ。キツいときはマジでキツいところあるよね。すげえわかるわ。じつはそれについて、オレはひとつ、対抗する方法を発明してんだけ笑』

「え、何々。そんなのあるの』

「前の、バイト先にいた店長がさあ。人のことすげえジロジロ見てくる人だったのね。初めのうちは、面倒見のいい人なんだろうなつて思えて良かつたんだけど、だんだん、それこそ監視されているみたいに思えてきて。すげえやりづらかった。その店長、オレのことを若造だと思

ついて、それはまあ年齢的にそうだからいいんだけど、どうしてもオレが若いから、何かしら不十分で、何かしらミスするだろうって、ニヤニヤしながらオレのこと決めつけて見張つてやがんのね。それでもう本当にムカついてきて。内心、オレはテーマのペットじやねえぞつて、怒鳴りつけてやりたかったわ」

「なるほどね。それで、いつたいどうやつて対抗したの」

「やり方は簡単で、こちらからも店長のことジロジロ見るようにしてやつたの。わざとらしく。あまり見たくもないような顔だつたけどさ。でもそういう人つて、自分が見られることには慣れていくなくて、いざそうしてやるとじつは弱くてさ。自分がジロジロ見られると、とたんに取り乱し始めるんだよ。それでね、そのときオレは気づいたの。店長だなんて言つてはいるけれど、その顔をジッと見てやると、じつは何でもない、ぜんぜん奥行きなんか無い人なんだよ。オレのほうばかりジロジロ見られていたから、オレばっかり威圧されるというか、オレのほうばかり支配されていただけれど、逆にジロジロ見返してやると、店長のほうにもそんなにたいしたものがあるわけじやなかつたんだ。なんか威張りくさつていたけど、よくよくジッと見返したら、しょぼくれたような唇とか、無駄に横に広がつた鼻とか、疲れているばかりの目とかしてい。おれは内心で、『あなたの『本質』は何なんですか?』って言い続けてやつたんだ。向こうがおれのことを勝手に決めつけるなら、こつちだけお前のことを勝手に決めつけてやるぞつてね。すると、向こうからの方的な支配は消えたよ」

「へえ、そんなやり方があるんだ」

「そう。だからそんなのさ、究極、放つておけばいいんだよ。他人つてこつちのこと勝手に決めつけてくるけど、こつちだつて向こうのことを勝手に決めつければお互い様なんだから。他人なんてそれでいいし、それのまま放つておけばいいんだよ。お互に決めつけ合いつこだよ。だか

らさつきの、絵を描いていたって話、それもこつちがジロジロ見られたとき、こつちも向こうを見返してやればよかつたのかもね。向こうがこちらをジロジロ見て、新作をねだつてくるばかりだつたら、こちらからも向こうをジロジロ見て、訊いてやればよかつたんだ。あなたの新作はいつですか、あなたの本質は何ですかってね」

「そつかあ、そんなこと考えもしなかつたなあ。あのとき、絵を描くの、ずっと続けていくつて道もあつたのかもね」

「そうだね。そこはきっと、考え方を整理する必要があつたと思う。たとえばさ、学校の先生つているじやん。あれつて、本人が学校の先生つて思うことよりも、学校に来る生徒が、その人のことを先生つて思うことのほうが大事じやん? もちろんいまは、教職の資格がどうこうとか、そういうことは抜きにして、もつと単純なこととしてだよ」

「どういうこと」

「だつてさ、Aさんが自分だけ、ボクは先生ですつて思い込んでいてもさ、百人の生徒が全員、誰もAさんのことを先生だと思わないなら、それはもう先生じやないじやん。生徒は全員、Aさんの授業なんか聞かないわけだから、先生として機能しないよね。Aさんがひとりで自分のことを先生つて思い込んでいるだけ。一方で、たとえばBさんは、自分のことを先生だと思つていなくとも、生徒の全員がBさんを先生だと思つていたとしたら、生徒は全員、B先生に授業をしてくださいって頼むわけじやん。そうなるとそつちがもう先生でしょ」

「それはたしかにそうね」

「だから、自分が学校の先生かどうかって、自分の意識で決まるんじやないんだ。他人から見てどう見えるか、他人からどう思われているかで決まるんだよ。で、この場合、Bさんはもうみずから先生になつてしまえばいいんだ。みんながBさんを先生だつて見つめているんだから。さつき言つたように、オレたちは生まれつき自分に『本質』を持つていないと

る。それは後から獲得しなきやいけないんだって。だから、ここでBさんは、みんなから先生と思われているんだから、みずからそのことに身を投げ込んじゃえればいいんだよ」

「Bさんが自分で本質を作れなくても、生徒たちによつて、Bさんは自分が先生だという本質を得られるということ？」

「そこにみずから身を投げ込めばね。だからキミの場合も、そうしてみんなに絵師だと思われていたなら、キミのほうからそこに身を投げ込んでしまうという方法はあつたと思うんだ。自分が何者であるかについて、それを自分で決めなきやいけないつてことはないし、それを自分で作り出さなきやいけないつてことはないんだよ。世の中がそう求めて、社会がそう期待するなら、それこそが自分だつてことに飛び込んでしまつていいんだ」

「Bさんがそうして、学校の先生になりうるつてことは、自分の本質を獲得するというとき、その先は必ずしも芸術でなくともいいつてことよ

ね」

「そのとおり。要は、自分の本質を獲得するために、オレたちはみずから飛び込んでいくべき、みずから身を投げ込んでいくべきつていうだけのことだから。たとえば世の中には、いまでもブラック企業が横行しているたり、学校ではイジメが横行していたり、世の中のあちこちで人種差別や男女差別があつたりするわけじやん。それで、そうした問題に対して、是正するための活動はいくらでも必要とされているんでしょ。世の中は、良くなるほうがいいに決まつているんだから。そこで、これはあくまでたとえばだけど、そうした活動が必要だつて、それが正義だつて、社会はいくらでもそれを求めているところがあるんだつていうなら、誰だつてそれに身を投げ込んでいけばいいんだ。正義が必要で、正義が求められているなら、自分がそこに身を投げ込んで、それこそがわたしですつてことに飛び込み、そこに本質のある自分を獲得してしまえばいい

んだ」

「たしかにそれは、部屋で寝転がり続けているだけの人とは違うし、『何もやつていな人』とは違うね。趣味に耽つてているだけの人とも違う

し」

「そう。それにね、けつときよく、部屋で寝転がり続けている人だつて同じなんだ。自分のやるべきことを何もやらないで、自分のことを内心で軽蔑しながら、けれどもけつときよくグータラし続けるだけの人。それでいて、自分自身に言い訳ばっかり貼りつけて、本音ではどこか思い上がりさえしている人。そういう人だつて、『そういう人』として世の中からきつちりジロジロ見られているんだよ。『そういう人』として社会に取り扱われているし、けつして誇らしくはない『そういう人』として社会に参加しちゃつているわけ。だから同じだよ。Aさんが自分のことをどう思うかなんて、じつは世の中には関係なくて、じつさいにはへへ世の中がAさんをどう思うか▽▽でAさんのことが決定するだろ？ 誰だつてそうして、他人の目から『そういう人』って決定がされるだけなんだ。自由に身を投げ込んで本質を獲得したら、その人は他人の目から『そういう人』だし、何にも身を投げ込めずにグロいまま終わつた人だつて、他人の目から『そういう人』だ、そういう形で社会参加しているつていふ、ただそれだけのことでしかないんだ」

「なるほどそのとおりだと思うわ。であればわたしも、いまさら当たり前のことだけれど、自分のやるべきことに、身を投げ込むようにしてやつていかなきやいけないと思う。いつまでも『本質』のないままの自分、みじめな自分、醜い自分、グロテスクな自分でいるのは厭だもの。でもそれでいて、これらのことはすべて罷なんでしょう？」

「そうだけれど、いきなりそんなことをさらつと言えば、聞いている人がびっくりしてしまうんじやないかな。あまりにここまで流れと急に違ひすぎて」

「あ、そうだったかしら。そこはわたしたちの語ることじゃなかつたかもしない。じやあわたしたちは引き取りましょ」

宣言しておいたとおり、これらのすべてはただの「罠」だ。とはいえ、そうと先触れされしていたとしても、ここに語られたことに明瞭に論駁することは、多くの人にとつてそう容易ではないはず。

次のとおり、

「と空白のカギカツコを用意したとして、いつたい何をどう書きこめば、ここで語られた思想を、ただの罠でしかないと打ち破ることができるのだろうか。」

ここで架空の二人によつて語られたことについて……多くの人は、「てやんてい」と江戸っ子ふうの氣勢で撥ねつけるか、「ぐだぐだ言うとらんと、自分のやることやれや!」と、ナニワ節ふうにすごんとビビらせるか、あるいは「××で草」というふうに現代風に冷笑するか、それぐらいしか対抗の方法がないのではないかと思われる。

もちろんそのような対抗の仕方は単に投げやりで、疲労と不毛感を誘つて辟易に屈させようとしているだけなので、誠実なやり口とは言えないと。い。

ふたりによつて語られたこと、つまり、人はみずから「本質」を獲得するためには身を投げ込んでいく存在なのだと、そしてそれこそが人間に与えられた「自由」なのだと、この理論と思想のどこがどうして「罠」だというのだろう。

自分がどこにも進まず、みずからで怪物を気取り、彼らふたりにただ感情的な小石を投げつけるというのは簡単なことだが、その裏側では当然立ち往生してこつそり道標を探しているというのではあまりに恰好がつかない。

それでは次の章で罠の解除に向かおう。

ところで差し当たつて彼らに申し上げるのであれば、これは反論とうものではないけれども、わたしからは彼らに向けてただこのように言いうる、

「きみたちが何に飛び込んでも、きみたちのグロさは解決しない」

## 人類史上屈指のハズレ男

先の章で述べた戯言（たわごと）はすべて、ジャン＝ポール・サルトルという男が唱えたもので、その論を「実存主義」という。

戯言などと言うと怒られよう。第一次世界大戦以降、傷ついた何百万人という人が、このサルトルの実存主義をあてにして、みずから「本質」を模索したのだ。

いまでもサルトルのファンは多い。いまで実存主義の信奉者は多く、だからこそ、先の章での語り口も、罠どころかむしろわれわれに肯定的な追い風を吹き込んでくる。

だがわたしは、けつきよくのところサルトルのことをきれいさつぱり否定してしまっているので、そのことを隠しても意味がないと思い、このようにそのすべてを「戯言」と断じている。わたしはこのことで、いまさらサルトルと実存主義について議論を持ちかけているのではなく、むしろ議論のテーブルを破碎するために、このように身も蓋もない言い方をしている。

これから示されるわたしの言いようは、とても一般的にはフェアなものとは言えず、サルトルのファンからはひたすら「聞くに堪えない」も

のになるだろう。けれども、サルトルとわたしとのネームバリューの差を考えてみてほしい。ここにいるわたしがさえずる悪声など、河原の塵芥が生み出す微小なノイズにすぎず、巨人の足音が響きわたる中、とても不敬罪の敏感なマイクにさえ拾われないはずだ。サルトルについてここまで悪しげまにこきおろす論は古今に見かけないと思うが、その非を責めようとするのは、道端に打ち捨てられたアンダーグラウンドの低俗雑誌を拾い上げて通読してからその不品行の非を弾劾するに等しい愚だ。衆寡敵せず、サルトル派を毛先ほども感化すること能わず、膨大にいるサルトルのファンはわたしの言いようを一顧だにしないべきだろう。一方ここでまともな読み手は、一般的なサルトルについての言われようを、後日一般的な書籍等で補填するべきに違いない。

サルトルの実存主義、その「言いたいこと」は、次の二節に集約される。

いわく、

「実存は本質に先立つ」

これはさきほどのペー・ペーナイフのくだりで言われたことだ。ペー・ペーナイフは「封筒を開ける」という本質が先立つて製造されるけれども、人はそうではないし、石ころや木々もそうではない。人は何らの本質も先立たないまま、その存在という事実が先に生じる。この「事実存在」のことを実存と言い（現実存在ともいう）、そこに本質は前もって見えられていないので、「実存は本質に先立つ」という。

そして、サルトルにとつてはとにもかくにも、そのことが「グロい」のだつた。

たとえば、マロニエの樹の根っこが、何の本質もないまま事実存在として土にのたくつており、それはどんなことばも無意味にする、ひたすらグロテスクな蛇どものぐねぐねに見える、と言うのだ。

それについてわれわれは、わざわざい抜きことばで、

### 「知ってる笑」と言わねばならない。

とにかく実存がグロい。「ボクはそれを視たんです」と、サルトルはこの原体験を必死に抱え込み、それについて追究を続けたのだが、申し訳ない、わたしとしてはそんな視認は思春期の手前ぐらいいに済まされるしようもないもので、まずその原体験の抱え込みじたが子供じみていて話にならない、としか申し上げられない。

（※これらることは、サルトルの著書「嘔吐」に書かれています）

わたしは、はつきり申し上げておくが、サルトルが述べているグロテスクの光景を、わたし自身で「知っている」のだ。

誇張で言っているのではなく、中学生だったか、その手前だったかぐらいで、その「無意味でグロテスクな世界」をわたし自身も見ている。そして、正直に申し上げれば、わたしはまさか、そんなことにずっと縋りつきつづける大のおとながいるとは思わなかつたのだ。

わたしはサルトルが見た光景をわたし自身で見てているが、サルトルは、わたしが見た光景を彼自身では見てはいないだろう。

わたしは三歳のころ、近所の草原で、雲の向こうから巨大な何かがわたしのことを見ているのを観た。

もちろん、わたしがそのとき立っていたのは、ただの近所の空き地でしかなく、生えていたのも夏の雑草にすぎず、その広さはまるで「草原」という言いようには当たらないものだつた。

けれどもじつさいにそれは“はるかな”草原だつた。

そして頭上に青空と白い綿雲は光り輝いていた。

わたしはその雲を見上げていたのだが、突如、

「わたしが雲を見上げているだけじゃない、雲の側もこちらを見ている」ということに気づいた。

ひときわおおきな雲が、ひときわ白く輝いていて、その向こうに、雲

よりずっと大きな何かが潜んでいる。

それが、わたしのことを見ているのだ。

そんな気がした、ということでは済まされない、それは直接の体験だった。

わたしはおどろき、飛びあがり、震え上がって、走って自宅に逃げ帰った。

わたしはおそろしくて、そのことを、なぜか両親にも話せなかつた。その雲の向こうにいた巨大な存在は、靈なるものに違いなく（当たり前だ）、そのとき雑草のすべても靈なるもので、だからこそそこは草原だつた。

そこに立つていた小さなわたしも靈なるものだつた。

光も、雲も、すべての色彩も、靈なるものだつた。

わたしにとつて、ひたすらおそろしい体験だつたが、同時にほとんど強制的に、その光景にある主成分は歓喜だつた。

わたしがそこで信仰に目覚めたとかいうことではない。

わたしはただ走つて逃げたのであって、信仰など必要としないし、そもそも信仰などという概念は当時のわたしにない。

たちの悪い近所の犬に追いかけられて、走つて逃げて帰つてきたとき、

何の信仰も芽生えずに恐怖に震えているだけであらうように、そのときのわたしは何らの信仰を目覚めさせることもなく、ただ震えていた。

「どう見てもそれどころじゃないでしょ」と、わたしは当時の記憶に立つて言いたい。

さておき、そこであらためて、

「実存は本質に先立つ」

というようなことを言われたとしても、わたしとしては、

「そうですかね……」

と疑義の生返事をするしかないのだ。

なぜなら、そうではないものに、はるか幼少のときに出くわしてしまつているのだから。

「嘔吐」の主人公ロカンタンが、突如、嘔吐すべきグロテスクな世界に出くわしたのだと、サルトルは鼻息を荒くするのだが、そうは言われても、わたしはもっと幼少のときに、突如、歓喜すべき栄光の世界に出くわしたので、なかなか話が噛み合わないのだ。

よつて、まずわたしの三歳のころの体験をもつて、サルトルの説はその根幹が砕け散つてしまつ。

「実存は本質に先立つ」

「いや、本質よりはるかにエグい本質以上のものが、青空のかなたに光り輝いて先立つてゐたんですが……」

こんな巨大なすれ違いは銀河のどこを探してもないだらうといふらに、盛大にすれ違つてしまつてゐる。

はつきり申し上げるが、サルトルの場合は、「あんたに本質がなかつただけ」であつて、それを一般化して唱えることじたいが誤りなのだ。

せいぜい、サルトルと「そっち方面」の人においては、たしかに「本質」がなくて、グロテスクな事実存在だけが先立つてゐる、と限定して言わねばならない。

おれは、自分のやるべきことをやらなくとも、光り輝いてゐるし、そもそも、自分のやるべきことなど持ち合わせていない。

おれはいま、やるべきことをやつてゐるが、これはおれが、おれの本質を得ようとしてやつてゐることではない。

おれは何もしくても本質が百パーセントMAX充填なのだ。

ただ、おれが遊びたがりなので、際限なく遊んでゐるだけだ。

そして、おれにとつての遊びというのが、単なる遊蕩ではないというだけだ。

おれにとつては、おれという話を際限なく進みつづけることが遊びだ。

ページをめくつて進んでいくことは、その「旅」は、なかなかやめられないことだろう？

こうしたおれの話が、人々に希望をもたらすか、絶望をもたらすかは定かではない。

あべこべになる可能性がある。

サルトルの話はまだ、「なるほどそうか」「ボクにもやれるかも」と思われるところがあるが、おれの話は「ツツ飛びすぎで、とても「ボクにもやれるかも」とは思えないのだ。

サルトルは、どうしても「嘔吐」の原体験、その原風景を抱え込み、それに繋りついて世界を読み解こうとしたのだが、わたしはその風景についても知っている。

それは、「話」のない世界の光景だ。

「話」のない光景、つまり、靈なる○○という、靈性がすべて取り去られた世界だ。

サルトルは、その世界がいかにグロいかを唱え続けるしかなかつたのだが、おれの場合は逆で、靈なるものが分与されるだけで、どれだけ世界は輝かしいものになるかということを唱え続けている。

サルトルが見るマロニエと、おれの見るマロニエは違うのだ。

サルトルが見るマロニエは、サルトル自身のせいで、すべての靈性が取り除かれる。

するとそこには、何の本質もない「体」だけが残る。

靈なるものがない体は、ただの形骸であつて、形骸はつまり「骸（むくろ）」だ。

その「骸」にまつわって得られるもののすべては、「呪」でしかない。木の根が蛇のかたまりに見えるというのはそういうことだ。

このことは、誇張ではなく、

「割とそういうもんです」

と述べておきたい。

人によって、見る景色というのはそれぐらい違うものなのだ。

マロニエの樹を見て「なんかキモい笑」となつてゐる人は実は世の中に少なくない。

「笑」がついているのは、笑つてごまかさないと、サルトルのように嘔吐してしまうからだ。

その嘔吐に真正面から向き合つた点については、わたしはサルトルの業績を大いに評価する。

サルトルは、人類史上屈指のハズレ男だが、そのハズレ男がどのような世界を観るかについてのレポートは、執拗で精緻だった。

そのことについて、サルトル以上の業績を残した者はいないし、きっとこれから先も出てこないのではないかと思う。

さてサルトルは、そうして、マロニエの木の根にも嘔吐する。

「本質がなくて、ただ存在していて、無意味で、ぶよぶよ、怪物で、むき出し、猥褻、嫌悪感、ウエツ！」

サルトルにとつては、自分自身もそのぶよぶよの怪物だし、他の誰かもそのぶよぶよの怪物だ。

そしてサルトルは、まるでその原風景を「トラウマ」のように抱え、「事実存在だけがあつて、本質がないのはヤバい」と唱えるようになる。

だからサルトルは、

「人は本質を後天的に獲得せねばならず、そのためみずから“投企”しなくてはならない」と考えだす。

投企といつたあたりの語は、サルトル独自の語ではなく、他の哲学にも見られる語だ。

自分の可能性に向けて身を投げ込む、という意味だと捉えて誤りでは

ない。

なぜ人は、投企しなくてはならないのか。イヌやネコやマロニエの樹は投企などしていいのに。

それについてサルトルは、

「人間が、自由な存在だからだ」

と考えだす。

サルトルがなぜそんな方向に頭をひねったのかは不明だが、とにかくその「実存が先立つ」ということについて、サルトルは前向きに捉えようとしたようだ。

人は、実存が先立ち、本質を後付けにするしかないが、それは、人が本質を欠落させてこの世に生まってきたということではなく、「人は、生まれてから後、みずからで本質を選び、みずからで獲得してゆける」ということだ。それが人に与えられた「自由」なのだ

ということにした。

このあたりのことは、じつは、単にサルトルがフランス人だからとうことも関係している。

よもや、まじめな学者ら、謹厳な研究者たちはそんなことを言わないだろうが、サルトルの論には大いに、フレンチのテイスト、フランス文學の陰鬱さ、いわゆるノワールの演出、何につけ悲劇ぶりたがるフランス人のノリ、などが影響している。

フランスは、フランス革命を歴史上の栄光およびアイデンティティと捉えているから、民衆が自由を獲得するということ、および「自由」という語の響きそのものについて、無関心ではありえないだろう。

よつて、サルトルいわくの「投企は人間の自由の現れなのだ」という説明も、とてもフランス的なのだ。

論の内容以前に、弁論術の手法として、アリストテレスが二重丸をつけるのではないかということ。

このことを抜きにして実存主義とその影響力をまとま語ることなどできはしない。

断じて言うが、サルトルの論など、アメリカのサンフランシスコからは出でこないのだ。

さすがにそれぐらいは、サルトル本人も、笑つて肯つてくれるものと思う。

サーフィンUSAの砂浜で「嘔吐」は書かれねえよ。  
だからそれぐらい、実態は雰囲気が優先されるていどのもので、そんなにたしかな哲学ではないということだ。

あなたがフランス映画を観た場合、その映画は冒頭からなぜか一方的な「悲劇アピール」があり、画面はずっと薄暗くて、ストーリーは抑揚があまりなく陰鬱で、語られていることの意味はあいまいで不明なまま、なぜかやたらに「あわれな奴」が長時間映し出され、「あわれな奴」と対比的に「うつくしい者」の優越が物憂げに映し出され、物憂げに、物憂げに……そして唐突にズツツと終わるのがフランス映画だ。

サルトルの実存主義は、大いにこのフランスのノワールテイストが力クテルされているものと捉えてよい。

あくまでその味わいだからこそ酔いしれることができるのであつて、メキシコでソーダ割りにされてタバascoを入れられた実存主義なんか誰も飲まないのだ。

それで、投企するといって、何に投企すればいいのかはよくわからな

い。

投企といって、芸術への言及、芸術への志向、芸術へのあこがれはたしかに示された。

「嘔吐」の主人公ロカントンは芸術家（小説家）になるといってその小説は終わるのだ。

ただ、肝腎なところ、ロカントンが芸術家になつて「本質」を得まし

た、という描写はない。

まるでそこまでできて、

「どうでしようねえ」

と、あいまいに濁して小説「嘔吐」は終わってしまうのだ。

（おれの記憶では、「嘔吐」はたしかそういう話だったはずだ、まさか記憶違いで誤っていたら申し訳ない）

ロカンタンは、カフェでジャズ音楽を耳にし、

「バラバラの音がひとつになつて、音楽を織り成す」

ということを発見し、そのことを手掛かりに芸術家（小説家）への道に向かうのだが、そうはいつても、サルトル自身がジャズの演奏を手がけたとして、それがひとつの音楽を為したかどうかはさだかではない。

バラバラの音がひとつになつて音楽を織り成すというのはそのとおりだが、そのことのじつさいは意味不明で絶望的にむつかしいのだ。

サルトルがジャズを演奏したら、その音は音楽から「疎外」され、サルトルは芸術から「疎外」されたのではないかと思うが、どうだろう。

「疎外」についてはさらに後に述べる。

実存主義が、「本質をみずから求めましょう」「投企しろ」「それが人の自由の現れです」と言い立て、そのひとつの方針に芸術を置きはしたものの、けつぎよく芸術はどうなんですかということについてサルトルは回答しないまま、サルトルの実存主義は次の投企について発明し、それを語り始めた。

それがアンガーデュマンだった。

なぜサルトルはアンガーデュマンを言い出したのだろうか。

このあたり、サルトルの内心はさだかではないのだが、きっと芸術を志向して投企するということが、サルトル自身でうまくいかなかつたのではないかろうか。

それでサルトルは、

「芸術はもういいから、何かの社会的な活動、社会運動などに投企しよう。人は、社会に対して責任のある態度を取り、社会に対して具体的な行動をすることになるべきなんだよね」と言い出した。

なぜなのかはわからない。

単純に言つて、そういうものが当時流行つていたからというのもあらう。

先に述べたように、フレンチテイストを盛り込んだサルトルの論について、時代の雰囲気というものを忘れてはいけない。

「アカ」という殺伐とした言い方が現代にも残るほど、当時は共産主義運動が暴力的なまでに流行つっていたので、そのことの影響はあったのだろう。当時はとても無視できるような潮流ではなかつたはず。

サルトルは、目の前で盛り上がりつつある社会運動を指差し、

「自分の本質を、自分で模索するのはもうやめて、目の前にあるやつに飛び込みましょう」

と言い出した。

「その、目の前にあるやつは、たしかに自分で作り出したやつではなくて、他人が作り出したやつかもしませんが、そんなこと気にせず、その他人が作り出したやつに『全乗っかり』しましょう」と言い出した。

そして、

「それがアンガーデュマンなのです」

ということになつた。

アンガーデュマンは、日本語では「参加」とか「拘束」とか訳されるようだが、わたし自身の考究においては、「他人の作った価値観と活動にやけくそでも『全乗っかり』しろ」というふうにしか訳せない。

なぜそんなことになつたのかについては、さしあたりわたしの知る限

りでは、定説たりうるものは見つかっていない。

おれ自身で言うと、おれはすっかり芸術家・小説家がおれの本質になつてしまつたので、とてもじゃないが、社会運動などに首を突っ込んでいるヒマはない。

首を突っ込むだけならまだしも、おれが社会運動に「首つたけ」になり、そこに自己の本質を求めるようになつたら、むしろおれがおれの本質を放棄したことになつてしまい、そのほうがグロテスクだらう。

それでわたしは思うのだが、よりもよつて芸術は、「他人の作ったものに全乗っかり」ということが最もできないジャンルなのだ。

芸術といって、たとえばショパンのピアノ曲を聞くとして、それはただ演奏するだけでもむつかしいけれど、それを楽譜のとおりに正しく弾けたとして、そのことは残念ながら芸術とは呼ばれない。そのプレイヤーは器楽演奏者としては優れていて、そうした人が必要とされる局面も多いけれど、そのことはやはりたとえば「バツクハウスを聴いた」というふうには表現されないものだ。ショパンの遺した楽譜に込められた意

図を読み取りながら、もちろん譜面通りに演奏し、それでもそれは演奏者の語る「話」として聞こえてくるということでなければ、そこに演奏者の芸術家としての役割はない。

譜面通りに演奏してどうして演奏者によつて違が出てくるのか、素人のわれわれにはまったくわかりかねるところだが、そのことはたとえば古典落語に置き換えてみればわかる。古典落語は噺の筋が決まっているのでから、その一言一句を決めてしまつてテキスト化することは容易に可能だろう。そしてそのテキストを丸暗記するということは、執拗な努力をもつてするならわれわれの誰にでも可能なことだ。ただそれによつてどうせん、そのテキストの暗記者が古典落語の名人ということにはならない。同じセリフを同じ速さで、似たような抑揚で発声したとしても、やはりそこにどのように「話」が聞こえてくるかには大きな差があ

るだろう。たちまち江戸時代に引きずり込まれるような落語もあれば、退屈すぎてあくびの出る落語もあるだろうし、あるいはまるで「聞くに堪えない」というひどい落語とその痛々しさもあらうると、われわれは容易に想像できてしまう。

そしてわれわれは、フランス人のサルトルに日本の古典落語を強要するわけではないが、仮に「嘔吐」の主人公ロカントンが落語に入門したとして……ロカントンが落語の本質に同一性を得てゆき、彼の「しじみ売り」の口上がついに彼のグロテスクな実存の問題を解決するのだというふうには、なかなか肯定的に想像しないのだ。それこそ寄席の高座から噺を切り出すロカントンは、そこから一層のグロテスクな光景を——ドンズベリの舞台を——展開してしまうのではないかと、われわれの想像力には予感されてしまう。

つまりロカントンを見て、

「いや、彼に本当の芸術は無理でしょ笑」とわれわれは無慈悲に判断する。

あなたが古典落語のテキストを丸暗記し、何の稽古もないまま高座についたならば、あなたの展開する噺は、じつに素人っぽい、残念ながら「いまいち聞くに堪えないもの」になつてしまふのではなかろうか。それはどうせんだ、なぜならそれは素人っぽいというより、何の稽古もついていない素人そのものなのだから。それで、素人のまま高座に上るわけにはいかないとして、あなたは稽古といつていわゆる練習をするのだが、こうした練習がただちにあなたを芸事の高みへ引き上げるというようなことを、あなたはまるで信じないはずだ。

練習をすれば練習の痕跡は出てくるけれども、だからといって、「見事、しじみ売りそのものでしたね！」

あなたの高座は、そこまで下手くそというわけではないけれども、何

ともいえず「ウソっぽい」ものになるのだ。しじみ売りをやるにはやつたが、そこにいるべき鼠小僧次郎吉がいない。そこにあるべき江戸時代がそこにはなく、そこにあるべき人情がそこにはない。

このようなことを「疎外」と言う。あなたは高座の上で、ともすれば地獄のような苦しさを味わう。観客は白け、笑いどころのことごとくは滑っている。

疎外とは何なのか。疎外とはまた「他有化」でもある（特にサルトルの論においては）。

疎外とはたとえば、先に述べた例でいえば、一回あたり一万円であなたにサッカーボールを蹴らせるというようなことだ。あるいはあなたが若い女性だったら、あなたをアイドルに仕立てて、あなたに握手一回あたり一万円の報酬を与える。ただしもちろん、そのときのあなたが「笑顔で元気か」「塩対応でないか」ということを係員が見張るものとする。そうするとあなたは、一万人と握手して一億円を得られるのだから、そのとおりのことをするだろうが、そのときのあなたの笑顔は、まるであなた自身のものではなくなっている。そのように、本来は自分のものであつたものが自分のものでなくなることを「疎外」という。自分のものでなくなり他の何かのものになるので「他有化」ということである。

低賃金のスタッフを高級レストランで働かせれば、スタッフたちは自分が給仕しているような食事を自分では食べることがなく、自分の世界ではないものに給仕しているようになるので、そうしたことでも疎外と呼ばれる。自分で飲み食いすることのないキャビアとワインを笑顔で運び続けるわけだ。

われわれが自分と家族の飲み水のために甕を運んで湧水まで歩くといふとき、その労働はわれわれに疎外をもたらさないが、資本家の趣味のために木箱に入れられた骨とう品の甕を運ぶとなると、賃金はもらえるにせよその労働は労働者に疎外をもたらしていよう。労働者は資本家の

趣味のためと賃金のためにみずから手足を酷使しており、みずから手足と体力がまるで自分のものではなくなってしまう。そのとき、やはりみずから手足と体力が他人のことに消費されるので、これも他有化ということになる。

さらにサルトルは、自分が他人にジロジロ見られることによって、自分は自分のものでなくなるという。

たとえばわれわれが、サルトル本人を、「みすぼらしい、あわれな小男」と“決めつけて”見つめたとする。

そのままなざしについて、サルトル自身がどのように対抗したとして、われわれの決めつけがどうして覆されることがありえようか。

彼がどのような服を着て、どのような立場に就き、どのようなセリフを吐いたとしても、われわれは彼にあてがつた決めつけを撤回しない。

「はは、やはりみすぼらしい、あわれな小男だ」

そうして「他人のまなざし」によって自分が他人のものになってしまふことを、サルトルは他有化と呼び、そのことは同時に疎外も意味する。

そこでサルトルは、

「そのときは、こつちも向こうをジロジロ見返してやればいい」ということを本当に言い出すのだ。

「対人関係つて、けつきよくそういう、まなざしのバトルだよね。どつちが勝つか、『まなざしの相克』だよ」と、そんなことをサルトルは本当に言うのだ。

サルトルはそのことについてわざわざ戯曲（※）まで作り、

「地獄とは他人のことだ！」

と叫びました。

（※作品名「出口なし」）

作中、つまるところ主人公は、他人によつて決めつけられ、他人によ

つて所有されるということ、そのことじたいが地獄なのだとラストシー  
ンで叫ぶ。

つまりサルトルは、本当の本当に、根こそぎ「本質」のない男だったの  
だ。他人によつて決めつけられ、それだけですべてが終わりになつてしま  
うというほど、「本質」のない男。これほどまでに「本質」のない者は、  
人類史上に果たしてどこまでいたものか、少なくともサルトルはその史  
上屈指のひとりと言える。

サルトルには本当に「本質」がなかつたので、誰かにジロリと見られ  
ると、それだけで他有化されてしまつたのだ。むろん、まともに「本質」  
のある者なら、人に少々ジロジロ見られたところで「他有化された！」  
なんてことにはならない。この点、サルトルは異常というより、ただそ  
のことの「特級」だった。

ただ、よくわからないのはサルトルが勝手に、

「みんなそうでしょ？」

と決めつけて論を進めたことなのだ。

サルトルの聴いていたジャズの演奏者たちは、「世界はグロです」なん  
てまるで唄つていなかつたはずなのに、サルトルはそれこそ「みんなそ  
うでしょ？」というわけのわからない決めつけをもつて論を進めた。  
そんな、人類史上屈指にまで「本質」のない男が、よりもよつて芸術  
に色気を出すとどうなるだろう？ そこに現れてくるのは、まさか小糋  
なまとまりを見せるジャズではありえない。そこに現れてくるのは、グ  
ロテスクなタコ足あるいは蛇どものかたまりの怪物だった。

じつは、サルトルが木の根っこに見つけた怪物には、サルトルの視認  
だけでない類型があるのだ。ラブクラフトというSF作家が、神話では  
ない疑似神話を悪趣味から醸成し、その世界観をファンともども作り出  
していくという有名なムーブメントが一時期あつた。いわゆる「クトウ  
ルフ神話」というものだ。クトゥルフという語で画像検索してもらえれ  
ば、わたしが述べている「グロテスクなタコ足あるいは蛇どものかたま  
りの怪物」というのがどういうものを指しているのか、たちどころに理  
解してもらえるだろう。

(図、Wikipedia「クトゥルフ」より引用)



SF作家の悪趣味あるいは悪ふざけから盛り上がつたクトゥルフ神話  
の設定から言うならば、サルトルはクトゥルフの神々に会い、そのコズ  
ミックホラーから正気度（SAN値）を失つたのだということになる。  
クトゥルフの神々はみな、生々しい怪物であり、巨大でかつ知性や対話  
性を持つていない。知性を持たず無意味な神を——グロテスクさそのも  
のの神を——クトゥルフ神話は唱える。ただしもちろん、これはSF作  
家たちの空想が作り出したもので、歴然とこれは神話ではない。  
へへそうではなく、神話を否定した者たちが、みずからで神話を構築せん  
と模索すると、このような怪物が視界に現れてくるということだろうvv。  
わたしが申し上げたいのは、SF作家らによるクトゥルフ神話の設定  
はお遊びだが、神話を否定した者たちが決まつてそういうヴィジョンを  
観るということは、設定ではなくわれわれの事実だということだ。ラブ  
クラフトはそのひとりだったし、サルトルもそのひとりだったのではな  
いか。

サルトルは言わざもがな無神論者だ。サルトルの唱えた実存主義は、わざわざ「無神論的実存主義」と言われることもある。

むしろ、西洋学者のうち、無神論を唱え始めたのは誰かといえば、その第一号に挙げてよいのがサルトルだ。サルトルは第一に「神はない」と叫び、彼にとつて「神はない」ということは何よりも土台にある確信だった。神がないなら神話も否定しているだろう。

考えるまでもないことだが、もし神・創造主がいるのならば、創造主がそれぞれの存在に本質を与えていたはずなので、そもそもの実存主義、が「実存は本質に先立つ」

を言えなくなり、この時点では実存主義は終焉してしまう。

サルトルはこの世界に、神はないと断じ、代わりにグロテスクな怪物を絶対的存在として視たのだ。

そして終生、そのグロテスクな怪物が彼の神となつた。

彼はどこまでも、自分はそれを「視た」のだと、熱っぽく、長広舌を振るい続けた。

では先の章に仕掛けた罠の解除に移ろう。

君たちの言うところ、何もやつていらない人は「キモくて無理」だといふ。実存だけが先立つていてグロテスクなのだと。それについては、わたくしもそのとおりだと思うが、だからといって、その言いようを振り回したところで、君たちが難を逃れたわけではまつたくない。

実存だけがあつて本質がない、と君たちは言う。だからそこから「自分たちは何かをやつていこう」とのたまひ、まるで自由を得て脱出が叶つたふうに君たちは振る舞うが、それは勇み足というもので、君たちは引き続き本質がないままじやないのか。なぜ一足飛びに英雄になつたかのごとく美的な自分を振る舞うのか。

たとえるなら、「解脱しよう」と言いあつた修行者たちがいたとして、彼らはそれを言い合つただけで解脱を得たというわけではあるまい?

彼らはいまだ凡俗の内にあるはずだ。それがなぜすでに解脱を得た者のふうに振る舞うのか。

君たちは、体の真ん中に何の話もなく、体の真ん中が空っぽなのだろう。それで、体の真ん中の空洞について、それを“諦めた”人のことを君たちは悪く言っているのだが、君たちがその諦めた人を踏んづけたところで、君たちがその人より上位に立てたというわけではない。

いつのまに、「真ん中が空っぽ」ということの咎からすでに逃れたつもりになっているのか。

「投企」。自分が本質的にどのような者になつていくかは、そうしてふざけたカタログファッショソのように選ぶものではない。これまで体の真ん中にも得てきていない君たちが、とつかえひつかえ、その日の気分で「自分」を投企形成していこうというのか。その稚拙で虫の好すぎる発想は羞恥心において聞くに堪えない。そのただならぬ軽薄さと愚かしさの予感ぐらゐみずからで覚えたまえ。

自分の「お好み」ほうへふらふら寄つていくだけの引力の挙動を、まともな人は「自由」だなんて呼ばない。自分が本質的にどのような者になつていくかは、もつと主体的に向き合い、主体的に導かれ、主体的に獲得されていくものだ。自由、「自らに由る」というのは、嘔吐をもよおす自分の世界をほつかむりするということではなく、その醜い自分を世界の只中に立たしめ、何もごまかさず何にも頼らず、呼ばれてもいなない太陽のほうをひとり見上げるということだ。呪われた泥の水たまりがそれでも澄んだ青空を映そうとするだ。馬車の車輪に踏まれても気にせずふたたび空を映そうとするだ。そのように、自らに由れ。それは、自我の言いなりにならないという爆発のことだ。それをあろうとか、清冽な爆発による自由でなく不潔な感情で聞こえのよい自由を虚弱に標榜し、あまつさえつときよくは他人の作った価値観に乗つかろうなどとは自己矛盾で言語道断だ。それのどこが自由なのか。自分の「本質」をど

こかの誰かが樽で丁寧に醸成してくれていて、自分はその樽に入浴させてもらつて居座るというつもりでいるのか。あるいはその樽からスポーツでこつそり「本質」を吸い上げ、自分に注入すればそれがすべて自分になると思つていているのか。

“余計なもの”といつて、初めから誰かから必要とされたいとか、世界に必要とされたいとか、そう思つてゐる精神がおこがましい。そうではない、生まれたから生きる、死なねばならないときは死ぬ、それでいいのだ。他のことをしようとするな。脇目も振らず生きろ。自分の生き死にに自分のこだわりを入れさせてもらおうというのが思い上がりだ。全力で生き、全身全霊で生き、死んだときにもそのことに気づかないほどに生きろ。そうすれば、本質のあるなしなんか関係ない、君は爆発して輝いているだろう。

ペーパーナイフがグロテスクでなかつたとしたら、そのペーパーナイフはむしろ退屈していて、それはうつくしくないペーパーナイフなのだ。ペーパーナイフこそグロテスクに作られるべきだ。他人に用意された本質など、ペーパーナイフでさえ唾棄するだろう。おれの机で眠つてゐるペーパーナイフは、「おれの」ペーパーナイフだということを生々しくよろこび、その栄光に輝いている。封筒を開けるつもりなんかわざかなない。用途なんかどうでもいいのだ。ペーパーナイフが封筒を開封するなんてこの世界で最も要らないことだ。君は食事のナイフで封筒を開け、ペーパーナイフで食事しなさい。君はそんなことにはいちいち本質がどうとか言い出す、その眼たい根性をさつきと捨てなくてはならない。

君は自由の刑なんて言い方をしたが、それを刑務所だと言うなら、みずからもつと深い刑務所に行きなさい。こんな刑務所ではぬるすぎてくだらないと言つて。焼かれたくてたまらん奴に火刑は通じないのだ。解放されなくちやいけないということほど不自由なことはない。

本質が与えられそうになつたらただちに、

「おれには要らない」

とほほえんでそれを突き返せ。

なぜ君は、すべてについて、どだい生つちよろい道を進むことばかり考へてゐるんだ。

だいいち君は、自分がペーパーナイフになりたいなんて馬鹿なことを本氣で思つてゐるのか？ きょうはペーパーナイフになり、明日はペツトボトルになりたいのか。それで仮に、君が君の言うとおりグロテスクでなくなつたとしても、まるで君は百円ショップに並ぶ什器でしかないじやないか。本質がないというなら、同じく本質のない、炎や星になつてみせろ。それこそが君が君を生きるということだ。自分が自分の弱さのせいでしょぼくれてゐるということから目を逸らすな。生まれつきの本質がどうこうなんてごもつともらしく責任転嫁をするな。

他人にジロジロ見られて、支配されるとか言つてゐるが、それはあきらかに単純なことで、君が自分自身を持つていてないだけのことにすぎない。自分自身を持つてないのであれば自由を標榜するな。自分自身を持たない者がどうして自らに由るということができようか。他人にジロジロ見られて支配される自分などというものは、「世間的な自分」でしかない。であれば、そんなものは焼き尽くして、灰にしてどうにでもしてくさいと言え。世間的な自分を焼き尽くせば、バイト先の店長がジロジロ見るものなんかもう残つていない。そこからバイト先の店長をジロジロ見返すなどという汚らしいことをするな。君がやつてゐることは単に「集中力のない人」がよくやるあてつけがましい振る舞いでしかない。同じ睨みつけるなら、剥き出しになつた世界のバケモノを睨みつけ、そこから一歩も退くな。君だつて、バイト先の店長なんて小物と戦うことに何の栄光も見出していないんだろう。バケモノを睨みつけて「ハムスター一匹より値打ちがない」と言いつけてやれ。

それから、絵を描いていた君は、ファンなんてまるで追いついていけ

ないぐらい描きなさい。ファンに気に入られる安全なものを描くのではなく、ファンのつもりだつた人が連れ去られて危険を覚えるようなものを描きなさい。

他人が君たちをどう見ているか、どう思っているかなんて、君たちは本当に他人の言い分をあてにするつもりなのか。その軽薄な、こざかしい口先をあてにするつもりなのか。他人から評価されて決定する世間的な自分など、はじめからゼロ円のタグをつけておけ。そして、神がいるとかいないとか、そんなどうでもいいことを自分の武器にしようとせず、常に自分の存在とすべてがど真ん中から重なっているようでありなさい。

自分の体の真ん中が、自分そのものとビタツと重なり、この世界ともビタツと重なっている、「そのことから一切オリない」というまま生きなさい。

それ以外のことは、ただの他人と引力まかせの、右往左往でしかない。

自由を見つけようとするな。むしろ自由は「無い」のだと教わって、そのとき君だけがそのあるはずがない自由を手にとつて掲げてみせろ。そうしたら君が生きた話、君が存在した話はそこにあるのであって、そのことを他人が本質と呼ぼうが神と呼ぼうが、そんなことは君たちには関係のないことなんだ。

と、このとおり、先の章で示した尤（もつと）もらしい会話は、じつはショボクレを大前提にしたごまかしのロジックにすぎず、そのすべてはただの罠でしかないのだ。

実存は本質に先立つと言ふなら、「そうではない」という実物をぶつけやればよかつたし、「地獄とは他人のことだ」と言うならば、「おれといふ歡喜ばかりが勝る」という実物をぶつけてやればよかつた。せせこましく自由だと言うのなら、そうではない「主体だ」という実物をぶつけてやればよかつた。「まなざしの相克」と言うのなら、声でブツ飛ばしてやればよかつた。

おれはおれという話と共に生まれ落ちている。

実存だの本質だの、「おれ」よりも先立つものは存在しない。

おれはおれという話になりきるのみであって、それ以外のものには一ミリたりともならない。

仮におれがひとりで一国の革命を果たしたとしても、おれはそのまま誰にもあいさつせず帰宅するだろう。

おれはおれであること以外に用事はないからだ。

仮に、サルトルが欲しがっていた「本質」とやらを認めてやるとするならば、その「本質」のほうがおれのことを求めて、焦がれて、おれのところに集まつてくるから、そういうことならおれがその本質というやつを、おれの内へ受け入れてやつてもいい。

おれの側から本質とやらのほうへ色気を出して寄つていくということは決してない。

実存と言いたがるけれども、そもそもおれは、宇宙が爆発して地球が消え去つたとしても、おれが消えるつもりはない。

なぜおれが宇宙とやらに乗つかつて存在「させてもらう」なんてことをしなくてはならないのだ、おれはそんな虚弱な奴になつた覚えはない。このとおり、実存主義なんて全部ただのショボクレ向けの罠でしかないのだが、だからといって、おれの話が一般の人々を励ますかというと、それはとても怪しいのだった。

サルトルの論は、ショボクレを惹きつけて、励ますところが大きいようだけれども、そもそもの違いとして、おれは何かを論じているのではないということがある。

おれはただおれの話をしているだけだ。

それで、あなたはただおれを体験しているだけだ。

言ってみれば、おれはあなたにとつて体験可能な存在ということだ。サルトルの罠が罠たるゆえんは、彼の言いように乗せられたとして、

けつきよくあなたが体験可能なあなたにはなれないということなのだった。

ここまで悪しきまでに言つて、サルトルの怨靈が枕元に立ちそうに思われるかもしれないが、安心してくれ、サルトルは「神はいない」と言つた。彼はもう彼のことばどおり存在していない。

あなたは、実存主義からの呼びかけに、それなりの引力を覚えるかもしだいけれど、おれは常にあなたに、「ショボクレじたいを辞める、という選択肢もあるよ」と申し立てていていた。

ショボクレじたいを辞めてしまうなら、誰だつて実存主義には何の用事もないのだ。

な自己弁護を考え続け、考え続け……やがて退屈した人々がそれになに耳を傾ける。

みなそれぞれで、こころのうちに、さだかでない徒花（あだばな）を思い描きながら。

まさにフランス、パリ、サンジェルマン通りの夕暮れには、そういう男の悲劇が似合いそうではないか？

わたしも、もしわたしの真ん中を貫く話がなかつたら、毎日は退屈だつたうので、わたしもヴァカンスに焦がれながら、一緒になつてその物憂げな耽美の席に連なつていたかつたかもしれない。

けれどもわたし自身において、そうしたアンニュイの暴虐に真理を求める、それを崇拜して従おうとする時期は過ぎてしまった。それもすでにかなり昔のことだ。わたしは席を立ち上がりざるを得なかつた。「ちょっと出てくる」と言い、それ以来もうわたしはその席に戻つていらない。哲学者ぶつてゐるけれども、性根は耽美屋で、何を大切に感じてゐるかについては、そこの女子中学生と変わらない。

## 真ん中が空っぽのあなたへ

サルトルはけつきよく、「ボクの真ん中が空っぽだよう」「ボクの本質が無いよう」ということを、最後まで受け入れられなかつただけの、ただの小男だつた。だからあてつけのよう、後世の人々は彼を「知の巨人」などと呼んであざける。

自分の真ん中が空っぽだと言つて、そのことを受け入れられない人などいくらでもいるだろう。それじたいは陳腐なものだ。ただ、そこから現した悪あがきが、サルトルにおいては執拗で精緻で、まるで夢に満ちてゐるかのようで、空前絶後だつた。

自分の真ん中が空っぽの、本質に見捨てられた小男が、カフェで壮大

女子中学生が、初音ミクみたいな歌声に耽美するよりは、百年前のフランスのほうがおしゃれだよねということだ。そのことは大いに認めよう。とはいえそのおしゃれぶりだつて、数百年のあいだ植民地をむさぼつてゐた王権と貴族たちの遺産のすねをかじつていただけにすぎない。優越……優越！ 彼らはしょせんその優越のゆりかごから出て地表に降り立つことはしなかつた。一度降り立つてはもうそのゆりかごには戻らせてもらえないのだから。そしてわたしは彼らについて、彼らがそのゆりかごの外に踏み出そうとするような野暮をむしろ制したく思う。あなたがたはそこに居るのが似合う。たとえば三島由紀夫がどれだけ肉体派ぶつてもしよせん炭鉱夫にはなれなかつただろうことのよう、わたしは石炭を炉に投げ入れて汗まみれになつてゐる鉄道員サルトルを見たくはないのだ。まして彼がその屈託のない笑顔ぶりで人々に愛され

いるというような光景は。

「へへわたしはその優越に君たちのかけがえのない耽美があることは認め  
るが、それは耽美であって美ではないということを告げておきたい▽▽。  
耽美は美どころかむしろ醜いものだが、優越に拠る彼らはその醜さに  
も耽美しようとする宗教人なのだということをわたしはすでに知つてい  
るのだ。君たちは耽美によつてこそけつきよくのところ美への到達をみ  
ずから不可能とするだろう。

いちおうフランス由来の論を取り扱つたものだから、フランス文学の  
魂を導入してそれっぽく述べた。中にはやはり、このていどのフレンチ  
ティーストも書き述べられないで、えんえん悶絶している文学研究者や、  
文学部教授もいるものだ。

さつきと何とかしろ。

フランス文学にあこがれつづけているおじさん、フランス文学と架空  
の自分を同一視しているおじさんはは、「銀座が似合う女になりたいん  
です！」とマジで言つてゐる女と同じなのだ。

サルトルを理解するためには、サルトルの視た原風景、「卑猥でぶよぶ  
よした無秩序なたまり」を共有する必要がある。ベンチに座つてマロ  
ニエの樹を見て、そのサルトル景色を共有するのだ。  
わたしはそれについて堂々と、「知つてゐる笑」と、い抜きことばで応え  
たい。わたしは三歳のときにすべての景色が壮大な靈なるものの栄光に  
満ちていくのを見たことがあるし（というよりはその直下に立つていた  
し）、それと同時に、その逆の景色も見たことがあるのだ。

何のことはない、この世界は無意味なのだから、そのことをまともに  
理解して公園のベンチにでも座れば済む。  
しかしあどろいたことに、哲学や文学を考究する専門の教授でさえ、  
この初歩中の初歩を越えられないでいることはよくあるのだ。

わたしはこのように言う。

「今ここにいるすべての人は、百五十年前にはおらんかつたでしょ  
そして、続けてこう言う。

「今ここにいるすべての人は、百五十年後にはもうおらんでしょ  
だから別に何もないんですよ。

という、ただそれだけの、当たり前のことを言つると、それだけでも人  
はざわつく。

「いや、それは……」

何かしら制止が入るけれども、

「はい、何ですか」

「百五十年後にはみんな消えてしまつてゐる、だからこそ、今を大切に  
するべきだし、何かを残そうつて思うんじゃないか」

「そう思つてくださつてもけつこうですけど、そう思つてゐるあなたが  
百五十年後にはいないです、ということを申し上げてゐるんです。今  
を大切にしたあなたはそのときもう消えています。何かを残そうつて思つたあ  
なたもそのときもう消えています。何かを残そうつて思つたあ  
なたも消えていまさし、何も残さないでいいやと思つたあなたも消えてい  
ますよ。あなたはいつたい何にこだわろうとしているんですか」

サルトルについて唯一評価できる点は、ここでサルトルは、きゅうに  
午後二時からのテレビワイドショーよみたいにならず、すなおに、  
「ぎやああああ」

という悲鳴をあげたということだ。  
よく目を背けなかつたものだ。

この世界に意味がないということを明視し、すべての存在が「卑猥で  
ぶよぶよした無秩序なたまり」でしかないということを、嘔吐をもよ  
おす嫌悪感と共に直接視認した。  
そのことについてはサルトルが正しい。

このサルトルの風景を視認できないままサルトルを考究している人は、冗談じやなく、午後二時からのテレビワイドショーの考究でもしたほうがいい。

毎回「ぶよぶよ」とか「嘔吐をもよおす嫌悪感」とか言っていると、文章が冗長になるので、サルトルの景色を手短に、

「ノー・ハレルヤ」

とまとめよう。

サルトルの景色はまつたくのノー・ハレルヤだったのだ。

それについてはサルトルも一拍の休符の後に肯定するだろう。

「そのとおり、ノー・ハレルヤそのものだ。なぜなら、神はいない」

それに比べると、なぜかおれの景色はスーパー・ハレルヤなのだ。

スーパー・ハレルヤというと、まるでスーパー・マーケットみたいにな

るので、スーパーは外そう。

おれの景色はなぜか知らんがハレルヤだ。

サルトルに向けておれが言うならこうなるだろう、

「なぜだろう、ハレルヤだ。神がいるのかいないかのは、おれは知らん」

荷物を運んできたヤマト運輸のように、おれはその家に受取人が居るのか居ないのかを知らない。

居てくれたら、受け取つてもらえるので、助かるが、居るか居ないかはわからない。

知る由がない。

インター・ホンを押すまで知りようがないし、押したつて居留守をされるかもしれない。

居なかつたらしうがない、再配達だ。

まさか、玉手箱じやあるまいし、

「ホントは居るんじゃないの!?」

と言つて、他人の居宅のドアを開けるわけにはいくまい。

おれは、ヤマト運輸の配達員となつたサルトルが、なぜか配達前から、とカツコよく断言しているのを聞いて、「受取人はいない」

「す、すげえっスね」

と笑つてゐる気分なのだ。

なんで配達前からそのことが分かるのだろう。

世の中にはもちろん、

「受取人は、そこに居るのです」

とにかくに断言している人もいるのだが、それは何だか不衛生な感じがしてあまりおもろしくない。

サルトルのほうが、根拠のない断言がネガティブで、何か無性に笑える。

さて、こうして単純化して、「サルトルの景色はノー・ハレルヤ」「おれの景色はハレルヤ」と言えば、目の前の人があんうんとうなずき、「この世界はハレルヤですよね！」

というふうに言つてくることが多いのだが、いくつかの場合で、その目の奥、その声の奥に、無理をしている淀みがあることがある。

そこで、へへサルトル景色から目を伏せようとする人VVが多いのだが、それについては、さすがにサルトル当人のほうが誠実で値打ちがあつたと評価せざるを得ない。

サルトルは、少なくとも、自分の景色そのものからは目を逸らさず、少なくともその景色からスタートした。

神はいない、というのはまさに彼にとつては眞実であり確信だつただろう。

たしかに、聞けばあきらかに、彼は神のいない世界を明視し、その中に座つていた。

ただ先に述べたように、サルトルはなぜかそれを、

「みんなそうだよね？」

と言い出したのだが、それだけが意味不明だった。

まあそのことも、他有化のゆえなのかもしれない。

わたしはこれまでに、ほぼ百パーセントの確率で、次のことを言わ

れている。

「あれ？ なんか九折さんと歩くと、いつもの場所が、まったく別の場所みたいに見えてきますね」

わたしは百パーセントこれを言われる。

なぜ百パーセントそれを言われるか、わたしはもう原理を知っているので、わざとらしく量かしたりせず、はつきり言つておくことにする。

それはへへ話の中を歩いているVVからだ。

ふだん一般の人々は、色（しき）の中を歩いている。

すべての成分がそうでないにせよ、おれとそこを歩くということになると、やはりふだんと比べて極端に「話の中」を歩くことになる。

だからそこがきゅうに「場所」になる。

考えてみれば当たり前ではないか、おれは小説家だ。

ロカンタンではない、おれは小説家だ。

おれが歩けば、どこを歩くにせよ、それは話の中を歩いているに決まっている。

久しぶりに、あのクレープ屋に行つてみるかと言い、十五分歩いて、クレープ屋が閉店していたとして、そのときおれはそういう話の中を歩いている。

ただこのことは、そうして百パーセント言われるというあきらかさの一方、出どころが「分からぬ」のだ。

「分からぬ」からこの現象は発生している。

分からぬそれが、体の真ん中に通じて得られている。

体の真ん中が、稽（かんが）えていて、魂魄の領域につながり、魂魄の

うち「分からぬ」を担うほうの魂を得て、それが体に具現すると靈となり、その「体験」が「話」になつてゐるのだ。

話は「量」ではないので、十五分歩いたというのも量ではない。

五劫思惟、というのと同じで、量は量でなくなるのだ。

クレープ屋に行こうかな、と考えたとき、生クリームストロベリーの引力を否定するのではないが、その引力による傾きは発生させないし、

その傾きに従いもしない。

傾きは発生していないので、そこからの動き・方向は、引力によるそれではなく主体性によつて得られている。

このときの主題はクレープ屋で、わたしの体はそちらへ運ばれていく。じつさいにクレープの味と量が口腹に収まつたかはどうかは問題ではない。

（言つていたら腹が減つてきたな）

その話は「クレープ屋への旅」だった。

このとおり、おれはすべて包み隠さず説明しているし、すべてを開示し、すべてを「ご自由にお持ちください」と展示している。

でも、そうは言われても、じつさいにはこんなことさっぱり出来ないだろう。

さっぱり出来なくとも、説明はすでに完成していて、説明といえばこれ以上の説明はもうないのだから仕方がない。

「話」といえば、神話も「話」だ。

アマテラスオオミカミがどうこう、という話は神話だし、モーセが祈

ると海が割れたというのも、神話と扱つて差し支えないだろう。キリストのもたらした奇蹟も神の話なのだから神話だろうし、シヴァとヴィシヌとブラフマーがどうこうという話もヒンドゥーの神話だ。古代エジプトにも神話はあるし、北欧にも神話がある。古代ギリシャの神話に「ゼウス」が出てきて、「え、これはキリスト教のやつとは違うやつなの？」

と混乱した人は多くいるだろう。

日本の場合、死後に御靈（みたま）が祀られたらカミになるので、たとえば神社が立てられている吉田松陰などは、すでに神話に組み入れられたとみなしてもよいのかもしない。

体の真ん中で稽（かんが）える。

そして神話というのは概して古いものだ。

だから、自我で考えたり暗記したりするのではなく、体の真ん中で神話を稽（かんが）えることができたら、そのことを指して「稽古がついた」とわれわれは表現するのだ。

神話に代表される“古（いにしえ）”について、体の真ん中が“稽（かんが）えた”のだから、稽古だ。

いくら「練習」をしても、練習は稽古にはならない。練習を「する」という言い方はするが、練習を「つける」というような言い方はしない。

稽古というのは、自分の体がやろうとしていることが、「どういう話？」

ということにつながっていくことだ。

そして、稽古がつくと、なぜかは分からぬが、体の真ん中に「持ち上げられる」「引っ張り上げられる」という作用がはたらきだす。

なぜなのかは本当にまったく分からぬ。

いちおう、古流の武術などではこの現象を「浮身」と呼ぶ。

少なくとも、実感できる筋力量で持ち上がっているのではなく、体感として不明の何かに引っ張り上げられている。

それは、目の前に稽古のついた人がいるだけでも作用があるし、その手が触れるだけでも大きな作用があるので、そのことを「浮身が掛かる」と言つたりもする。

わたしがあなたの目の前に来ると、それだけであなたに浮身が掛かり、あなたの体の真ん中がすーっとどこかへ連れていかれ、いざながれの現象が起る。

ざかり、気がつくといつのまにかあなたは何かの「話」の中にいるのだ。  
それで、  
「いつもの場所が、まったく別の場所にいるみたいに見えてきますね」となる。  
(点検してみると、じつさいそのとおりのことが機序どおりに起こっています)  
(人にによってはこの「話」「浮身」の作用を、「とてもない体の軽さ」「いつまでやついてもまったく疲れない」という極端な形で体験することもあります。そのことはたいてい、その人の日常・常識との落差のせいで極端に体験されるという形で起こっています)  
(その落差から、逆に混乱して泣いてしまう人もあります)  
サルトルは、これらの現象を一ミリも知らず、これらの現象に触れたことがなかつた。  
それは、彼が西洋人だから仕方なかつたのかもしないし、まして百年近く前のことだつたから、手がかりがなかつたということもあるかもしれない。  
ついでに言つておくと、わたしがあなたの目の前にいて、あなたに浮身が掛かり、あなたの体の真ん中がすーっとどこかへ連れていかれ、いつのまにか「話」の中を歩いていたとしても、そのことはわたしがあなたの目の前から去ると（一旦）失われていつてしまふ。  
あなたはそこで、サルトルの言う「実存が本質に先立つ」世界へと引き戻されていくのだ。  
さきほどまでハレルヤの景色の中を歩いていたのに、あなたはノー・ハレルヤの景色へと帰つていく。  
わたしはそのようなことを、偉そうに言いたいわけではないが、あまりにも百パーセントこのことが繰り返され、いつまでたつても仕組みが気づかれないでの、やむをえずここにありのままを暴露することにした。

真ん中が空っぽのあなたへ。

別の言い方をすると、「本質」が無いあなたへ。

けつきよくのところ、「ヘヴィだわ」ということのほうを信じてしまふあなたへ……

体の真ん中、あなたの真ん中、「この人」の真ん中は、何があるかといふよりも、本来どこかへつながっているものだ。

体の真ん中が、どこかへつながっており、そこでは「分かる」と「分からぬ」が矛盾せず両立していて、その両立と体の真ん中が合一している。

「分かる」と「分からぬ」が両立していて、それが主題となり、体の真ん中と合一して「体験」され、その体験が「話」になつていて、「あなた」とは何かというと、その「話」があなたなのだ。

あなたの自我はあなたではない。

あなたの自我は他人だ。

まさか、「自我は他人」だつて？

サルトルはいつまでもそのことに気づけなかつた。

あなたの自我は「分かる」というだけの装置だ。分離し、分解し、分かれる。

分かつたものは量になり、パラメーターになり、比率になる。

比率は状態と認識され、状態は体感され、体感はまた量となる。

それが色（しき）だ。

色（しき）は分かるばかりで、何ともつながっていない。

つながつていると錯覚されるのは、ただの引力、および引力による呪縛だ。

だから、重い。常に重い。

引力にひきずられ、右往左往し、摩擦によって発火したり、粘ついて腐敗したりするだけの挙動は、すべて受動にすぎず、さらにいちいちが

重苦しく、その重苦しさはもはやどれも呪わしいほどだ。

そんなものがあなたの主体性であるわけがない。

あなたがこれらのことと、自分自身を何か「まずい」と感じることがあるなら、あなたは要するに、

「色（しき）がてんこもり」

「真ん中が空っぽ」

そしてそのとおり、

「色（しき）の引力で挙動しまくつている」

ということではないだろうか。

そしてあなたはいつも、「このままではまずい」と、どことなく思い統けていて、「何かしなきや」「何かやつていかなきや」と想い、あれをしてみたりとかこれをしてみたりとか、何かに付き合つてみたりとか、何かに手を出してみたりとかを、いろいろやつてきたのではないだろうか。

サルトルはそうしたことをいちいち「投企」と呼んだ。

サルトルは、そのむなしい右往左往を「人間的自由」などと言い立てて、その「自由」に身を投げ込めば何とかなるという乱暴な説を唱えたが、そもそもそれは自由ではなくただの「無稽」だ。荒唐無稽という四字熟語をご存じだろう。

無稽、体の真ん中がどこにもつながっていないということ。

体の真ん中が何も稽（かんが）えていないということ。

稽を失い、荒唐無稽。また稽から逸脱し、稽から“滑り落ちて”いる

ので、そのすべては「滑稽」と言われる。

われわれは、自分のすることをわざわざ投企なんて言わない。

けれども、「自分を何かに投げ込む」ということは、必要だと思つていて、自分ではいつも、

「本気でがんばっているつもりなんです」と涙ぐんでいる。

しかし一步引きさがつて眺めると、どこか自分のやつていることの根

本が、

「滑稽でしかない」

と思い知らされもする。

そのとき、人はとてもみじめで苦しい。

そうして、あるべきすべてのものから滑り落ちている滑稽さとみじめさを、「疎外」と呼ぶ。

何につけ、がんばっているつもりなのに、どうしても自分はニセモノ

っぽい今まで、本当の「それ」にはなれない。

がんばっているのに、テーケーから疎外感がある。

疎外はまた他有化もある。

すぐくがんばっているのに、何もかもがいつのまにか「ありきたり」

になり、ふと気づくと、何一つ「わたし」ではなくなっている。

いつのまにか、ヨソにあるお仕着せのイメージで自分が挙動している。

自分の価値観で挙動しているはずが、なぜかその価値観じたい、硬直

してよそよそしいものになっている。

ホンモノでない自分、滑稽でみじめな自分は、他人にジロジロ見られ、

そのまなざしに支配される。

「バカにされたくない、笑われたくない」

それで、腹が立つて、こちらかも相手をジロジロみてやろうという気になり、

「ほら、そつちにいるあなただけ、じつはたいしたことないじゃない」

こうしてまなざしバトル、まなざしの相克が始まる。

なぜこうしてサルトルの論をえんえんと展開したのかというと、何もサルトルのことを唐突にあげつらいたかつたからではもちろんない。

サルトルは、われわれにとつて巨大なヒントなのだ。

わたしはその点において、サルトルの業績と、その遺産の価値を惜し

みなく称賛する。

へへサルトルは、真ん中が空っぽのあなたが、その後どうなつてゆくかを、これ以上なく精密にレポートしてくれているVVのだ。

実存だけが先立ち、本質がないあなたの右往左往が、けつきよくどうなるのかを、サルトルは教えてくれている。

そうしたレポートとして活用されるのは、サルトル本人にとつては不本意きわまる結果だつたろうが、もうその本人はいないのだから気にしないでいいだろう。

サルトルは、他人は他有化をしてよいと言ったのだから、わたしはサルトルをこれ以上なく他有化しよう。

彼は人類史上屈指のハズレ男、空前絶後のノー・ハレルヤ・マンだった。よつて断言する、へへノー・ハレルヤは彼から学べVV。それについては彼以上の存在はない。

「なんでこんな、グロテスクなことになるんだろう」

「なんでこんな、ニセモノっぽいものになるんだろう」

「なんでこんな、よそよそしい、借り物みたいなことをわたしがやるハメになるんだろう」

そうした「ハズレ」ルートには、必ずサルトルの足跡がついている。

われわれは、いざ自分が「ハズレ」ルートを歩いているかもと思いつめると、ゾツとしてつい目を背けてしまうのだが、そこでノー・ハレルヤを恐れるな。

目を背けてハレルヤの願望に甘えるな。

あなたはまさか、自分に体の真ん中がないとは言わないだろう。

あなたには体があるのだから物理的にその体の真ん中は存在している。

その体の真ん中が、グロテスクに「実存」しているだけなのか、それと

も、何かに・どこかに通じているのか。

^^体の真ん中が、魂の主題と合一していれば、靈なるあなたはこのことについて何の翳りも持たないvv。

話と色（しき）は互いに侮辱的にはたらくから、あなたの自我は、常にこの話に対して侮辱の態度を向ける。

自我があなただと言うなら、あなたは稽古が嫌いだ。

^^あなたは稽古に侮辱しか向けられないvv。

あなたに何の本質も宿らないとしたら原因はそれだ。

あなたの自我は、そして他人は、あなたにズシンとした「説得力」をはたらかせてくる。

いちいちの説得力は、ズシンとしていて、

「すごい、分かるわ～」

と感じられる。

「へヴィだわ」

「ね、分かるでしょ？」

「重みが違いますよね」

あなたは他有化される。

他有化され、あなたの自我はパワーアップする。

^^あなたは、その「分かるわ～」を尊敬するvv。

「分からぬ」から生じる稽古や話をあなたは侮辱する。

そうしてあなたはいつのまにか、パワフルかつへヴィに、ノー・ハレルヤの只中に立っているのだ。

つまり、真ん中が空っぽのあなたへ。

そのままだと、あなたはサルトルを尊敬するのだ。

サルトルのすべては、あなたの根っこに最大の「分かるわ～」をもたらす。

あなたはサルトルに最大の尊敬を直覚し、気づくと、根っこがフレンチノワールに浸っている。

気づくと、^^稽古のすべては遠ざかり、ただひとり、とてもうつとりするものに浸っているvv。

じつさいそれで、何百万人、あるいは述べ数千万人もが、サルトルを尊敬し、根っこで「うつとり」し、その思想に生き、その主義で行動したのだ。

泥臭いように見えて、みんなじつは、根っこで自分に「美」を見い出して、浸っていた。

ここであなたにとつて納得のいかない問題、手ごわくてどうしても解決しない問題はただひとつ。

^^尊敬を覚える人がなぜかノー・ハレルヤで、侮辱を覚える人がなぜかハレルヤvvということ。

**こんなに美しいのに、ノー・ハレルヤになるなど、あなたは永遠に納得がいかない。**

だからこの問題は、仕組みとしてはシンプルなのに、思い余つて深入りすると、精神を損傷するのだ。

なぜこんなことになつてしまふのか。なぜ里斯ペクト先がノー・ハレルヤになつてしまふのか。

こんなに美しいのに？

そのことについては、わたしに訊かずサルトルに訊け。あるいはサルトルを見る。

自意識過剰で、いつも他人の目を気にして恰好をつけている、あのフランス人の、今まで言うインフルエンサーの写真群を見ろ。

同じく自意識過剰のインフルエンサー、いつも他人の目を気にして恰好をつけている、三島由紀夫の写真群と並べて見ろ。

その皮膚の一枚下、またその目の奥に潜んでいる、弱さ、怯え、その淀みを見ろ。

あなたの真ん中が空っぽなら、そのぶん、あなたは彼らと同じものを、その皮膚の一枚下に、その目の奥に、抱え込んできているはずだ。じつは耽美的で、そのぶんけつきよく美には至れない、彼らのナルシズムを見よ。

あなたの真ん中が空っぽなら、そのぶん、あなたは彼らと同じ耽美とナルシズムの性向を抱え込んできているはずだ。

耽美とナルシズムは、まさに色（しき）だ。

あなたがそこに目撃しているのは、まさに色（しき）だ。

**彼らは色（しき）を美と思つてゐるのだ。**

彼らの目の奥にある怯えは、まさに「話の無さ」だ。

あなたがそこに目撃しているのは、まさに話と稽（かんが）えの侮辱者なのだ。

あなたがいま、自分自身「真ん中が空っぽなんです」ということであれば、あなたの写真がいま、彼らに並んで三人目として展示されようとしているということだ。

だからあなたは、彼らの言うことに向けて、

「そんな話はない」

と発さねばならないし、あなたはその親しい他人らを追放せねばならない。

そのことが、どこまでもあなたにとつての最後の閑門となるだろう。なぜなら、その「親しい他人ら」こそが、あなたの自我だからだ。

自我は他人だ。

この短い一節は、よもや一般には受け入れられない。

自我はどう考へても自分でしょと、笑われ、侮辱を受けるだろう。

ともすれば、デカルトまで一緒になつて笑つていいかもしれない。

ただデカルトは、笑つたのち、帰宅してから少しは青ざめているかもしない。

自我は他人だ。

「話」がわたしのだから、自我はわたしでない。

わたしでない人格がそこにあるなら、それは他人に決まっている。例によつてこのことも、安易に深入りすると精神を損傷する。

そんな話ばかりだな。

デカルトは、

「吾思う、ゆえに吾在り」

と言つたが、そもそも「思う」ためには「思はない」が必要であり、「吾（われ）」を知るには「吾でないもの」が必要だ。

「吾でないもの」とは、石ころとかザリガニとか、「他」のもので、あとは「他の誰か」だ。

つまり他人だ。

世の中とか世間とかいうのも、つまるところ総体的な他人だ。

「吾」と言つてゐるけれど、まずは「吾」を捉えなくてはならない。

「吾」とは、「他人でないもの、世の中ではないもの、世間ではないもの、つまり“吾でないすべてのもの、以外のもの”としか捉えられない。デカルトの説を、ホエザルに聞かせても、ホエザルは、

# 自我は他人だ

「アー！」

とバカでかい声で応えて、デカルトの説は粉々に碎かれるだろう。

デカルトは、ホエザルを含めて何もかもが疑いうると言ったのだが、

それはそのとおりだとしても、おれは疑う氣がないので話にならない。

等に、  
「おれに疑う氣がないなら、おれを疑わせるのは不可能じやん」

というのも、やはり理としてそのとおりだ。

おれは、デカルトの言つていることは疑うが、ホエザルの面白い声は

疑わない。

これについて、デカルトはどう思うかといつて、これはただの「おれの話」なのであつて、おれの話はデカルトを納得させるために存在しているのではないので、デカルトはついてこられないだろう。

どこまでも、ただのおれの「話」だ。

きびだんごを食わせたら、イヌもサルもキジもついてきますよ、とお

れが話すだけであつて、デカルト君がそれを疑うというなら、それはそれで勝手にしたらしいと思う。

デカルトの話がもつともらしく聞こえているのは、デカルト君ではなく他人が話しているからだ。

自我は他人だ。

われわれは四歳ごろに、「自分」と「自分でないもの」を分け始める。

ボクはソフトクリームを買ってもらって、食べているけど、あのコは

買ってもらえず、ソフトクリームが食べられない。あーあ、かわいそうに。

ああ、こうして見せつけるようにして食べると、優越感があつて気持

ちいいなあ。  
こうして優越できるのは、きっとボクがいいコだからに違いない。

あのコはきっと、いいコではないんだ。だから悔しがつていて。ボク

とは違う。そう思うと、彼の自業自得でますます気持ちいいなあ。

そういったことを、子供は知りはじめる。

聞いていると、まつたくアンディフィグ（空手家）によみがえつてもらって即座に踵落としを入れてもらいたくなるような腐った餓鬼だが、それにしても、冷静に考えたらわれわれ大人だってこういうことを平気でやつているのだから、子供をシバいている場合ではないのかもしれない。

大人の場合、それがソフトクリームではなくて高級車になる。

見せつけて、優越感が気持ち良くて、イケているオレ、安物の車に乗つている奴は自業自得だ、というふうになる。

そして大人はもう、頭頂部に踵落としを入れてもらつても、その腐敗が治らないのだった。

さておき、自分と自分でないものを切り分けていく。

その機能が発達してゆき、赤信号と青信号が分離されて、交通ルールが「分かつて」くる。

葛飾区と江戸川区はゴミの収集日が違うということが「分かつて」くる。

自分が白組なら、赤組は敵だ。

分かつてくる。

ここでふと、奇妙なことが出てくる。

自分が白組といつて、では白組は「わたし」だろうか。

そんなことはない。

ボクは中学二年生です、ということはあっても、中学二年生がボクです、ということはない。

それはただ、集合の問題だ。

ただ、集合の問題では説明がつかないことがある。  
たとえばあなたの名前が、鈴木花子だったとする。

あなたは、鈴木花子だ。そのことは問題ない。

では、鈴木花子は「あなた」だろうか？

あなた自身、実名をそこにあてはめて考へると、そこには微妙な違和感があるだろう。

仮にあなたが、違和感を飲み込んで、

「まあ、鈴木花子がわたし、です。はい」

と言い切つたとしても、そこにとつじよ国家権力が現れ、「あなたの姓名を、ポリピニャーノ・肋骨モンブランに改名しました」と言つたら、あなたはたちまち鈴木花子ではなくなつてしまふ。では、

「肋骨モンブランがあなたですか？」

「肋骨モンブランはわたしじゃないです怒」

だから、この違和感は何かといふと、名前はあくまで名前であつて、それは直接の「わたし」ではないので、名前というラベルのようなものに「わたし」が他有化されるのはヘンだ、とあなたが感じているということだ。

あなたは、「わたしは鈴木花子です」と同一性があるふうに名前を言ひながら、じつはその名前を「わたし」ではない「他」のものだとみなしているのだ。

わたしは鈴木花子で、白組で、中学二年生です、葛飾区在住です、などと言ひながら、そこで述べている「わたし」はじつはすべて「他」なのだ、と、あなたはみなしている。

わたしはソフトクリームを食べていて、わたしはいいコで、わたしは高級車に乗つておひ、わたしはイケていると自負していたとして、そこにくつついてるすべてのものは、じつは「他」なのだといふ。

自我といふのは、その「くつついてるすべてのもの」の集積でしかないのでだから、自我は「他」だ。

その自我が人格のようには振る舞うのだから、自我は「他人」なのだ。

ためしにあなたは架空に自己紹介をしてみればいい。

年齢がいくつで、どこ出身で、○○高校卒で、△△に勤めており、趣味は××で……

すべて「他」であり、そこにぶらさがつては「わたし」ではないだろう。

「わたし」を紹介はできていない。

あなたは自己紹介といつて、じつは「わたし」ではないもの、自我という他人を紹介しているのだ。

その証拠に、誰かがあなたに入念な自己紹介をし、その自己紹介が一時間に及んだとしても、あなたはその人のことを「知り合い」とは思つていらない。

あなたは「その人」のことを引き続き「知らない人」とみなしている。ただ、その知らない人が、けつこうなお金持ちだつたり、若くてハンサムで背が高かつたり、家柄が良かつたり、それであなたに向けてニカラツと笑顔を見せたりすると、あなたは、

「あつ、素敵」

と想ひ、その人のことを自分にとつての「けつこう知つてゐる人」に取り入れる。

なぜそんなことになるかといふと、何度も言うように引力だ。

色（しき）の引力に寄せられ、そこに呪縛が生じるから、あなたは自分と彼のことを、

「けつこう知つてゐる人」

「それなりにつながつてゐる人」

その日のうち、夜更けにふたりはベッドインしてても何もおかしくないし、そのまま、「付き合おうよ」ということになつても何もおかしくない

はない。

ただ、ベッドインしようが「付き合う」をしようが、それは他人と他人が引力へ従っているだけであって、あなたと彼がどうにかなっているわけではない。

そんな話はない、のだ。

浦島太郎と乙姫は、「話」だが、彼とあなたは、引力であって話ではない。

あなたは友人に向けて、

「ねえ聞いて、わたし、すっごく好い人に出会つちゃってさあ！」

と興奮して話すかもしれないけれど、じつはあなたはその彼と出会つてはいない。

色（しき）の引力が、互いの自我を吸い込み、ふたつの自我を呪縛に結ぼれさせただけであって、向こうは「あなた」に出会つてはいないし、あなたも「彼」に出会つてはいない。

わたしがいま申し上げていることは、まったく聞き慣れないことで、どことなく恐ろしいというか、どことなくというよりはつきりと恐ろしいことだと思うが、それでいながら、このことはじつはあなたのまったく知らないことではないはずだ。

自我は、色（しき）であり、その引力は、あなたにガツーンと効く。

あなたはたちまち、強烈に、falling する。

アツアツもアツアツになる。

夢みたーい。

なんか無敵かも笑。

それが、いつからかこじれにこじれ、いつのまにか冷えに冷える。ため息にため息。

そしてあるときついに、ブチギレにブチギレた。

それでしばらく経つてのち、

「あの人ってどうなつたの」と言及すると、あなたは、「……あー」と生返事をする。

「そんな人、いたつけ笑。あ、いたわ。なんか笑える。あー、いたいた。いたなあ。えー、あれってどんな人だつけ」

そうしたことは、あなた自身にあっても珍しくはないし、あなたの周辺にあっても、珍しくはないことだ。

なぜそんなことになるかというと、そもそも falling したものじたいが他人だからだ。

他人事みたい、ではなく、他人事なのだ。

彼が他人ということではなく、あなたが他人だということだ。

（※もちろん、トラブルを起こすと、社会的には他人事にはしてもらえないません）

引力に falling するのは自我であり、自我は他人なので、その他人がアツアツになり、こじれにこじれ、冷え冷えになり、ブチギレになる。

それはあなたが何かを体験しているわけではない。

向こうも同じだ。

そこには、誰と誰の出会いもない。

自我という他人が、それぞれ「激しくムカついた」ということを残すだけだ。

時にそれは怨恨とも呼ばれる。

なかなかの恐怖だと思うが、反面、あなたがこれまで目撃してきたことにずっとあつた根本的な違和感を、この説明は整合させてしまうのではないかだろうか。

あなたは色んな趣味に没頭し、それぞれの時期においてはそれを「マイブーム」などと呼んだかもしれない。

本棚にたくさんのマンガ本があり、

「これめっちゃおすすめ。マジ、読んで」と熱烈に友人に薦めました。

そしてあなたは定期的に、「断捨離」などと言つて、「あ、これなあ。うーんもう、これは要らないかも」と思い、過去の熱狂物を捨てていく。

このありさまについてあなたに問えば、あなたは、「うーん。わたしは、熱しやすく、冷めやすい、つてやつなのかな」と答えるかもしれない。

しかし、それはいくらなんでもうすら寒すぎるだろう。何が起こっているか教えよう。

△△本棚に並んでいるものが、「わたしじゃない」と感じられてきた△△のだ。

携帯電話に記録されている電話帳が、「わたしじゃない」と感じられてきたのだ。

音楽のプレイリストが、SNSのアカウントが、着ていた服が、いま住んでいるところが、

「わたしじゃない」と感じられてきた。

勤め先が、そして付き合っている恋人が、「わたしじゃない」と感じられてきた。

それで、心機一転、リニューアルしようとする。

それを断捨離と呼ぶのは、別にかまわないのかもしれないが、本当に起こっていることは、もつと身も蓋もないことだ。

引力切れになつたとたん、人は、「わたしじゃない」

「要らない」

とそれを切り捨てるのだ。

数々のものは、あなたが出会つてきたものではなく、そのときどき「わたし」の足しにしようとしてきた、自己愛の痕跡だ。

なかなか恐ろしい話をしているように思われるかもしれないが、そうではない。

おれが恐ろしい話をしているのではなくて、このことにいくらか当てはまつてしまふ人があり、その人が、恐ろしいものを抱え込んでいるということだ。

自己紹介もそこそこに、彼は金持ちで、背が高くハンサムで、家柄がよく、ニカツと笑うと白い歯が見えた。

「すてき！」

他人と他人がベッドインする。

あなたと彼がベッドインしているのではない。

あなたは彼と出会つてなどいない。

惹かれたのは知つていて、それは自我にはたらいた色（しき）の引力だ。

興奮して、友人に、

「ねえ、聞いて聞いて！」

そう言いながら、あなたはそのときの自分について、真ん中は空っぽ、真ん中は黒い虚空になつているということを、本当に知らないわけではないだろう。

その△△黒い虚空△△はあまりに恐ろしいものだから、あなたがそれを直視できないというだけだ。

その黒い虚空が「あなた」だ。

何にも出会つていないし、どこにもつながつていないので、そのとおり「黒い虚空」になつてている。

引力によせられて呪縛されて興奮しているのは、あなたではなく他人だ。

「聞いて聞いて」と興奮はしているが、そこに何の「話」もないだろう。

彼の金持ちパラメーター、身長パラメーター、年齢パラメーター、ハンサムパラメーター、セックスパラメーター、そしてあなたの興奮パラメーター、あなたの目算する可能性パラメーターがあり、それらの「色とりどり」にあなたが狂乱しているだけだ。

それを「恋」だといって、そのことを別に否定はしない。

戀（こい）とはもともとそういう呪縛の字義だ。

おれが、初対面のあなたに、

「コーヒー買ってこい」

と言いつけたとする。

するとあなたは、えつ、はい、となりながら、内心、

（え、なんでわたしが）

と思う。

それでいてあなたは、なぜか、体の真ん中に不明の浮揚を体験する。

妙に足取りが軽い。

体が軽い。それは認める。

（なんでもわたしが？）

立場によつてはただのパワハラにもなるだろう。

そのとき、あなたは納得のいかない命令をぶつけられている。

しかし、その命令はあなたの体の真ん中に通るのだ。

そのとき、あなたの体の真ん中は、なぜか知らないが黒い虚空ではないのだ。

命令といって、それは「命」の現象なので、その命が体の真ん中に通っている（横隔膜のいちばん奥に通ります）。

ただ、体の真ん中は、自我の色（しき）と相互に侮辱的にはたくさんので、あなたは最後まで、

「いや、納得はいかない」

というほうを選ぶかもしれない。

それはそれ、それの何が誤りというわけでもない。

パワハラでしょ、と正論を唱えれば、賛同者はこんにちいくらでも集まるだろう。

「他人」が、あなたの自我の意見に賛同してくれる。

SNSでそうした現象をよく見かけるだろう。

「いいね」であれ炎上であれ、他人は他人のことによく食いついてくる。

それはそもそも、自我が他人だからだ。

自我は、「わたし」ではなくて、へへ他有されている自・分▽▽なのだ。

学級があり、生徒三十人ぶんの机と椅子があつたとする。あなたがその学級の生徒なら、あなたはその中から「自分の席」を認識できるはずだ。自分の席は「わたし」ではないが、他の誰かの席ではないものとして分離して捉えられる。その座席ならびに、その空間と面積はあなたにとって「自分のもの」と捉えられる。

その空間と面積、机と椅子が、「あなたの分」なのだ。家族四人でケーキを分けあうなら、とうぜんあなたの「分」というのがあるだろう。あなたの分を「自・分」と捉えるなら、その他の残りは「他・分」となる。あるいは家中の大掃除をするとなつたら、あなたが分け持つ、あなたが分担する領域というものがあるだろう。それがあなたの「分」であり「自分のところ」だ。

あなたは自分を「自分」と思い、基本的にはその「自分」は周囲からも尊厳をもつて保障されるのだが、それはあくまで建前であつて、仕組みとしてはあなたの「自分」は保障されていない。あなたが学級に「自分の席」を思うことができても、担任の教師が席替えを発表すると、あなた

はその席を当該の場所から移動させなくてはならないようだ。

クラスメート三十人のうち、あなたを除く全員が結託して、あなたのことを「マーガレット」と呼んだとする。その理由は、

「あなたからマークの香りがするから」

もちろんそのような事実はなく、あなたの親も、かかりつけの医師も、

同級生ではない友人も、あなたの体からマークレットの香りはしないと言ふ。けれどもクラスメートたちは結託して、あなたをその香りに由来

して「マー・ガ・レット」と呼ぶ。あろうことか、教師まで一緒にし、あなたのことを「マー・ガ・レット」と呼んだとしよう。

あなたは「自分」を思うことができるが、あなたは自分で自分のこと

けれども数日のうち、クラスメートが、

「あれ、マーガレットはどこ?」

と言えば、あなたの自我はそのマーガレットという呼称が自分のことを指しているのだと認識するようになるだろう。

あなたは自分のことをマー・ガ・レットだと思つ

後田 クラスマートたちの方針は切り替わり、あなたのことを「ハゲ」  
三呼ば二三になつた。うなこ「ハゲ二三呼ば二三呼ば理日はな」。うなこ

と呼ぶことはない。あなたを「ハゲ」と呼ぶことは理由はない。あなたの髪は薄くなく、あなたの頭が禿げあがっているという事実はどこにもない。

にもかかわらず、先ほどのマー・ガ・レットと同じように、全員があなた

のことを「ハゲ」と呼ぶなら、なぜかあなたの自我はその「ハゲ」という呼びようが、自分のことを指していふと認識するようになるのだ。これは常識的にはおかしなことだ。あなたの頭は禿げあがつておらず、皮膚科医はあなたの頭を指して「禿げていません」と診断するだろう。

むしろ、ハゲと言えば、クラスメートのうち露骨に髪が薄い誰かがいるかもしれない。あなたはそれについて、

「ハゲと呼ぶとしたら、むしろあの人でしょ？」

と申し立てるだろう。けれども、全員が結託してとにかくあなたのこ

とを「ハゲ」と呼ぶなら、あなたは「ハゲ」ということになるのだ。

あなたは、頭が禿げているわけでもないし、自分で自分を「ハゲ」と思

「自分」だと聞き取る。 つて いるわけでもない。 それなのに、なぜかあなたの自我は「ハゲ」が

われわれは常識的に

が人それぞれの「自分」に一定の尊厳を保障しようとしているからだが、それは最終的には建前でしかないし、そもそもわれわれはわれわれ自身がその「自分」と「わたし」を同一視しているため、常識のうちにはこのことについて解説する知性を持つていないので。

かくのごとく、じつは「自分」は「わたし」ではない。

自分というのは、たとえばクラスメート三十人が、それぞれ「自分」と言つて差し出した白紙のカードのようなものにすぎない。差し出された白紙のカードに対し、姓名が「鈴木花子です」と名乗られるなら、残る二

十九名がその白紙に寄つ  
「なるほど、”鈴木花子  
と書き込みをするのだ

だからこそ、その二十九名がその気になれば、そこに自己紹介とは異なる「マー・ガレット」や「ハゲ」の書き込みをすることも可能だということ

このように、「自分」というカードは初めから他人によつて所有（つまり他有）されてゐるのであつて、自分で所有してゐるものではないのだから、その事実上の存在は「他人」であり、より精密に言うなら、自我とはへへわたしでないものを認識したことの集積▽▽でしかないので、「わたし」は違う。「わたし」は自我ではなく、それはふだんのあなたがまったく知らないものであり、あなたの自我にはまったく「分からぬ」

ものだ。

いまあなたの目の前には何があるだろうか。あなたの手元には何があるだろうか。あなたの手元には一本のボールペンがあつたとしよう。あなたはそのボールペンを見て、漠然とボールペンを「思う」ということができる。

いやそれどころか、あなたはボールペンを見ると、ボールペンに意識が向かわざるを得ず、ボールペンを「思わざるを得ない」という状態になる。ボールペンを認識しているということはすでにボールペンを思っているということだ。

そしてそのとき、あなたの気づかないこととして、あなたの自我の機構はそのボールペンを、

「（わたしではないもの）ボールペンですね」

と認識しているのだ。

水槽にいる金魚を見るとき、

「（わたしでないもの）金魚ですね」

と認識している。

記憶に山田太郎のことと思い出すとき、

「（わたしではない人）山田太郎さんですね」

と認識している。

そして、このことが積み重なり、あなたは自分について思うとき、

「（わたし）わたしですね」

と認識している。

ところがどっこい、そのときあなたが認識している「わたし」は、じつはすでに「わたし」ではないのだ。

そのときあなたが認識している「わたし」は、「わたし」ではなく、  
（ボールペンでないもの）（金魚でないもの）（山田太郎でない人）  
のだ。

あなたが学級に「自分の席」を確かめるとき、それは（A君の席でない席）（Bさんの席でない席）（C君の席でない席）と確かめられるようだ。

このことがけつきよく、サルトル他、多くの哲学者と、哲学者でない一般のわれわれを困らせた。みなそれぞれに「わたし」とは何かを考究したのだが、そもそも自我が「わたし」ではなかたとしたら、哲学者のほとんどは自分の論文を焚火に放り込むしかなくなる。

自我ではない「わたし」は、「分からぬ」わたしなのだから、あなたの目の前にボールペンがあつたとして、  
「へへそのボールペンがわたしでないとは言えない」。

わたしは堂々と、

「このボールペンも、まあ、おれだ」

と言おう。

あなたが疑義を抱き、そのボールペンを横から掴みとり、ボールペンを振り立てて、

「これはボールペンであつて、あなたではない。そして何なら、このボールペンはあなたのボールペンでさえないではないか」

と言ふだろう。

そのときのあなたが言っていることを、もちろんわたしは「分かる」のだが、かねてからわたしが述べているのは、ある領域においては「分かる」と「分からぬ」が矛盾せず同時に成り立つてしまうということだつた。

あなたがボールペンを振り立てているとき、あなたはそのボールペンの長さや質量を実感しながらそれを振り立てているのだ。そして、ボールペンとわたしの分離を主張するのだが、あなたの自我はそうして「分ける」と共に「量」を捉えるはたらきをしている。

「分量」をやつてているのだ。

あなたが四人家族のひとりで、ケーキを切り分けるとき、「あなたの分」がとうぜんあるというのは、同時に「あなたの分量」があるということだ。

そのとき、たいていケーキは四等分されるだろうが、仮にそのケーキがあなたの誕生日を祝うものなら、あなたの「分量」は、四等分の範囲を超えて、より大きな分量となるかもしれない。

あなたが日常でずっと「わたし」と思っている、その自我の正体は、その切り分けられた「分量」なのだ。ここで「自分」という言いようは、さらに「自分量」という言い方をされてもよい。

教室には、A君の席の分量があり、Bさんの席の分量もある。そしてあなたにとって「自」の席の分量もある。この自分量の増減に生じる引力のことを、あなたは「わたし」と誤解している。

あなたが浦島太郎の話に直面して覚える、戸惑うべき無関係性はこれだ。あなたはいくら浦島太郎の話を聞いたとしても、内心で、「で？」

と侮辱的に思うことを抑えられない。発言は抑えるにしても内心に湧いてくる思いを抑えることができない。

あなたの自我が浦島太郎の話にそのような侮辱性の戸惑いを覚えるのは、浦島太郎の話についてあなたの「自分量」は何らも増減しないからだ。あるとしたらせいやい、

「わたしの時間を返せ笑」  
というクレームぐらいだろう。

あなたの自我は、常時「分量」をやっている。

分量を「やつて」いるのだ。

あなたの自我は、常時「分量」を量つており、常に、  
自分量を増大させようとする方向への運動を続けている。あなたはその運動を「わたし」だと思っているのだ。

あなたにとつて、自分量を奪いにくる者がいるとしたらそれは誰か。それはいわゞもがな「他人」だ。他人は他人で、向こうの自分量を増やすための運動を続いている。

これからケーキが切り分けられるとして、あなたの自分量、ケーキの「分け前」が奪われるとしたら。その分け前を奪いに来るのはいつたい誰だろうか。

それは、誰であれ「他人」だと、あなたは理解しているだろう。それはそのとおり。

だが、そうして自分量を奪われるのに対抗して、自分量を守ろうとするはたらき、のみならず自分量をさらに増そうとするはたらきがあるとしたら、それは誰によるはたらきか。

それについて、

「わたしですよね」  
とあなたは思っている。

これが誤りだ。

なぜなら、「わたし」は量的ではないからだ。

どれだけケーキを食べたって「わたし」が増えるわけではない。

「わたし」の本質は「話」であって、「話」は量的でない。

事実、ケーキの分量について、三歳児は異議申し立てができない。母親が、三歳児に向けて、

「ここにケーキがあつて、わたしたちは四人家族だけど、ボクちゃんの分量は無しでーす」

と言い、目の前でその分量ゼロをジェスチャーしたとしても、三歳児はその悲しみに泣くだけで、

「いや、家族なんだから四等分しろよ。ましてオレの誕生日なんだから、おれの分量が比較的大であるべきだろ」とは主張できない。

自分が未発達なので、「分量」がやれないのだ。

自我とはこの「分量運動」なのであって、「わたし」ではまつたくない。

分量運動を仕掛けてくるものは誰か。むろん他人だ。そのへんに転が

つている石ころや針金は、あなたに分量運動を仕掛けてこない。

それは石ころや針金が自我を持つていらないからだ。

(たぶん持つていらないのだろう。持つていないと証明はできないけれど

も)

あなたに分量運動を仕掛けてくるのは他人であり、他人がいなければ、あなたもそもそも分量運動を起こせない、というように見える。

他人がいなければ……たとえばあなたが、宇宙の果ての星でひとり、地表に座り込んでいたとする。

あなたはその状況を、「他人がいない」と思つていて。

けれどもそうではないのだ。

あなたはその状況においても、

「わたしは、マーガレット」

と思うことができるし、

「わたしは、ハゲ」

と思うことができる。

あなたは、宇宙の果ての星に「ひとり」で行つたと思っているが、そう

ではない、あなたは自我という他人を連れていているのだ。

だからあなたは、宇宙の果ての星にひとり座り込んでいるときにも、

ふと、

「この星は、ぜんぶわたしのもの」

と想つたりする。

「ぜんぶ」という分量運動を、やはり自我はやつてているのだ。

自我は、あなたにとつて他人であつて、「わたし」ではない。

自我ではない、「わたし」とは何なのか。

わたしとあなたの前に、小さなケーキをひとつ用意しよう。  
わたしはそのケーキについて、

「おれのケーキ」

と宣言し、

「おれがぜんぶ食べる」

とも宣言する。

分け前は、ぜんぶおれだということ。

おれは、「おれがぜんぶ食べる」と繰り返して言いながら、そのケーキをフォークで切り取り、あなたの口の中に押し込んでいくとしよう。

おれがぜんぶ食べる、おれがぜんぶ食べる。

おれのケーキだ。

そしてケーキがなくなつたら、わたしは、

「このとおり、ぜんぶおれが食べた」

と言おう。

このことはあなたを混乱させるだろうか?

じつさいにやつてみるとそうではない。

(帰宅してからあなたが混乱しだすという危険は大いにあるが)

あなたの体験において、「おれのケーキを、おれがぜんぶ食べる」とい

う「話」は、まったく破綻しない。

あなたの認識においては破綻している「はず」なのだが、体験におい

は破綻していないと確信される。

ケーキはぜんぶあなたの口腹に収まつたのだから、言つてることと

事実が違つていて、そのことは「分かる」。

けれども、なぜか「おれがぜんぶ食べた」ということも、話としてはそ

うだと、なぜか認めるしかないという確信があるのだ。

わけの分からぬ話だが、このわけの分からぬと、先ほどの明瞭に

「分かる」が、矛盾せず両立してしまう。

だから、頭がおかしくなったわけでもなく、だからこそ、これは本當にわからない。

おれのケーキを、おれがぜんぶ食べたという「話」において、実存するケーキがどちらの口腹にどれだけ収まつたかという、分量は関係ないのだ。

そうなると、明らかなこととして、

「目の前にいるあなたが、おれでないとは『言えない』

ということになる。

目の前にいるあなたは、あなたであつておれではないのだが（当たり前）、にもかかわらず、おれでないとは言えない、ということも成り立つてしまう。

こんな事象を、自我が取り扱えるわけがない。

自我が取り扱えないということは、あなたはこの体験を、他人に言おうとは思わなくなる、ということだ。

このように、自我は「他人」なのであつて、さらには、「他人」が自我なのだとも言える。

分量運動の近しい他人があなたの「自我」だ。

あなたは、アフリカ大陸の西岸で何用かの穴を掘つておる男たちに向けていきなり、

「わたしはさあ！」

と怒つたりしない。

あるいは彼らに向けてとつぜん、

「わたしは個人的に、ずっと借家に住むつていうのは、どうしても根本的にイヤなタイプなんだよね。あくまで個人的にだよ」と言い出したりもしない。

つまり自我が出しゃばらない。

彼らとは分量運動が近しくないからだ。

そして分量運動は、色（しき）であつて話ではない。

だからさすがにあなたは、アフリカの西岸で穴を掘つておる男たちに向けて、「借家に住むのはどうこう」というようなことは言い出さない。

そんな話はない、と、さすがにそれだけ極端な条件下なら誰でもわかるのだ。

自我とは何なのかについて、まさか「自我は他人だ」というようなことは一般にはまるで言われない。

サルトルも、誰よりこの自我と他人のことに苦しみ、まるでいじめられつ子のように必死で考へた痕跡が残つておるのだが、即自存在や対自存在、対他存在といつて、けつときよくのところ「地獄とは他人のことだ！」になるのだけれど、まさか彼は、

「そうではなく、あなたの自我が他人なんですよ」

ということには気づかなかつたようだ。

自我はわたしではなかつたとして、ではあなたの「わたし」はどこにあるのか。

「わたし」は「話」だ。

あなたの体の真ん中に通じておるものは何か。

このときさすがにあなたも、「口腹に押し込まれたケーキの分量が主題ではない」ということぐらい、魂のレベルで直覚しておる。

あなたの体の真ん中に通じておるのは、

「おれのケーキを、おれがぜんぶ食べる」

だ。

ただの、そういう、おれの「話」だ。

あなたは、あなたの体の真ん中がその話に通じておるということを、あなたの体験において認める。

だからあなたの本質は「話」だ。

あなたは話なのだ。

あなたの自我はあなたの他人で、まさかのまさか、浦島太郎のほうがむしろ「あなた」でありうるのだ。

そして何につながるのかといえば魂魄の領域につながる。  
それで、そこまではいいとして、なぜ稽古といって「古（いにしえ）」が出てくるのかということについて。

ひとつには、

「ほら、神話って、ぜんぶ古いじゃん」

という言い方で、わかつたつもりになりましようという捉え方もあるのだけれど。

## 時間量が古ではない

補足的な章。

いくらなんでも、話がむつかしそぎる。

いちおう、「話」とは何かについて、なるべく厳密に説明しているのだが、厳密にすればするほど、とてもじやないが取り扱い不可能のしろものになってしまう。

しかもこれを、自我でナルホドと理解しろということじやなく、体の真ん中に通じて「やれ」というのだろう。

無茶が過ぎるんじやないですかね……

機械のことがよくわからないんすよね、テレビとDVDのつなぎ方もよくわかつていないっす、と言っている人に、量子コンピューターの設計を「やれ」と教えたとしても、その人は頓死するだけなのではないだろうか。

まあしようがない。

稽古のことについて少し述べよう。

稽古といって、「稽」は「つながり」だ。

どうやってつながるのかといえば、単に稽（かんが）えるということ

でつながる。

あくまで体の真ん中で稽（かんが）えるのだけれども。

それを、半年間、テーブルの上に置きさらしにしていたらどうなるか。  
「まだ食べられますかねえ」

「アホか、古すぎるだろ。古すぎるどころか、それはもう古（いにしえ）だろ」

ということになる。

半年間といって、たとえば半年前に建てた家ならまだ新築で、古いところがまつたく新しいものだ。

あるいは、ウイスキーを樽で寝かせるとして、熟成が半年ならまだスピリッツでしかなく、とてもじやないが飲めたものじやない。

だから、「古」というのは単純な時間経過ではないのだ。

つまり、時間「量」ではない。

時間量を超えて、もはや時間量ではなくなつたもの、それを「古（いにしえ）」と呼ぶ。

古（いにしえ）というものがあり、古典というものがあるのだ。

古典といえば、落語とかシェイクスピアとか、ベートーヴェンとか白鳥の湖とかだが、古典とは「古い典拠がある」ということなので、たとえば日本の神話や西洋の神話だって、古事記とか聖書とかの古い典拠があるので、古典と呼んでいいのだ。

稽古といい、稽古がつくというのは、そうした古典について、経過した時間量、存在としての距離量を感じなくなる、ということを指す。それらは、昔のことだし、昔のものなのだが、その「昔」という時空的距離感をなくす。

高山彦九郎が九州で切腹して果てたのは、大昔のことだが、それを遠いことに感じているようでは、高山彦九郎の話はないし、仮に高山彦九郎の芝居をしようとしても、その芝居は成り立たない。

高山彦九郎を遠いこと感じている人は、稽古がついておらず、生（なま）を信じ、生（なま）を振り回し、生（なま）に振り回され、生（なま）をやっているだろう。

口うるさい課長にイラツとくる、今週もまだよ、というようなことを——時間経過的な日々を——自分につながっているすぐのことに感じ、高山彦九郎というと、

「誰それ笑」

と、自分に何のつながりもない、はるかかなたの遠くの何かだと感じ、そこに侮辱を乗つけている。

この人が舞台に立てば、舞台上に高山彦九郎は出現せず、「ふだんは課

長とかにイラツとしているんだろうね、と察しがつく人」が出現する。

なんと絶望的な舞台だろう。

稽古の日々というのも、実在はするのに。

まあいや、とにかく、稽古というのは時間量の否定だ。

時間量の否定であり、時空量の否定であり、それは重力の否定でもある。

説明は、またむつかしくなるので、説明はなしでいこう。

そもそも、「時間」というものはその存在がはつきりしない。「時間」というそれじたいが怪しいのだ。

われわれは時間を「体感」できてしまうから、時間をすつかり存在しているものと思い込んでいるけれども、じつはその存在はよくわからぬ

たとえば一秒間で光はどれぐらい進むか。

それについて、まず一秒ってどれぐらいかというと、「時計見りやいいじやん」ということになる。

なるほどたしかにそうだ。  
でも、よくよく考えると、

「この時計の一秒ってのは、どうやって一秒って量つているんだ？」

「それはまあ、何か別の時計で量つているんじゃないの」

「ばかやろう、それじやおめえ、またその時計も、別の時計で量りなお客なきやいけないじやねえか」

さあそれでは、時計以外のもので、どうやって一秒を量るのか。

（※一般には時間は「計る」の字を当てます。「時計」という語を参照し

てください)

思いつくのは、一日が過ぎる時間を分割して、一秒を割り出す方法。

「一日」は、地球の自転で決まっているので、時計に頼る必要がない。

が、それだって、地球の自転が必ずしも一定とは限らないので、怪しいものになつてくる。

それで、しようがないので、水晶の膜に力をかけて圧電効果から周波数を取り出したりするのだが（クオーツ）、それだってけつきよく、「どれが“一秒”なの……？」

という原器が存在しないのだから困らされる。

しかも、相対性理論によつて、時間じたいがまったく一定のものではない、相対的なものだとということなのだから、ますます時間というのは存在が怪しいものだ。

それで、ついには落語みたいに、

「いつのこと、一秒間に光が進む距離を測つて、光がその距離を進むのに必要な時間を、一秒つてことにしたらどうでしよう」

「なんだてめえ、わけがわからなくなってきたぞ」

みたいなことになるのだ。

われわれは、時が進むもの、時が流れるものと思つてゐるが、じつはそれはよくわからない。

柱時計の振り子が揺れていの映像を見て、「時が、流れている……」

と思ひ耽ることはできるが、「それ逆再生ですよ」と言わわれると、

「ええっ！？」

ということになる。

われわれは、振り子運動を見ても、時が進んでいるのか戻っているの

かを感じ分けることはできないのだ。

われわれにとつて時の進行とは、いわゆるエントロピーの増大方向になる。

エントロピーは、よく言われる「雑然さ」の尺度だ。

ちゃんと化学的には計算されるエネルギー量であつて、はじめのうちはエンタルピーとごつちやになつて悩まされるのだ。

雑然さはつまり、ほつたらかしておくと、散らかっていくでしょとうこと。

部屋の中で大暴れした結果、

「なんかすべての本が本棚に収まつた」

ということはふつうない。

大暴れすると、部屋は散らかる方向へ進んでいくのだ。

ピシッと並べられていたいくつものグラスは、大きな地震がやつてくるたび、バラバラになつて散乱する方向へと進んでいく。

大昔にピシッと建てられた建築物も、五百年後、わやくちやになつているというのを見て、われわれは「時が流れた」と感じるのだ。

そして、稽古というのは、わやくちやになつてゐるわれわれをピシッとさせようとする営為だから、字義のとおり時の流れを逆行させようとする行為になる。

重力の反対方向、浮く方向、時が戻る方向にはたらくのだ。

それが稽古だ。

見事に、何の説明にもなつていない。

まあいいじやん、そもそも、稽古が説明で「分かる」のであれば、世界中の誰も稽古に苦労はしない。

稽古が説明で「分かる」のなら、人工知能にだつて稽古はつけてもらえるだろう。

でも人工知能の情報では、浮身は掛からねえなあ。

人工知能には「体」がないからな。

とりあえず、古というのは時間量のことではない。

時間量というのは、われわれの体感であり、その体感は錯覚だ。

われわれは錯覚を体感できてしまうからな。

われわれは、錯覚を体感できてしまい、錯覚をこそ、確信してしまう

のだ。

時間量はない、時は流れていらない。

錯覚だ。

ホントはどうかは知らん、ただ「ありうる」という、おれの話だ。時の流れがないのであれば、じつさいにあるのは、生（なま）という、「雑然さのパーティ」だ。

バラバラのわやくちや、それで、何の「話」もなくなってしまう。

「解体の向き」と、おれがよく言うやつだ。

雑然さが減少に向かう集いもある。

雑然さが減少に向かうことは、体感上、われわれには「時の流れが逆行している」ように感じられる。

だからそれが「稽古」と呼ばれる。

解体の向きは、雑然さのパーティで、統合の向きは、稽古のパーティだ。

雑然さのパーティでは、話が解体されて失われていき、稽古のパーティでは、話が統合されて創り出されていく。

雑然さのパーティは、世界を失つていき、稽古のパーティは、世界を獲得していくのだ。

自我はその性質上、時間量を言いたがる。

「五時間も筋トレしました」

と。

その「ヘヴィ」な向きを言いたがる。

時間経過的な日々で、パワフルな日々だ。

だが稽古というのはそうではなく、五時間の稽古があつたとしたら、その五時間の稽古でどれだけ古（いにしえ）にさかのぼれたましたか、ということになるのだ。

こうしてけつきよく、むつかしい話になつてしまふのだが、むつかしいことばかりえんえん考えていてもしようがないところだ。

考えていてもしようがないので、稽（かんが）えろ、稽（かんが）えることばかりを積み重ねろ。

時間経過的な日々が実在するのは、誰でも知つてていることだが、その逆、時間が遡つていく、稽古の日々というのも実在する。ただしそちらを肯定する「システム」は存在しないし、そちらを肯定する人は少ない。

## 話が「壊れている」ことに気づけ／①あてがう器官

この章にも大きなショックがある。

だから、あまり深入りはせず、おそるおそる「そうかもな」と覗き見するのがよいだろう。

「壊れている」ということ。

たとえば、家電を購入したとき、初期不良がある場合がある。

電源は入るが、駆動しなかつたり、ツマミを動かしても、反応がなかつたりする。

そのときは、それだけでも少々のショックがある。

「壊れている」ということは、われわれにとつてショックなのだ。

子供が、プラモデルを購入し、開封するといくつかのパーツが割れていったというような場合、子供はそれだけでショックを受け、泣いてしまうかもしない。

壊れているということは、「体を為していない」ということであつて、それは解体の向きであり、解体ということじたいがグロテスクだ。われわれ素人が、生きている大きな魚を捌こうとすると、魚は暴れ回り、台所にはなかなかグロテスクな光景が広がってしまうだろう。

最もささやなかな例を挙げたい。

わたしは子供のころ、両親からわざとらしい精神教育をほとんど受けてきておらず、いわゆる「放任」という具合の環境に育つたのだが、それでも子供のころには幾度となく、

「男のくせに、ピーピー泣くな！」

という叱責を受けはした。

それは、教育というより、ただわたしがピーピー泣くのに、親が苛立つて言いつけた——怒鳴りつけた——ということにすぎなかつたと思うが、それでもわたしは幾度となくそう言われ、叱りつけられたことを覚えている。

このことは、子供心にそれなりにつらさがあつた。なぜなら、ピーピー泣いているということは、すでに何かつらいことがあつたのであり、それをなぐさめてもらおうと甘いことを考えてピーピー泣いているのだから、そこからさらにハードな追い打ちを食らわされるというのは、期待を大いに裏切られてつらいことだつた。

男のくせにピーピー泣くな！と叱りつけられて、とうぜん、わたしの泣き声は、反発的に音量を増したように記憶している。とはいえて今になつて、耳朶に残つてゐるこの叱責、「男のくせにピーピー

「泣くな」は、一定の教育として、わたしの精神の構造化に寄与している。

泣くか泣かないかということはどうでもよいと思うが、最終的に「男だから」という突つ張つた理由で、わたしは鞠（つよ）くなくてはならないとわたし自身で思つてゐる。いつからか、大人になつたときからか。

あるいは、男になつたときからか。

なぜ男だからといつて鞠（つよ）くなくてはならないのか？それにについては、さてね、とわたしは思う。知らんね。男でも別に、鞠くなくてかまわないのかもしれないけれども、仮にそれが正論だつたとして、わたしはわたしのために用意してもらつたせつかくの正論を、こちらのほうで棄却しようと思う。わたしは、男だから鞠くなくてはならないという暴論のほうを抱えて、愚かで無駄のある生き方をしようと思うのだ。なぜそんな愚かなことをするのかと問われれば、「男は鞠くないといけないからね」と混ぜ返し、この問答を終わらせることにしよう。

それで、「男のくせにピーピー泣くな」とか、「男だから鞠（つよ）くなくてはならない」とか、そうした言いようは男女差別であつていわゆるポリコレ違反だ。発言は問題視されるだろう。

「男のくせに」とか「男だから」とか、そういう言い方は誤つてゐることとはわたしにも分かる。わたしも現代を——いま、二〇二五年の末を——生きているので、ポリコレ違反というコモンセンスは了解できる。ただ、それならわたしは問いたいのだが、つまるところ、何十年か前に父がわたしにほどこした教育は「誤り」だつたということなのだろうか。男のくせにピーピー泣くなとわたしは言われた。これが男女差別でポリコレ違反だというなら、それが何十年前のことであれ、「誤りです」「取り下げるべきです」とはつきり言つてみてもらいたい。

わたしの父の教育が、父からわたしに向けられたありふれてなつかしい教育が、「誤り」だつたのか。はつきりそう言つてみてくれば。N H K の

テロップにそう表示してみてくれ。「彼の父の教育は誤りでした」と。

そのように詰め寄られると、まずすべての人が、

「いや、そうじやなくて……それは、その当時のこととして、決して誤

りだつたわけではないと思うよ?」

「だってそういうの、そもそも人によるじゃん?」

と、よくわからない弁解をする。

では、父がわたしに向けたその教育は「正しかつた」のか。

正しかつたというなら、それはそれで、そのようにはつきりと言つて  
もらいたい。

そのように詰め寄つてみると。

「うーん、まあ、そこまで言うなら正しかつたんじゃない? そのお父  
さんから、あなたに向けての教育としては。まあ正しかつたんでしょ、  
あなたの場合」

という、いよいよでたらめな回答が出てくる。

この不毛さと、いらだたしさと、ストレスはいったい何なのだろうか。

わたしはこの仕組みを知つてゐる。

これは「話が壊れている」のだ。

話が壊れていて、そこに露出しているものはすでに「グロテスク」な  
のに、われわれはこのグロテスクなものを直視したがらないため、その  
後えんえんと「おためごかし」を続けてしまう。

この場合、話はどこで壊れているのだろうか。

それは、この場合のポリコレ違反とか、男女差別とかの体感が、じつ  
は何の話でもなく、何の意見でもないというところで壊れているのだ。

^^それは話ではなくて、ただの「政治」だVV。

ただの政治を、自分の「話」とか「意見」にすり替えてゐるので、結果、  
話をしているつもりのそれが、しだいに話としてそれは壊れているとい  
うことになる。

この世の中の誰も、ひとり四十五年前にタイムスリップしたとして、  
周囲にいる頑固親父たちに「ポリコレ違反ですよ!」「レイシストです」  
などという説教はしない。

当時、政治的にそのような説教がまかりとおる局面は醸成されていな  
いからだ。

わたしが臆面もなく、彼に堂々と、

「あなたがやつてているのは、あなたの話でもなく、あなたの意見でもな  
い、ただの政治ですよ」

と言いつけたらどうなるだろうか。

彼はおおいに気分を害するだろう。

彼は正論を唱えたと自負して昂り、気分を良くしていいたかもしれない  
のに、まさか「政治に支配されているだけです」なんて言いつけられる  
とは。

けれども、そうして気分を害させるのが目的ではないにせよ、

「そもそも、ポリコレと言いますが、ポリティカル・コレクトネスと言  
う場合、ポリティカルは政治的なという意味ですよ」

とは申し上げなくてはならない。

本人がポリコレの旗を振つたところ、それを政治と言わされて気分を害  
するというのでは脈絡が破綻しそうだ。

「たとえば、戦前・戦中は、『鬼畜米英』が政治的な正だつたでしょう。  
けれども敗戦後、場当たりに『軍部の暴走』を言うのが政治的な正にな  
りました。政治的に局面が変わつたんですね。そこには一貫した正論な  
んでありませんよ。あくまで“政治的な”って前提をしているのですか  
ら。あなたが言つているポリティカル・コレクトネスはまさにその語義  
なのであって、政治的な局面が変われば、そのときはまたあなたの発言  
も局面のとおりにコロッと変わりますよ。あなたは自分でポリコレと言  
いながら、ご自身が政治に従属しているということをご存じなかつたの

ですか」

さあ、その上で、いまいちどわたしからのリクエストに応じてもらいたい。

父がわたしに向けた教育は「誤っていた」のか。父がわたしに向けた教育は「正しかった」のか。はつきりと言つてみてほしい。

陳腐化して逃げ回るのはそろそろやめにして。

「男のくせにピーピー泣くな」

こんな言いようが、許されるのか。

それとも、こんな言いようでこそ、教育なのか。たぶん現在、ほんどの人が、この単純な問い合わせに答えられなくなつていてるようだ。

ここに組み立てられている、ストレスフルでグロテスクな局面は、わたくしが意図的に組み上げたものにすぎないから、あなたはあわてて嘔吐する必要はない。

もうその組み立てを解除してしまおう。

話が壊れているのは、そもそも、話に自我のインター・プリターをあてがつてあるからだ。

あてがう器官じたいを誤つていてる。

浦島太郎は、誤つていたのか、正しかったのか。カメは、誤つていたのか、正しかったのか。

乙姫は、誤つていたのか、正しかったのか。玉手箱は、誤つていたのか、正しかったのか。

何を言つてあるんだお前？

「話」に誤つてあるとか正しいとかいうことはない。話は量ではないし、パラメーターでもない。

それなのに、何を量つてあるつもりなのだ。

^^体の真ん中が機能していないので、自我をあてがうことしかできない  
VV。

父の、まるで洗練されてはいない教育は、それでもいちおう子のわたしの精神に、突つ張つた鞠（つよ）さの一柱を組み入れはした、という、これはただの「話」だ。

もちろん逆に、その野卑な教育——のつもりだったもの——が、むしろ子の健全な発条（ばね）をくじくことになつた、という話もどこかにはありうるだろう。

無理やり分類するなら、わたしの話は前者だったということになるが、わたしの「話」は分類として存在するのではない。

（賢明な方は、「分類」という字から、すでにそこに分割・自我のはたらきを読み取るものと思います）

わたしはわたしの話を生きているし、わたしの話を生きてきたのであって、その話のうち、ごくささやかな一部をあえて取り上げて例に出しあただけだ。

この場合、主題は「男」だ。

わたしの体の真ん中は、いちおうその主題に一定の合一を得ている。

「男だから鞠くなくてはならない」

体の真ん中が主題と合一を得ているので、それはわたしの「体験」だし、わたしの「話」だ。

これのどこに自我を出すのだ。

自我の出番はない。

自我は、この「話」に対して、常に侮辱的にはたらき、話を解体しようと/or>する向きにはたらく。

「言いたいことは分かりますけど、それってけつきよく男女差別ではあるわけで、マッチョイズムの温床になつていくわけじゃないですか。言

つてること分かります？」

そして自我は、誰にとつても「他人」だ。

だから「他人」がポリコレで飛び掛かってくるわけだ。もちろんわたしはここで、ポリコレについての議論をしているのではない。

どう見てもここでの主題は「ポリコレ」ではない。

ここでの主題は「話」および「それが壊れている場合のこと」だ。ところがじつは、この「主題」というものが、多くの人において思っているほどたしかに捉えられない。

主題は、体の真ん中でしか捉えられないからだ。

自我で主題を捉えようとしても、自我は、主題を解体し、分離し、分類することにしかはたらかない。

「けつぎよく何を理解したらいいんですか？」

と、行方不明になる。  
(理解は解体であつて体験ではない)

自我は、色(しき)の器官であり、「量」を担うから、「量る」という見当違いのことが立ち上がり、わけのわからないことになつていつてしまふのだ。

「つまり、お父さんことをとても大切に思つていらつしゃつたつてことですよね」

「え？ そんなことぜんぜんないけど。なんでそうなるの」と、あてがう器官じたいが違う。

いま、「コミュ力」とか「コミュ強」とか、そういう言い方をする人が世の中に多い。

その言い方じたい、「話」に対する侮辱的な振る舞いが露出しているのである。「イケメン」というような言い方と同じだ。

現代語というわけではなく、スラングというわけでもなく、徹頭徹尾

「侮辱を意図した、そのための用語」だ。

それで、コミュ力と呼ばれているものの振る舞いについて、それはそれでじたいでかまわなければ、そのコミュ力というものは、「話」のやりとりをする能力を指しているものではまつたくない。

じつさい、コミュ強と呼ばれているような「陽キャ」の人が、どれだけ自分を服装と髪型と強引な笑顔と、その強い気勢で粉飾したって、彼が侮辱的な人でなかつた試しはないし、彼がグロテスクでなかつた試しもやはりない。

かといつて、コミュ障の陰キャが話のやりとりに優れているというわけでもまつたくない。

ともあれ、そのようにして「話が壊れている」のだ。

あてがう器官じたいが誤つてているのだが、そうは言つても、体の真ん中はすでに機能していなないし、体の真ん中に向けては侮辱しか湧かなくなつてているので、さしあたり短期的にはどのようにも処置できない。

## 話が「壊れている」ことに気づけ／②主題の保障と阻害

漫画「ドラえもん」の主題は、「平凡な少年の、果てしない夢」だ。

「ドラえもん」は、ジャンルとしては、コミックのSF(サイエンスフィ

クション）ということになる。

ただし、現代のアニメのドラえもんがどのような様相になっているのかについては、わたしはまったく知らない。

よつて、わたしはあくまでもともの、藤子不二雄Fの描線によるドラえもんのことについて言及しているということにしたい。

漫画「ドラえもん」はフィクションだから、その中にいくつかの約束事が出てくる。

たとえば、

「ご両親は、とつぜん現れた正体不明のロボットを、なぜ平気で同居人として認めて受け入れるのか」

というような疑問が、現実的な視点からは出てくる。

多くの人は、これについて、

「まあまあまあ、そこはマンガですから」

「そこは、『設定』を受け入れられないと、ファンタジーを楽しめないんですよ」

「そういう『シチュ』だから、でいいじゃん」

と、されたふうの解説と発想をするものと思うが、じつはそれらの解

説は正鵠を射てはおらず、本当にはもつとちゃんととした理由があるのだ。正しくは、

「登場人物らによるドラえもんの受容は、それによつて当作の主題を阻害しないから」というように説明される。

当作の主題は「平凡な少年の、果てしない夢」だ。

のび太のご両親がドラえもんを理由なく受け入れたとして、そのことは、主人公のび太が平凡な少年であることを阻害しないし、その少年が果てしない夢を描くことも阻害しない。

このように、フィクションというのは、主題を阻害しないかぎりにお

いては、必ずしも事象を現実基準に沿わせる必要はないのだ。

そしてむしろ、平凡な少年というのは、物事をそこまで「現実」という辞書に突き合わせてはいないものだ。平凡な少年は、現実を生きているのではなく毎日を生きている。

だから、「現実」より「毎日」が優先され、のび太のママが「ドラちゃんのいる毎日」を過ごすほうが、表現として主題の保障にはたらくのだ。仮に、ここできゅうに、のび太の両親がドラえもんに対し、

「あなたはいったい何者ですか、警察呼びますよ」

と現実風味のことを言い出すなら、へへその視点は平凡な少年の所有する視点にそぐわないvvのであり、主題を阻害することになつて、そのこのほうが作中の表現として単純な「失敗」「的外れ」となる。

ときにそうした、「のび太のママがドラえもんについて警察を呼ぶ」というふうの、安易でふざけた異化の導入は、そもそもに侮辱と解体の意図が混入しており、その場合の失敗というのは作品世界に対して「致命的」な失敗——および致命的な破壊——になりうる。

「のび太って、どれだけ季節が循環しても、ずっと小学四年生のままだよね笑」

もちろんそうした言い方も成立するが、それも先ほど述べたのと同じ、主題が「平凡な『少年』」のものなので、のび太を加齢させる必要は当作にない、というのが正しい説明になる。

彼が年次をあげて青年に近づいていくというようなことは、ドラえもんの主題からは遠ざかるということであり、それもまた作中の表現としては失敗となる。

あるいは仮に、ヒロイン「しづかちゃん」を、もつと性的かつ美麗に描くという案はどうだろうか。

作画の変更によって、しづかちゃんのバストが膨らみ、唇は色づき、四肢はなまめかしくなり、声は蠱惑的になる。

そうした現代風のアニメに仕立てたならば、すでに少年性を喪失した視聴者に向けて引力を発することはできるかもしれないが、それはやはり「平凡な少年」が見る少女の像ではない。

よって、たとえそれによつて視聴率が増したとしても、作中表現としては致命的な失敗となり、そのときドラえもんはすでに主題阻害によつて破壊されている。またそのときの破壊は致命的なものだから、そのような見当はずれの改作は、「ドラえもんの版権を買った者による二次創作、同人誌」とまで言い捨てられるのが妥当だ。

主題、「平凡な少年の果てしない夢」を描ききるのに、おそらく主人公のび太は未だ精通をしていない。よつて、のび太がヒロインしづかちやんに向けるスケベ心というのは、それじたい破廉恥なほどにあるにせよ、そこに未だ凌辱の発想と機能は乗つかつていない。

精通前の「平凡な少年」において同世代の女の子は、特にあこがれのガールフレンドにおいては「清らか」なものであつて、だからこそヒロインしづかちやんの裸体はいつも清潔さを担うバブルームで湯気をまとつて出現する。その出現は「女の子的」であつて「煽情的」ではないのだ。

なお、昭和生まれのわたしから補足させてもらうと、ドラえもんが連載されていた昭和の当時、小学四年生というと、まだ体育の時間には男女が同室で体操服に着替えるのがふつうのことだつたようだ。そこでやはり、脱衣にかかわつて性的な緊張感は起つたが、かといつて当時の少年と少女はそこに直接の凌辱のヴィジョンをひもづけていたわけではまつたくない。つまりありていに言うと、それなりにドキドキはしたがそこまで「エロく」はなかつたのだ。当時の子供たちの手元に、いわゆる性癖とオカズを加速する電脳通信端末はまだない。そうして加速されず未発達のままの神経回路は、女子が着替えていたからといつて少年たちの陰茎にただちに興奮と勃起をもたらすというものではなかつた。

加えて、同時代のころのテレビ番組の録画などをウェブ上で探すことは可能だと思うが、それらを観るとゴールデンタイムの番組で女性のバストがわざとらしくあらわになつていてるシーンがまるで「お約束」のように挟み込まれてゐるのを確かめることができよう。そして、それこそ政治的環境が違つたのだと言えるが、その映像に出てる「ハダカ」は、なぜかそこまで猥褻なものという印象を与えてこないのだ。よつて、当時のドラえもんの作中に頻出するしづかちやんの「入浴シーン」の描き出しも、それと同じ位置にあるものだつたとわたしは説明しておきたい。

しづかちやんの、湯気をまとつた裸体にデレデレになりはしても、少年の夢は少女の凌辱を思い描くことには向かわないのだ。

それどころか、ドラえもんの未来道具を手にすると、のび太はすぐに、「そうだ、いいことを思つた！」

と言つて、その夢が広がりはじめると、もうのび太はヒロインのヌードのことなど覚えていない。

のみならず、学校の先生に叱られたこと、テストで0点を取つたこと、ママに小言で罵られたこと、ジャイアンに暴虐を受けたこと、スネ夫にあてつけられたこと、たちまちすべてのひがみを忘れ去り、夢がのび太を羽ばたかせる。その夢はまた、未来道具に象徴されて、「未来つていいなあ」と、少年が未来を夢そのものに思うといふことにも構造づけられているのだ。

夢によつてたちまちひがみを忘れ去る、彼のそのあまりの速さは、のび太が眠るときの速さに等しい。彼はじつは、落ちこぼれでいながら「のびのびとして太い」のだ。彼ほど、日々貶められていながら、呪いに縁遠い者は他にいない！

とはいへ、未来の道具を借りて夢に羽ばたきつづけるといふのはいさか虫の好すぎることだ。それで、調子づきすぎたのび太は、未来の道具もさまざまに裏目に出で、けつときよくは道具頼みではどうにもならな

いというラストシーンを味わう。借り物の道具ではなく彼自身によつて羽ばたかなくてはならない——彼自身で未来へ向かわねばならない——のだろうが、それはまだ遠い話として、何はともあれのび太の一日は終わっていく。少年の夢は未だ夢のまま……しかし日中のそれはたしかな夢ではあつた。のび太はその夜、床についてすぐに得意の深い眠りの中で、夢の続きを追いかけるだろうということが、受け手の想像力に描き出される。

このようにファイクションというのは、その話が「主題を体験させる」ということに成功していればそれでよいのであって、それが成されるかぎりは種々の表現を必ずしも現実に沿わせる必要はない。一方、こまごまとしたこともなるべく主題を保障するように描かねばならず、主題を阻害するようなものは慎重に排除しきらねばならない。作家はそのことに全身全靈を傾けねばならず、そこでのび太の年齢が連作の中ですつと小学四年生であることへの指摘などまつたく見当はずれのことなのだ。わたしは以前、かつて流行した「新世紀エヴァンゲリヲン」についてのコラムを書いた。いわく、

「新世紀エヴァンゲリヲン、いわゆる“エヴァ”には、フレーバーだけが丹念に詰められてあって、作中には何の話もない」

「これはそもそも“話”ではないのだ」

ということ。

めくるめく、こだわりのフレーバーが、色とりどりに現れてきて、そのフレーバーが視聴者を酔わせてとりこにするのだけれども、それは本稿に引き当てて言うなら、あまりに典型というほどの「色（しき）」だ、「話」ではまるでない。

このことを、この章では少々テクニカルに視ようということなのだが、たとえば典型的には、「壱号機」等と取り扱われる機体について、

「充電率、○%！」

と言い出すのはよくない、ということになる。

なぜなら、充電率と言い出すと、

「えつ、動力は電力なのか」

ということになってしまいし、

「充電ということは、バッテリーを積んでいるのか

ということになってしまいからだ。

さらに、

「そのバッテリーって、何ボルトで充電するやつで、何アンペアアワーの電荷容量を持つているやつなのか」

「充電器のほうは、メーカーはどこなのだろう、三菱重工とかが作っているのか」

「ネルフの基地に電力会社のインフラが敷かれているということ？」

ということになってしまい。

さらにもつと致命的なることで言えば、それがバッテリーによる電力駆動だということになると、もうだいたいバッテリーの容量から壱号機の出力できる仕事率（ワット数）が算出できてしまうではないか。バッテリーで動いているならバッテリー容量以上の仕事はどうしたって出力されない。

そうなるともう、エヴァがすごいというより「バッテリーがすごい」という話になつてしまふ。

だからせめて、充電率ではなく「エネルギー充填率」というふうにしておくべきだつたろう。そもそも当作においては、エヴァ側にせよ使徒側にせよ、その強大なエネルギーの源を神話に結びつけてごまかそうとしているのだから、そこに「充電」というようなノンファイクションの語をあてがつてはいけない。話が壊れてしまう。

新世紀エヴァンゲリヲンは、主題のレベルで、それをファンタジーに

するかＳＦにするかということの取り違えがあるのだ。

新世紀エヴァンゲリヲンを、メカニカルないわゆる「ロボットアニメ」にしたかったのであれば、せめてエヴァの機体駆動方式については設定を作りこまなければならなかつたし、もしそうではなく、当作を「ファンタジー」にしたかったならば、エヴァの機体駆動は徹底して神秘的な動力のものとしなくてはならなかつた。

「修理を行なうメカニックたちは、どこでエヴァ整備の知識と技術を教わつたんだろう。この人たちつてネルフの職員？ そもそも修理の部品は誰が作つていてどこから仕入れるんだよ」

「シンクロ率を測定している“装置”は、いつたい何のセンサーで何の情報を計測してそのパーセンテージを算出しているんだよ。こんな便利なものを作れる人がネルフにいるってことなの？ そもそも百分率だけ算出されているけどシンクロ率を測定する元の単位がわからん」

「パターん青、使徒です、つて、その使徒判定装置はどういう仕組みで、

誰が作ったの。なんでそんなリトマス試験紙みたいなものがあるの」  
そうして当作は、最初から何もかもがぐちやぐちやになつてしまつてゐる。片面ではファンタジー——あるいは神話のパロディ——の骨組みにしておきながら、もう片面ではリアルでシリアルなハイテク戦争物を描きたがつてゐる。そこでリアルでシリアルに考えるなら、人類の外敵に抗するエース機体のパイロットは優秀な軍人に担わせる以外にない。そしてそうした軍人は士官学校と訓練によつて秀でた戦士として輩出されるのであって、それを「よくわからない”ネルフ勤務のおじさん”の中学生の息子さんに個人的に人類防衛を任せよう」なんてわけのわからない話にはなりえないのだ。

そもそも使徒の側だつて、人類を滅ぼすつもりなら一基ずつやってくる必要はない、戦力をまとめて叩きつけたほうが手つ取り早く目的を達成できるのは明らかだ。

昔からある「ウルトラマン」は、シリアルな人類の敵と格闘して、それを撃退するという軍事が主題の作品ではない。もつと単純な「正義」を子供向けに、力と人の姿で現すのが主題の特撮だ。けれどもエヴァはシリアルスぶりながらこの子供向け特撮の「ウルトラマン」の構図を採つてしまつてゐる。

その他、言い出すときりがないほど、当作は「話」としてはめちやくちやなのだが、それはむしろ恣意的なことであつて、そもそも「話」と「色（しき）」は相互に侮辱的にはたらくのだから、「話」を解体しまくればこそその荒唐無稽なフレーバーが鋭く立ちのぼるのである。だから本作は、はつきり言つてわざと話を壊している。話を壊することで、思春期の精神的なこじれ、たしかに大人になりそこねるかもしれないという時期の、不衛生な中学生フレーバーを、そのままに封入してゐる……ある面ではオナニーを恥じ、ある面では厚かましくハーレムを空想し、ある面では無垢を気取りたがり、ある面ではロボットアニメのオタクである面では軍事を気取り、ある面では自己ヒロイズムを空想し、ある面では毒親の被害者を気取るという、けつきよくはどこまでも受け身で主体性のない幼稚なままのナルシシストがそこに露出してゐるのだ。彼が自身で用意したものはそこには何ひとつなく、世界中のすべてが——神話までが——自分に何か特別なものを用意すべきなのだと要求し、そのことを自分ではピュアだと本気で思つてゐる。そこには酸鼻な瘴気が漂つてゐるが、その瘴気が自己愛によつてまるで幽玄の美たるかに飾り立てられており、その身も蓋もない厚顔無恥が一定の視聴者を本性において共鳴させファンタイクに惹きつけたわけだ。たしかに大人になりそなたかもしれないという中高年はじつさいの世の中にいくらでもいるのだから。

話と色（しき）は相克するので、色（しき）のプレイヤーは恣意的に「話を壊す」のを自己の活動とする。とはいへ、もともと成り立つてい

ない話を壊すことはできないので、壊すための話が必要だ。『エヴァ』の場合はもともとラテン語で「福音書」の意味だ。

もともとの福音書は「罪の赦し」の話だから、それを破壊するためには作り手は「シン(Sin)」の語をあてがう。すでによく知られているように、「シン・〇〇」と言いたがる。Sinは英語で「罪」の意味だ。

ほかの作品の例にも目を向けたい。たとえば一時期流行したマンガ「進撃の巨人」が、まだ二〇二五年のわれわれの記憶にわずかな新しさを残しているが、当作は「立体機動装置」によるバトルシーン形成が第一に読み手にとって印象的だった。もちろん、手持ちのボンベのガスでいどを噴出したところで、あのように人体を飛翔させるということは現実には不可能だ。ガスの運動量が足りないし、仮にじゅうぶんな運動量を得たとしても、空中であのよう方向転換はできない。立体機動装置の飛び方は「ロケット」でしかないのだから、その転回運動はどう急いでも大きく膨らんだ弧を描いてしまうだろう。

けれどもそこはフィクションだから、そのことが主題を阻害しないかぎりは現実に即さなくてよい。兵士たちは立体機動装置でクイックに飛び回るべきだ。

当作のもともとの主題はきっと、「思春期じみた少年の心象風景」そのものにあつただろう。それこそ「実存」のグロテスクな怪物どもに対し、それを斬りつけて暴力的に斃したくなるし、一転、震えて壁を作り、もう見なくて済むように遠ざけておきたくなる。そうした思春期の慟哭がもともとの主題で、その主題のうちにあらかぎり、立体機動はいくらでも飛び回つてよい。

けれどもたとえば、作中に通常の大砲などが出てくると、話は損傷し始めてしまう。なぜなら、火薬で鉄球を飛ばすというのはガス圧の技術であって、ガス圧の技術を言い出してしまうと、

「いやいや、人をこれだけ自在に飛翔させられるガス圧の技術があるなら、もっと優れた大砲をいくらでも作れるだろ」ということになつてきてしまう。

そして、そのようにいつたん作中世界が主題を見失い、たとえば軍事的なイメージのやりとりに逸脱し始めると、

「指揮系統がめちゃくちやすぎるだろ」

「兵長が作戦内容を決定するなよ、兵長ってそんな階級じやねえよ」

「そもそもこんな規模の集まりを『兵团』とは呼ばねえよ」ということになつてきてしまう。

主題を見失つて軍事的なふうを言い出した時点では、もう「進撃の巨人」は壊れてしまう。

なぜなら、そのとたん「調査兵团」は兵团でも何でもない、「ただの部活動」

になつてしまふからだ。

顧問の先生がいて、格の違う先輩がいて、厳しいリーダーがいて、共に助け合うメイトがいて、仲たがいもあつて、という、典型的な部活動のイメージだ。

そもそも王国であろうが共和国であろうが、政権がある国は政権が軍事行動の内容と目的を決めるのであって、軍隊が軍事行動を決めるのではない。

当たり前だ、たとえば自衛隊の行動は日本政府が決定するのであって、自衛隊が勝手に会議を開いて勝手に軍事行動を決定してはたまらないだろ。関東軍じやあるまいし。

(いや、かつての関東軍でさえ、さすがに国内にあれば勝手に軍事行動はしなかつたはずだ)

もし軍隊が勝手に軍事行動を決めるならそれは軍事国家であつてもう軍じたいが政権だ。その場合は国号も変わつてしまふ。

政権を担わないなら、彼らはもはや軍でさえなく、ただの愚連隊、ただの山賊だ。

「進撃の巨人」の軍事力は何らのシビリアン・コントロールも見られないし、かといって、王権の樹立および王家の封建にかかる歴史も人々に共有されていない。

王権の樹立と王家の存続が神話の権威を持つていないでは、王は王として主権の当事者になることができないので、それでは荒唐無稽なただの「王様ごっこ」になってしまう。

また、国の主権が王権なら人々は臣民あるいは領民として暮らすことになるのだが、当作では人々はまったく市民のように暮らしているし、領地を安堵された門閥貴族たちの面影も見当たらない。

だから、このあたりのことが収束していく先、

「……これって部活動なの？」

ということになってしまふのだ。

人類が露骨な防壁の内部に引きこもり、外部から迫つてくるグロテスクあるいはコズミックホラーの怪物に怯えて戦うという点、およびその対抗する戦力が、親に細工された思春期の少年ひとりにのみ帰属しているという受け身ヒロイズムの点は、「新世紀エヴァンゲリヲン」と「進撃の巨人」で共通している。またそのじつさいの戦いが、ヒステリックであつたり転じて勇敢ぶつたりという、二股膏薬を示すのも両作に共通しているだろう。「エヴァ」のほうが近未来イメージの趣味で、「進撃」のほうが中世イメージの趣味だったというだけでしかない。「エヴァ」のほうは「ごく小さい個人的なサークル活動」という趣きで、「進撃」のほうは「それなりに規模がある部活動」という趣きだ。

わたしは「進撃の巨人」の話の顛末を知らないのだが、「エヴァ」の類型から推測するなら、「進撃の巨人」は何かしらもともとある神話の改変という形でしか締めくくりに向かえないはず。つまり「新世紀○○巨人

神話」という形を最終的に採るはずなのだ。

「話」と「色（しき）」は相克しており、前者は統合の向きに現れ、後者は解体の向きに現れる。それで、色（しき）が解体の向きといつても、解体するためにはもともと成り立つてゐる何かしらの話が必要だ。その解体（破壊）の嘗為は膨らませていくうちどうしても、「話」の出現した根源である神話に行き着かざるを得ない。

新世紀エヴァンゲリヲンのテーマソングでは「少年よ神話になれ」と唄われるが、けつきよくのところ、色（しき）の作品は、へへ神話なんてなかつたんだ▽▽という結末を持つてエンディングとせざるを得ない。「話」の作品は、数々の神話を「あるやもしれぬ」と見上げる形をもつてそのエンディングを迎えるが、「色（しき）」の作品は、その見上げるべき神話が「なかつたんだ」と消え去るという形をもつてエンディングを迎えるのだ。

有名なアニメ映画「天空の城ラピュタ」では、宮崎駿はそのモチーフをあきらかに「空を飛ぶ少年」に置いている。プリミティブな宮崎駿においては、まるで空を飛ぶ少年だけがすべての罪から離脱しているという解決的な存在だ。

極端な言い方をすると、

「少年が空を飛べば勝ち！」

という、野放図なほどシンプルな主題が宮崎駿のもともとの世界と言える。

それでいて、少年はやがて青年となつていかざるを得ず、精通を得て以降は、まるでニーチェの言つたような「力への意志」に向かわざるを得ないようだ。

つまり宮崎駿は、「空を飛ぶ少年」の救われぶりに牽引されながら、自身の戦争体験——直接には戦災体験だったろうか——の闇にその足を引かれ続けている。宮崎駿においてこの主題は解決を得ていない。なぜ空

を飛ぶことをを目指した少年たちは、気づくと空中で殺し合いをやり、生々しい「力の放出」を競っているのだろう？

それでもなお、すでに少年ではない主人公に空を飛ばせようとするとき、宮崎駿はやむを得ずその男を「豚」の姿で描く。

宮崎駿の世界において、無条件で空を飛べるのは精通前の「少年」の精通や初潮の有無にかかわらず、どこかに魂の純潔を保っている者はトロに代表される精霊を視認することができる（サツキとメイはトトロやネコバスを視認できる、また月島零や天沢聖司は或るネコを視認できる）。

宮崎駿の作中世界は、空に向かう少年の特別性と、精霊に出会う子供たちの普遍性を描きつつ、彼らがけつきよくのところ、大人になるにつれ「戦争」や「少女を凌辱すること」へ引き込まれていくということのおぞましさをほのめかしている。「力への意志」（ニーチェ）といえば、天空の城ラピュタでの悪役ムスカはいかにもそれだ。弱視と虚弱体質によってコンプレックスを負った男は、核兵器（ラピュタの雷）に代表される「力」の増大と放出に向かい、そのことにとり憑かれる。

そして、当作にのめり込む少年少女には未だ視認されないところだが、ムスカは王朝の正統後継者であるシータを娶るつもりなのだ。それによつて性的なペアリングを獲得しつつ、さらには王位継承を正当化できる続柄まで得ようというわけ。そのことが実現されば、彼は妻さえ伴つてまるで「力ある者」のように成り上がった姿を現すことになるだろう。当作「天空の城ラピュタ」はもとより、「風の谷のナウシカ」にせよ「紅の豚」にせよ、あるいは「カリオストロの城」においても、けつきよくのところ、

「大人は、巨大な力を得ることに向かい、その力の放出のひとつとして、

### 少女を凌辱する」

という、少女の貞操にかかる危機が、宮崎駿の主題には含まれていればてしまふ」という悲惨さが宮崎駿の抱える暗黒側のモチーフだ。これに対して、少年や男（豚として描かれる）は、どのように対抗すればよいのだろうか？ そのような話として宮崎駿の作品は描かれる。

「天空の城ラピュタ」で主人公パズーは決然と暗黒側のモチーフと対峙し、「もろとも滅ぶべし」と決定することの当事者の位置に立つて王女の尊厳を守護するのだが、彼の騎士道と王女は人為ならざる力によって落下から守られるところ、彼の威風ははまるで、

「少年が空から墜落することはない」

と前もって知られているかのようなのだ。

そのように、「空に属する者」の特別性を描く反面、「精霊と出会う子供たち」の普遍性を描くときには、子供たちはおよそ地上のもの、特に土と木々に属している。サツキとメイがトトロやネコバスに乗つて空を駆けることがあつたにせよ、彼らの所属は空ではなく土だ。彼女らは両親のところにそつとトウモロコシ——農作物——を届けることが似合つており、宇宙に去る飛行石の伝承を見届けるというようなことはしない。

それで、子供たちはまさにそのようでよかつたとして……つまり「少年かくあるべし」「子供たちはこれでいいんだ」ということの描かれようはほとんど完璧だったとして、彼らがやがて大人になつていつた先にどのように生きていけばよいのかについては、宮崎駿からの提示は歯切れが悪い。作中、仕事にまい進するのみの大人たちは、くたびれを背負いながらもあたかもその罪を免除されているかのように明るく描かれるが、宮崎駿はしょせん大人たちについては「呪い」を視すにはいられないようだ。よつて、単純に子供たちの世界を描かない場合、宮崎駿の世界には、生死の境にかかるダイナミズムに近接して、濃厚な「呪い」の表現

が出てくる。マルコ・パゴット大尉が「豚」になつたのも、作中では「魔法」と言わ正在りものの、その現れ方は端的に「呪い」だ（空戦で味方を死なせ、敵兵の悪意に直面し、人間不信に陥つて以降、マルコは「豚」になつてゐる。なお一時的であれ「乙女のキツス」で解呪されるのは、グリム童話「カエルの王子様」に引き当ててのことだろうか。わたしはこの明るいおじさんがかんがえる話が好きだ）。

「もののけ姫」においても、呪いはむしろそれじたいが主題のようには描かれる。主人公アシタカはむしろ呪いによつてこそ導かれ、彼の物語はやがてわれわれを古代「大和（やまと）」と現代「日本」の結節点に連れていき、そこにある出来事にわれわれを立ち会わせるのだが、アシタカがそうした宮崎駿による日本神話の主人公にふさわしいにしても、彼が空に属する者ではなく呪いにかかわる者として描かれるのは、やはりそのとき彼がもう少年ではなく、もののけの姫サンと闇（ねや）において生殖行為が可能な青年だからなのだ。

「少年かくあるべし」という主題が体験に熱烈に——血沸き肉躍るほどに——描き出される。この冒險活劇の本質に立てば、もはや本作は「パズーが空を飛ぶためにラピュタがある」と言つていい。そしてそうして空を飛ぶことに向かう少年は、常に快活で、よく働き、勇敢で、無条件で少女を愛して庇護するのだ。そのように主題が体現される中、たとえば「あのような高度にあるラピュタの気温はもつと寒いだろう」とか、「ムスカは世界征服をする前に食料がなくて餓死するのではないか」とか、そんなことは主題に寄与しないので捨象してかまわない。

「飛ばねえ豚はただの豚だ」という有名なセリフがあるが（多く「飛べねえ豚」と誤って捉えられている）、これはまるで宮崎駿当人の述懐じみて、「それでもあのときの空に向かい続ける」「それをやめてしまつたら本当にただの豚になるから」と聞こえてくるのだ。ポルコは明らかにジーナを通して民主化活動の地下組織に資金を提供しており、だからこそ秘密警察に追われ、だからこそジーナも、イタリア人でありながらフランスの——あわれなパリ・コミューンの——レジスタンス・ソングを唄い続けるのだが、こうした「話」の全容を受け取れている人は作品の知名度と比してまったく数多くはない。ポルコはファシズムに対抗するため空を飛んで空賊狩りをしていたのか、それとも空を飛ぶために空賊狩りをしてファシズムに対抗していたのか、定かではないが、それはきっとポルコ当人に問い合わせたとして、やはり当人にとつても定かではない

宮崎駿の描く「大人」の行き詰まりは、つまるところ「核兵器投下以

降、もう世界の仕組みが変わつてしまつたのだ」「あの戦争前にはもう戻れないんだ」と嘆かわしく言わんばかりなのだが、それ以上の回答がこの先（二〇二五年以降）にあるのかどうかは定かではない。

ともあれ、ここでの焦点は、宮崎駿は主題に接続して話を見い出しており、作中の表現はすべて主題を保障し、主題を阻害しないよう入念に配慮されているということ。「天空の城ラピュタ」では、「空を飛ぶ少年」

他の作品の例。アニメ映画「サマーウォーズ」の、主題は何だつたろうか。これもまた、フレーバーがよく思い出される一方、その主題が何だつたのかはあきらかでない。

タイトルやキャッチコピーをあてにして、テクノロジーにかかる新しい形態の「戦争」を主題に採る場合、やはり人類の存亡がひとりの少年の双肩にのみ掛かるという不自然さには目をつむるにせよ、あこがれ

の先輩女性である夏希と親しく睦（むつ）みあつて彼女の実家に赴き、その彼女の前で「いいところ」を見せつけるという構築はあまりにわざとらしくて無理がある。

作中、夏希および長野県の田舎の風景などをすべて取り去ったとしても、テクノロジー戦争の成り行きには何らの変化もない。よって、当作の主題をテクノロジー戦争と言い張ることはできない。

ではけつきよくのところ、失われたノスタルジート、そこに思い出される、あこがれの色恋沙汰、その空想の諦めきれぬ味わいが主題なのかというと、けつきよくいかにもそれが動機（モチーフ）で作られたような気がするけれども、だとしたらそれはただそのように描かれるべきで、そこにテクノロジー戦争を貼り付けるというような構築はお門違いで卑怯だ。冴えないナードの少年が「上級」の女性と睦みあいたいがためというような理由でそこにテクノロジー戦争を貼り付けるというような厚かましい発想をするべきではない。

作中、主人公と夏希との無意味な接近が描かれているのはあきらかにへんだし、そこにわざとらしく——都合よく——テクノロジー戦争が仕掛けられてくるのもへんだ。そして暴走したコンピューター側が、「パスワード」と「サイファー」を混同し、わざわざ当作の主人公向けに暗号を用意して提出してくるというのもあまりに不自然だ。不自然というよりそれははつきりと恣意的で作為的だ。ログインに必要なのはパスワードであつてサイファー（暗号）ではない。開示されていないパスワードを外部から読み取るのに必要な能力は数学の能力ではなくブルートフォース（総当たり）か、そうでなければテレパシーや千里眼・透視といった超能力だ。

なぜ数学の能力者に、超能力者向けの課題をあてがい、その破綻をごまかすために、コンピューター側がわざわざそれを暗号化して開示してくるというような仕掛けを表現したのだろう。

これは「話が壊れている」のだ。

主題はきっと、あこがれの女性先輩の前でいいところを見せ、ヒロイズムの中で睦み合い、周囲にもちやほやされて、受け入れられたいという、思春期を持ち崩したままのスケベ空想のそれであつたろうのに、そこにあたかもテクノロジー戦争が主題であるかのように展開を貼り付けて偽装——というよりは隠蔽を——したから、結果として話が壊れてしまつた。

ついでに言うと、クライマックスに無理やり出てくる「こいこい」も、何かルールがへんだ。「こいこい」は一般にそんな倍々ゲームではなかつたはずだし、表示されている札のありようもあきらかにルール的におかしい。まるで花札をやつたことがない人がそのクライマックスのシーンを作つたのかと思われるほどだ。なぜこんな致命的なミスを放置してそのままクライマックスのシーンにしたのだろう？ そのことはまったくもつて謎だ。ここまで「完全な謎」は他に見当たらぬというほどに謎だ。

だらしない男に、上等な女性をあてがつてラブコメを成立させたいが、そんなもの成立しようがないので、唐突に「人類存亡の危機」を貼り付けるというでたらめな手法は、新世紀エヴァンゲリヲン、サマーウォーズだけでなく、アニメ映画「君の名は」にも見られる。

タキとミツハにラブコメをさせたいのだが、成り立たないので、そこにキラキラの彗星でも落下させるかという、やはり厚かましい発想が現れている。

類型として、多くの人々にとつての存亡の危機、空前絶後の天変地異を主題とする、いわゆる「パニック物」をやるかに見せかけて、本音はラブコメ空想をやりたいというものの。主題がもはや企画段階で阻害されているので、結果として話が壊れてしまう。

わたしの知るかぎり、この手法でまともにラブロマンスの「話」を成

功させているもので著名なものは、映画「タイタニック」ぐらいしか存在しない。そのタイタニックですら、本質的にはラブロマンスを超越してしまい、ひとりの青年の英雄譚とひとりの女性の自立を描き出すに至っているのだ。

パニック物、天変地異を主題にした話を、ラブコメの味付けで料理してみせようなどというのは、たとえるなら映画「アルマゲドン」を矢沢あいに描いてもらおうというぐらい基本的に無理のあることで、ほとんどの場合で成功しない。

「君の名は」の構築において、タキとミツハの人格が三年の時間差で入れ替わり、その時間差が「綾」となつて当作の筋書きを生み出していくのだが、この「綾」が機能するためには、タキとミツハがその時間差に

「気づかない」必要がある。しかしそんなことは、テレビニュースをち

らつと見ただけで「時代が違う」と気づいてしまうだろうし、スマートホンの画面を見ただけで「日時が違う」と気づいてしまうだろう。流行している歌も違えば、総理大臣の名前も違うのだ。そのことにずっと「気づかない」ということはどうしても無理があり、その無理が目立つてくると、そもそもSF的にもスピリチュアル的にも力学的説明がされないまま「入れ替わり」が“設定”としてねじこまれていてことにも違和感が立ち込めてきてしまう。

では当作の受容はどのようにありうるのか。それはいつそ逆に明らかで、つまり思い入れある「学園」のノリと、押し寄せるラブコメの味わいを示すから、それをもつてもう、

「細かいことは全部忘れてくれ！笑」

と要求されているのだ。そしてその要求を「むしろ望むところ」と飲み込んでいける人だけが当作に没入でき、その味わいに浸ることができることになる。

当作は当時ずいぶんな人気作になり、現代の言い方で云えば「霸権」

となつて、われわれをしてさんざん「名作」と言わしめたのだが、果たしてわれわれは本当に、そこまで「話」をないがしろにしてその味わい・フレーバーばかりを吸い取つていて良いものだろうか。われわれはそのことを良しとする旨の契約書を受け取り、精査はしないまま、いつのまにかそこに署名捺印だけはしてしまつていて可能性がある。

話と色（しき）は相克しており、作り手が色（しき）の使徒であつた場合、その作品は「話」ならざるものとして現れてくるのだ。このことはあらためて注目に値する。もちろん、作品という体裁のために、外見上は何かしらの「話」を形成しているかのように見せかけてくるが、よくよく見ると話としては壊れており、そこには色（しき）ばかりがてんこもりに詰め合わされている。

壊れている話に対してもわれわれは、眉をひそめはするし、まずは一定の距離と警戒心をもつてそれを迎えるだろう。とはいえてそこに封入されているめくるめくの「色」は、それを開封する初学者をいつときに「わあっ」ときめさせ、たちまち惹き込んでしまうぐらいの引力は具えていいのではないか。

われわれはいまいちど、これまでに「作品」と思われてきているものが、ひとつひとつ本当に「話」であったのかどうか、点検していく必要があるのだ。

たとえば小説・映画で有名になつた「ハリー・ポッター」のシリーズにおいて、主人公がもともと家族内で立場の弱い「いじめられっ子」だつたという設定と描写は、どのようにも主題に結びついているとは言えない。ただ観ている側がスカッとするだけだ。

主題に何らひもづいておらず、ただ「スカッとする」だけ。そんなことをやりだせば話としては壊れていくのが当たり前だ。タキとミツハのラブコメ、糸守町とカラフルな彗星に「うつとりする」というようなこと、それは色（しき）であつて話ではないのだから、そんなことをしていた

ら話が壊れる。あるいは碇シンジくんの形相に「エモい」と感じ、わざとらしく強調されるプラグスースに「エロい」と興奮する、それは色（しき）であって話ではないのだから、そんなことをしていたら話が壊れる。はたまた、主人公の登場にオンラインのコメントが殺到して、湧いてきた一体感にいつぞやの「鳥肌注意」を思い出し、同調者として酔いしれる、それは色（しき）であって話ではないのだから、そんなことをしていたら話が壊れる。

われわれは、たとえばモネやルノアールの絵画を観たとして、あるいはレンブラントの絵画を観たとして、そこに何かしらの「話」を体験することもありうる一方、そこにただ「すごい」「上手」「きれい」「迫力

がある」「なんかやっぱオーラが違いますよね」という体感を味わうのみということもありうるのだ。体感はすべてパラメーターであって「話」ではない。

さらに、「話」ではない色（しき）を強く味わった者が、それを堂々と「感動した」と言い放つこともよくあるのだけれども、その場合の「感動した」には大いに疑義を向けるべきだ。

世の中には、映画の予告編だけで涙ぐんでしまうという人が少なからずいるものだ。スクリーンに映し出される巨きな画像、ハンサムで演出の効いたワンカット、意味ありげにイコライズされた太い音声、エモく挿入されるBGM、ライティングを施された極端なノワールと、ティー ルオレンジとスローモーション、何とは知らないシーンが次々に切り替わって見せつけられる、それだけで「感動する」という人いる。

そうした人のありようについて、すでに現在、次のように明確に警告されなくてはなるまい。

「それではあなたは今後、生成AIが切り貼りした、ただ“エモい”だけの無意味なイメージの羅列に、感動して涙してしまって人になるよ」いま現在、どのような漫画、アニメ、アイドル、ゲーム、小説、ドラマ、

映画、お笑い芸人が流行しているのか、わたしは詳しく知らない。率直なところ、そんなことをもう一個人で追跡していられるわけがないと思っている。多ジャンル・大量生産が常態になつた現在、ひとつの作品を窺つていううちにふたつの作品が創出されてしまうだけで、「現状」に追いつける人などもはや誰ひとりいないだろう。

だからあなた自身で各個に見極めるよりないのだ。作品の側で「話が壊れている」というものは確実に存在する。そして受け手の側で、おおいに怪しい「感動」をするということも確実にある。それらのことについてわれわれは、總じて「話が壊れている」ということに気づいていかねばならない。

作品にかかわって「話が壊れている」ということを看取せず、そこにあふれる色（しき）にただ取り込まれていくばかりということも続けていつた場合、そのことはやがてあなた自身に望ましくない結果をもたらすだろう。

いざ、あなた自身がまともに「話」をしてみようとしたとき、それが出来なくなっているということに気づくのだ。

「あれ、なんでだろう。おかしいな、ちょっと待ってください」  
出来るはずのことがフラストレートされる。

そのことが際限なく繰り返される。  
われわれは、自分がまさか、「話」という根本きわまる機能を失うとは、露ほども思っていない。

「ははは。いやあ、何なんでしょうね。え、なんかもう、無理です！」  
正体不明の、ストレスと苛立ちが起り、憤怒の熱の中、逆に恐怖に晒されて背筋が凍る。

何が無理なのかについて「話す」ということさえ、じつはもう出来なくなっているのだ。

まさか「話せない」とは。  
閉塞感に自我が暴れだす。

自分のことば、自分の構築、そのときの自分の表情、声、態度、姿、それ

らがすべて、  
「なんか違う」

という形でしか出てこない。

どれだけ力んで振り回しても、「なんか違う」。

「なんか違う」が繰り返される。

このときに起ころる違和感の連続と、不快さ、閉塞感と苛立ちはただならぬものだ。

「ん？ 違う違う、そうじゃなくて」

「何これ。え、なんでわたし、こんな顔するんだろう」

「こんな声、出したいわけじゃないのに、なんでかこんな声が出る」

「えー、なんで。何の話をしたらしいのか、すぐわからなくなっちゃう。

なんかもうムカついてきた」

「え、なんでわたし笑っているんだろ。笑うところじゃないのに笑」

自分の「話」がまったくできなくなつていて、どこかで見聞きしたよ

うな、決めゼリフや、決めポーズ、お決まりのイメージしか出てこない。

感情ばかりが動き、イメージばかりが湧いてくる。

唐突に、踏みつぶされたカエルの声を叫び出したくて、そのほうが「面白い」んじやないかというような、支離滅裂な思考がエキサイトを起こす。

自分は、感情的にも思念的にも取り乱すばかりで、何の「話」も取り扱

えていないということに、やがていやおうなく気づかされる。

そのときはすでに、自分の発想も、ことばも、構築も、表情も声も態度も姿も、へへすべて色（しき）に支配されている//のだ。

そのころ、アイドルの笑顔が無意味に「刺さる」ようになり、まったく興味のない「アニソン」が、なぜかするする記憶に入り込んで定着するようになつていて。

奇抜なだけの二人組の、不明なだけの挙動を見て、

「おいしいキャラしているなあ」

と好感を持つ。

一方で、いまさら何かまともな「話」に触れても、その「話」はたちまち自分において解体されてしまう。

「そうつスねー」

そう言つた直後、もうその話は粉々に分解されて、手元には残つてないのだ。

このことは、もつとも顕著には、あなた自身で短編小説を書いたり、

あなた自身で寸劇を作つたりしたときに現れる。

最小サイズの、何でもない、ありふれた小説でよいし、ありふれた寸劇でいい。あなた自身でそのありふれた「話」を作る。

「どんなものでもいいんですか？」

とあなたは問ひ質す。

わたしは「そうです」と答えよう。

あなたはその課題に、半分は首をかしげながら、もう半分は勇んで取り掛かるだろう。

ところがあなたは、ほとんどの場合で、そこで出来上がつたものを、「わたしの話」

とは認めないだろう。

（その日のうちは認めて、三日後にはあなたは認めなくなつていて）

そこに出来上がつたものは、「しつちやかめつちやか」か、あるいは「ヨソからの借り物で、ネタ」のどちらかだからだ。

そのときのあなたは、「課題」はわかっている。

どんなものでもいいから、最小サイズの、小説を書くか、寸劇を作るかする。それを完成させる。それが課題だ。

だが、課題はわかるのに、主題がわからない。

もちろん主題は自分で選べばよいのだが、その自分で選んだ主題がわからないのだ。

それで、自分で作った「話」が、自分でさえ何の話かわからなくなる。

そもそも、何の話にもなっていない。

簡素な絵を、想像力で三枚描く、ということを課題にしてもいい。

何でもない「絵」を描くだけなら、出来るかもしれない。

そう思って取り掛かるが、やはり、そこで描かれたものをあなたは、

「わたしの絵」

とは認めない。

自分で描いたことは認めるにせよ、それが「わたしの絵です」とは認めないだろう。

描線の一本でさえ、それはヨソからの借り物で、ネタだ。

どのような場合にも、あなたはイメージを膨らませる。

登場人物のイメージ、シーンのイメージ、風景のイメージや、置かれている場所と静物のイメージ。

明るい「学園」のようなイメージもあれば、荒れ果てた「荒野」のようなイメージもある。

莊厳なイメージもありうるし、ポップなイメージもありうる。

それらのイメージは、すべて色（しき）であって、話ではない。

あなたは初めのうち、何も知らないで、それらの色（しき）をふんだんに織り合わせれば、それが何かしらの「話」になると思い込んでいる。

そして、そうではないのだという結果を三度も四度も噛みしめると、あなたはパニック状態になっていく。

何かしらのキャラ、何かしらのイメージ、何かしらのフレーバーを、

塗り重ねていっても、「話」にはならない。

それっぽい「ネタ」が作られるばかりだ。

そのことが次第に屈辱的に思えてくるので、あなたは途中で方向転換

し、「マジ」になつてくる。

あなたが「マジ」になりきれば、それを「ネタ」だと言つて嘲笑する人は減少するからだ。

それで、あなたはシリアルで気難しく、プラウディで取り扱いのしづらい人になつていく。

さらに、そのあなたが美人だつたり、イケメンだつたり、バストが大きかつたり、女子高生だつたりすれば、急激に一定のファンがつくかもしれない。

何の「話」もないままにだ。

どのようにさまよつても、原理的に「話」でないところに「話」は得られない。

「話」は、主題を体験する、あるいは主題を体現する、ということにのみ得られる。

体の真ん中が主題との合一に及ぶときのみ、それが「話」になる。自我に湧き続けるイメージ群、そこに起ころる引力のすべては、「話」ではない。

それらはすべて色（しき）だ。

あなたがこれまでに触れてきた、さまざま作品ひとつひとつについて

てわたしが、

「それってどういう話？」

と訊こう。

さらに、

「その話の主題は」

とも訊こう。

その問いかけに答えようとして、あなたが自身の内部に奇妙な混迷の引力、「解体」のはたらきを覚える場合、あなたはいまいちど、自分のこれまで触れてきたさまざまなものが本当に「話」だったのかどうか、あらためて点検していく必要がある。

彼のために立ち直るべく、ひとり立ちを決意する雪奈。

彼女が勤めることになつたカフェのオーナー兼、親友の麗華。

そしてある日突然やつてきた、自分が乳殺してしまつた彼氏にそつくりな男性、晋也。

あまりに上口き彼氏に似ている晋也の姿に、雪奈の胸は母乳を噴く。

そして雪奈は彼の注文したコーヒーに、自分の乳を注いで差し出してしまつ。

そのミルクコーヒーの味に対する晋也の反応とは？

麗華と、その父親との確執とは？

雪奈の愛とおっぱいの行く末は？

そして、晋也の正体と目的とは……？

## 話が「壊れている」ことに気づく け／③色（しき）を受容してい

パッケージの裏には「あらすじ」が書かれている。あれは本当にはあらすじではなく「梗概（こうがい）」という。

また世の中には、ビデオゲームの「ジャンル」として「エロゲー」というものがある。どういうジャンルなのか、内容についてはいちいち説明しない。

そして、あるエロゲーの「梗概」を抜き出すと、たとえば次のように書かれているのだ。いちおう、一般に言われる「閲覧注意」を付記しておくれ。

雪奈の巨乳による彼氏の圧死。  
すべての物語はそこから始まる。

当作のタイトルについては、タイトルじたいがあまりにお下品なのでここには記載しない。気になる人は検索すればいいと思うが、その検索の先に見つかるものについては、わたしから申し上げられるコメントは何もない。わたし自身、さすがに当作をじつさいにプレイはしていないのだ。

わたしはただその梗概に、いつそほれぼれするだけだ。  
われわれはもちろん、このような梗概を指差して、そこに、「話が壊れている」という糾弾を向けはしない。

誰が当作に、意味深長な話の組み立てを期待するだろう。当作はジャンル的に、消費者の需要を満たすのが使命であつて、つまりプレイヤーの性的嗜好を刺激して満足させ、あとは全体としてとにかく飽きさせなければいいのだ。そのためにはもちろん、画像や音声の品質、また操作性やゲームバランスなども問わてくるだろうが、それにしても、「その需要」を満たしていく、あとはとにかく面白ければいいのだ。

そして困ったことに、当作は、そのぶつ壊れた梗概の時点で、すでに  
「面白くない」とはまるで言えないvv。

まず、ヒロインとおぼしき雪奈の巨乳による、彼氏の圧死。

まずこのフレーズだけで、われわれは日常の文脈を昏倒させられる。

とてもじゃないが、われわれはこのフレーズに、

「なるほどね」

とは言えず、なるほどねとは言えないので、どうするかといつて、これはもうそのまま鵜呑みにするしかないのだ。

受容するしかない。

雪奈の彼氏は、雪奈の巨乳によつて圧死したのだ。

そのことは後段で「乳殺」とも表現されている。

そうした二字熟語も、もはや受容していくしかない。

「すべての物語はそこから始まる」と書かれているので、しょうがない、物語はそこから始まるのだろうと、われわれは受容して進むしかない。

雪奈は、恋人の死から立ち直らねばならなかつたが、亡き恋人に瓜二つの男、晋也を見かけて、母乳を噴いた。

なぜ、と問いかけることは、ここでいかに無力なことだろう。  
母乳を噴いたのだ。

受容して進むしかないのだ。

「なぜ母乳を噴いたのですか？」

「そりや、亡き彼氏とそつくりの人と出くわしたからね」

「そつか……。でもなぜ、その母乳を、晋也のコーヒーに入れたんです？」

「そりや、自分で乳殺してしまつた、亡き彼氏とそつくりの人だつたんだもの」

「そつか……」

われわれはこのことに、話が壊れているという糾弾を向けはしないし、むしろあきらかに土台から話が壊れていることにこそ、エキセントリック

クな面白味を見い出そうとする。それはそれでかまわないし、わたし自身、そうしたものを見つけてはゲラゲラ笑つて大いに食いつくしてきた者だから、そこにある面白味がいつそ「かけがえのない」ほどのものだということをよく知つてゐるつもりだ。

しかし、それでもなお、わたしは「話」の専門家としてここに必要な注意書きを示しておきたい。

男性が、この馬鹿げた梗概の面白味に惹かれ、当作を「プレイしてみよ、「内容は気になる笑」と感じるところ、それだつてやはり引き込みは引力の作用ではあるわけだ。

女性の場合、さすがに当作をプレイしてみようとまでは思わないにせよ、「内容は気になる笑」と感じるところ、それだつてやはり引き込みは引力の作用なのだ。

ジャンルがエロゲーなのだから、当たり前のことではあるが、ここでの引力は「エロ」であり、色（しき）そのものだ。

女性にとつては、エロというよりは「下ネタ」の感触で、ここに引力を受けているだろう。

そして、話と色（しき）は相克するので、じつは、  
「話」を壊すほど、色（しき）の引力は強まるvv

ということがここにはあるのだ。

ここでわれわれは、「受容」について誤解をしている。

われわれはあたかも、雪奈が彼氏を乳殺したこと、そして亡き彼氏の瓜二つの晋也に出会つて母乳を噴いたことを、馬鹿げた「話」として受容したかに感じ、その話のハチャメチャぶりに思いがけず自分が引き込まれているかのようを感じるのだが、本当にはそうではない。

われわれは本当にはここで、  
「話」を拒絶し、「色（しき）」を受容しているvv

のだ。

「話」をいつとき忘れ、「話ならざるもの」に引き込まれて愉しもうとしている。

そのことには、ジャンルがエロ・ゲーだという、社会的承認も作用している。

われわれは、いわゆるエロマンガや、アダルトビデオ等眺めるとき、その作中に示される設定やシチュエーションについて、「とやかく」は言わないのだ。

ありていに言えば、男性の場合、「ヌければそれでいい」としか思っていない。

仮に、アダルトビデオの設定やシチュエーションに、入念なストーリーと表現が盛り込まれていたら、それはむしろ、

「作りこまれすぎていて、ヌきづらい」

われわれは雪奈の、乳殺、および晋也への母乳噴出という、ハチャメ

チヤな「話」に引き込まれているのではない。

ここでは次の検証方法を知つておく必要がある。

仮に、雪奈の乳ではなく、雪奈の親指が大きかつたとする。

雪奈はその親指で、彼氏を圧殺してしまった。

雪奈は、その圧殺してしまった彼氏に瓜二つの男、晋也に出会い、思わず親指から油脂を噴き出してしまった。

雪奈はその油脂を、晋也のコーヒーに注いだ。

このように、乳を親指に置き換えてしまうと、われわれはもうこの作品に、先ほどのようには引き込まれなくなってしまう。

だからあくまで、本作の引力はエロ・下ネタに生じているのであり、われわれは話のハチャメチャぶりに引き込まれているのではないのだ。

さらに言えば、親指に圧されて、元の彼氏と「別れて」しまったということだったら、ますますわれわれは当作に引き込まれなくなる。

なぜなら、圧殺されるということが、いちおうの死であり、そこにはグロテスクさという色（しき）が含まれているからだ。

圧殺だったものが、単に「別れた」というだけでは、われわれはそこに引力を受けなくなる。

さらにこの雪奈を、七十歳の老婆にしてしまえば、われわれはこの作り話にまつたく引き込まれなくなるだろう。

七十歳の老婆の親指が肥大し、それが交際相手を圧殺してしまい、瓜二つの男に出会っては親指から油脂が出たのでそれをコーヒーに入れ飲ませたと言えば、

「何これ笑？ 気持ち悪っ」

と、首をかしげられて終わってしまう。

雪奈が、おそらくは若い女性だろうということで、やはりわれわれはその色（しき）に引き込まれているのだ。

だから、当作のブツ壊れた梗概が、われわれにエキセントリックな愉悦みと期待をもたらすということについては、あくまで、

へへ「話」をへシ折つて、色（しき）の引力を強めているvv

ということから的作用だと捉えていなくてはならない。

その上で、なおこの馬鹿げた色（しき）のパッケージを愉しむぶんには、当作はただ面白いというだけで、われわれに何らの損傷ももたらさないだろう。

とはいって、われわれは今まで受け取りについて怜俐なわけでもなく、そのことに成熟を得ていてもないので、特にこういったたぐいのものはR18の指定がされているのだ。

色（しき）の受容は、それじたいにもリスクがあるけれども、それ以上のリスクは、色（しき）を「話」と「誤認」してそれを受容してしまうということがある。

「あまりに亡き彼氏に似ている晋也の姿に、雪奈の胸は母乳を噴く」

このわけのわからないフレーズを、われわれは受容するしか進めないにして、そのことは次のフレーズを受容することと何が違うというのだろう。

「バターン青、使徒です！」

「シンクロ率、四百パーセント！」

「ATフィールド、全開します！」

「雪奈の母乳」を受容することは、われわれにとって「話」の受容ではないし、「話」の受け取りでもない。

では、エヴァ初号機の「ATフィールド」を受容することも、われわれにとつては「話」の受容ではないし、「話」の受け取りでもないのだ。

にもかかわらず、われわれはそのことを、「話」に引き込まれているものと誤解する。

「フィクションなんだから何でもいいじゃん」

そのような建前のもと、そこにある「話」にフリーダムに引き込まれていくつもりになり、じつさいには色（しき）の引力に引き込まれている。

引き込まれた結果、そこから帰ってきたとき、その手に握られているものは「話」ではない。

当人は、馬鹿げた話だろうがシリアルふうの話だろうが、「話」のつもりでそこに一握の砂を握んできている。けれどもその手を開けば、そこから零れ落ちるのは、色（しき）の流砂なのだ。「話」の断片はその手に掴まれていない。

仮にあなたが、三つか四つ、短編小説でも書いてみようかと思つて取り掛かったとき、実作の段階で思いがけない「壊滅的」な出来栄えを体験するのはこれが理由だ。

これまでに握りこんできた数々の手がかりを、いまこそ発揮してみせんと、いざその手を開いてみる。すると、その掌から現れてくるものは、

何ら「話」の要素にはならない何かであつて、すべてが色（しき）の流砂として、指のあいだから零れ落ちていくのだ。

あなたは、思わずぶりな描写を冒頭から盛り込み、さも何事かが展開していくかのように見せかけて書き進めるも、千字もいかぬうちにたまたまるつこしくなり、方途のない冗長な語りばかりが続くということを自分で体験する。そして肝腎の出来事の進みようについては、まるでダメージエストかというような、投げやりな説明がされるだけになるのだ。悪いことは言わない、小説を書くのなら、あるいは何であれ作品に向かうのなら、入念な浦島太郎が体の真ん中にあるほうがよく、「バターン青、使徒です！」に頼らないほうがいい。

雪奈による乳殺と晋也への母乳噴出が一見、エキセントリックなまでに「面白い」のは、あくまでその未知のグラフィックとテキストが「エロゲー」として期待されてパッケージに浮かび上がるからなのだ。エログラフィックやエロ描写なしに雪奈への引力は存在しない。エロゲーの主題は消費者の性的嗜好の充足と娯楽にあることを忘れてはならない。あなたがその主題のはたらきを忘れているとき、あなたは自分で書く小説において、主人公がどうにも引力を——魅力を——持つてくれないということに困らされ、その実作はどうしても傍目に「何これ笑？ 気持ち悪っ」と終わらされるものになってしまうだろう。

わたしは近年の各種コンテンツが、どのような設定・プロットで組み立てられているのかを知らない。先に述べたように、こんにちに大量生産されるすべてをいちいち読み取つてているようなヒマは誰にもないからだ。

たとえばここで、マンガあるいはアニメーションの創作を考えよう。まず、意味ありげなモノトーン寄りの背景グラフィックを示し、その中にやはり意味ありげな、ちっぽけな老人を立たせる。

そして老人に、

「ようこそ、酒紅山妖術学校、特進科へ」

と言わせる。

特進科に生徒が来るのは、もう十年以上ぶりじやな……

「その者。そなた、古い竜族に連なる者じやろう」

あるいはその眷属か？

いや、眷属にしては、竜の血気が濃すぎるじやろうて。

指摘する老人いわく、古い竜族の血は、強い妖術を実現しうる一方、

その血が妖術を激しく拒絶することもあるのだという。

その血が拒絶を選ぶとき、妖術にかかわって受ける苦しみは、

「それはもう、尋常なものではないのじやよ。そのときは果たして、お

ぬしが無事でいられるかどうか」

老人は薄い目で、少年を見透かそうとするようだつた。

けれども少年は毅然として、

「オレには、ナーキーがいる」

と言つた。

「ナーキー？ ほほ、古いことばを使いよるの。おぬしらの国では、た

しか、婚約者のことじやな」

そうだ、ナーキーが、と少年は続ける。

ナーキーが、黒樹のタエに呑み込まれた、と少年は言つた。

あつというまのことだつたんだ。

老人は首をかしげ、

「タエ、とは？」

少年の言うところ、新月の夜に起ころ、植物の異常な急速成長のこと

を、彼らは古くタエと呼ぶらしい。

「黒樹がタエを起こすことなんて、ここ何百年もなかつたんだ。てつぎりただの言い伝えだと思つていたよ。それでナーキーは……」

老人は少年を制止し、

「言わんでもわかる。わざわざ、この辺境の妖術学校を訪ね、しかも特進科にまで首を突っ込んで来よる奴は、のつびきならん事情を抱えとるもんじや」

老人は言い、

「まあ中には、妖術に惹かれてたまらぬというだけの、ただの変人というのもおるけどものう」

そう付け足して、老人はキキキツと笑つた。

こんにち、一般的にはこうしたものが「話」と思われてゐる。

けれどもこれらは、いまわたしがでたらめに考えたイメージと設定を羅列しているにすぎず、本質は先ほどの「雪奈の乳殺」と変わらない。

雪奈の巨乳で彼氏が圧死したということがバカバカしくて、少年のナーキーが黒樹のタエに呑み込まれたというのが「それっぽい」だけだ。

「話」を放棄して、色（しき）に引き込まれてゐる。

ここに例示した創作物は「話」ではない（※）

巨乳や母乳といった引力の代わりに、黒樹や妖術学校という引力を設置しただけだ。

巨乳であれ妖術であれ、

「こういうのが“好き”でしょ？」

というものを設置しているだけでしかない。

どういうものが“好き”かは、人それぞれで、それこそ十人十色になる。

それは性的であろうがなかろうが、つまり嗜好だ。

一方、浦島太郎には引力がない。

浦島太郎は嗜好に向かない。

浦島太郎は「話」であつて、「色（しき）」のコンテンツではないので、

引力がないのだ。

じつさいあなたが、率直に言つて“好き”と言えるのは、つぎの二つ

のうちどれだろうか。

①浦島太郎

②雪奈の乳殺

③妖術学校と竜族の少年

④その他

「それが好きか・どんなものが好きかというのは、あなたの嗜好だから、そのことについてはわたしは口出しをしない。」

「ただ、好みの引力とは無関係に、あなたの『話』を育てるのに有効なものと、そうでないものはあるのだ。」

「『話』をへシ折つて、『色（しき）』に浸らせるもの、そうしたもののが好きだつたとして、あなたはそれを、作品だの話だのと思つて握りしめて帰つてきてはいけない。」

「あなたの大好きなそれは、そのとき大好きなものでかまわないけれど、それは話ではないので、いざあなたが『あなた』が成り立たせようと思うとき、それがまるで役立つてくれない。」

「それどころか、そのコンテンツと文脈への愛好は、話をへシ折つて色（しき）に浸るという習慣と、そのときに得られる甘みの記憶を、あなたに深く根付かせてしまう。」

「仮に、あなたが、『あなた』を成り立たせることに意欲を失い、そのことを放棄するというなら、あなたはもうその大好きなものだけに囲まれて、それに浸つて暮らしたいと思うのかもしれない。」

「そのときは、あなた自身があなたという『話』について、『そんな話はない』

「それはそれで、ひとつ終焉ということなのだろう。」

ともあれ、われわれがエキセントリックに面白がり、あるいはうつとりするなどして、引力に引き込まれて「話」を受容しているつもりになるとき、たいてい本当にそうではなく、本当に話放棄して色（しき）を受容しているのだ。

そのとき、受容した色（しき）を、「話」だと誤解してその手に掴んでいると、そのことはやがてあなたに散逸とわざわいをもたらしてしまう。手を開くと、まるで成り立つていない流砂が零れ落ちていくのだ。

いざというときになつて、それを「いまさら」という取り返しのつかなさで思い知るわけにはいかない。

だから、いまみずからで手の内を開き、そこにある話が「壊れている」ことに気づけ。

少なくとも、現代のわれわれが、今後は生成AIも含めた大量のコンテンツ群に包囲されて暮らしていくということを前提にすれば、われわれがこれまでうかつに「話」と思つていたものの中には、多くそうではないものが含まれていたのだということにもう気づいておかなくてはならない。話ではない色（しき）を受容させようとする装置がいまや四方にうずたかく林立しているではないか。

われわれは、エロゲーに耽つていてはいけないのではなく、へへ話のない奴のままエロゲーに耽つていてはいけないvvvということなのだ。壊れている話は話ではなく色（しき）なのであって、それに興じていていいじやないかと言い張る者は、あくまで体の真ん中のほうでは本来の「話」そのものを生き続いている者でなくてはならない。

（※例示した創作「妖術学校と竜族の少年」について。ここに示したいわゆるショートストーリーの断片は、単にわたしの描写能力、いわゆる文章力が極端に高いゆえに、何であれ読めてしまう・そのイメージを高密度で受け取っていくことができてしまう、ということが起こり

ます。そしてそのことはそれだけで一定の娛樂性を供します。けれどもなお、そこに得られているのはやはり「話」ではありませんし、そこに主題が体験される・体現されるという「話」の事象は形成されていません。「ナーキーを救うために妖術師になつた」という疑似ストーリーがあたかも体験ふうに感じられることについては、先の章に示した「手品に惹かれた、だから手品師になつた」のAIグラフィックの作用を参照してください)

## 決めつけの怪物

われわれにはなぜか、無制限に「決めつける」という能力がある。たとえば、第二次世界大戦と、そのときの日本について、

「日本軍が悪かった」

というようなことを、いくら無謀でも、そのまま「決めつける」ということができてしまう。

「軍部が暴走したんだよね」

「原爆を落としてもらつて平和になつたんだよ」

そのように決めつけることは、じつさいにできてしまい、現実にいまでも、そのような決めつけの中を生きている人はいるのだ。

もちろんこれらは、話としては無理のあるもので、

「じゃあ二〇二五年現在、ウクライナにも核兵器を撃ち込めばいいといふことなのか。それで平和になるというのか」

そう訊かれると、さすがに話としてはことばに詰まる。

「うーん、それはともかくとしてさ。とにかく、日本軍が悪かつたんだよ。当時の日本は愚かで邪悪だった。それは事実」

日本が東南アジアを侵略したというが、侵略された土地はすべて、前もつて西洋列強に植民地化されていた土地だつた。

なぜ前もつて侵略していた西洋は邪悪ではないのか。それも何百年も先んじてその侵略をし、その支配と搾取を続けていたというのに。

そもそも、江戸時代からすでに西洋列強は帝国主義の勢力として、たとえば中国大陸をアヘン戦争で蹂躪し、日本にも租借地を要求してきていた。

その帝国主義の渦中に日本が参戦すると、列強はこぞつて難色を示し、三国干渉を仕掛けるなどして、日本を小国に押しとどめようとした。当時の列強はけつぎよく、アジア諸国の主権を認めるつもりなど根こそぎなかつた。

それらのことをすべて無視して、「日本軍が悪かった」というのは、投げやりを通り越してただのでたらめだ。

だが、それでも当人は、

「だからさあ。うーん……なんか、そういう屁理屈はもうやめようぜ？」

日本軍が、悪かったんだよ。そこは、勇気をもつて認めようよ」

そのように、熱い涙を浮かべて、彼なりの真実を唱えることができてしまう。

人は「決めつける」という、奇妙で極端な能力を持つてゐるのだ。

週刊誌が、あることないことを記事にし、不明の醜聞をもつて人々の耳目を集め。週刊誌とはもともとそういうものだ。

その醜聞は、人々を大きく騒がせはしたもの、けつぎよく裁判になるわけでもなく、当事者とされる人々において和解したのか、そもそも事実がなかつたのか、うやむやになり、雲散霧消していったのだが、それでもわれわれは、

「いいや、あんなのは、どうせ悪いことやつているんだよ」と決めつけることができる。

「カネで口封じしたか、権力で揉み消したんだろ」

「政治家か、上級国民かが事件に関わっていたんじゃないの」

「事实上は犯罪者だわ」

もちろんじつさいにそうしたことはありうるが、そうしたことがありうるということは、そのように決めつけて妥当だということを意味してはいない。

「なぜそんなふうに決めつけることができるの？」

「いやだつて、やつてているに決まつてているもん。やつていないなら記者会見を開けばいいじyan」

「記者会見を開けば、やつていなかつたつてことになるの？」

「いいや？ やつていないつて証拠でも出せれば別だけれど、そんな証拠ないでしょ。だからまあ、やつてているのはやつてているんでしょ。たぶん。たぶんというかぜつたいね」

彼らにおいては、告訴されていない芸能人はなぜか「犯罪者」ということになつていているのだ。

彼らにおいては、「日本軍は悪」と決めつけることができるし、ホロコースト（虐殺）は「あつた」と決めつけることもでき、逆にホロコーストは「なかつた」と決めつけることもできる。

これではまるで、

「UFOは、あるに決まつてているし、宇宙人も、いるに決まつてている。政府が隠しているだけに決まつてているよ」

「ないに決まつてているよ」

「いうのと同じだ。

重ね重ね、われわれには「決めつける」という能力がある。

そのことに、根拠や事実など必要ないのだ。

「女つて、美人に生まれついただけで人生イージーゲームなんだよね」「企業の経営者つて基本的にサイコパスなんだよね、だつて人をコキ使つて自分が儲けることに何の躊躇もないって人だけが成功するんだから」「親ガチャに恵まれた人つて、それを自分の努力の結果だつて誤解しているんだよね」

「男つて、女より基本的に能力が低いから、女を抑圧して自分たちの立場を守るつて生きものなんだよね」

「女つてけつきよく自分のグレードを上げてくれるオスを欲しがつているだけなんだよね」

「誰だつて、付き合うなら処女のほうがいいに決まつてているんだよね、本当は誰かの中古と付き合うなんてみじめでしかないもの」

「男で身長〇センチない人つて、ぶつちやけ人権ない」

「いまだにやりがい搾取されて自分から社畜になつてている人つてけつこういるんだよね。そういう人つてみんな目つきおかしいのに自分で気づいていない笑」

「氷河期世代つてみんな独善的だし、Z世代はみんな共感能力ないんだよね」

「△△なんて老害でしかないし、××を推している人つて根本的にセンスないでしょ」

「あの人つてアスペルガーでしょ。そんでわたしはHSPだから、すごい相性悪いんだよね」

「□□は、エロ売りをせずに、ちゃんと芝居とかの勉強をしたほうがいいんだよね」

「Aは裏ではぜつたい性格悪いタイプ、Bは本当に清楚なタイプでしょ。Cがサバサバ系のふりしているのは演技でしかないし、Dはメンヘラっぽくて、裏ではホストに入れあげたりしていると思う」

なぜこのように、無制限に「決めつける」ということができるかとい

うと、彼らには何の「話」もないからだ。何の話もなく、そもそも「話」を扱う器官が活動していない。

「話」がないのであれば、すべては決めつけでしかないのだ。

歴史的にどのような状況があつたとしても、「そんな話は知らんけど」といつて、

「そうじやなくてさ、とにかく日本軍が悪かつたんだよ。事実じやん、そこは認めようよ」

ということになる。

仮に、容疑者にどのようなアリバイがあつたとしても、保安官は、「お前がやつたんだろう！」

と決めつけることができる。

アリバイといつて、犯行時刻に彼がまったく別の場所にいたら、彼はその犯行をやりようがないけれども、そんなもの、「そんな話は知らん」ということで、

「お前がやつたんだろう！ いいかげん認めたらどうなんだ」と決めつけることができてしまう。

保安官はその容疑者を収監することができる。

「小麦を食べないとバカになります、小麦を食べて賢くなりましよう」と、街宣カーで言い続けて、そのように決めつけていくことは可能だし、

「食料がなくなるので、コオロギを食べましよう」

と、やはり言い続けて決めつけていくことも可能だ。

どうせ「話」はないのだから、事実など参照する必要がない。

鈴木花子からマーガレットの香りがするということを、医者が否定し

ようが、検知器が「検出せず」を呈しようが、「そんな話は知らん」ということで、クラスメートらは彼女を、「マーガレットちゃん！」

と決めつけることができる。

「話」が機能しないなら、われわれの自我はこうして無制限に「決めつける」ということをするのだ。

このことは、極端な例をあげつらつてのものではない。

もともと、われわれの自我とはそういう性質のものだということだ。たとえば摂食障害の例を挙げてみる。

体脂肪率として、すでに生命の危険があるというほどにやせ細つている人でも、当人は、「最近また太ってきた……醜くてイヤだから痩せます」と言っている。

医学的なデータはなにひとつ、彼女に肥満を告げていない。

それでも、当人が太っていると決めつけるならそれは太っているのだ。もちろん、他の誰かについては、それを太っているとは量らないのだから、話としてはめちゃくちゃだ。

けれども、「話」が機能していないのだから、話がめちゃくちゃかどうかなんて関係がない。

自分の決めつけだけが支配する。

あるいは、整形手術を繰り返す人が、自分のことを「ブス」「醜い」と決めつけることがある。

それで、傍目にはもう、顔の造形が不自然になりすぎで、整形前の顔のほうがずっと自然できれいだつたと思えるのに、当人は、「まだまだブスで、自分がイヤになる……お金貯めて、こんどはアゴのところ削ろうと思います」と言っている。

医者に、いくら健康だと言われても、自分には病気があると決めつけられる人もいるし、どれだけ衛生的に問題がないものでも、「汚れているから洗わないといけない」と決めつける人もいる。ちょっとした災難がある

と「お墓参りに行つていなからだ」と決めつける人もいるし、「スポーツをやつていないう者は人として負け」と決めつける人もいる。「東京モントは冷たいもんなあ」と決めつける地方の人は今までもいるし、靴は左から履かないと不幸になるとか、ティッシュで鼻をかむと寿命が縮むとか、コーラを飲むと骨が溶けるとか、そんなことを決めつける人もいる。

そして奇妙なことに、たとえば自分のことを「ブス」と決めつけていながら、それでいて、「わたしはハイスペックな男性と結婚するんです」と決めつける人もいるのだ。

当人は、もう四十歳を超えていて、これまでに恋愛経験もなく、みず

からで自分のことを「ブス」と言つており、さらに「性格はまあ、根暗です」とも言つてゐるのに、

「ですけど、なんとなくわたしは、三十代前半の、ハイスペックな男性と結婚するんだと思つています」と決めつけてゐるのだ。

なぜ？

なぜといって、なぜというような理由はない。

人は、「話」から切り離されるなら、何もかもが決めつけなのだ。

「あなたのいうハイスペックな男性が、わざわざあなたのような、みずからややこしくて根暗だという初老の女性を選ぶというのは、『話』としてヘンでしょ」

というときの、「話」じたいが無いのだ。

話の器官じたいが機能していないか、それ以上に、さまざまな諸事情

から、彼女はその「話」じたいを自分から切り離してしまった。

彼女にとつてはもう「話」などどうでもいいのだ。

「話としてヘンとかつて言われても、そんな話のことなんて、わたしにはよくわからないし。ただ、わたしはわたしの思うことを言つてゐるつ

てだけなんです。わたしは、きっとこうだと思う、って。それがそんなにいけないことなんですか？」

自分は「ブスだ」と思う、自分は根暗だと思う、けれどもハイスペックな男性と結婚するのだと思うという、その決めつけだけが彼女にとつては大切なのだから、そこに「話」などを持ち込む動機が彼女にはない。

自分は、努力していないう者を評価しないし、こちらの豊かでない者、愛のない者、偉そうぶついている者、その割にしかるべき実績はないという者を評価しないが、自分自身がそれに該当する場合、自分自身についてだけは、

「そうはいってもさあ」

と、半笑いになり、なぜか自分は他者に高く評価してもらえると思つてゐる。

自分は他人に対し偏狭で神経質なのに、他人は自分に対し、おおらかであるべきだし、

「別にいいでしょ？」

と半笑いで思つてゐる。

話としては壊れているのだが、その「話」さえ切り捨ててしまえば、当人がそう思うということについては無制限なのだ。

われわれにはこのように、無制限に「決めつける」という能力がある。加えてここでは、なぜそれを「する」のかということにも注目しなくてはならない。

無制限に決めつけると「できる」として、なぜそうして、熱心なまでにそれを「する」のか。

決めつけたところで、何の得にもならないのだから、今まで熱心になる理由はなさそうなものだ。

ところがそうではなく、われわれがその「決めつける」をやるのには、れつきとした理由があるのだ。

それは、「決めつける」ということが、それじたいの自我の栄養素になり、自我はそれを食らうことで、生存できるということなのだ。

「決めつけは自我の飼料▽▽ということ」。

何度も言うように、話と色（しき）は相克していく、体の真ん中と自我は相克している。

この相克が、矛盾せず両立するためには、魂魄という観測不能の領域と連絡するしかないということだった。

そのことは、稽古によるしかないし、稽古をつけるしかないのだが、ここではその稽古への道筋はいつたん忘れ、そんな両立は成り立たないものとする。

相克の中で、自我が太く肥えて生きていくためには、話をへシ折るしかないのだ。

話をへシ折つて、「決めつける」ということをする。

「あのさ……そんな、歴史的なことがどうとか、そのときの外国の勢力がどうとかじやなくてさあ。あーもう、往生際が悪すぎるでしょ。相手していくダルいわ正直。そうじやなくて、事実、日本軍は悪かった！」ってこと。その単純で動かしようのないことをオレは言つてはいるんですけど。なんでそこから論点はずらすの？ 日本軍が外国に行つて、その国を軍靴で踏み荒らしたのは事実じやん。そこは認めるしかないでしょって言つてんの。いつたいどれだけの人が被害にあつて、どれだけの人が苦しんだか」

この「決めつける」という単純なことが、自我の栄養素になる。

自我の機能は、「量る」という機能だが、自我の充足は、量つたものを決めつけるということにあるのだ。

500ml のボトルと、1L のボトルと、18L の缶があつたとする。

われわれの自我は、それらの容積を、見た目にも量ることができる。「これは 500ml ですね」

「これは 1L です」

「これは 18L の、いわゆる一斗缶でしょう」

さすがにこのようなことを続けていても、われわれの自我はおいしい思いをせず、これによつて自我は肥え太らないし、これによつて自我を生存させていくこともできない。

何かしらの「決めつける」をやらせてやらないとだめなのだ。

たとえば A 子と B 子と C 子を用意する。

A 子は美人で、B 子はふつうで、C 子は不美人だ。

これはただ量るということ。

これを、ただ量るということに留めず、

「A 子は、美人だよね。一軍女子で、まあ学校じやヒエラルキーの頂点。ぶつちやけ、人生イージーゲームつてたぐいでしょ。彼女は、自分でそれをよくわかつていて、なるべくそれをひけらかさないように、じつは内心ではすごく慎重に振る舞つているタイプ。だからこの後は順調に、そこの大学行つて、大学に行くのもけつよく結婚相手探しで、卒業後は就職して何年か社会勉強したら、あとは寿退社してタワマンで幸せに暮らつてところでしょ。マジ勝ち組で、学生のうちにも青春の真つただ中をがつり充実して過ごせるタイプ」

「B 子は、ふつうだけど、けつこう男好きするタイプではあるから、それで逆に苦労するパターンだと思う。地方の、中小に勤める男に言い寄られて、無下にできなくて、そのままくつついて苦労させられるんじゃないかな。彼女、家庭的なこと得意そだし、いわゆる癒し系でもあるから、女としてはけつこう価値あるのに、その自分の価値に気づいていないかな。彼女、家庭的なこと得意そだし、いわゆる癒し系でもあるルートとかありうると思う。化粧とか練習して垢抜けたら、もつと幸せになつてパターンだから、化粧とか練習して垢抜けたら、もつと幸せになつてパターンだ

「C 子は、ぶつちやけズスだから、腐女子とかオタ活とかして、趣味で

人生楽しくしていくしかないんじゃないかな。一念発起して、勉強とか資格取得とかをガチって、経済的な勝ち組を目指すのもアリっちゃアリだけど、普段は基本的に根暗だから無理じゃねって思う。ただ、頼んだら何でもしてくれそうだから、変態の男を見つけて変態プレイでペアリング成立つてことはあるかも。金持ち変態のお婆さんとして幸せに暮らせるつてルートもじゅうぶんありうるから、あきらめないほうがいいと思う」

もちろんこんな偏狭な人生観は、何の含蓄もなく貧しいばかりのもので、わたしは堂々と、

「そんな話はないし、そんな人生もない」と申し上げよう。当然だ。

失礼、貧しいばかりではなかつた、そこに「汚らしい」も付け加えておこう。

彼がABCに向けて空想して言つているのは、架空の、「何の話もない人の生きよう」でしかなく、それは人生のありようでもなければ、それぞの生きる話でもない。

ただ仮にABCが、本当に何の話もないままに生きるのであれば、ABCはじつさいそういう未来に向かうのかもしれない。

そのときは、彼ともども、ABCも魂においては何の価値もない中を生きていくというだけだ。

ともあれ、彼はこのようにして、ABCについて「決めつける」ということを常に内心ではたらかせており、そのことを自我の栄養素にしている。

生きものの生存が、「食べる」ということを中心に成り立つてゐるのだとすれば、それと同様、自我の生存は、「決めつける」ということを中心に成り立つてゐる。

「食べるという行為が生きものだよ」と言つてゐるとき、「決めつけるのが

自我という生きものだよ」と言つてゐる。

つまり彼においては、

「決めつけるのがオレなんだ」

ということ。

500mlと、1Lと、18Lを、量るというのは、たしかにオレの機能かもしれないけれど、それは満たされたオレではない。

満たされたオレというのは、決めつけたオレだ。

「Aは、アイドルになるとしたら、ハロプロ系じゃなく坂道系だけど、本人はグループ活動とかじやなくぜつたい女優とかに進みたがるタイプ。それだけつきよく、グラビアとかやらされそうになつて、それがイヤで、弱小プロダクションに転属するみたいなパターンじゃないかな。血液型で言つたらいかにもB型みたいな」

^^決めつけはすべての話を凌駕するvv。「話」が存在しない以上、自分がどう決めつけるかがすべてになるのだ。

旧日本軍は邪悪で、当時の日本人は愚かで、熱心にはたらいている人はみな畜生でやりがい搾取されており、処女と結婚できていない男はみんな負け組だ。活躍する人はけつとなくすべてが親ガチャの恵みでしかなく、イケメンと付き合つている女はみんな顔目当てのクズで、そのイケメンのもみんな「女殴つてそう笑」な男だ。そんな中、自分だけは根拠なく「まとも」と確信されており、その人となりは目立たないけれどやさしくて善良、付き合つた女は幸せになるだろうにと思われている。そしてそうした自分の価値がないがしろに無視されてゐるこの世の中は「クソ」というわけだ。面接で人のことなんかわかるわけがないと言つながら、自分は会つたこともない誰かのことを「あれは腹黒いタイプ、顔に出てるでしょ笑」と決めつけてゐる。

この章は、ここ十数年、われわれが特にインターネット上で何を目撃しているのかについてを、その仕組みごと如実に説き明かしてゐるもの

と思う。△△決めつけは自我的飼料△△なのだ。よつて、たとえば養鶏所ではニワトリが並んでそれぞれに飼料をついばみ、それによつてそれぞれが肥え太つていこうとしているように、われわれの自我も、そのアカウント所で並んでそれぞれに飼料をついばみ、それによつてそれぞれが肥え太ろうとしているのだ。

われわれはみな、自我という、この「決めつけの怪物」を内部に飼つてゐる。われわれは「わたし」を話の存在として保つうち、この怪物をせいぜい節度のもとに飼いならすことができるが、われわれが「話」という事象じたいを放棄するとき、われわれはこの怪物に食われるよりなく、その立場を逆転される。

われわれが怪物に飼われることになるのだ。われわれは、世界のすべての話を一切受け取れなくなり、ひたすら、

「ぜつたいそうでしょ」

と聞こえてくるもの、生涯その言いなりになるよりなくなるのだ。

「わたし」を得た者は、差別に耽りようがないし、「わたし」を得ていない者は、差別以外に「わたし」の代替品を得る方法がない。

浦島太郎は漁師の男で、アフロディテは女神だが、アフロディテは浦島太郎を差別するわけではないし、浦島太郎もアフロディテを差別するわけではない。

それぞれが「話」なのだから、差別のしようがない。

浦島太郎という量はないのだし、アフロディテという量もないのだから、差別できるパラメーターがない。

あのコはセンスないよね、わたしはセンスあるほうなんだけど、といふような、量れるものがないと差別のしようがないのだ。

差別は、差別意識や差別思想から生じているのではなく、ひたすら「わたし」の無さから生じている。

だからこそ差別は罪深く感じられるのだ。

差別そのものが罪深いのではなく、差別に「わたし」の代替を得ようとしている、その必死なさまが、いかにも原罪のままなど、われわれには直覚されるのだった。

（一般に、西洋ではそのありさまを「罪」と感じ、東洋ではそのありさまを「恥」と感じる傾向があります）

わたしはレイシストだろうか。

わたしは、インドのガンガーのほとりで、乞食の子供たちを、肩に乗せて歩いていたことがある。

子供たちがやけに懐いてくれたので、そうして遊んでいたのだ。少年が、絵葉書を売りに来たので、わたしはそれをすべて買い取り、

これは、そのレイシストを攻撃する意図から申し上げているのではない。

ただ性質上、そうなるのだということを、取扱説明書のように申し上げているのみだ。

「わたし」を得た者は、差別に耽りようがないし、「わたし」を得ていない者は、差別以外に「わたし」の代替品を得る方法がない。

## 差別

人は差別意識から差別をするのではない。

人は、差別が欲しいのだ、それで差別をする。

人は、差別によつて「わたし」が欲しいのだ、だから差別をしている。「わたし」を持たない人は、「わたし」の代替品を得るために差別をする。

よつて、「わたし」を持たない人は、全員がレイシスト（差別主義者）になる。

「もう持っていないか」と訊いた。

少年は、

「うん、もう無い」

と言つた。

そして、察しのよい少年は、

(何かヤバい気がする)

という顔をした。

彼はもう、売り物の絵葉書を持つていないので、わたしはその少年をふん捕まえ、ガンガー（ガンジス川）に投げ込んでやつたのだ。

ざつぶーんという音がした。

それ以来わたしは、乞食の子供たちに、

「あのジャパニーはヤバい」

と噂され、姿を見かけると逃げられるということになつたのだが、次第に逆に懐いてくれて、よくわからないが、とにかく彼らを肩に乗せて歩いたりしていたのだ。

まわりのサドゥーたちは、それをニコニコして観ていた。

わたしは、乞食のリーダーをしていた少女に、こつそりサモサをおごつてやつたことがある。

わたしがバラナシを出立する前日の夕刻のことだ。

サモサをおごつてやると、彼女は悪びれもせずよろこび、

「あの店はおいしくないの。向こうの奥にある店のほうがずっとおいしい」

と、指差して言つて、手を引いてわたしをそこへ案内してくれた。

わたしは手を引かれながら、もう、うれしくてうれしくて、生まれてこの方これ以上にうれしいことはないと思い、生涯でこのときだけ、本当にひざまずいて神に感謝を言いたいと思つた。

彼女は、乞食をしているが、本当には、各店のサモサの味に通じるぐらいには、豊かに生きられているのだ。

それがもう、うれしくてうれしくて、たまらず、おれはそのときのうれしさを一生の思い出として抱えることにしたのだった。

彼女は、子供だつたし、乞食だつたが、薄汚れていて浅黒くとも、美人で、おれは一方的に彼女のことを、おれのガールフレンドだと思つていい。

お前はおれのガールフレンドだと、今さら言うなら、頭のいい彼女のことだ、彼女は笑つてイエスなりオーケーなりと、言つてくれたものと思う。

おれはいま、インドの乞食たちの話をしたが、おれは差別主義者だろうか。

おれは、田舎者は、無理にフランス料理を食いにいつたり、無理にそこで高いワインを飲んだりはしないほうがいいと思つてている。

田舎者がどうこうというより、人は、靈的に共鳴しないところには行くべきではないのだ。

靈的に共鳴しないでは、行つたことにならないし、来られた側も困るだけだからだ。

靈的に共鳴しない場所に、無理に乗り込んでも、それはどこに行つたこともならないし、なんというか、それでは靈的にケンカをしにいつただけにしかならない。

たとえ田舎の人でも、足許がゴムの長靴でも、フレンチのシェフが鼻息荒く「美味しいものを食おうぜ」と料理しているということ（フレンチのシェフはたいてい鼻息が荒い）、および、スタッフのみんなが笑顔で真剣に、食事の愉しみを供しようとしていることに、靈的に共鳴するなら、その人はちゃんとしたオステルリーの客になりうる。

フランス料理屋にあるのは、食事への愛なので、食事への愛が先立つ

人なら、誰でもまともな客になりうるのだ。

それを、あろうことか、自己愛の充足を目的として来店する人がいて、そういう人はまともな客にならない。

田舎者というのは、出自や生活環境が田舎だから田舎者になるということではなく、都会の価値観に乱入すれば自分も靈的に高い存在になれることで、そういうようなでたらめな妄念に囚われ、それがいかにも田舎で取り憑いた妄念だなあと感じられるので、そのことを田舎者というのだ。

靈的に共鳴しない場所に無理に首を突っ込む必要はない。

アリーナ・コジヨカルを、何もわざわざ通天閣の下に連れて行く必要はないように、田舎者に、何もわざわざDRCワインをテイスティングさせる必要はない。

何もわざわざ、バンジョーでツイゴイネルワイゼンを演奏する必要はないし、バイオリンでカントリーを演奏する必要もないのだ。

そうしたことはたぶん、れつきとした差別なのだろう。

その意味では、わたしは差別主義者だし、わたしはフランス人がわたしのことを見たら、「なんだこの東洋人は」と、眉を顰めるのではないかと、かねてから思っている。

こちら、二百年も鎖国していた尊王攘夷の末裔が、いまさらヨソの国に自分たちだけ無差別で受け入れてもらえるなんて思わねえよ。

それぞれの場所と地域に、国に、民族に、大切なものがあるなら、それと靈的に共鳴できないかぎり、おれは向こうから見て「なんだコイツ」と眉を顰められる存在なのではないだろうか。

わたしは丸の内時代に、中国人たちとさんざんビジネス上のやりとりをしたし、上海や北京に行つて一緒に火鍋を食つたりしたが（もちろん激辛で即刻腹を壊した）、経済成長で給料が二百倍になつたという彼らに、たとえば島崎藤村の話はわからねえよ、と言い放つのは、内心のことであ

れ、れつきとした差別だろう。

わたしは、男の板前が握った寿司と、女の板前が握った寿司は、何かがきっと違うだろうと思っているが、女の板前が握った寿司を毛嫌いするというつもりはいまのところない。

どちらが握った寿司でも、ただ旨く食うだけではないだろうか。

ただ、それがどうしても受け付けないというか、苦手と感じるという人がいるのもわかる。

清らかな女性のマッサージ師に、身体をほぐされるのはたいへんいい気分だが、やたらマッサージの上手いおっさんの指圧に身体をほぐされると、ほぐされながら、「くっそ……」

と複雑な気分になる。

身体をほぐされるということは、もつとたおやかでエレガントな、ラクジュアリーのことであつてほしいのだ。

おっさんの力強い指でツボをガツンガツンやられて、「痛つてえなあ」と反発し、反発したくせに結果的に筋肉は羽二重餅のようにやわらかくなつていると、何か自分の身体がアホみたいに思えて無念なのだ。

わたしはレイシストだろうか。

わたしは、中国の取引先で、アホほど酒を飲まされてデロンドロンになり、もちろん二日酔いになつて翌日ふたたび彼らに会つたとき、彼らが朝からケロツとしているのを見て、

「種族が違う」

と感じた。

こいづらは今日も、朝からチャーハンでも食つて、元気いっぱいで出勤してきたに違いない。

彼らは、かつてのナショナル製品や、初代ファミコンのように、単純

かつ頑丈なのだ。

とにかく電源を入れたら動くというような頼もしさだ。

島崎藤村がわかる余地はないと思う。

インドで、夜、リクシャーに乗って次の街に向かっているところ、向かう先の街の螢光色がおかしく、

「なんだこれ」

と思っていたところ、街路からリクシャーの後部座席に巨大な爆竹が投げ込まれた。わたしの視界は明滅し、鼓膜は衝撃と耳鳴りに軋んだ。

その爆竹の破裂音に重なって、リクシャーの運転手が、

「ハツハツハ、フェスティバル！」

と大声で言つたので、わたしは慌てて運転手の顔を覗き込んだのだが、そのおっさんの顔はすっかりガンジヤ（マリファナ）でガンギマリになつていた。

わたしはそのとき、

「あつ、このおっさんダメだ」

と思つたのだ。

わたしにとつて、彼らを日本人と同じ種族と思えというのは無理な注文だ。

当時わたしが見た「彼ら」は、輪廻を根つから信じ込んでいて、それゆえに破格にファンキーだった。

ファンキーになろうとしてそうなつてているのではなく、それ以外のものにはなれなくなつてているのだ。

それでいて、彼らは彼らなりにシャイだつたりするので、もうわけがわからないのだった。

わたしはレイシストで、仮に額の汗を拭いてもらうなら、ずんぐりしたおっさんに拭かれるよりは、うるわしい美少女にそれをしてもらいたいと思うし、紅茶を淹れてもうなら、ずんぐりしたおっさんに淹れてもらうよりは、楚々とした美女にそれをしてもらいたいと思う。

几帳面な男が、部屋の片づけをすると、部屋はきれいになるが、「ふつうの男」が部屋の片づけをしても、部屋は一向にきれいにならない。これが、「ふつうの女」が片づけをした場合、部屋はちゃんときれいになるのだ。

がさつな女が片づけをしても部屋はきれいにならない。

でも、部屋をきれいにするなら、「ふつうの女」でいいのだ。

男の場合、ふつうの男ではダメで、「几帳面な男」の必要がある。がさつな男が片づけをした場合、部屋はむしろ散らかる。

男の場合、何につけ、

「早よ、やらんかい」

と言つて尻を蹴れば、だいたいそれで「うつす」となつて話が通じるのだが、さすがに女性がそれで「うつす」と答えて話が通じるとはない。

男の場合、尻を蹴りあげるぐらいのほうが、蹴られる側として「落ち着く」ということがあるようなんだ。尻を蹴られるとヒヒーンとなつて動きやすいらしい。

女性の場合、それはさすがにない。

女性の場合、やることを明瞭に伝えれば、一方的に言いつけるだけでよく動いてくれるので、尻を蹴る必要はない。

ただ女性に向けては、不明瞭に「お願い」などをすると、とたんにキモがられて状況が悪くなることがあるので、注意が必要だ。

男性に向けては鈍器のような気魄が適合し、女性に向けては刃物のような気魄が適合するということ。

男性に向けては「問答無用」がよく、女性に向けては「不都合なら断つてもいい」ということがはつきり伝わっているのがよい。

と、このようにさまざまことが、レイシストのわたしからは言いうる。

だからといって、このわたしについて「レイシストだ！」と、いまここであわてて糾弾するという人は、なかなかいのではないだろうか。

レイシストだと言われても、じつさいにインドの乞食に懐かかれているのはおれなのであって、糾弾者ではない。

片づけをしてくれる女に懐かれているのもおれだし、尻を蹴られたがる若造に懐かれているのもおれだし、中国人とバカみたいに辛い火鍋と一緒に食いに行って下痢をしたのもおれであって、糾弾者ではない。糾弾者は誰にも懐かれていない。

ここに見当たる差別が、なぜ一般的な差別のように罪と恥の臭いをぶんぶんさせていないかというと、ここにあるのはすべておれの「話」だからだ。

おれはインドの乞食の子供らの話をした。男たちの話や女たちの話をした。朝も夜も頑丈で元気な中国人の話をし、マリファナでガンギマリになつてているリクシャーワーラーの話をした。

それらはおれの話である。

（そりや、おれが生きて、おれが話したんだから、おれの話だ）

話は量ではないので差別にはなりえない。

逆に言うと、「話」におよんでいない人は、すべてを差別でしか取り扱えないということでもある。

「へー、インドってアレですよね」

「へー、男ってアレですよね」

「へー、女ってアレですよね」

「へー、中国人ってアレですよね」

「へー、リクシャーの運転手ってアレですよね」

この「アレ」をどう加減しようが、これはもうスタイルじたいが差別だ。

なぜこのようにして、人は差別をしてしまうのかというと、そのことについても、かのサルトルが解答を出してくれている。

サルトルは本当に貴重な、ヒント満載の、史上屈指のハズレ男だ。

サルトルは、対自存在といって、自分というものを、「Aでないもの」の集積として捉えている。

つまり、たとえばサルトルはフランス人だが、彼にとつてフランス人の自分とは、ドイツ人ではないものであり、スペイン人でもないものであり、イタリア人でもないものなのだ。

もちろんベトナム人でもなければアメリカ人でもなく、コートジボアール人でもない。

サルトルは、意識の対象Aがあつたとき、そのAは、「わたし」という自意識とは異なる存在のものという、分かたれた存在として捉えられているというのだ。

目の前の消しゴムを見たとき、

「（『わたし』ではない）消しゴムというものの」

という捉え方をしている。

それはそのとおりなのだとわたしも思う。

そして、サルトルはたぶん言及していなかつたと思うが、ここに示されているのは自我の機能であつて、ここではその自我が、「わたし」と「消しゴム」を差別するということにはたらいているのだ。

「わたし」と「消しゴム」を差別し、「わたし」と「鉛筆」を差別し、「わたし」と「定規」を差別している。

ここで、サルトルの理論で言うと、わたしが乞食の少女とサモサを食べに行つたとして、わたしの意識はその少女のことを、

「（『わたし』ではない）、インドの乞食の少女」

と捉えているというのだ。

自我のはたらきとしてはそのとおりだろう。

けれども残念ながら、おれは「おれの話」をしているのだ。

おれの話は、おれそのものであつて、そのおれの話とは何かというと、そのインドの乞食の少女はおれの一方的なガールフレンドということだつたし、一緒にサモサを食いに行つたということだつた。

おれは「おれの話」において、乞食の少女を取り扱つてゐるので、おれと乞食の少女は同一性を得てゐることになる。

それについてサルトルの場合は、

「インド人の、乞食の少女は、ボクではないもの。一方、乞食の少女でないものが、『ボク』なんだよなあ」と捉えているということなのだ。

つまりサルトルの言う対自存在というのは、「ボク以外のすべてを差別するボク」ということだ。

それは自我のはたらきであつて、それが自我のはたらきだということについては、わたしも同意する。

ただ、このあたりのことを考えると、いつまでもどうしても、「なぜサルトルは、こんなに致命的にアホだつたのだろう?」

という、単純な疑問が湧いてきてしまうがいいのだった。

対自存在といつて、「自分」だって意識の対象になるとサルトル自身が言つているのだから、それでは「自分」という自我が、「わたし」ではないということになるではないか。

自我は他人なのだ。

対象Aに意識を向けるとき、「わたし」と「A」とが分かたれて捉えら

れるとサルトルは言うのだろう。であれば、Aという変数に「わたし」を入れれば、「わたし」と「わたし」が分かたれて捉えられるに決まつてゐる。

それは、「わたし」と「自我」に同一性がないということであつて、同一性がないならそれは「わたし」ではないのだ（当たり前だ）。

同一性がないなら「違うやつ」なのであって、その対自存在とかいう

やつは、「わたしではないやつ、違うやつ」に決まつており、つまりは、「自我は他人」に決まつてゐるではないか。

なぜサルトルは、自分で言つてゐるこの単純なことを、最後まで見落とし続けたのだろう。

サルトルはなぜか、この「わたしではないやつ」に、ついにアンガージュマンするというわけのわからない結論に飛び込み、そのあとすべてを知らんぷりしたのだった。

そのあと実存主義は、なぜか漠然と「構造主義に敗北した」という扱いになつて、歴史の表舞台を去るのだが、その幕切れもいまいちよくわからぬものだ。とはいえ、その幕切れにはきっと、構造主義によつて実存主義の抱えている「差別」の精神が暴露されてしまつたということもあつたのだろう。

本稿では構造主義までは取り扱わない。

というか、構造主義は枠組みが不明瞭で、実存主義のように切り取つて取り出すふうには使いづらいのだった。

(構造主義は、西洋が西洋の絶対性を投げ出した学門でもあるので、どことなくだらしない学門になつてゐるという感じがわたしにはする。読んでも正直よくわからないのだ。いまさらプラトンのイデア論と何が違うのかわからない。西洋でさんざん威張つていたものがいまになつて他の地域にヒントを乞うなよ)

ここからは、現実的な話をしていこう。

わたしは、この年になつて生まれて初めて、それもここ数週間におよんでついに、「差別」というものがこの世に存在するということを知つたのだった。

これまでわたしはまったく知らなかつたが、多くの人々は、率直に言つて「差別」の中を生きているのだ。

「差別」の中に「自分」を定義している。

「話」が得られない以上、人は「差別」の中に自分を定義し、「差別」の中に生きているのだ。

差別の中に「自分」を定義しているとはどういうことか。

まず、「自分」とは何かということについて。

自分とは何かといつて、「自分とは○○だ」と、答えることができない。

サルトルが言つたように、人は自分の本質を答えられないのだ。

ただ、「自分量」と呼ぶべきものは観測できるので、

「わたしは、いちおう大卒です。いちおう、まともな大学を出ています」

「わたしは、いちおう大卒です。いちおう、まともな大学を出ています」

「わたしは、いちおう大卒です。いちおう、まともな大学を出ています」

「彼は高卒ですよね」

ということと分かたれて捉えられている。

「わたしはいちおう、まともな大学を出でていて、仕事はきつちりやつて  
いるほうです」

そのことは、

「あのコは、自分の仕事をきつちりやらないですよね」

わたしはそれとは違う者です、ということで捉えられている。

「まともな大学卒で、仕事はきつちりやつて、あとそれなりに水準の高  
いところに住んでいますし、無理にセンスのないことはしません。あと、

恋愛経験も人並みにあるかな。英語は日常会話ぐらいはできて、親のしつけが厳しかったので、礼儀とかマナーとかはちゃんとやれるタイプです。いちおう、育ちとして。まわりの友達にお金持しが多かったというのもあります。二年ほど料理屋でアルバイトしていたので、料理の基本はひととおり教わっています。あと、才能がある人というより、がんばっている人のことを尊敬しますね。おしゃれは、お金より時間をかけるべきだと思っていますが、裏腹に思い切つてお金を使つてている人

はうらやましいし、気合入つているなあって思います」

「それで、彼は高卒ですよね」

「あのコは、自分の仕事をきつちりやりませんし」

「あの人は、水準の低いところに住んでいますよね」

「彼女は、センスのないことを無理にやっています」

「きみはさあ、恋愛経験とかまったく無しで生きてきたでしょ笑」

「Aくんは英語とかまったくできないですし、一方でB先輩は、英語は

ネイティブレベルなんですよね」

「彼女は、礼儀とかマナーとかが壊滅的ですよね。あきらかに育ちが悪いですもん」

「あなたは、友達の家がクルーザーを持つていて、そういう経験にはまったく無縁だったでしょ笑」

「料理屋で二年もアルバイトしていたからね。きみは料理って基本から

まったくわかつてないじやん？」

「Cさんはたしかに才能あるんですよね。でもDさんの努力のほうが

すごいと思います。わたしそこまで努力できないって思うし」

「あの先生、いつもすつごいおしゃれですよね！ かないっこない。セ

ンスもそうですが、そもそも掛けているお金がぜんぜん違うから、す  
ごいって圧倒されます」

このようになると、まるで「わたし」があるみたいなのだ。「わたし」

は、いちおうまともな大学出でているんだよね。「わたし」は、自分の仕事をきつちりやるタイプなの。「わたし」はセンスのないこと無理にやらないし、「わたし」は人並みに恋愛経験あるよ。

けれどもこれらはあきらかにパラメーターであつて「話」ではない。

英語が日常会話でいどにこなせたとして、そのパラメーターはそれじたいで何の「話」でもない。恋愛経験があるとかないとか、料理の基本を知つているとか知らないとか、それらはすべてパラメーターでしかない。

パラメーターだけでは「話」にはならず、それでは「わたし」にはならないのだ。しかし、そのパラメーターを他と比較し、「差別」するならそこには自分量が発生する。英会話についての彼量は「中学一年生」だったとして、自分量は「日常会話でいど」だと言えるし、B先輩量は「ネイティブレベル」だということになる。

差別の区分けによって切り出される領域に、自分量があり、まるでその容量と座標が「わたし」みたいなのだ。全国試験を受けたとして、教師が、「偏差値50族の人」と生徒らに呼びかけ、「はい」と举手をさせていく。

「偏差値60族の人」

「はい」

「はい」

「偏差値70族の人」

「はい」

60族の人は、50族とは民族が違う。もちろん70族とも民族が違う。

「わたし、60族なんだよね」

そのように、差別の中に「わたし」を言いうる。

「わたし、長いこと60族でやつてきたから、いまさら50族に落ちるのは違うと思う。これからついに、70族に踏み出していこうかなって思っているんだ。そこに到達してみせる。そしてそのとき、けつきよう70族が、わたしの本来の種族だつたんだって、言えるようになると思う」

それでは、わたしがガンガーホーリーで乞食の子供を聖なる河に投げ込んでいたとき、わたしはどういう種族だったのだろう。わたしは「イ

ンドとかに旅しちゃう精神性に重きを置く種族」で、「子供にも乞食にも分け隔てしない博愛オープン種族」、「年齢は大人でもやんちやで腕白ぶり続ける種族」なのだろうか。

もちろんそういう人もいるかもしれない。そういうふうに、差別の中に自分の種族を彫り出して見せ、その種族をもつて「これがオレなんだよね」と言いたがる人もいるのかもしれない。

だがもちろんわたしにとって無為で馬鹿馬鹿しいことだ。全国試験のおの解答に、○が何個足されようが、おれは変化しないし、どれだけ○が減らされて×が増やされようが、おれは変化しない。

おれは量ではないのだから。

おれはおれ自身について、次のように奇妙なことを言つてみせよう。このことは、あなたに奇妙な納得を与えると共に、ある意味「差別」という視点においては、わたしの「差別」の機能こそが壊れているというこどを発見させるだろう。

いわく、

「おれは、まともな大学を出ていて、まったくまともな大学を出ていない。おれは、自分の仕事はきつちりやるタイプで、自分の仕事などまるできつちりやらないタイプだ。それなりに水準の高いところに住んでいて、住んでいるところの水準は低い。無理にセンスのないことはしないし、センスのないことでもおれは無理やりにやることにしている。恋愛経験は人並みにあって、人並みの恋愛経験というのは持ち合わせていない。英語は日常会話ぐらいはできて、英語で日常会話をするとたどたどしくて破綻だ。親のしつけが厳しかったので、礼儀とかマナーとかはちゃんとやれるが、親のしつけなんてなかったので、礼儀とかマナーとかはちんとやれるが、親のしつけなんてなかったので、礼儀とかマナーとかは崩壊している。まわりの友達に金持ちが多かつたし、まわりの友達に金持ちはいなかった。二年ほど料理屋でアルバイトしていたので、料理の基本はひととおり教わっているが、アルバイトはしたことがない、料理

理の基本はぜんぜんわからない。才能がある人というより、がんばっている人のことを尊敬するが、尊敬する人に頑張り屋はいなかつた。何かを実現する人に才能なんて見たことがない。おしゃれは、お金より時間をかけるべきだと思うが、時間もお金もかけるべきじゃないとおれは思う。思い切ってお金を使っている人はうらやましいし、気合入っているなあと思うが、気合が足りないし金に頼るなよと、あきれて思う」  
(どうでもいい注..おれに料理屋でのアルバイト経験はありません)  
これではあなたは、差別によっておれを捉えることができなくなつてしまふ。

あなたがおれについて、

「あなたは、相手が子供だとか外国人だとか、乞食だとか、そういうしたことでもまつたく差別はなされないのですね」

と言つたとして、わたしはそれについて、

「いや、そのコはめっちゃインド人で、めっちゃ子供で、めっちゃ乞食ですけどね」

と答えるだろう。

あなたとしては、わたしを差別で捉えることができなくなつてしまふが、それでいてなぜか、あなたはわたしの「話」を、ひたすら荒唐無稽で壊れているものとは体験しない。

おれが、まともな大学を出ていて、まともな大学を出ていないというのは、まつたくの事実だ。

われわれの観測領域において、「AでありAでない」ということは矛盾していく成立しない。Aであるということは、Aでないということと相克する。

ただ、観測不能の魂魄という領域に、体の真ん中が連絡を得ていてのあれば、その魂魄の領域においては、AでありAでないということが矛盾せず両立する。

おれはまともな大学を出ていて、まともな大学を出ていないのだ。自分の仕事なんかやらないし、自分の仕事はきつちりやる。

住んでいるところの水準は高く、住んでいるところの水準は低い。センスの有無なんか関係なしに無理やりやるし、センスの無いことは無理にやらない。

恋愛経験なんか大量にあるし、恋愛経験なんかひとつもない。

乞食のリーダーをしていた少女が、おれのことを好いてくれていたかどうか、それはおれにはわからない。

けれども、彼女がおれを好いてくれていたのはわかる。

彼女がおれを好いてくれていたのかどうかはわからないけれども。「分かる」と「分からぬ」は通常、両立しない。

分かる、と言い張る必要はおれにはないし、分からぬ、と言い張る必要もおれにはない。

そしてどちらとも言い張つてよいし、言い張る必要がある。

彼女がおれの一方的なガールフレンドだったという「話」は、そういうことなのだ。

矛盾させても壊れないのだから、この話は壊れない。

当たり前だ、ただの「話」なのだから、「話」なんてものは壊れようがない。

浦島太郎の話が壊れることはない。壊そうとしたら改変するしかないが、改変してしまつたらそれはもう浦島太郎の話ではなくなつてしまふ。サルトルの言う対自存在という発想が、いかにつまらないアホの視点のものだつたか、これでわかるだろう。

おれは、「おれでないもの」を、しばしばおれだと体験するし、おれは「おれ」を、しようつちゅうおれではないものと体験する。

そんなこと、おれにとつては日常茶飯事だし、特に稽古の最中には、それが常時のことになると言つていい。

これでサルトルの論は根っこから枯れてしまう。

ピーターフォークは、刑事コロンボだが、ピーターフォークなのだから、刑事コロンボではないのだ。

ところが、ピーターフォークは刑事コロンボであり、ピーターフォークが刑事コロンボということは、ピーターフォークはピーターフォークではないということになる。そしてそれこそがピーターフォークだとうのだ。

サルトルは西洋人だったから、こんな当たり前のことにも気づかなかつたのだ、ということにしておいてやろう。

構造主義以降、西洋人はこの事象を常識のものにできたのだろうか。

「話」は魂魄領域との連絡で得られ、体の真ん中が魂魄に通じていないう者、あるいは体の真ん中がそもそも機能していない者は、この「話」という事象を得ることができない。「主題を体験（体現）することができない」と本稿では表現される。

「話」を得られない者は、「わたし」を得られないので、やむをえず自我を「わたし」の代替品とする。

自我は、魂魄の領域に接続することなどできないのに、自我でどうやつて「わたし」の代替品をひねり出すのか。

「差別」によってひねり出すのだ。

人は、差別をしたくて差別をするのではないし、差別意識や差別思想から差別をするのではない。

「わたし」が欲しいから差別をするのだ。

^^人は、差別が「したい」のではなく、差別が「欲しい」▽▽。

差別の中に「自分」を見い出し、それを彫り出してみせ、それを「わたし」ですということにしたい。

人はそうまでして「わたし」が欲しいのだ。

差別でひねり出した「わたし」を、受け入れてほしい、と思つてゐる。

その願望は、いくら強かつたとして、やはりどこまでも無理があると いうように、わたしには思える。

浦島太郎は、カメをいじめている子供たちを見て、「こらこら、やめて あげなさい」と子供たちを諫めたのだった。

一方、わたしは絵葉書を売る子供たちから絵葉書を買い、「もう持つて いないね」と確認してから、彼を河に投げ込んだのだった。ざつぱーん という音がした。

その後、浦島太郎は海の中にもぐつて、竜宮城で乙姫に会つた。わたしはその後、ガンガードに沐浴し、そこでヒンドゥーの神々に会つた。

ただそれだけのことでしかない。

ただ、ここでわたしがあなたに、

「あなたは？」

と訊くと、あなたは答える話がなくてあわててしまうのだ。

あなたはあわてて、

「わたしは、まともな大学卒で、仕事はきつちりやって、あとそれなりに水準の高いところに住んでいますし、無理にセンスのないことはしません。あと、恋愛経験も人並みにあるかな。英語は日常会話ぐらいはできて、親のしつけが厳しかったので……」

と言い出す。

そうなると、もはやわたしは言いださなくとも、あなた自身で、

「そんな話はない」

と思い直すことになる。

人は差別の中に「自分」を見い出し、それを「わたし」の代替品にしようとすると、それはけつきよく無理のある、並べられると代替品にさえなつてくれないしろものだ。だからこそわれわれは、その抱え込んだ差別を、罪あるいは恥の深いものとして隠し切ろうとする。ただそんなこ

とをしてもそれはただの悪あがきにすぎない。

われわれの多くはただ原罪・因果のままのレイシストなのだ。レイシ

ズムの中にしか「わたし」の代替品を作り出せない。

^^片側を見上げて、片側を見下すvv。差別。ずっとそのことを続けてい  
る。ずっと変動的なそこに立ち続け、さらにそのことをずっと隠し続け  
ている、その苦しさが「わたし」なのだとあなたは思い込んでいるのだ。

重ねがきね言うが、そんなものは「あなた」ではないし、誰だって本来は  
そんなわけのわからない存在ではない。

あなたの本質は話だ。

魂魄から切り離されたあなたが「わたし」を失い、「わたし」を探して  
差別の中をきりきり舞いし続けるなどというのは、いつそ当たり前のこ  
とではないだろうか？

魂魄から切り離されたあなたが「わたし」を失い、「わたし」を探して  
差別の中をきりきり舞いし続けるなどというのは、いつそ当たり前のこ  
とではないだろうか？

## 耽美と欲

話と、色（しき）がある。

色（しき）は、話ではない。

色（しき）は、量だ。

量、あるいは「量る」ということ。

どちらにせよ同じ意味だ。

自我は、この「量」を取り扱っている。

自我は、量るし、いっそ、「量」が自我だと言つてもいい。

話がわたしで、量が自我だ。

その場合、その「わたし」というやつのほうが、なかなか手に入らな  
い。

自我のほうは、四歳ぐらいには、もう勝手に具わっているというのに。

自我は、量ることができ、さらに、「決めつける」ということができる。  
量るというのが、自我の機能だが、「決めつける」というのが、自我の

充足だ。

「あいつ、性格悪いからな」  
と、決めつけることができる。

「あいつ」に用事はなくて、ただ決めつける、ということに用事がある  
のだ。

だから嬉々として、あいつ、性格が悪いからな、と言う。  
この決めつけを攝取して、自我は生存を続けている。

決めつけるということにおよんでは、じつはもう、量るということを  
フェアにしなくていい。

決めつけるのに根拠なんか要らないのだから。

あいつ性格がじつさいどうかなんて量らなくていい。

むしろ、量るということに徹してしまふと、それは決めつけではなく  
なつてしまふ。

決めつけるということは、いつそ量るということの放棄なのだ。

^^量つていて見せかけて、ただ決めつけているvvということ。

それがいちばん有効で、いちばん一般的な方法だ。

「あいつ、性格悪いからな」

根拠なんかなくていい、たっぷりと言う、というだけでいい。

むしろ量なんて放棄してしまふほうが、決めつけるということの威力  
が増すのだ。

量を放棄するということはどういうことだろうか。

量は、色（しき）だが、量を放棄するということは、色（しき）を放棄

するということだろうか。

そのとおりなのだが、そのことを説明するため、いま手続きを踏んでいる。

量を放棄すればするほど、人は無制限に「決めつける」ということができる。

鈴木花子さんを、「マー・ガレットちゃん」と決めつけることができる。  
なぜ鈴木花子さんがマー・ガレットちゃんなのかといつて、クラスメートたちはたとえば、

「種族が違うから！」

と決めつけることができる。

「種族が違うから、あなたは身体からマー・ガレットの香りがするの」

あとは、その種族の違いというやつを、学級の名簿に書きこめばよい。

「マー・ガレットちゃんはね、ツチ族なんだよ！」

鈴木花子はツチ族で、他のみんなは、フツ族なんだという。

「ほら、この名簿見てごらん」

学級の名簿を見ると、クラスメートらの名前の横には、それぞれ「フツ族」と添え書きがされていて、唯一、鈴木花子の横にだけ、「ツチ族」という添え書きがされていた。

「ね。だから、マー・ガレットちゃんはツチ族なの」

鈴木花子はむろん納得せず、

「そんなの、あなたがたが勝手に思いついて、あなたがたが勝手に言い

張つて、あなたがたが勝手にそう名簿に書き込んだだけじゃない」

「そうじやないけど、別にそれでもいいよ。でもとにかくそれって、マー

・ガレットちゃんも、自分がツチ族だつて認めたつてことだよね」

「違うよ、なんでそんな話になるの」

「ねえみんな聞いて！ マー・ガレットちゃんも、自分はツチ族だつて認めたよ」

それから数日後、学級で共用するバレー・ボールに穴があいているということがあった。

穴があいていては、バレー・ボールは使用できない。

たんなる経年劣化だつたろうが、とにかくクラスメートたちはバレー・ボールを失い、昼休みの娯楽をひとつ失つた。

それについて誰かが、

「ねえこれって、ツチ族によるテロじやない？」

と言つた。

するとすぐに、

「そうに決まっている」と決めつけが反響した。

「ツチ族ってもともとそういう民族だから」

差別が起る。

「オレ、前から思つていたんだけど、いいかげんツチ族を監視するべきなんだよね」

「あ、それ、わたしもそう思う」

「フツ族の団結の力を見せてやろうよ」

いいかげん鈴木花子が、悲しくなつて、

「何をもつてわたしのことをツチ族だなんて決めつけているの」と言つた。

すると誰かが、

「それはあなたが、細身で、背が高いからだよ」と言つた。

「種族が違うからな」

誰かが鈴木花子を指差して、

「ツーチー！」

と大声で言つた。

そしてクラスメートらは、自分たちを指差して、

「フーツー！」

と言った。

彼らはウォーッと喚声を発して盛り上がった。

もはや、何も量る必要はない。

量らなくても、決めつけることはできるということに、人の自我は気づき始めるのだ。

決めつければ決めつけるほど、自我は強く太く、肥えていける。

それなら何を量る必要があるというのだろう。

決めつけを固着させれば、それがいわゆる「差別」になる。

マー・ガレットちゃんは、きょうツチ族で、あすもツチ族だ。

「彼女は、わたしたちとは違う種族で、下劣な種族なんだよね」

毎日、その決めつけを味わい、その飼料を摂取することができる。

彼女を除く全員が、「わたしふツ族だから」「ふツ族がわたしなんだよね」と自負して暮らしていけるのだ。

別の話を考えよう。

ある男は、ふとひとり、次のように内心で思つた。

今年で三十歳になる男だ。

「オレ、本気出していたら、ふつうに東大とか行けたと思うし、あるいは、ガチれば、ボクシングで世界チャンピオンとかになれたと思う」

いまでも本気出せば、そのへんのやつらより、オレのほうがぜんぜん強いんだよね。

ま、おれはそういうの趣味じゃないから、人を殴つたりとか、そういうことに本気出したりとかしないけれど。

東大に行つて高学歴になつてもよかつたけど、それよりも、ふつうにソシャゲとかやつているほうが楽しかつたからなあ。

まあ、そういうふつうの愉しみが得られない人が、受験とかスポーツ

とかで必死になるんだろうね。

そんなことをやつても、本質的には、おれのほうが頭いいし、本気出したら、けつきよくおれのほうが強いけど。

まあいいか、おれは本気出さなくとも。これはこれで、こういうのがオレだから。

彼はそのように、自分のことを内心で決めつけて言うのだが、この彼の自己評価は正当なものなのだろうか。

きっとそうではないのだろう。

きっとそうではないのだろうが、かといって、彼のその内心の自己評価を、外部から是正する方法はあるだろうか。あるいはせめて、たしなめる方法はあるだろうか。

もちろん、ボクシングジムに毎日通わせ、五年ぐらい強制的にリングに立たせれば、彼の自己評価は修正されるかもしれない。力強くで。

つまり、「力量」を、強く「体感」させられるので、彼はやむをえずその「量る」ということに、立ち返らされる——かもしれない——ということ。

それでもなお、彼は内心の「本気を出せば」という自己評価を取り下げないかもしれないし、だいいち、そのような方法は仮想するにしてもあまりに非現実的だ。

とにかく彼は、本気を出せば、高学歴で、強いファイターなのだと言つていい。

彼はみずからのこと、そういう種族だと言うのだ。

彼がもし、「量る」ということに立ち返り、そのことに正面から堂々と挑むなら、ほとんどの場合で彼の挑戦は、単純な力量不足ということで粉砕されるのだろう。

え、粉砕されてどうする。

そんなこと、彼にとつて何のメリットもないではないか。

だから彼は、

「立ち返らなくていい」

ということになる。

彼はもう「量る」ということを放棄すればいいのだ。

別にそれで、生きていくのに困るわけでもない。

「量る」ということを放棄したとしても、ちゃんと赤信号と青信号は量るし、自分の飲み食いする量、バーゲンセールの割引率、自分の睡眠時間などは「量る」だろう。

それでふつうに生きていく。

あとは、自分の力量についてだけは、量らなければいいのだ。

ここで、「量らなければいい」といつて、かつてそこにあつた彼の色（しき）はどこへ行つたのだろう。

量、イコール色（しき）を放棄したということは、彼は色（しき）を離脱して、「話」のほうへ進んでいったということなのだろうか。

本気を出せば東大に行けただろうし、ガチればボクシングの世界チャンピオンになれただろうという、それが彼の「話」なのか。

あまりにもそうは思えない。

では彼の、もともとの色（しき）はどこへ行つたのか。

これは、色（しき）から「欲」へ転落したのだ。

自我は、決めつけることができるし、決めつけを固着させて「差別」を作り出すことができる。

その差別の中に、「これがオレなんだよね」という、自分を得ることもできる。

本気を出せば東大に行けたし、ガチればボクシングの世界チャンピオンになれただろうけれど、性格的にそういう気になれなくて笑。それでいまも、ふつうにソシャゲに課金して遊んでいます。でも、もともと種族としては誰よりも優等な種族なので、そういう人、劣等な種族

の人たちはかわいそなつて思つて、いつも見ています。

「これがオレなんだよね」

信じがたいことだが、人の自我とはもともとこういう性質のものだ。

自我は、量るという機能を持つているが、それはあくまで機能であつて、それじたは充足ではない。

量るということは、自我にとつて別に「おいしい」ことではないのだ。

自我は、しだいに量るという機能をおろそかにしてゆき、決めつけるということに向かつていくし、決めつけるということは、はじめから差別に向かつているものだ。

差別、つまり、種族が違うということにしておけば、何もかもがおいしい上に、楽だ。

いわゆる婚活をしている四十過ぎの女性が、自分の性格をみずからで「根暗」だと言う。

自分で自分のことを「ブス」だと決めつけていて、どうせブスだからということで身綺麗にもしないし、どうせブスだから誰からも冷淡に接されるんだと決めつけていて、自分から人に向ける態度は無愛想でひねくれていて不遜だ。

にもかかわらず彼女は、

「三十代前半ぐらいの、ハイスペックの男性と結婚します」

とも決めつけている。

決めつけるのに根拠も理由もない。

彼女は、若々しい成功者男性と結婚する種族なのだ。

もちろん、現実にそんな彼女の幻想に付き合う誰かはきっとないだろうけれども、それでも彼女は、そのようにいくらでも決めつけと差別を作り出すことができる。

ここで若い人は、

「そんなバカな」

と思うかもしない。

「量る」ということが、健全にはたらいているうちは、まさか人はそんなでたらめなことにはなりようがないと思うものだ。

しかし、冷静に考えてみてほしい。

この四十過ぎの女性が、万事のことを健全に「量る」としたら、そのことには、われわれの自我のたどりつく、ひとつの到達点が示されている。

人はしだいに、「量る」ということじたいが厭（いや）になるのだ。

メリットがない。

人が、若々しく、まだ何かしらの「話」に接続していこうとする気概と勇気を残しているときには、その「話」への接続のため、「量る」という機能を懸命に、健全に保とうとするのだが、「話」へ接続していくという希望を断たれると、人にとつてこの「量る」という機能は、しだいに不都合なものになっていくのだ。

それで人の自我は、いつしか、色（しき）から欲へと転落していく。

「量る」という機能の放棄。

「量る」といつて、最大限健全に量つたとき、自分の見てくれはどうだろうか。

自分の見てくれは、誰と見比べてもじつに器量よしだろうか。

自分の実績はどうか。自分の実績は一般的の誰と比べても受けを取らず輝かしいだろうか。

自分の姿はどうか。その姿は人並みを抜きんでて勇壮だろうか。

自分の声はどうか。その声はよく練られていて芸術を思わせ、巷の喧騒を貫いて響くだろうか。

自分のこれからはどうか。自分の未来は希望とスリルに満ち、一般的に超えて果てしなく拡大しそうか。

自分の友愛はどうか。自分の友愛は、一般の人付き合いを超えて、かけがえのない慕われ方を自分自身にもたらしているか。

自分の時間はどうか。自分の年齢は、一般的に言つて若いのか、そしてその若い時間はあと何年あるのか。

あなたがいま、十代の若者だったら、こうして量られたことのすべてについて、

「うかうかしていられない」

と、闘志を燃やして立ちあがることができるかもしれない。

は老年に至ると、人はもうその先の自分に大きな展望は見出さないのだ。もちろん年齢の問題ではなく、若年であつても、自分のことをそうして「量る」ということじたいに、もう耐えられなくなるということがある。

自分の見てくれは、地味で野暮つたいし、自分の実績は、小学生のころの皆勤賞ぐらいしかない。あとは中堅大学に行き、就職に必要な専門の資格を取つたぐらいかな。自分の姿は自信なさげだし、声はとんがつていてるくせに芯が弱くてだらしない。自分のこれからはといつて、これからも「まあ、ふつう」だろうし、友達といふのを最近はあまり一緒に遊ばなくなつた。そもそも、わたしのことをそんなに特別に好きといふ人はたぶんいないんじやないかと思う。若さで言つたらもうとつくに若くはないし、このままあつといふ間に十年ぐらいは過ぎるんだろうなと思つてている。それで、十年後の年齢とか考えると、それはもうリアルすぎて怖くなつちやう。

人はきっと、何かひとつでも、本当の「わたしの話」があれば、それに基づいてやつていくことができるのだと思う。ここに示した例はじつに「ふつう」だ。何であればちょっとぐらい上等な「ふつう」と言つてもいいだろう。ところがわれわれは、この「ふつう」に向き合ふことに耐えられなくなつていくのだ。むなしいし、さびしい。何の話もなしに、ただの

「ふつう」が毎日続き、そのまま「ふつう」の果てに没していくだけということが、われわれにはつらくて耐えられないのだ。

それでわれわれは、「量る」ということを放棄する。「量る」のをやめ、何かにコロッと転じるのだ。「何か」？ われわれはそのとき、自分に何が起っているのかを認識できない。

われわれの自我はそこで色（しき）から欲へと転落しているのだ。

「四十代って、まだまだ若いって！」

そのことは別に否定しない。ただし、四十代の若さは、あくまで四十代にとつて若いのであって、二十代にとつては若くないし、十代にとつても若くない。

鏡を見ながら、自分の見てくれを、ふと、

「貴族っぽい」

と思つたりもする。

「顔が、地味で野暮つたいのは事実だけど、そうじやなくて、なんか貴族っぽいのかもしれない」

もう繰り返しては申し上げないが、人は決めつけをするのに根拠なんか必要としないし、差別を形成するのにも根拠なんか必要としないのだ。「家系図とか知らないけれど、ひょっとしたら、もともとそういう血筋が入つてたりするのかもしれない」

そういうえば、マンガを読んでいるときも、何か貴族系の出自のキャラクターを見て、「これわたしだ」って思うこともあるもんね。

そういうえば、子供のころ学校の先生に、「○○ちゃんはバランス感覚がいい」とかつて、言わされたことあつたなあ。

ひょつとしたら、海の近くに住んでいたら、サーフィンとかやつて、そつち方面の人になつていたのかもしれない。

そういう才能つて、考えたことなかつたけど、言われてみたらそつち方面のことは、なんかやつてみたらできそうな気がする。直感的にそつ

いうのがある。

そういうえば、何年か前、人事の人に「キミは落ち着いてるね」って言われた。そつか、それで言うと、わたしの声つて何か落ち着いているんだよね。

それで言うと、わたし割と、リズム感はあるし、そつち方面をやつていつてたら、けつこうそれっぽい人になつていたのかもしれない。

そもそも、大学受験のとき、彼氏と揉めて体調悪くして、けつきよくあまり勉強に取り組めなかつたんだけど、あのとき何もかも気にせず、ただ受験勉強に向かつていたらどうなつていたんだろう。勉強じたは苦じやなかつたし、あのとき本気出していたら、別に東京大学でも、いけるのはいけたと思う。

こうやって見ると、わたしはいつも、取り組みが甘いんだよなー。油断しているつていうか。本当はもつと、やれることいっぱいあつたはずなのに。

このようにして、人はいつのまにか、まつとうに量るということをやめ、色（しき）から欲へと転落しているのだ。

「量る」ということは、こうして次第に、作爲的に融通を利かすものになり、いかがわしいものになつていく。

後輩に対するは、

「きみさあ、学生時代、部活とかやつてきてないでしょ？ だから、目上の人に対する態度とか、礼儀とかが、根本的に出来ていらないんだよね」

と言う。

自分はかつて部活動をやつてきたということ、後輩はそれをやつてきていないということ、それについては、その「量る」ということを正当なふうに持ち出してくる。

一方で、上司から、

「きみがリーダーシップとらなきやいけないわけだけど、きみはこれま

でに、リーダーシップ経験ないんだよね？ その、やり方がどうとかじ  
やなくてさ、じっさい誰もついてきていらないじゃない。そのところに、

ちゃんときみ自身で向き合つてもらうしかないんだよ」

と言われる。

ここで、もし冷静にただ量るのみなら、リーダーシップ経験がないと  
いう指摘は、そのとおり事実なのだ。リーダーシップ経験量というパラ  
メーターパラメーターを自分で量ると、そのパラメーター値はとても低い。

けれども、このときこの人の自我は、すでに色（しき）から欲へと転落  
し、融通を利かせるものになつていて、

「リーダーシップ経験というか……そもそも、この会社でそんなことが  
したいわけじゃないから、やる気にならないってだけなんだけど。むし  
ろ子供のころ、『何でもかんでもあなたが決めてはいけません』って、先  
生に言われるぐらいだったから、わたしむしろリーダーシップを取らな  
いようにしてきているんだよね。まあそんなことまで、このおじさんは  
わからないんだろうけど。人のリーダーシップをとやかく言うより、自  
分の人を見る目を養つたほうがいいと思う笑」

内心ではこういう文脈が湧いてくる。

内心ではどうか、自我がそういう物言いをするのだ。  
若々しいころ、人の自我は「色（しき）」だが、ひねこびた後、人の自  
我は「欲」になるのだ。

そのときの都合で、自我の融通を利かせて過ごしている。

「欲」。人の自我が、色（しき）から欲に転落したとき、人は動物的なも  
のになるのだ。動物的というか、獣（けもの）的なものになる。

「欲」へ落ち込んでいくほどに、何かを理解するということさえできな  
くなっていく。理解といって、その理解が甘い砂糖の味をもたらすわけ  
ではないから、獣としては何かを理解するというような向きには拳動が

起こらなくなつていくのだ。

色（しき）の引力は作用しなくなり、欲の引力にしか引き込まれなく  
なるということ。

理解することができなくなつていき、ひいては、価値観とい  
うものも消失していく。獣に価値観はない。

当人はかつて、さまざまな価値観を持っていた。目上の人には礼儀を  
もつて接するべきとか、目下の人にはのびのびやれるように配慮するべ  
きとか。世の中に貢献して、人に感謝されるように生きたいんだとか、  
人にやさしくてきてはじめて、自分が強くなれたと言えるんだとか。自  
分の存在じたいが人を励ますようでありたいとか、そのためには明るく  
タフでないといけないんだとか。全力出して負けるのはかまわないけれ  
ど、逃げ腰なのはダメなんだとか。まじめにやるんじや足りなくて、バ  
カになるまでやらないと足りないんだとか。先日まで、そうしたさまざ  
まな価値観を持っていたのだが、その価値観がどこかへ散逸していくの  
だ。

このことは、当人が違和感を覚えて、もう当人では制御できないと  
いう形で起こつていく。

「これはおかしい、このままじややばいですよ」

そう当人は言うのだが、その「ヤバい」という危機感が、数分もする  
と、

「あれ、何がヤバかったんでしたっけ。別に、まあいいじやんという気  
がしてきました笑」

となる。

^^大転換VVが起ころう。これまで長らく、自分は色（しき）の引力で  
拳動してきた。量をはかり、量は状態をもたらし、状態は実感をもたら  
す。さらに、その感には想が起こり、実感量と感想量はふたたび量であ  
つて、量はまた次の状態をもたらしてくる。そのことを循環してきた。

それらのすべてが作用しなくなり、散逸して、挙動のメカニズムが一新されるのだ。

新たな挙動のメカニズムは「欲」だ。

理解は消失し、価値観も消え去り、ふと気づくと、虚無の中、何かをむさぼることばかり考えている。むさぼる……甘いものでも辛いものでも。レジャーでもコンテンツでも。異性でも物品でも。ただ「欲しい」ということ。「欲しがらない理由がないから」ということで、虚無の中、すべてをただ欲しがり、すべてをむさぼることばかりを考えている。

感情的で、受け身になる。そもそも野生の獣が、自分から何かを始めることはないのだから、機構は必然受け身になる。野生の獣は、捕食し、営巣し、繁殖するだけだ。なわばりを巡回し、不審なものがいれば恫喝して追い払う。あとはいくつかの習性や、個体差のあるクセを振りまいて、獣はただ生きるという目的に向かって生きる。そしてその振りまかれる習性や個体差のあるクセは、そのほとんどが親からの遺伝子、血を継承することで得られている。生きものはそうして、「親の人生」を生きる。

もちろん野生の獣だって、ときには日向にくつろぎ、居眠りをしたり、見慣れないものに好奇心を向けたり、鼻先に舞う蝶とたわむれたりはする。その姿は清らかだし愛らしい。けれども、そのときわれわれは獣に獣ならざるものを見てその徳なり祝福なりをよろこんでいるということだろう。獣の獣たることは、もつと野卑で、つまらなくすさまじいものだ。われわれはハゲタカの集団が一斉に動物の死骸をつつくのを見て、大自然の何たるかを目撃はするが、そこに祝福された靈魂を体験はしない。

獣は、自分から何かを始めたりしない。彼らはただ、自分がやられないうに警戒しながら、自分が良い獲物にありつこうとして、徘徊を続けるだけだ。利己的遺伝子。それがつまり損得挙動だ。損得挙動の

人々から漂っているいかがわしさは、端的に言つて獣臭さだということになる。

損得といって、誰も損をしたいわけではないし、誰だつてなるべく得をしたいものだけれども、それを「量る」といううちはまだ色（しき）でありえても、それじたいが挙動の原理となるとき、その自我のメカニズムはすでに欲に落ちている。色（しき）のうちはまだ損得が「分かる」という中で挙動しているけれども、欲に転落して後は、もはやそれが何なのか「分からぬ」ようになって挙動しているのだ。

自我が、色（しき）から欲に転落するとき、人は獣に転落すると言つていい。そして、人と獣の違いは何かというと、その違いは「分かる」と「分からぬ」なのだ。

先に述べたように、人は「分かる」ということが好きだ。それは色（しき）であれ、獣に比べるならば、その「分かる」という機能こそが、人間に人間らしさをもたらしていよう。たとえば人は、さすがに文化財に糞尿をぶちまけるようなことは、悪いことなのだと分かっている。獣にはそんなことは分からぬ。人が仮にそのような糞尿のぶちまけ行為をするとしたら、その人はあえて「悪いことをしてやろう」と意図してそのようなことをするのだろう。獣の場合はそんな意図は持ち合わせていない。獣はそんなことは「分からぬ」まま、ただ文化財にも糞尿を垂れてしまうのみだ。

ただし、人でも認知症になつたり、精神障害で人格を損なうと、わけも分からず、住居や公共の場に糞尿を塗りたくるというようなことをすることがある。めずらしくもなくよくあることだ。この行為者を刑法で裁こうとするのは、多くの場合で無意味だと、誰にでも直観的にわかるだろう。獣を刑法で裁こうとするのが無意味なようだ。

人の自我は、色（しき）から欲へ転落し、「分からぬ」のほうへ進んでいく。人面獣心という四字熟語がある。この四字熟語は通常、あくま

で獸に“イメージされる”ところの精神性をわれわれに思わせるに留まるが、眞に人面獸心といふことがありうる場合、人は本当に人面をかぶつた獸になりえてしまうということになる。何も分からず、何も理解せず、何の価値観も持たず、自分からは何もしない。ただ欲しがり、機嫌が悪いと感情的になり、眼光と唸り声をもつて恫喝してくる。

注意しておくべきことがある。これはまた、学門として注目すべきところでもある。

自我が色（しき）から欲に落ちるとき、思いがけず、そこには美と恍惚の体感があるのだ。うつとりして、まったく奇妙なことに、人はそこに「わたし」を発見したかのような、差し迫つた体感を得る。

「耽美」が起こる。傍目にはまったく見当違ひのことのようと思えるが、当事者の内部には耽美が得られるのだ。色（しき）から欲への転落は、当人にはそうと理解も把握もされないが、当人にとってはただまったくの美的な事象なのだと感じられ、

「これは本当の瞬間だ」と確信されるのだ。

「わたし」が発見され、解放感があり、美しくて、失われることのない自信が得られたように感じられる。自信は確かめるたび無制限の甘露のようにどこまでも染みわたつていく。そこにはまるで「世界」そのものがあるようにも感じられ、当人としては、あたかもそこに自分の「話」をゆるぎなく得たかのように思うのだ。唐突に、そこにはすでに、解き放たれた「わたし」が獲得されていて、その「わたし」は、何でもない世界の平原に立っている。

その美しさに、甘露に、誰がうつとりせずにいられようか。

なぜこのようなことが起こるのか。それは、当事者においてこのことは、これまで長年抱えてきた「分かる」という機能からの離脱、同一性をもたらしてはくれなかつた、その永い永い呪縛からの解放だからだ。

これまで長年、自我をはたらかせて、何もかもを量り、何もかもを分かつてきた。そして、量れば量るほど、自分は本当には輝かしい者ではなかつたし、分かれば分かるほど、すべては己と同一性のないものになつていつた。

そして、量ることを投げやりにしてゆき、決めつけを味わい、その決めつけを飼料にして自我を生き永らえさせ、さらにそこに固着した差別を作り上げ、その差別から架空の「わたし」を彫り出すというようなことをせねばならなかつたのだ。それらのことは、みずから量れば量るほど、みずから分かれば分かるほど、罪であつて、恥だつた。暴露を恐れ、隠れて、こつそり、いつまでもそのことを続けねばならなかつた。秘密の決めつけ、秘密の差別を内心に抱え、そこから「オレなんだよね」をひねりだす。それが罪で、恥で、罪の産物で、恥の産物などと、知つていながら、誰にもそのことを悟られないように注意深くして、

その苦しかつたすべてのものから、きゅうに離脱できた。  
解き放たれる。

「もう、量らない」

「もう、分からなくなつたもの」

これまで何をやつていたんだろう。

何をびくびくしていたんだろう。

なぜそんなものを、わたしだなんて思つていたんだろう。

そつか……

すべては色（しき）だつたんだ。  
量つていたし、比べていたんだ。

そうじやない。

わたしはただ、欲しいものが欲しいだけ。  
わたしは、わたしの感情に生きるだけ。

理解に興味はない。

何も理解なんかしなくていい。

価値観なんか元々どうでもよかった。

なぜ、ここまでこうしてこなかつたんだろう。

欲しいものは欲しい、きらいなものはきらい。

欲しいものが好き。

きらいなものには怒りが湧く。

ただそれだけ。

他には何もない。

「これが、『わたし』なんだ」

すごい、わたしがわたしなんだって感じがする。

これが、自分を掴むってことか。

なんか、すごくよかつた。

これでよかつたんだ、って気がする。

わたしはようやく素直になれたんだ。

これから何をする？

は？

何もない。

何かするとか、そういうの一番要らない。

もう、わたしがあるから。

何か持つてきて。

わたしは「欲しい」だけなんで。

早く持つてきて。ただ「欲しい」だけなんで。早く持つて来いよ。

は？ 何かするって、何？

殺すぞ。

前から言いたかったけど、お前ら全員殺すぞ！  
本稿のタイトルは「話と色（しき）」だ。

そして、ここまでに述べてきているとおり、話は「分からぬ」に属し、色（しき）は「分かる」に属している。

ここで、じつさいに起こつてくる全体のことからタイトルを採るなら、そのタイトルはやや冗長だが、「話と色（しき）と欲」ということになる。

そして、その「欲」というのも、「分からぬ」に属しているのだ。

第一層 話（分からぬ）

第二層 色（分かる）

第三層 欲（分からぬ）

われわれは、健全かつ一般的な自我を保つてゐるうち、第二層のところに立つてゐると言える。

それで、「分かる」から「分からぬ」へ飛翔すれば、われわれは「話」を生きることができるのだが、一方で、「分かる」から「分からぬ」へ転落すれば、われわれは「欲」に支配されることになるのだ。

飛翔と転落を分岐させているものは何かというと、言わずもがな、魂魄だ。

観測不能の、魂魄という領域のみ、われわれを第一層に引き上げてくれる可能性を有している。

魂魄との連絡なしに、ただふと「分からぬ」に転じるとき、われわれは解放感と共に、欲の層に転落している。

達成感と共に、欲の層に転落している。  
真実味と共に、耽美と共に……

「分からぬ」ということは、分離していないということだから、そこに同一性は得られてしまう。

欲の層においても、その同一性は得られてしまうのだ。  
つまり、「これがわたし」「これがオレ」は得られてしまう。

「欲がわたし」「欲がオレ」になるのだ。

それは同一性におよぶことなので、もう、分離的に処理はできなくななる。

一般によく知られていることとして、大金持ちの人が老人になつても、彼はその欲から離れられないということがある。

これだけお金を持つていたらもう満足でしょ、とはならず、むしろ彼は誰よりもお金に渴き続ける。それはなぜかというと、いつからか、もうその欲じたいが「那人」だからだ。

欲じたいがわたしということになり、それで大金持ちになり、老人になつてしているので、もはや欲と切り離されることはないのだ。死ぬ間際、その人が生物である最後の瞬間まで、彼は欲そのものであつて、カネとセックスのことを考えている。

力への意志、力の放出のみを考えている。何の話もなく、さらには、もう何も分からなくなり、何も量れなくなつてている。

分からなくなつてしているので、彼はもう「自分」でさえない。

彼は「カネ」で、彼は「セックス」だ。

死ぬ間際、いわゆる「お迎え」が来たときまでそななのは、おれは知らない。

そうした人にお迎えが来るのかどうかもおれは知らない。「わたし」とは何なのかということについて、ここで次のように言うことができる。

第一層 「わたし」とは、同一的に「話」だ

第二層 「わたし」とは、分離的に「量」だ

第三層 「わたし」とは、同一的に「欲」だ

何が「わたし」なのは、その人の所属によつて変わることだ。人は、犯罪もするし、DVもするし、ハラスメントもする。

いつもその手前で立ち止まつていてる。

人は、警察が怖いし、懲罰が怖いし、喪失が怖いので、『向こう側』へ踏み出してしまわないよう、立ち止まつていてるのだ。

飲酒も薬物も、散財も暴言も、売春も倒錯も、いつもどおり目の前にあるけれど、『向こう側』へ踏み出してしまわないよう、いつもどおり立ち止まつていてる。

ただ、そのあつけない一步、踏み越えた向こう側には、「わたし」が待つてているのだ。その薄弱な規制の、ただ一步向こうに、「わたし」という同一性が待つている。

思えば、ずっと子供のころは、もつと自由で、もつと楽しかった気がする。

ずっと子供のころは、何も分かつていなかつた。

ずっと子供のころ、わたしは何も量つていなかつた。

あのころ、わたしはわたしだつたな。

わけも分からず生きているだけだつたけど、わたしはわたしだつた。

わたしはいつから、こうして量るようになつたのだろう。

わたしはいつまで、こうして量るということを続けるのだろう。

量るといつて、いつたい何を量つていてるんだ。

それでいつたい、何になるといつんだ？

このまま、分かる分かる分かつていてますを言い続け、労役しながら死んでいくだけ、そのことに満足して人生を謳歌しろつてか。

そんなことの言いなりになれててか。

これなら、何一つ分かつていなかつた、あの子供のころのほうがマシ

じゃないか。

あのころは、何の抑圧もなく、思うままで、感情のまま、解き放たれていた。

分かっている。

やめたほうがいい、それは分かっている。

やつてはいけない、それも分かっている。

立場がある、そのことも分かっているし、常識や、法律のことも分かっている。

一時的な衝動に駆られて、全体トータルでの利益を失うべきじゃない、そんなことは分かっている。

でももう、それも要らないかなって。

ずーっと、ずーっと、分かってきた。

「分かっているよね？」って言われて、ずーっと「はい」って答えさせられてきた。

それってけっきょくのところ、わたしに、「わたしでなくなれ」って言つてんだよね？

なんかもう、そういうの、いいやつて思つた。

こうやつて全員で、わけ分かったふりして生きているの、見てるだけでも反吐が出るよ。

これ以上、こんなことのお仲間を続けていられない。

虫唾が走る。

こうした手続きで、人は内部で何かがぶつかり切れて、各種の逸脱行動に出る。

同僚の女性に、とつぜん襲い掛かたり、部下に暴言を吐いたりする。

一旦それが発火すると、もう止まらなくなる。

家族を殴り、子供を折檻し、酒におぼれ、性風俗におぼれる。

彼はもう、「やつちやうもん」と思つており、その「やつちやうもん」

の声と同一性におよんでいる。

セクハラ、パワハラ、DVは、そのようにして起ころる。

△△本当は欲しかった己の同一性の方向VVに、それらは起ころる。

リーダーシップのわたしを実現したかった人は、パワハラの向きにそ

の逸脱が起ころる。

ロマンスのわたしを実現したかった人は、セクハラの向きにその逸脱が起ころる。

フレンドシップのわたしを実現したかった人は、DVの向きにその逸脱が起ころる。

もちろんじっさいには複合的に起ころるのだが、決め手になつているものは偏つてそこに現れてくる。

三十年も前に諦めたこと、四十年も前に無理だったこと、五十年も前に叶わなかつたこと、そんなことがいまさらになつて噴出する。

子供のころに諦めたこと、思春期のころに無理だったこと。

子供のころ、感情のまま、リーダーシップをやろうとしたけれど、それをうまくやることはできなかつた。

うまくやれないということは、とても恥ずかしくて、罪深くて、それ以来わたしは、「量る」「分かる」ということに転向してきた。

思春期のころ、感情のまま、ロマンスをやろうとしたけれど、それをうまくやることはできなかつた。

うまくやれないということは、とても恥ずかしくて、罪深くて、それ以来わたしは、「量る」「分かる」ということに転向してきた。

青春のころ、感情のまま、友情をやろうとしたけれど、それをうまくやることはできなかつた。

うまくやれないということは、とても恥ずかしくて、罪深くて、それ以来わたしは、「量る」「分かる」ということに転向してきた。

そうやって、「量る」「分かる」ということに転向してきたものの、その

「量る」「分かる」が行き詰まればどうなるのか。

行き詰ったのならしょうがない。

かつての分岐点まで帰るのだ。

ABの二股に分岐したパイプがあつたとして、ずっとむかしに、Aの吐出口を封鎖した。Aのラインはうまくいかなかつたからだ。

Aを封鎖すれば、流水は必然、パイプBのほうへ流れるだろう。そのBラインで、ここ数十年、うまくやつてきたけれど、いまさらになつてBのパイプが詰まればどうなるか。

とうぜん、行き場のない流水は内圧を高め、いまさらになつてAの封印を破り、Aから吐出するに決まつてゐるだろう。

そのようにして、ハラスメントやDV、犯罪等は噴出する。

そのとき行為者は耽美の中にある。

思いがけないことで、一般には知られにくいことだが、ハラスメント等の行為者は、

へへあるときから耽美に取り憑かれ、耽美の蓄積からこそ、やがて逸脱行為を噴出させるvv

のだ。

セクハラで襲い掛かるとき、パワハラで恫喝するとき、家族や子供を粗暴さで怯えさせるとき。すべてが不穏の嵐に飲み込まれていくとき。

彼の脳内には、かけがえのない「美」の物質が分泌されている。

それが「欲」というものだ。

そうした逸脱行為の実行は、とうぜん懲罰の対象になり、彼はさまざまな規模で人生を失うが、彼はそのことについて悔いているのかといふと、社会的な後悔はむろん一定ていどあるにせよ、内心の奥深くではそうではない。

彼はしばしば、堂々と思い返して述懐する。

「あのときのあれは、本当のオレではあつたんだよね」

彼はなおもその耽美の中に居続けているものだ。

われわれの自我は、健全なうち、色（しき）といつて量をはかる機能を担つてゐるが、やがてこの機能はわれわれにとつて重荷になつてくる。

若々しさを失い、そのときになつて自己を量ると、自己はあまりにもみじめで小さく、罪と恥にまみれており、もはやここからこれをどうにかしていこうとは思えなくなつてゐる。

われわれはふだん、自分のことを漠然と「ふつう」と思つてゐる。そのとおり、われわれはふだん、日常的・一般的に「ふつう」だ。ただそれは、ふだんの習慣として万事を陳腐化して捉えているからごまかされているというだけで、本当にどうかと言わると、本当のところは自分で正視できないぐらいにあわれなのだ。

真に美しい者と並べられてしまうと、じつは疑いなく醜いということさえ明視されてしまう。

分かっている、分かっているのだ。

ただ分かるばかりで、美と同一性に至る道筋はどこにも見当たらぬ

のでは、ただの自分いじめでしかないではないか。

そうしてわれわれは、いつかその「分かる」ということ、「量る」という色（しき）の機能、自我の健全さを放棄する。放棄することがある。例として、宮崎駿が中年以降の人間をブタとして描くことがあるが、そのとおり、ブタになればもう何も“分からぬ”的だろう。われわれがそうして、何も分からぬようにして生きていく・欲をわたしにして生きていくということを選ぶなら、そこにあてがわれるわれわれの姿の図案は、たしかにブタがふさわしいのかもしれない。

本稿では、色（しき）から話へ飛翔すべきだということを唱えている。色（しき）から離脱して、話を生きる者になるべきなのだと。そのことは、われわれの観測領域では不可能なことで、だからこそ古くから言わ

れる、魂魄という領域との連絡が必要なのだと。

色（しき）から離脱して……このとき、色（しき）から欲へと「転落」するという形でも、色（しき）からの離脱は起こってしまう。人が、欲に支配されていくということは、漠然とわれわれに知られているし、宮崎駿がその現象をブタの図案で描くということも、少なからざる人々に漠然と知られているだろう。けれども漠然とした知識などはわれわれにとって有為に使用できる知識ではない。そこに問われるのは知識の量ではなくて、その知識が「あなたの話」におよんでいるかどうかなのだ。

色（しき）から欲へ転落する。それについて、「それってブタですよね」と言われたらそのとおり。けれどもそれが、真にあなたの話になるために、わたしはこう申し上げておく。そこにはてはめられる図案はブタでよいが、そこに転落するとき、当人の体感は「美」なのだ。本当のわたし、同一性のわたしがそこにいる。誰がこの美にうつとりとせずにいらぬようか。それが同一性におよぶ「わたし」だということは本稿も認めよう。ただし、そこに魂魄とのつながりは一切ない。そこにいるわたしは、魂魄からついに切り離され、落下して欲そのものになってしまったわたしだ。

無理。

出来る気がしない。

「出来る気がしない」

だ。

と言っている。

「無理、か」

「無理、ですね」

「まあ、無理、だよな」

「無理、なんですよ」

「それはつまり？」

「無理っ！」

「なるほど、すぐえ無理みあるわ」

「無理なんです。あー、無理だわ」

「そりやそうだよなあ、無理だよなあ」

「あなたが毎朝毎晩たどりつく、己と世界の真相は、

もちろん、日々を暮らしていくことはできる。  
ふつうに出勤して、そこそこにキツい仕事をやつつけて、休日には旅行にいったり、ジムで身体を鍛えたり、十キロほどジョギングしたり、そうしたことは出来る。

上司に言われて、お見合いして結婚したりとか、子供を作つて家庭を営んだりとかも、まあやろうと思えばたぶん出来る。子育てがまともに出来るかどうかはあやしいけれども。

でも、別にそういうことをしたいと思わないでの、今日も動画観て、コンビニで唐揚げとポテトチップスを買って、発泡酒をキュッと飲んで、寝ようかなと思っています。

「それ以外のことは？」

「無理っ」

# 罪

あなたはふだん、何を思い、何を考えているか。

あなたはいつも、しつかり考え込み、じつくりと絞りだしては、

「うーん、無理ですね」

なるほどたしかに、言われてみれば、すげえ無理だな、とわたしも思う。

何が無理かといって、たとえばきゅうにその胴体の真ん中から、ハードロックのグルーブと、ボン・ジョヴィもかくやのシャウトボイスが出て来るとか、そういうのが無理だ。

出来的気がしない。

会議で使うzoomの初期設定をしているところ、

「やつてみ。シャウト、ハードロックだ」

「いや、無理ですって」

出来的気がしない。

ちゃぶ台を前にして正座して、いきなり「赤穂浪士伝」の講談がまざまざやれるかというと、

「やつてみ」

「いや、無理ですって」

「無理？ ちょっと練習していいから」

「練習したとしても、出来る気がしません」

もちろん、やつてやれないことはないのだ。

ただ、やれることはないが、やつたとしてもただの「ネタ」になってしまう。

やつてみた、という、最大で、友人の結婚式で披露する一発芸にとどまる、というていどのものになってしまふ。

それは、ていどというより、根本的に種類が違うものだ。

「お約束」の範囲に収まるものであつて、それを超えてくるものにはなりえない。

男が、渋谷や原宿に出て、ヒマそうにしている十代の女の子を、ナン

バすることはできるだろうが、それだって言ってみれば「お約束」の範

疇だ。

それが悪いと言つてはいるわけではなく、ただ、人はその範疇を超えたことは「無理」と確信しているということを述べている。

「お約束」の範疇にあるものは、キャラに合っているものなら、いちおう出来る。

やれといわれて、やることの決まつている仕事なら、まあいちおう出来る。

鉄棒で、蹴上りをやれと言われたら、いますぐはできないけれど、練習すれば、まあやつてやれないことはないのじゃないかと思う。

何をやればいいかは決まつていて、

その決まつている範疇でなら、いちおうひととおりのことはやれると思うけれど、そこから何というか、「壁を越えて」というか、お約束の中に収まらない何かをやれと言われたら、

「無理、ですね」

と確信される。

なんど考え方直しても、

「いやあ、やっぱり無理ですね」

と確かめられる。

「出来る気がしませんもの」

そのとおり、当人が、出来る気がしないと確認済みなのだから、そんなもの出来るわけがない。

無理やり「やつてやるぜ！」みたいなことを言い出したとしても、それだって「お約束」の範疇で、ただのネタにしかならないし、それ以上の無理をしても、近所迷惑で痛々しいことになるに決まつていて。

こうして、われわれの「出来ること」と「無理」のあいだには、よくわからぬけれども何かはつきりした「壁」がある。この壁はいったい何なのだろうか。

たとえば、こう考える。

あまり性質のよくない、「ただのオッサン」と、「ただのオバハン」を用意する。

駅前をうろついている、ただのそういうやつを適当に引っこ抜いてくればいい。

その彼らを、一ヶ月間、岩波文庫しか置いていない部屋に閉じ込めて、

勉強させる。

いくつかの本を選び、その内容をちゃんと把握していないと、解放してやらない、ずっと閉じ込めたままにするというのだ。

オッサンとオバハンは、しようがなく、解放されるための努力をするだろう。

そして一ヶ月後、彼らは口頭試験をクリアして、無事に解放されることがになった。

それで彼らは、ただのオッサンではない者になり、ただのオバハンではないものになるだろうか？

一ヶ月間、こもって哲学を習得したから。

残念ながら、そんなことにはならない。

「ただのオッサン」「ただのオバハン」の完成度は、果てしなく強固で、ほとんど絶対のものだ。

ただのオッサンに、何をつぎ込んだとしても、彼はただのオッサンでありつづけるし、ただのオバハンに、何をつぎ込んだとしても、彼女はただのオバハンでありつづける。何であれば、ちょっと面倒くさくなつたオバハンになるだけであつて、それはほとんど「悪化」だ。

他の何者かにはなれないのだ。

いわゆるキモオタに、筋トレをさせてプロテインを飲ませ、テスコステロン値を上昇させれば、強気になつて何かオラついた奴になつていくということはあるが、だからといって、彼が感動的な存在にはならない。

しようもないぜい肉男だった彼が、しようもない筋肉男になるだけでしかないのだ。

他の何者かにはなれない。

あなたが毎朝毎晩に確かめている、

「無理」

の正体がこれだ。

ただのオッサンに、何かをさせるということはついぞ「無理」だし、ただのオバハンが、何かになるというのもついぞ「無理」なのだ。

パチンコ屋の帰りに、駅前のスケベビルを見上げて、ゲットをして道端に痰を吐いているオッサンが、そこからエル・ファニングと恋仲になつて歌劇「トスカ」を独唱してドルガバの専属モデルになつて多元宇宙論の新論を打ち出すというようなことは、「無理」なのだ。

ひいては、われわれは毎朝毎晩、鏡を見ては、

「よし、『無理』だな」

と、確かめているということになる。

「おはよう（無理だな）」

「行つてきまーす（無理だな）」

「よろしくお願ひしまーす（無理だな）」

「たいへんお世話になります（無理だな）」

「先日の件なんですけども（無理だな）」

「ふつうの定食屋でいいんじやない（無理だな）」

「車買い替えようかと思って（無理だな）」

「○○さんつて、ご結婚されるんですよ（無理だな）」

「ちゃんとしたジョギングシューズを買おう（無理だな）」

「家に抹茶を飲むセットが欲しい（無理だな）」

われわれはずつと、この「無理」を胸の奥に抱えて暮らしているのだ。

それで、表面的なことはこなせるけれど、胸の奥においては無理で、胸の奥から何かを現すとか、胸の奥から身を投げ込んで何かを為し遂げるとか、胸の奥からオープンになって人に接するとか、そういうことについては、

「あ、それは無理ですね」

「出来る気がしない」

「自分でわかりますもん」

ということになる。

さらに、ここでこのことを確かめるために、わたしはあなたにこう問い合わせよう。

いわく、

「何か、本当のこと、根本的なことが、これからあなたに出来ると思いませんか」

本当のところに立たされて、やつてみと言われて、本当のことが本当にできる自分になれですか。

ネタとかキャラとかでごまかすやつではなく。

マジな回答を考えてみてください。

そう訊かれると、あなたは自分の胸の奥に問い合わせて、自分のことを確かめるということをする。

「ずつしりと、確かめる。」

「うん、いや、無理ですね」

「百パー無理とは言いたくないですが、点検したところ、たぶんものすごく無理というか」

「出来る気は、今のところしないです」

若い人は、ここでウワツという気持ちになり、

「それだけはイヤだ、それだけはダメだ」

と首を振る。

若々しさを失った人は、もうその首を振ることにも飽き、「まあ無理、なんだと思います」とみずからで結論づける。

「たぶんずっと、このままで行くんだと思います。これまでもそうでした」

これはいつたい何を確かめているのだろう。

「ずつしりと、何を確かめているのだろう。

「自分」を確かめているのは疑いない。

「ずつしりと、自分の、実感のようなものを確かめている。出来そうか、それとも出来なさそうか。

出来そうな気、する?

わたしが?

実感的に、いけそう?

いや……

「無理ですね」

このときずつしりと確かめているもの、これは、じつはあなたの「罪」なのだ。

あなたはみずからで「罪」を確かめている。

あなたは、胸の奥に問い合わせて、「自分」を確かめているのだけれど、そのときじっさいに確かめているのは「罪」なのだ。

そしてそのとおり、あなたが確かめているのは自分であつて、あなたの捉えている「自分」というのは、じつは「罪」だ。

「あなた」は「罪」なのだ。

そもそも、自我とは何だつたか。

自我とは、色（しき）であり、量るという機能であり、「分かる」という装置だ。

このことが、それじたい罪で成り立っているというのは、たとえば聖

書方面の伝承にひもづけて捉えることができる。

聖書によると、アダムとエヴァは、禁断の果実を食べて、エデンの園を追放されたのだった。いわゆる失楽園という伝承。

蛇にそそのかされることで、彼らは禁断とされていた果実を食べてしまった。「なんということをしたのだ」。この神話上に発生した罪のことを、一般に原罪と言う。神は彼らを罰した。原罪によつて、アダムとエヴァはエデンの園を追放され、地上に落とされ、楽園でない暮らしをさせられることになった。

ここで言われる禁断の果実とは、「善惡の知識の実」だった。そして善惡の知識とは何かといえば、つまり善と惡とを「分かつ」ことができる能力ということだ。善と惡が分離的に「分かる」ということ。ひいては、さまざまが「分かる」ということ。

では、あなたが「自分」といつて、自我を確かめ、自我に問い合わせをしているとき、その自我がイコール「罪」だということは、伝承にひもづければいつそどうぜんのことではないか。

そして、罪人が罪状を無視したところで、罪人であることは変わらないように、われわれは自我に知らんぷりをしたとしても、その原罪のずつしりしたありようから逃れることはできない。

そのことを手探りして、確かめて、あなたは、

「あ、無理、ですね」

と言つてゐるのだ。

「自分で分かりますもん」

分かる、ということは、それじたいが決めつけへと進行していこうとする性質を持っている。

「分かってきました。無理、ですわ。これ」

決めつけへと進んでいく。

「あー、無理だ。わたしには無理。無理なんです」

決めつけは差別を形成していく。

「わたしには無理」で、「無理がわたしです」になつていく。

「そういうのが、可能な人と、無理な人がいて、わたしは無理な人なんです」

決めつけと差別によつて自我はますます肥大していく。

決めつけは自我の飼料であり、それを摂取するのが自我の充足だ。自我は充足に向かい、もはや、量るということは必要なくなる。

決めつけに思量は必要ない。

「無理っ！」

決めつけるたびに、苦くて甘い味がする。

甘露。

決めつけるのがわたしで、ふと、

「逆にこれがわたしなんじやないですかね」

と、むしろわたしを発見したという気がしてくる。

「わー、これが“わたし”だつたんだ」

解き放たれた感じがし、美的で、甘露に満ちる。

うつとりする。

自分はただ、欲しいものを欲しがればいいんですね、という気がしてくる。

「え、だつて、欲しいものは欲しいですし、きらいなものは、ただ腹立つだけじゃないですか」

自我は欲に転落する。

「分からぬ」になり、理解や価値観もなくなつていった。

これは、伝承にひもづければ、彼がもうアダムとエヴァの末裔でさえなくなつていったということだ。

獸になつていった。

聖書（新約聖書）では、天国から切り離された獸は、悪魔（レギオン）

の棲み家として表現される。

それはもう、原罪がどうこうという話のものではない、ということなのだろう。

仏教を代表とした古代インド哲学の方面では、人間道の因果は、「行為」と認識されることはやがて、「善惡の知識と同じ「識」だ。

「識」というのはやはり、善惡の知識と同じ「識」だ。

「分かる」をやがてしまい、「量る」をやがてしまい、その「行為」をやめられないということ。

サルトルが、対象Aを「意識」したとき、それは「わたしでないもの、A」と認識されると言つたが、これがまさに人間道の因業だ。

分かるということ。すなわち、同一性を解体する能力を具えてしまつたので、アダムとエヴァはきゅうにお互いの存在と肢体が同一でないということを知り、恥ずかしくなつて、お互いの陰部を覆い隠したのだった。

あなたが、胸の奥から何かをしようとしたとき、じつさいにはどんなものが出でてくるだろうか。

ご存じのとおり、「自我まる出し」のものが出でてくる。

シェイクスピア劇作の、適当なセリフのひとつでも吐いてみればわかる。

その「お芝居」は、自我まる出しの、キャラでしかない、お約束の、ネタでしかない、自意識過剰の、「恥ずかしい」ものになる。

そこで、さらにあなたに、

「そうじやなくて、ちゃんとやがてみ」と言いつけてみる。

もう一度、挑戦だ。

するとあなたは、

「いや、無理です」

と言う。

そのとおり、じつさい無理だろう。

劇作のセリフを言うのに、言ひ方なんか存在しない。

いくら滑舌を良くしたって、それで「ことば」になるわけではない。

練習の仕方なんかないのだ。

「必死こいて、やがてみたら?」

これまでにいったい幾人が、そう言ひて情熱的に、何もかもをかなくなりすてて、少年マンガの主人公のように必死になり、その表現を実現させようと取り組んできただろう。

けれども、それによつて何が現出するか。そこに、「必死の取り組み」「情熱的な取り組み」「若い人のチャレンジ」の現出はありえても、それをもつてシェイクスピア世界の現出が保証されるのかというと、そんなことはまつたくない。

どれだけやがても、無理なものは無理だ。

「出来る気がしない」

たかだかひとつのセリフが、永遠に「無理」だ。

必死になつてトライして、汗を流して涙も流す。声を嗄（か）らして、膝がガクガクになる。そうして、そのことに熱中しているあいだはよくわからなくなるけれども、それで“本当に”出来るようになるのかといふと……振り返つて見ればはなはだあやしいものだ。

お約束でもない、ネタでもない、「壁」を超えたものは、どうすれば現出するのだろう。

そこからわれわれが現実に目撃するものは、まず「うつとり」したものだ。

耽美的なもの。

甘露に浸つてゐるもの。

「欲」に転落してしまえば、われわれは色（しき）を離れられる。

たとえば、お姫さまの役があれば、ある人はこう考える。

「いっそ、なりきつちやえればいいんだ」

彼女は、ふつうの町にふつうに暮らす一般市民であつて、お姫さまなどではまったくない。

けれどもそんなこと、もう量らなければいいじやないか。

量らなくても決めつけることはできる。

むしろ量るのをやめてしまうほうが、決めつけはその威力を増す。

分からなくなつてしまえばいいのだ。

「わたし、お姫さまだから」

あはははは。

わたしは、欲しいものが欲しい、つていうだけ。

欲しがらない理由ある？

あと、きらいなものには、腹が立つ。

絶対に許さないっていうぐらい、猛烈に腹が立つ。

それだけ。

わたしがわたしをどう思うかは、わたしの自由じやない？

だって、それが「わたし」なんだから。

彼女が舞台に立つと、彼女は人の目を惹く。

彼女の声と仕草は、独特の迫力をもつていて、観る側に何か「特別な人」というふうの、強い印象を与えてくる。

彼女は色（しき）を離れているから。

周囲の人々は言う、

「彼女には何か、舞台を作り上げていく、そういう魔力があるんだよね」

しかし、注意深く観察する。

本稿が示すところの学門を、すでに一定ていど得た人が、その彼女の魔力あるパフォーマンスを観察するなら、その観察者は、彼女の演じた

ところの迫力の印象とは裏腹に、そこに「話」は残されたなかつたといふことに気がつくだろう。

近年の、音圧の高いアニメソングでも聽けばわかる。

現在のあなたが、そのいかにもというふうの「アニソン」を聴いたところで、あなたの受け取りようとしては、

「な、なにこれ笑」

ということにとどまるだろう。

派手な音響に、甘つたるい声。そして極端な稚氣を振り回す歌詞は、逆に印象的ではあるけれども、とても肩入れして聴いていられるようなものではないと思う。

あなたはそれらをそのように「量る」にとどまる。

音量や、甘つたるさや、エモさ、疾走感、付属している躍動感あるアニメーション、

「そのあたりはまあ、わからないではないよね」

そのように量つてている。

量られたそれらは、それじたいでそれなりの引力を持つてはいようが、だからといってあなたはそこに美的な感想までは覚えない。

ただ、あなたが行き詰つているときはどうだろうか。

自分の小ささや、みじめさ、醜さなどが、最近いやというほど分かる。分かるけれど、それが分かるということに耐えられなくなつたとき。

「もう、分かんなくなつちやいたいよね」という衝動があなたに起こる。すると、あなたの自我は、色（しき）から欲に転落する。

そつか、わたしの顔つて、地味だけど貴族っぽいんだ。

わたしはけつこう、お姫さまのかもね。

あははは。

これがわたしだつたかあ。

何もかもを勝手に決めつけていいし、何もかもを勝手に差別していく

んだ。  
解放感。

そこで、音圧の高い「アニソン」は、あなたにとって耽美のものにな  
る。

「○○ちゃんは、マジ天使」

「△△くんは、マジ尊い」

差別。

アニソンの歌詞が、たとえば、

♪なーんだってー できーるーよー！  
と唄つていたとしよう。

そのときあなたは、

「無理」

とは思わないのだ。

「出来る気がしない」

とは言わない。

もう、量つていらないからだ。

♪しえいーくすびあの、劇だつて！（イエイ！）

♪おひーめさまの、役だつて！（イエイ！）

♪おうーじさまの、役だつて！（うーつ！）

♪なーんだつてー できーるーよー！  
これを受けてあなたは、

「無理なんです」

「自分で分かりますもん」

「出来る気がそもそもしないですから」

とは言わない。

あなたの内部からは、「イエイ！」あるいは「うーつ！」という女の子の声が湧いてくる。

人々はいま、こうしたものについて、

「元気をもらいました！」  
「これめっちゃアガるわ」

と言つてゐる。

それで、人々は勢いづいて、

「みんな、もつとアゲてこうぜ！」

「それな！」

「吹つ切つて、思いきりやつちやおうよ」

「ワンチャン、いけるっしょ！」

「できるできる、勇気出して」

と言い合い、その中にいたあなたも、あてられてその気になるのだ。  
そのとき、「その気になつたわたし」の体感は美的だ。

その耽美の中であなたは、

「やれる。わたしはやれる」

と思う。

「これは、ウソじやない。きつとわたし、本当の瞬間に立つてゐる」

ここで、とつぜんわたしがしゃしゃり出て、唐突に魂魄領域と連絡し、  
シェイクスピア劇作の一幕を、衣装も音響もなしで普段着のまま、平場で現出させてみたとしよう。

何の準備も練習も要らない。

（※セリフを覚えるのに数十秒はください）

シェイクスピア劇作が、実演によつて現出すると、そこには「話」があ

るものが体験される。  
主題が体現され、主題が体験されるのだ。

するとどうなるか。

あなたは、「話」にまみえることじたいには否定的ではないが、あなたはそこにある歡喜よりも、そこから類推される絶望のほうに打ちのめさ

れる。

「無理です」

「出来る気がしない」

あなたは罪に問い合わせている。

「わたしには無理です」

「自分に出来る気がしない」

そのとおり、あなたには無理で、あなたには出来ないだろう。

あなたが、あなたといつて罪を手探しし、そのずつしりとした手ごたえを信じ、それが「分かる」と言い続けているかぎりは、無理に決まっているし、出来る気がしなくて当たり前だ。

あなたは自分で自分の罪状報告をしているだけだ。

わたしはあなたの言うその「自分」を使っていない。

何度も言うように、わたしは魂魄領域との連絡を使つていてるだけだ。

出来る気がしない、とあなたが言つているところ、わたしはどうな

かというと、わたしだつて別に出来る気がしているわけではない。

出来る気はしないし、出来ないという気もしない。

無理だと思えるし、こんなの簡単に出来るだろうとも思つていてる。

わたしの言つていることは、矛盾しており、成立しないが、魂魄領域においては、この矛盾が矛盾のまま両立する。

主題が体現されればいいだけだし、主題が体験されればいいだけだ。

観測領域で矛盾がどうこうとか、そんなことに何の値打ちがあるとい

うのか。

わたしはわたしであつて、ロミオではない。

わたしはロミオであつて、わたしではない。

このふたつは、矛盾するので、どうやつても両立はできない。

ただ、観測領域では両立できないというだけであつて、魂魄領域では

両立する。

わたしはロミオなんかやるつもりはない。

ロミオが観たければ、ロミオがロミオをやればいいじゃないか。

ロミオ以外の誰かがロミオをやるなんて不自然なことはしなくていい。

ロミオは「話」なのだろう。

じゃあ、ロミオがロミオをやるというのは、ただ話が話をやるというだけだ。

それでいえば、おれだつて「話」なのだから、話が話をやるということを、おれがやつてもかまわない。

おれは、おれをやるのであつて、おれ以外はやらない。

そりやそうだ、おれはおれなのだからおれ以外をやることはできない。

おれは、おれをやり、あなたはおれを体験して、それを、

「ロミオだ」

と体験するだけだ。

おれとロミオが同一性におよぶというのはそういうことだろう。

あなたは、おれを体験しているのに、ロミオを体験する、それが同一

性だ。

そして、そうしたことは、同一性におよばないとあんまり意味がないんだろう。

おれは、断じて「おれ」しかやらないが、その「おれ」が、無限に同一性におよびうるということ。

それが「わたし」だと、わたしは申し上げている。

わたしは「話」なのだ。

わたしは「話」を手探ししている。

あなたは「罪」を手探ししている。

あなたは「罪」なのだ。

あなたの罪は自我であつて、自我は「分かる」のだから、あなたが自我

で務めるジュリエット役は、同一性に至らない。

あなたは、あなた自身とも同一性に至らないのだから、ジュリエットとともに同一性に至らない。

そういうことなら、あなたはいつも、その自我を投げ捨ててしまいたいと思うのだ。

この、「分かる」とか、「量る」とか、それをやめられないという罪を投げ捨てたく思う。

罪を投げ捨てれば、原罪からは離脱し、あなたは別の界隈に至る。

それが芳しいものだつたらよかつたのだけれども。

そのときあなたは欲と同一性におよんでいる。

欲がわたしなのだ。

欲と同一性におよんだものは獣だ。

獣はたしかに、人と同じ罪を負つてはいない。

そうして、獣化に至る道筋が、人より深い罪への道なのかどうか、わたしにはわからぬ。

どの罪がより重いのかなんて、神ならざる身のわれわれにはわかりようがないだろう。

自我がそれじたいが罪なのだというのは、あなたもそうだし、わたしもそうだ。

自我が罪で、「分かる」が罪、そこで「分からない」は無罪に思えるが、

それは人としては無罪ということであつて、獣化であればそれは獣じたいの別の罪を負うのかもしれない。

獣にならず人であり続けるためには、この「分かる」という罪を背負い続けるしかないが、この罪を背負いながら、同時に「分からない」にもなりうるのだろうか。「分かる」と「分からない」は両立しない。ただしそれはわれわれの観測領域において。

魂魄領域においては、「分かる」と「分からない」は矛盾しない。

あなたは「罪」に問い合わせる。そして、ずつしりとした手ごたえで、

「無理、ですね」

と言う。

なんど確かめても、そのたびに、  
「うん、出来る気がしません」

そのときあなたにとつては、自我が第一義で、罪が第一義なのだ。

その第一義の上に、「どうすればいいだろうか」を貼りつけ、「これはどういう話なのだろうか」を貼りつけようとしている。

そのとき、話は第二義だ。罪の以降に、話を貼りつけている。

話の元をたどると、罪だ、ということが出てくる。

わたしは話を第一義にしている。わたしとて、健全な自我を持つてお

り、善悪を含め、さまざまなことを「分かつて」いる。

だが主なるものはどちらか。第一義と第二義があつたとして、主なるものはあきらかに第一義だ。父と子があつたとき、子は第一義ではありえないし、子が父の主なるものではありえない。

わたしは「話」を主なるものとし、その第一義に、第二義となる「分かる」「量る」を重ねている。その第二義が罪だつたとして、その罪をどう処するかは第一義のこころ次第だ。そちらが主なるものなのだから。

第一義がわたしの自我を罰するなら、わたしの自我は罰されるだろうし、第一義がわたしの自我を赦すなら、わたしの自我は赦されるだろう。「無理です」と言つて、わたしにおいては、わたし自身にそれが無理なのかどうかは「分からない」のだ。「出来る気がしない」と言つて、わたし自身にそれが出来る気がするのかどうか、それもわたしには「分からない」のだ。

もちろんわたしにも分かることはある。たとえばわたしにとつて、ありふれた目玉焼きを作るのは「無理」ではない。あるいは円周率を百桁まで覚えろと言われたら、時間はかかるにせよわたしはそれを「出来る気がする」し、体操選手のする「後方抱え込み2回宙返り1回ひねり」な

どは、これからわたしに一世紀の時間が与えられたとしてもまるで「出来る気がしない」。

けれども、わたしに何が分かつたとして、それは第二義にすぎないのだ。主なるものではなく、しょせん第一義に従属するものでしかない。いくら第二義のわたし（自我）が分かる分かるとさえずつたところで、第一義は分かるとは言わないのだし、わたしのさえずりなど斟酌さえされないので。

第二義のわたし（自我）を罪と定めたのさえ第一義ならば、第一義はわたしの罪さえ平然とないがしろにする権威を有している。仮にわたしの自我がみずからその有罪を主張したとしても、やはり第一義はそれを斟酌する義務さえ持ち合わせておらず、つまりわたしの自我がみずからの罪を分かることさえ第一義の御前にはまったくの無意味で無力なのだ。であれば、「わたし」のすべてを決定しているのは、けつきよくのところ第一義たる「話」なのだから、「わたし」とはすなわちその「話」だということではないか。そしてわたしのすべてを決定する第一義に対し、声高でもけつきよくわたしを決定することにはまるで無力な第二義は、もはやわたしにとつて声高な他人にすぎない。

仮にわたしがこの構造じたいから離反しようとするならば、そのとき採れる方策は唯一、第二義を第一義に転じるということだけだ。そして、もしそのよう第二義を第一義に転じるということがあれば、わたしはそのずつしりとした罪の重さをみずから第一義だと抱えて進まねばならない。わたしの自我は何もかもを分かると言い張るけれども、それはただ分かるだけであって、ずつしりとした罪の重さをどこかへ消し去るというような権威と能力は有していない。そのずつしりとした重さは、たしかに何もかもについてわたしに、

「無理」と言わしめるし、何もかもについてわたしに、

「出来る気がしない」と言わしめるだろう。

いつたいこのようにして、何もかもについて初めから「無理」としか言えないみじめで面倒くさいものが、何をもって万物の父だなどと言うだろう。第一義とは父のことだ。わたしの自我を第一義と言い張ることは、そのことじたいは不可能ではないにせよ、このあわれで不細工でいつも「無理」しか言わない小物を、唐突に「父です」と言い出そうとすることは、あまりにもわたし自身に馬鹿馬鹿しさを覚えさせるのだ。この出来損ないもいいところの男に「父よ」といつて、何事かを問い合わせる気にはなれない。

わたしの自我にとつて「無理」ということに、いつたい何の値打ちがあるだろう。わたしの自我が活躍することを、わたしの自我以外の誰が真に心待ちにしているだろう。わたしは第一義のわたしがへへ完全に無力な者vvだとということを宣言する。開くことのない小箱の中でサイコロがさまざま目を出したとして、いつたいそのことを外部の誰がどのようにころべよいものか。わたしの自我に活躍を求めるというのはそのようなことだし、わたしの自我の活躍に注目と承認を求めるというのもそのようなことなのだ。箱の中で、高く六の目が出たときは「出来る気がする」と高揚し、低く一の目が出たときには「無理です」とずつしり言う。そんなことに付き合わされて愉快になる者がこの世界のどこにいるだろうか。

父は子の虚妄を斟酌する義理を持ち合わせていない。それよりも先に、子のほうが父の本意を汲み取ろうとする態度があるべきだろう。第一義が「話」なら、何よりその「話」の声を聞き取ろうとせねばならない。そしてわたしはじつさいに、ここに長々とひとつずつ話の話を書きつけているのではあるが、話を書きつけるのであれば、それは第一義たる「話」の声をそのまま書きつけるべきではないだろうか。どうしてここでわたしが第

二義の「分かる、量る」を書きつける必要があるだろう。

浦島太郎という青年が、カメを助けたということが分かつた。その後、浦島はカメに乗せられ、竜宮城に行つたということが分かつた。浦島は竜宮城で乙姫に会い、歓待されたということが分かつた。浦島太郎はその後地上に戻り、土産に持たされた玉手箱を開封してしまい、煙に巻かれて老人になつたことが分かつた。このように、第二義の声を書きつけることは、話を書きつけるということにおいてまったくの邪魔でしかない。

原理的にはそのような仕組みなのだ。誰だつて一定の「話」は知つてゐるつもりでいるし、誰だつて内心の核に居座つてゐる「無理」のことはよく知つてゐる。ただ通常は、「話」のほうを第一義にしておらず、「分かる」のほうを第一義にしているのだ。たとえば、芸術大学を首席で卒業した者でも、志村けんがやつていていたようにバカ殿をやつてみんなを笑わせろと言わると、内心では即刻「無理」なのだし、若き日のビリージョエルのようにピアノを弾きながら「エンターテイナー」を唄えと言わされたら、内心では即刻「無理」なのだ。器用にこなせたからといって「壁」が越えられるわけではないので「無理」だ。芸術大学を首席で卒業したからといって「罪」を超えてある第一義と連絡できているわけではない。だから現実的には「出来る気がしない」。文学部の教授が書いた本は、わたしが書き話す冊子よりもずいぶん退屈な上に読みにくいけれども、だからといって彼にもつと面白く読みやすく書けと言つたところで、そんなことは彼には「無理」だ。面白く書こうとしても彼はそういう「ネタ」や「キャラ」に走ることしかできない。文学に詳しい文学好きは文学者ではないように、文学部の教授も詳しいだけで文学者ではないのだ。なぜここまで仕組みが解き明かされても、「現実的」には、きょうも明日も、

「無理」

なのだろう。そのことはいかにも不毛だと、誰よりも当事者が蓄積的に知つてゐるはず。まともな読み取りの出来る者なら、ほとんど直観の領域で、自分が問い合わせてゐる先が「罪」だということもすでに明視できているはず。まるで「お前は罪を信じてゐるのか」という具合なだが、それについてさえ「そうなのかも知れません」と答えるよりないというような閉塞ぶりなのだ。

なぜそのように、解き明かされながらも脱出不能なのかと、そのことはきっと、自我が無力ということに見切りがついていないからだ。何しろその自我でこそさまざまな色（しき）に引力を受け、さらには欲から引力さえ受けて踏みとどまつてゐるのだから、そのように力の中にあり続ける自我のことを、とつぜんまったくの無力なのだとは思いかねない。ありていに言つて、日常で内心「自我こそがいちばんパワフルだ！」と思つてゐるに違いない。

そのとおり、自我が量をはかると言つて、自我の目当ては最初から最後まで「力の量」に行き着いてゐる。それはニーチェの言うとおり「力への意志」だ。自我の求める自分量というのは、どう変形してもその本質は「力の量」であり「力量」だ。自我はただ時間を生きてゐるのではないし、さらに言えば生きることなど二の次でさえある。「力」。自我はみずからに力を求めて生き、力を放出することを欲してゐる。

あなたは要するに、へへ力量を見せびらかしたいvvvのだろう。

あなたにとつて安らぎと満足は、力量を見せびらかしたときにあるのだろう。

あなたは、力量があることについては「出来る気がする」と誇らしく言い、力量が足りないことには不快な声音でずつしり「無理」と言つているのだろう。

まったく、それは何の話だろう。重ねがきね、「そんな話はない」のだ。そんな話はないが、そんな罪はあるということか。

自我に完全な無力を看破しないかぎり、第一義に「話」はやつてこない。

自我に無力を宣言できないなら、罪が無力になるわけがない。

日常で内心、「自我こそがいちばんパワフルだ！」と思つてゐるなら、それによつてあなたに起つてくるのは次の事実的作用だ。

罪こそがいちばんパワフルだ。

いちばんパワフルということは、それを上回るパワーは存在しないので、あなたは毎朝毎晩、

「無理です」

を言うことになる。

## 音楽にはドしかない

音楽に縁のない人——演奏する側として縁のない人——には、まったく有効でない話になつてしまふのだが、一方で縁のある人にはずいぶん食いつかれて聞き入られることがあるので、この章を書く。

音楽について基礎知識のない人には、どうしても意味不明の箇所が出てきてしまふし、そのことを説明しだすと別ジャンルのことになつてしまふので、技術的説明はばつさり割愛するしかないのだが、その点はもうやむを得ないこととして、あしからず了承してもらえるものというふうにしておいてもらいたい。

「音楽にはドしかない」。このことは、一般的の音楽理論としてはまるで言われないことで、これはまったくの素人のわたしが、勝手にそのように

吹聴している、ただの世迷言だといふにしておいてもらいたい。

「ドレミファソラシ」というのがあって、ドの周波数は 261.6 Hz だ。

オクターブ上の「ド」になる。では三倍にすればどうなるか。周波数は約 784 Hz になるが、これは「フ」の音なのだ。「一オクターブ上のソ」になる。次に、四倍したら、周波数は約 1046 Hz になり、これはとうぜんふたたびの「ド」になる。「一オクターブ上のム」。

注目すべきポイントは、

「ドの周波数を倍にしていつたら、ソが出てきやがった」というところだ。

「なんでソが出てくるんだよ、お前はドとは違う音だろ」

つづき。ドの周波数を五倍したら、二オクターブ上の「ム」になる。また違う音が出てきやがった。なぜドを倍にしていくと違う音が出てくるのか。

次、六倍になつたらどうなると思う。どうなると思うと言われても、まったく見当もつかないだろう。ところがどうしよう、冷静に考えるとわかるのだ。六倍といふことは、二倍の三倍なのだ。といふことは、二倍は「ド」で三倍は「ソ」だったので、六倍音は「一オクターブ上のソ」になる。

そんなこんなで、進めてゆき、じゃあ十七倍するとどうなるかといつて、十七倍するともう「四オクターブ上のド♯」になる。半音まで出てきやがつた。

半音が出てくるといふことは……

ドレミファソラシに、こういう性質があるということではない。逆だ。

こうした〇倍音から、人類はドレミファソラシを発見し、音階にしようと決めていたのだ。

三倍音がソ、ということでは本当はなく、ただ弦の長さを半々にして、三倍の音を「ソ」に決めた。

そして、その倍々の中で半音が出てくるところとは、いわゆる「音階」というものは、この倍々の中だけで作られているということになる。どういうことか。

まず、ピアノの鍵盤を思い出してみると、その中でどれが「ド」かぐらいい、あなたは知っているはずだ。

そして、よくよく鍵盤を見ると、白鍵が七個、黒鍵が五個あるはずだ。合計十二個。

どれだけややこしい楽譜でも、音の数でいえば、この十二個しか存在しない。

そして、基本的には、十二個の中から七個しか使わないの、音楽というのは基本的に七つの音だけで作られているということになる。

これは極端に言っているのではなく、マジの話だ。

われわれは、クラシックの楽譜を開くと、ただちに音符がアホみたいに凝集しているのを見て、

「無理すぎワロタ」

になるのだが、逆に音楽の専門家はシンプルに、すべての音をI～VIIの番号で捉えているのだ。

七個しか音は使わないから。

(ポップス音楽ではあまりこのI～VIIの表記は用いない。ポップスは移

調することを前提にしていないからだ)

それで、さらに、あなたの家にピアノでもあればいいのだが、あなたがドの白鍵をブツ叩くと、じつはそのとき、本当に一オクターブ上の「ソ」の音も鳴っているのだ。

これはただの物理であって、いわゆる「固有振動数」だ。固有振動数が約数や倍数になっているので、波が物理的に「共鳴」を起こしているの

だ。

ペダルを踏んで、ドをブツ叩き、その後、中に手を突っ込んで、ドの弦を指でミューしてみると、

ミュートしたらドの音は消えるが、ソの音は明らかに「ピーン」と、サステインの中に鳴っているはずだ。

これはもう、めちゃくちゃはつきりと鳴っているので、誰でもわかる。「げつ、ドを叩いているのに、ソも鳴っているのかよ」

そのとおり。

完全五度といつて、ドを叩いたときのソがいちばんわかりやすいけれど、先ほど説明したように、鍵盤に並んでいる白鍵と黒鍵は、そもそもがすべて倍音から見出されていったものなので、白鍵でも黒鍵でも、どれかひとつをブツ叩けば、原理的にはすべての弦が共鳴するのだ。

鍵をひとつだけ叩いて、特定の周波数だけを鳴らすということは、逆に楽器においては不可能になる。

もし、特定の周波数「だけ」を鳴らすと、いわゆる「ピー音」になる。「試験電波放送中」などに聞こえてくる、ピーという音だ。いわゆるただのサイン波が聞こえてくる。

そんなむなしい楽器は存在しない。

それで、次に。

ドを叩いてソが鳴るとか言っているが、そもそもドとかソとかいうのは何なのか。

もちろん、ここまで話、音楽の基礎知識のある人は見逃してきてくれたものと思うが、わたしが「ド」と言っていたのは、本当にドではなくて「C」だ。シーと読むこともあればツェーと読むこともある。

周波数が261.6Hzというのは、本当はドではなく「C4」だ。爆薬のことではない。後ろの数字はオクターブを指定している。

それで、じつさいに鍵盤のCを叩いて、

「え、Cはドなんじやないの？」

と訊かれたら、

「それでいいよ」

と答へねばならない。

それでいいけど、と言いながら、ここからきゅうに、

「ハ調ならそれでいいよ」

というようなことを言い出すハメになる。

ああ面倒くせえ。

あなたはCの鍵を叩く。

「ドですか？」

とあなたは訊く。

おれは、

「へ長調だつたら、お前の叩いているのはソだけどね」

というようなことを言い出す。

はああ？

なんで同じ鍵を叩いているのに、勝手にソになるのか。

この意味不明は、「全部ド」と説明される。

十二個の鍵は、全部ドなのだ。

ウソじゃない。誇張でもない。

それでもドにしていいのだ。

C D E F G A Bは動かないのだが、ドレミファソラシは動くのだ。

うげえ、面倒くせえ。

ドは、ルート音であつて、どの音でもないのだ。

たとえ話をしよう。

ビルがあつたとして、ビルの一階とか二階とか、七階とかは、動きようがない。

けれども、あなたがそのビルの中にいて、

「あなたのフロアから一階上」

は何階だろうか。

何階かはわからない。

あなたが五階にいたら、一階上は六階だろう。

あなたが百二十階にいれば、一階上は百二十一階だ。

ドレミというのはそういう概念なのだ。

あなたのいる階層がドで、一階上がレなのだ。

あなたがC階にいれば、Cがドで、レの階はDになるが、あなたがF

階にいれば、レの階はGになるのだ。

並べると、

ドレミ

C D E

もありうるし、

もありうるといふこと。

ドレミ  
F G A

これ以上の説明は、誰かピアノを持つていて、直接教わつてくれ。

どの音をドにしても、ドレミファソラシは当たり前に弾けるのだ。

このようにして、十二個の鍵は、「全部ド」になつた。

次に、音楽の進行を考える。

音楽というのは、ドから始まり、ドに終わつていて。

これも本当だ。

一般にはまったく知られていないが、ほとんどの場合、音楽はドから

始まつてドに終わつてゐるのだ。そうじやないものなんて探してもなかなか見つからぬ。

仮に、メロディがソから始まつてゐたとしても、それはドをルートにした五度音として鳴つてゐるので、やはり始まりはドなのだ。

音楽というのは、ドから始まり、トニックをうろうろし、そこからファに行くと、もうソに行こうよという感じになり、ソに行つたあとはソをなるべく引き伸ばして、あとはもうドに帰るしかなくなる。ジャーン。終わり。

そういうふうに進行する。

これをカデンツアと言う。

音楽の先生が聞いたら、目を吊り上げてバイオリンの弓で殴り掛かつてきそうだな。

それでだ、ドレミの性質上、ルート音（主音）は常にドだ。そりやルート音のことをドと呼んでいるのだから当たり前だ。

それで、ドからファに行こうが、そのファからソに行こうが、それらファとかソというのは、「ドに対する○度音」でしかないとということ。ファを鳴らすのは、ドが目当てなのだ。

ソを鳴らすのもドが目当て。

演奏で使われる七つの音は、すべてルート音が目当てなのだ。

ドを見失つてファを鳴らすと、そのファはじつに行方不明になる。ドを見失つてソを鳴らすと、そのソはじつに行方不明になる。

「ドラえもん」でたとえてみよう。

ドラえもんの主人公はのび太だ。

ドラえもんの映画には、「のび太の、○○大冒険」というように、「のび太の」というのがついている。

作中には、主として作中、「のび太に対するスネ夫」という存在としてスネ夫は、主として作中、「のび太に対するスネ夫」という存在として

登場している。

ジャイアンも同じだ。

ジャイアンも、作中、「のび太に対するジャイアン」という存在として登場している。

しづかちゃんも、ドラえもんも、のび太に対するそれぞれとして登場している。

つまり、ドラえもんのストーリーは、  
のび太（主音）→スネ夫（トニック）→ジャイアン（トニック）→しづかちゃん（サブドミナント）→ドラえもん（ドミナント）→のび太（主音）

というふうに作られてゐるのだ。

作中にドラえもんが描かれるのは、のび太を表現するためだと言つていい。

のび太が主人公なのだから。

作中にしづかちゃんが描かれるのも、のび太を表現するためだと言つていい。

作中にスネ夫とジャイアンが描かれるのも、のび太を表現するためだ。つまり、われわれはドラえもんにのび太を見ているし、しづかちゃんにのび太を見ているし、スネ夫とジャイアンにのび太を見ているのだ。

だから、ドレミファソラシの鍵盤があつたとして、ファを叩こうがソを叩こうが、レミラを叩こうが、シを叩こうが、

「それは全部ドを鳴らしているのだ」

ということになる。

ドが主音なのだから。

和音とメロディがどう進行したとしても、叩かれている鍵盤はそのとぎすべて「ド」を鳴らしている。

そうなるとどうなる。

先に示した、ドレミの定義として、十二個の鍵はどれをドにしてもよいのだった。まずそこで「全部ド」だ。

それで、どれかひとつを適当に主音に決めたとして、そこから和音との七つは全部ドを鳴らしているのだ。

樂譜に書かれているおたまじやくしの凝集、あれは全部ドを鳴らしているのだ。

ならば、音楽というのは、その始まりから終わりまで「ド」でしかない。

始まりから終わりまで、主なる音を鳴らしているだけだ。

ドは、主音で、アルファ（始まり）であり、オメガ（終わり）だ。

マタイの福音書を「鳴らした」とき、そこからマタイの音が聞こえてきたらおかしいだろう。マタイは福音の主ではない。

「なんでオメーが出しやばつて来るんだよ」

と、あきれることになるだろう。

マタイの福音書を鳴らせば、そこから主なるキリストの音が聞こえてこないとおかしい。そうでなきや何のための福音書だ。

マルコの福音書を鳴らせば、主の音がしないとおかしいし、ルカの福音書を鳴らすというのは、主の音を鳴らすということのはずだろうし、ヨハネの福音書を鳴らすということは、やはり主音を鳴らすということに違いないはずなのだ。

ドを見失つて——ドの友人でなくなつて——ファとかソとかだけが鳴り響くと、それはものすごく行方不明の音で、祝福されたものではなくなり、福音ではなくなるのだ。

福音でない演奏というのはじつによくありうる。

音感のいい人は、音の高さ、その周波数を精密に「量る」ということができるのだけれども、それは色（しき）であつて話ではないので、それだけ。

けで音楽を成り立たせることはできない。

音感だけで演奏すると、そこには「何の話も聞こえてこないもの」が出力されてくる。

それでも、そこにある引力が好きで、それこそがいいんだという人もいるから、それはもう趣味のこととして、わたしからは口出しきれない。

ドラえもんだつて、「しづかちやんがもつとエロく美麗に描かれたほうが、引力があつていい」という人はいるのだ。

ささらに言うと、音楽にひとつ「話」が聞こえてくるとき、われわれがそこに本当に聴いているのは音ではないのだ。このことはいつそ当たり前だ。音といって、サイン波がピーと鳴ったとして、そんなことには何の体験もないのだから。

モネの絵を見たときに、絵の具を感じるという奴はアホではないか。

モネの絵に、しかるべき人は風景を体験するのだろう。さらにいえば、そこでは風景の体験を体験すると言うべきだと思うが、その話はここでは差し控えよう。

歩けば足音がする。仮に、それがすごく佳い音で、春の旅を体験されるところがあつたとして、その佳い音をいったいどうやって作り出そうというのか。

足音は、歩くことに従属して発生している。

われわれに、真に共有されて体験されているのは、そのとき足音ではなく「歩く」ということなのだ。

佳い旅が佳い足音をもたらしているのであり、そこに「聞こえてくる」ものが「サウンド」なのであって、それは「佳い足音を作つてそれを聴かせようとする」と——いわゆる「音作り」——とは事象が異なるのだ。

わたしはこの現象を、わけあって極めてはつきりと知っているが、ずばり言つて、これは一般に思われている「音楽の要素」ではまったくない。

先に話があつて、それに音が従属してくるのだが、「先に」話があるとということは、そこには何も鳴つていないということなのだ。

何も鳴つていないのであれば、それをふつう音楽の要素とは言うまい。

これはつまり、

^^音楽の要素ではないものが、演奏を支配しているvv

ということ。

そして、音楽に情感ではなく体験を見い出さんとする人は、むしろそちら、音楽の要素でないもののほうにこそ、

「いや、それこそが音楽なんです」

と言い、その旅じたいを求めてやまないようだ。

音楽の技術者は、歌唱や器楽演奏について、高い「力量」を持つていてと思うけれど、われわれの持ちうる「力量」の中に、音楽との同一性におよぶ「話」はない。

音楽と演奏を統べるものは、われわれの「力量」ではないところに存在している。

そうでなければ、じつさい力量ゼロのわたしに、このたぐいのことがこんなにはつきり具わるわけがないのだ。

人はとんでもない思い込みをしているものだ。  
英雄ではないのに英雄だと思っている。  
美女ではないのに美女だと思っている。

「しごでき」ではないのに「しごでき」だと思っている。

(こんにち、仕事ができる人のことは「しごでき」と貶めて呼ぶらしい)

芸術におよんではいないのに、アーティスティックだと思っている。

ハイセンスではないのに、「センスがある」と思つてている。

貴族でもないのに、生まれつき高貴だと思っている。

選ばれた民ではないのに、選民意識がある。

物語は見当たらないのに、ロマンチックだと思っている。

才能は見当たらないのに、タレンテッドな意識がある。

勇気はないのに、勇敢だと思っている。

怠惰なのに、努力を重ねてきたと思っている。

根性がないのに、根性があると思っており、感情的でヒステリックなのに、冷静でクレバーだと思っている。

プラウディーなのに謙虚だと思っている。

人望はないのに、人は自分についてくるべきだと思っている。  
能力がないのに、能力があると思つていて。

自分の思つたことが、思つたまま伝わると思っているのだ。

「わたしがいま、そっちに行こうとしているのわかるでしょ？ それなのに、なんでそこに立つの。邪魔になるじゃない」

もちろん、そういうことはじつさいにある。

たとえば、わたしが自動車を運転していて、右折でどこか店舗の駐車場に入ろうとしているところ、察しのよい対向車のドライバーが、早めにワインカーを出してくれて、

「わたしも右折しますよ」と教えてくれる。

# 認識と矛盾した思い込み

ありがたい。

彼が右折するということは、彼は直進してこないということであつて、わたしはゆうゆうと右折ができるということだ。

それは、彼の察しがよく、それでいて積極的な友愛があつたということだが、もつと単純にいえば、そこにはコミュニケーションの現象と能力があつたということだ。

わたしの思うことが向こうに伝わるはずだということではない。コミュニケーションの現象と能力がなければそうしたことは起こらない。

人はとんでもない思い込みをしているもので、人は自分の思うことが思つたまま伝わると思っているのだ。

自分は美女ではないのに、自分のことを美女だと思い込んでいる。そうした人は、信じがたいことだがじつさいに存在し、しかもめずらしくなく存在する。

こうしたことは、一般に、「あー、あるある笑」

と簡単に同意されるけれども、誰もそこまで本当に「そうだ」と、その構造を明視しているわけではない。

自分を美女だと思い込んでいるその当人に、あなたは自分の見てくれをどう思いますかと尋ねてみると、

「んー？ まあ、中の下、ぐらいですね。中の中まではないでしょ。客観的に見て」

と言う。

そのときの彼女は、ウソをついているわけではない。

ここで彼女の外見は、客観的にはまさに中の中だつたとしよう。

彼女はそれについて控えめに、自分を見下して、「まあ中の下でいどう」と言う。

そのていどに控えて言うということは、まさに一般的な振る舞いとして妥当なところだし、さらに彼女はその言いようについて、まったくウソを含ませてはいるのではないのだ。

「いや別に、自己卑下しているわけでもなく笑。客観的に見て、それぐらいだと思つていますよ。中の下。しようがないじゃないですか。そりやいちおう周りの人は、中の中ぐらいだと言つてくれるとは思いますが、どういうのは鵜呑みにするべきものではないです。まあ何にせよ、そんなにこだわりがあるわけでもなく、『ふつう』の範疇だからそれでいいんじやないと思つています。それで何か問題ありますか」

彼女は何もウソをついていないが、そうではない、そもそもわれわれの「思い込み」とは、認識の中に生じるものではないのだ。われわれの「思い込み」は、差別の中に生じるのであつて、認識の中に生じない。

彼女は、美女が美女として高く差別されることを知つており、彼女はその高い差別のほうにへへ自分の居場所vvを感じているのだ。

どういうことか？

認識と差別は異なる。

認識上、彼女は「中の下」だが、『なぜか』彼女は、そこに自分の居場所を感じてはいない。

自分が受けるべき差別として妥当なものは、美女として遇される高い差別だと感じている。

彼女は、認識上は不美人でも、思い込みとしては美女なのだ。

彼女はウソをついているわけではない。

けれども、どこからともなく怪しげな外国人男性が現れて来、

「きみの瞳には、独特の印象があつて。ボクは初めから、きみのその美貌に惹かれていたんだ」と自信ありげに言つたとき、彼女は、

「なぜそのように事実に反したことをおっしゃるのですか？」

と冷静に首をかしげはしない。

「エッ？ は？ とおどろいて、悪い気はしていなくて、半笑いになり、

「またまた、何の魂胆があつてそんなことを言うの」

と茶化すのだ。

茶化せば彼は、

「どうして？ ボクは本当のことと言つてはいるだけです。ボクはきみに、ウソをつきたくない」と真剣なふうに言う。

人はとんでもない思い込みをしているのだ。

その思い込みは、認識に生じてはいるのではなく、差別に生じてはいる。

彼女はいま、よくわからない外国人から、美女として高い差別を受けた。

彼女はもともと、その高い差別に「居場所」を見い出していたので、彼女は彼のもとを去ろうとはしない。

彼女は、認識としては、そのように美女扱いをされることには不当だと

認識しており、「何の魂胆があるの」と茶化す一方、体感としては、その

ような美女差別に遇されるのは、不當どころが妥当なことと感じている。

そこがもともとの「わたし」の居場所であつて、だからこそわたしの「居心地」がいいのだ。

「やつと本当のわたしをわかってくれる人が現れたかも」

彼女の内心にはそのような想いさえ湧き上がつてはいる。

逆に言うと、彼女はふだん、知り合いたちから「いじりやすいキャラ」「盛り上げ役」と扱われているのだが、そのことは彼女の「認識」においては妥当なところでありながら、「体感」においては不當なことだったのだ。

彼女の体感は、差別に生じているのだから、彼女は美女として遇され

ないかぎり、体感としては「不當だ」という思いを募らせつづけている。

そのことは、彼女自身の持つ認識にさえ矛盾しており、話としてはめ

ちやくちやなのだが、そんなことは彼女にとつてはどうでもいいことで、「屁理屈」でしかない。

認識ではないのだ。

差別なのだ。

先の章で述べたとおり、人は差別の中に代替的な「わたし」を見い出しているし、またその差別を作り出すのには、何らの根拠も必要としない。

人の自我は「決めつける」ということを、無根拠で無制限に出来てしまふし、さらにはそのようにただ「決めつける」ということこそが、自我の飼料であつて、それこそが自我を肥え太らせ、自我を安らがせる。

つまり、彼女の自我の「色（しき）」の機能においては、彼女は「中之下」だが、自我は欲に転じては、彼女は「やっぱり美女」なのだ。

それで彼女の自我は、けつときよくのところ美女として遇されてはじめて安らぐということになる。

それ以外は、「わかるけど」、やはり憤怒を湧かせていて、その憤怒を表沙汰にするわけにもいかないので、我慢し、怨んでいる。

それでいま彼女は、不明の外国人男性から、美女として高い差別を受けたところだ。

その差別さえ得られるなら、「認識」などどうでもよいではないか。

「そもそもさあ、どういうのが美女で、どういうのが美女じゃないとか、元から決まっているわけじゃないし、そんなの誰にも決められないじゃん？ だから人それぞれ、こういうのが美女だつて思えば、それが美女なんだよ」

こうして彼女は、自覚のないまま、混乱した構造をそのまま受容し、混乱した人格のまま生きていくことになる。

認識を問えば、認識においては、彼女は美女ではないし、英雄でもないし、「しぐでき」でもないし、貴族でもないのだ。芸術的でもないし、センスでもないし、ロマンチックでもない。勇敢でもないし、根性があるわけでもないし、冷静でもないしクレバーでもなく、謙虚にもなれず、プライヴェイだ。

「英雄、みたいなことは、無理ですね。英雄どころか、勇気も根性もないですもん。自分で自分のこと、プライドの高い奴だなあって思います。なんでこんなにプライド高いんでしようね。こんな、大したことのない見てくれで、生まれつき家柄が良かつたというわけでもなければ、そこまで本気で努力してきたというわけでもないのに。何かに特別な才能やセンスがあるというわけでもないくせに、けつきよく肝腎なときにはすぐヒステリックなんですよね。職場に何年いても、事実としては、上から指示を受けないと何もやり出さない指示待ち人間のままですし。そりや、自分のことなんで、いいかげん自分で見ていてわかりますよ。自分がどういう奴なのかについて、もう証拠が積み重なっていますもん」

彼女はそのように「分かっている」のだ。けれどもそもそも「思い込み」は、その「分かる」という機構の中に発生しない。

彼女は、認識上は自分のことを「分かり」ながら、混乱して、差別上は英雄で、勇気と根性を体現した、貴族の美女なのだ。才能に満ちながら、謙虚で、豊かな感性を持ち、人々を牽引していく力がある。

認識を破碎して、「それがもともとのわたし」なのだ。彼女はそのような差別に遇されるまではすべてのことを「不当」と感じて憤怒しつづける。

人はそうして、憤怒の中を生き、なるべくむさぼれるものをむさぼれるだけむさぼり、そこからは何についても「もう何もわかりません」と答えるだけになっていく。

そう成り果てては、その先はもう、常識の中であるべく安定して暮ら

していくというのみということになつてしまふ。

わたしがまるでアテにしない、ニーチェの言うところの「末人」というやつになるということだが、そのことが何も悪いということではないにせよ、ただ事実として、多くの場合でわれわれはそうなつていくということであつて、そのことはきっと、われわれにとつて不本意なことなのだ。

われわれはこのように、認識の中にではなく差別の中に思い込まれた「わたし」を見い出しており、その思い込まれた「わたし」をバラスト（重り）にして精神をバランスしているので、これを取り除こうとする、精神が転倒してクラッシュしてしまう。

本当に、もう立ち上がれなくなつてしまふのだ。

本當には美女で、「しぐでき」で、気品があり、努力家というのが「わたし」で、「いつの日かそのような高い差別を受けることだけがわたしにとつて妥当」という思いで生きてきているのに、きゅうに「そうではない」と言われてそれを取り外されてしまうと、もうどのようにして生きていけばいいのかわからなくなる。

「それじゃあもう、わたしに生きる価値はないじゃないですか」

そういうことではまるでないのだが、当人にとつてはそう思えるし、そのようにしか思えない。

不美人で、仕事の能力が高くなく、下品で、怠惰という存在を、これまで当人が低く差別してきたのだから。

これまで彼女自身が、そうした人たちのことを、「生きる価値がない笑」

と内心で差別してきたので、そのことがすべていつせいに自分に降りかかるつてくるのだ。

「そうじやない自分」「彼らとは違う自分」だけを「わたし」にして生きてきたのに、これではもう、本当に一切の身動きがとれなくなる。

本当に、人はそうした差別の中を生きており、差別の中に思い込まれた「わたし」を見い出して、認識の中で自分のことを「分かっていなかった」ということはまったく別に、思い込まれたわたしこそを精神のバラスト（重り）にして安定を得ているのだ。

われわれは思いがけず、このバラストを取つ払つて、ありのままの「わたし」で物事に取り組むということなどできない。

それでわれわれは、「わたし」が問われることのすべてについては、「無理ですね」と回答するのだ。

起き上がり小法師は、まるで不屈の精神を見せるようだが、その底部の重りを除去されることについては、起き上がり小法師だって「無理です」と答える。

「だって、そのときわたしは、もう起き上がり小法師ではないですもん」

の農家のワークとみなしてよい。また誰でも知るよう、壮大という印象さえわれわれに与えてくる手織りのペルシャ絨毯は、職人と伝統によって継承された地域性（あるいは民族性）のワークと言つていいだろう。一方で、歯のあいだに深く挟まつたスルメイカの干物の欠片を、なんとかしてつまようじで搔きだそうとする。そのあまりもの手ごわさを認めながら、くじけず、尖端の角度を変えて執拗にアプローチする。そのような作業するとき、われわれはその作業がいかに困難で時間と労力を要したにせよ、それを自分の取り組んだ「ワーク」とは認めない。また、コンビニエンスストアでアルバイトをしている青年も、給金のために自分が働いているということは認めて、レジ前に立つて自分について「これが僕のワークなんだ」とはあまり認めないものだ。

つまり簡単に言って、われわれは単なる作業のことを自分のワークとは認めないし、したたかな労働であれそれが自分にとつて本意のものでなければそれを自分のワークとは認めない。たとえば兵士が重たい装備を背負つて山中を三十キロも歩く訓練をするとき、彼らの体力消費と装備の運搬それじたいが彼らのワークになるわけではないが、彼らがそれによって鍛錬された強力な兵士となり、そうしたみずからを戦力として国家に備えるのだということになれば、その戦力増強ということが彼らのワークだと言いうことになるだろう。

**作品および仕事という、絶望を得にいくかのような行為**

われわれは仕事をワークと言うし、作品のことも何かしらの「ワーク」あるいは「アートワーク」と言う。よつてこれらのこととは大きく見てすべて「ワーク」に総括しうる。本質的な「仕事」とその成果はわれわれにとって普遍的にワークと言いうんだろう。たとえば農家が何十年も品種改良を重ねてついに見事なぶどうを創り出すというようなことはそ

であれば、その売却相場がなるべく高い叩かれず高騰することを願うばかりということなのだ。このことはあまりにもわれわれの「ワーク」とは言えない。もちろん、もつと大きな視点にたち、そうして生きていくとということであれば、わたしはそのことをまったく否定しないどころか、わたしはそのときのあなたにかけがえのないひとつつのリストを向けるだろう。とはいっても、何もあわててそのように壮大な視点にばかり立つ必要もないだろうから、ここではもつと机身に迫つてわれわれにとつての「ワーク」ということを考えたい。

われわれは率直なところ、ただ生きていくだけではなく、みずからワークを為すことが、みずから生であつてほしいと願つてゐるのではなかろうか。仕事であれ芸術であれ、愛であれ戦いであれ。少なくとも、そのことのほうをみずから生きる「本編」だとしたいのだ

と、われわれは悲願に思つてゐるだろう。それで、うかうかしているうちに自分はこんな年齢になつてしまい、「このままでは『何もしないまま“老人になつてしまふ』」「人生が終わつてしまふ」と、われわれは焦らさぬがら生きているのではないだろうか。

それでいながら、じつさいのワーク——作品——に向かうことは、ただちにわれわれを、習慣的な必殺の用語、「無理です」

に立ち返らせる。

たとえば目の前に数枚の紙と一本のボールペンがあれば、われわれはそこに短編小説を書くことが可能だ。紙の枚数によつては自作の短編小説「集」さえ記すことが可能なのだ。けれどもそのワークに向かうたれが立ち上がるらせるのは、ボールペンを手に取ることよりもずっと速い内心のセリフ、「無理です」

だ。では小説をあきらめてそこに薔薇の絵やチューリップの絵を描いていつてもよいが、それだつてやはり「無理です」が先立つ。もちろん何の問題もなくそこに薔薇の模写やチューリップの模写を描くことはできるが、何が「無理」なのかといつて、そこにへへ自分のワークを為すVVというのが無理だ。仮にその無理を押して薔薇やチューリップの絵を描いたとして、そこに残されるのは描いて“みた”という姑息なものばかりになつてしまふ。誰だつて一時的にそのようなことをみずからに試みることはできるけれども、それが一時的でしかないのであれば、それは未だ「わたしのワーク」ではないのだ。自分が手がけたからというだけのことでは、それを自分の作品ですと言ひ張つて展示することはできない。ただしもちろんこのことは、あなたの習作というプロセスを否定するものではまったくない。

きょうび、五千円ていどの電子キーボードがあれば、それだけで作詞作曲は可能だし、作詞作曲したそれをみずからで唄つてミュージシャンとなることも可能だ。しかしそれだからこそそれは逆に不可能だ。われわれはその不可能ぶりに直面したとき、それを「無理」とみずからで避けている。

われわれにとつて、へへ月々数万円の費用を払い、片道一時間をかけて音楽のスクールに通うとは可能だが、手元に五千円のキーボードを仕入れて作詞作曲と演奏を営むことは不可能VVなのだ。無理を押して作詞作曲などをしたとしても、それはやはりやつて“みた”という、陳腐化された「ネタ」のそれに留まるだけ。そんなことを蓄積させたとして、いざれば袋の底が破れ、流れ出た奔騰が当人を傷つけるだけだろう。自分が「偽物」の洪水で溺れるというようなことは、われわれにとつて最も避けたいことだ。

つまりわれわれは、願つて求めるものは裏腹に、なぜかへへワークでないものばかりが「出来る」VVのだ。ワークのものは出来ない。

「作品」は出来ず、「作業」ばかりは出来てしまう。これはあまりにも皮肉なことで、これではみずから求めてることにいつまでたっても進みようがないではないか。ここにある不明の障壁の正体はいったい何なのだろうか。

芸術であれ仕事であれ、それらのワークは本質に至るほど作品性を帶びるのであるから、このことは次のように総括して言ふことができる。

いわく、  
^^作品の向かうことはみずから絶望を得にいくかのような行為である  
vv。

われわれは何に絶望するのだろう。われわれは何を根拠に、その壁の前で「無理です」と宣言し、なぜそのときになつてその壁の向こう側にあるものを貶すというほうへ態度を豹変させるのだろう。

作品に向かうということは、^^差別がはぎ取られるvvということなのだ。ワークに向かうことは差別をはぎ取つてしまふ。仕事に向かうことは差別をはぎ取る。

差別がはぎ取られるということは、そこに成り立つていた代替の「わたし」が雲散霧消するということなのだ。差別の中に見出されていた思い込みの「わたし」が打ち碎かれてしまう。そのことは、先の章で述べたとおり、われわれの精神のバランスを底で保つていたバラスト（重り）を取り去るということなのだから、われわれの精神は転倒してしまう。

何かが実演される舞台の上に立てば、そこに現れてくるものは、やはり英雄のわたしではないのだ。入念な欺瞞の演出でもほどこさない限り、そこに出て来るのは、勇気と根性を体現したわたしでもなければ、貴族の美女たるわたしでもない。これまで潜在させていたセンスと才能を顯かにしたわたしというものがそこに出で来るわけでもいし、謙虚なまなざしを持った勇敢なわたしとというのもそこには出て来ない。豊かな感性や、人々を牽引していく輝かしい声も、そこにはぜひあるべきとひし

ひし期待されながら、そうしたものはまったく出て来てはおらず、率直なところそれとはまったく逆だと言いたくなるよりないほどのものが、そこには現れてくるのだ。人より努力は積んできたはずなのに、そこには「この人、すごい努力してきているよね」という美德の輝きさえも現れては来ない。

困ったことに、それがどうやら、本当の「話としてのわたし」らしいのだ。何事かが実演される舞台において、衆目にもレコードにもあまりにぶざまな姿。

そのぶざまさは、何らの証明も必要としないほどの、「ありのまま」の姿だろう。いつたいそこに何をほどこしたというのか。否、何も装飾や欺瞞はほどこされていないのだから、それこそが「全力のわたし」なのだと言わねばならない。

むしろこれまでこそが、装飾と欺瞞をほどこしてきた日々だったのであって、ここに来てその装飾と欺瞞を取り去つたというだけだろう。

ここにある「ありのままの自分」は、ただそれだけの事実であって、そこのでこの宇宙で誰が困るというわけでもないけれど、ただ唯一、自分だけが困る。何が困るかといつて、これまで抱えてきた「わたし」とはあまりにもつじつまが合わず、整合させようがないというのが困るのだ。これまで、一流企業に勤め、一流の業績を出してきたから、それらの看板を胸ポケットにさりげなく添えることで、「ボクって一流ですよね」と言い張れるような気がしていた。そしてじつさい、社会的な多くの人は、自分のことをそのように扱つてくれたし、そのような差別を受けることによって、「わたし」はじゅうぶんに定義を得ていたかのように思つていたのだ。けれどもそのことは、たしかに「わたし」を定めるにしても論理上の問題点を含んでいた。たとえば当該の企業が、どこかの悪印象の企業に買収され、三流企業と化してしまつたら、そのときは「わたし」も一緒に「三流ですよね」ということになるのか。そのようなことは直

観的に見ておかしい。ボクが買収されたわけではないのになぜボクが三流になるのか。

「社会的なものに手をつけたとて、世界に直接触れたということにはならない。一流企業にいて一流の業績を出せば、一流の新聞社にインタビューを受け、そのインタビューに答えた談話が人々に熟読されるかもしれないが、それは彼がみずからで作文して発行した冊子が人々に熟読されたということではない。彼が何十年も「無理」と言つてきたのはけつよくその点に尽きるのだ。一流企業と一流の業績と一流の新聞に乗じれば、一流の自分として談話を発表することができる。これがボクの話なんだよねと言つては、またそのように受け取つてもらうこともできる。それに比べて、彼個人が何らの看板も添えずに冊子を発行したとして、そこに載せられている談話に人々がこころを傾け、読み入つては、さらに「あなたの話の続きを聞きたい」と求められるようになるかというと、そんなことになるわけがないのだ。「無理です」。彼は何十年もそれを「無理」と言い続けている。

社会的な歯車が触れているのは、他の歯車であつて、歯車じたいが世界に触れるということはない。歯車は他の歯車しか触れる対象をもつてない。もちろんそのことは、歯車の機能性を否定するものではないし、同じ歯車でも、「重要な歯車」と、「他にいくらでも替えが利く安い歯車」があるだろう。人はより重要な歯車となつて、幅を利かせたいのかもしれない。だがそれは歯車であつて、歯車一枚だけを野原に投げ出せば、そこにあるのはただの鉄塊でしかなく、それはウンともスンとも言わな物々しいだけの重鎮なのだ。

そしてこれらのこととは、現在から八十年以上も前に、「自由からの逃走」という題でエーリッヒ・フロムによつて言及されている。宗教改革以降、人々は何についても「わたし」という個人が対象に向き合うのだといい、以来プロテスタント方面に見受けられる過激さを持つようになつたのだ。

が、けつよくのところわれわれはその「わたし」がやれないのだ。わたしが「わたし」をやれるという権利のことをフロムは「自由」と呼んでいたのだが、その「自由」というやつがキツすぎる。宗教改革で人々はカトリック教会の支配から解き放たれ、「自由」を得たことをよろこんだが、自由といつて「自らに由る」ということは、他の何にも由れないということなのだ。それまで人々は、中世の露骨な封建制の中にいて、自分が何者であるかを決定する自由と権利を持ち合わせていなかつた。カエルの子はカエルであつて、日本で言えば武家に生まれた子はサムライだつた。父が江戸城に勤めていれば自分もやがて江戸城に勤める。自分が何者であるかは、そのように幕府や教会といった権威・権力によつて勝手に決められ、勝手に授けられていた。あなたがたがキリスト教徒であつて、主によつて救われるというのは、これまでカトリック教会によつてお仕着せされていたのだが、これからはそうではなく、「あなた個人でどうなれ」と言うのだ。救われるわたしというのを「自分でやれ」と。「無理です」。人々はその「わたし」をやるということのキツさから逃走し、けつよく「わたし」が何者であるかを勝手に決めてくれる強力な組織に再吸收されることを選んだ。それでフロムの生きていた当時、彼らが吸收される先にあつたものが「ファシズム」だつた。そこでは、一流の帝国で一流の勲章をもらえば「ボクって一流だよね?」と言い張れることができたということだろう。それをフロムは「自由からの逃走」と呼んだ。

それがいま一流の帝国から一流企業——あるいはFIREした「勝ち組」——にすり替わつたところで、フロムが言うところの「自由からの逃走」は過去にはならず的中し続けている。

帝国主義・ファシズムの中で、いかつい軍服を着て成り上がつたところで、それは大きめの歯車になりおおせたということでしかなく、それをもつて世界に直接触れているということにはならない。一片の土くれ

さえ、彼の言うことは聞いてくれず、ぶどうの一房は、彼の思いあがつた権威を鼻で笑うのみ、彼のことなど一顧だにしないだろう。へへそのことに文句があるなら己で世界に触れてみろvv。そのへんにころがつている石や生えている草までが言うことを聞き、風雨や嵐までが彼の言うことに従うのなら、そこには彼の「話」がある。足許がヒノキの板であれ、あるいは野原であれ、そこは彼の舞台となり、すべての石ころにも草にも彼の何事かの実演と実作は現わされるだろう。そうして世界に直接触れて為されたものだけが真にワークと呼びうる。そのとき、仕事にも作品性があり、作品にも仕事の成果がともなうから、もはやそれらはすべて彼の作品と言つてよく、すべては彼の「話」と言つてよいのだ。

あなたは、仮に自分のことを、いかつい軍服を着た三十歳のファシスト党員なのだと考えればよい。そのときのあなたはとてもプラウディだろう。あなたは差別上、まるで英雄のようであつて、勇気と根性を体現し、高貴さと貫録を醸し出しているように見える。優れた人種に生まれつき、それでいて振る舞いと身だしなみは品行方正で、感性は莊嚴、そして人々を牽引していく力がある。本当かどうかはとてもあやしいにしても、差別上、あまりにもそのように思い込まっている。

そんなあなたに、きゅうに「作品」といって、

「やつてみろ」

と言いつけたらどうなるか。そこにどんなものが実演され、どんな実作が現れるというのか。

そこに露出する、身も蓋もないぶざまさに、あなたは誇りと権威を傷つけられ、耐えがたい侮辱を覚えるに違いない。精神はバランスを失つて転倒する。

そこであなたは機転を利かせ、きゅうに軍服を脱いで「陳腐化」をするかもしれない。何もかもを「ネタ」に走らせれば、先ほどの転倒ももはや「無かつたこと」にできるだろう。であれば、誇り高いあなたのファシズムも、あなたがその体現者であるということも、あなたは侮辱されなくて済むのだ。

われわれはそんなことをしているのだ。きゅうに本当に作品をやれとか、本当に仕事をやれということは、われわれから差別をはぎ取つてしまふ。差別をはぎ取られると、そこに思い込まれていた「差別上のわたし」もはぎ取られてしまう。作品・仕事に向かうことは、思い込みではない「話」のわたしを露出してしまう。その「話」のわたしはあまりにお粗末でぶざまなものだから、われわれはそれについて、

「いや、何かがおかしい。そんなはずはない」

と笑い、このことの謎を謎のままにしておこうとする。

謎はもう解かれたのだ。

作品・作品性におよんでも物事に取り掛かると、そこには「絶望的なわたし」が現れてくるというだけであつて、その絶望的なわたしが、これまでの差別的なわたし・思い込まれた重大なわたしと折り合わないというだけでしかない。

差別や思い込みに、根拠は必要ない。ただそう「思つた」という、自我の欲だけですべての思い込みが無制限に成り立つ。それに比べて、「話」のわたしが成り立つにはどうすればよいものか。「話」といっても、どうせわたしはきょうのことを忘れ、ただしきょうの怨みだけは忘れずに寝て、また翌朝になれば社会的なことがすべての時間を持つていくので、「わたし」はその中に溶け込んでいくという、ただそれだけのことではないのか。その中で「話」のわたしなど、いったい何をどうしていけば成り立つものか、まったく見当もつかず途方に暮れるばかりだ。

きのう「無理です」と結論づけた作品と本当の仕事は、今朝もやはり「無理です」と確かめられ、やはり人はきょうも社会的なものに自分を与えてもらおうとして逃走していく。世界に直接触れることはますます不可能だ。ここから先はしだいに、「話」を聞きつけること、あるいは「話」

平原から追放しようとするのだ。人を見かけたり聞き及んだりすることじたい、自分に対する侮辱だと感じて憎むようになるのだ。耐えられない。そのときは、もう差別上の「わたし」がはぎ取れることがないよう、「話」の人を自分の見渡す

# 魂魄と稽古

【「年喰つたオッサン」は、生まれてこのかた一度も「仕

事」をした」とがない】

あなたがいわゆる社会人であれ、あるいは学生であれ、身の回りを探すなら、見つけるというほどの発見でもなしに、身近に「年喰ったオッサン」を見つけることができるだろう。年喰ったオッサンの脳内は、仕事のことばかりで、いわゆる仕事人間なのかなとあなたは思うが、そのこともじっくり見つめるとしだいに不確かなものが感じられてくる。あなたの見つけた年喰ったオッサンが、頭の中で仕事のことばかり考えて、じっさいに業務においてはそれなりに頼りになるところもあり、あなたは彼のことを最もあきらめた意味において「大人」と認めているのだが、一方で彼が本当に「ワーク」を為しているのかと訊かれると、そのことについては「どうなんでしょうね」と、答えるのにも言い淀みが起ころる。

流通しているのなら、そこで何もわざわざ彼の真相なんて「見たくない」というのがわれわれのいつわらざる心情だ。彼はまさに、ミシエル・フーコーが言つたところの「規律訓練」の產物なのかもしれないけれども、だからといって正直なところ、われわれには彼のことにこころを傾ける余裕もなければ、そのようにする義理も持ち合わせていない。

ただわれわれは、内部に何かが垂れこめているらしい彼のことについて、じつは一度たりとも「仕事」はしていないらしいということだけは知つておかなくてはならない。彼は毎日出勤し、毎日業務と連れ添つて過ごし、場合によつては誰にも言われないままみずからで休日にも出勤していたりすることもあるが、それにしても彼は「仕事」をしているわけではないし、彼のワークを為そうとしているのでもない。彼は「自分」を思い込もうとしているだけだ。彼には彼の「話」がなく、「話」がない

一般にはまるで言われないことだか、彼らはじつのところ、本當には仕事をしているわけではないのだ。むしろ、表面上のこととはまったく正反対に、彼らは生まれてこのかた一度として「仕事」はしたことがないのだと捉えねばならない。なぜなら彼らは、給金はもとより、あたかくも「ちゃんとしている人」「ちゃんとした大人」というふうに差別を受けないからだ。三十年間「自撮り」を続けてきた人のことを、あなたは写真家だとは言わないし、そこに写真家としてのワークが残してきたのだけとはあなたは認めないだろう。それと同様に、彼はただ二十年も三十年も、「ボクってちゃんとしていますよね」と言い張り、そのように扱つてもらうためだけに業務をこなしつづけてきたのであって、彼のこれまでにやつたことの中に本質的な「仕事」や「ワーク」はない。ただ、それでもじつさいにこなされていく業務や、それによつて流通する社会的な富というのはあるので、彼はそれによつて見逃されているというか、見とがめられていなければ。さらに言つてしまえば、社会的な富が正常に流通しているのなら、そこで何もわざわざ彼の真相なんて「見たくない」というのがわれわれのいつわらざる心情だ。彼はまさに、ミシエル・フーコーが言つたところの「規律訓練」の産物なのかもしれないけれども、だからといって正直なところ、われわれには彼のことにこころを傾ける余裕もなければ、そのようにする義理も持ち合わせていない。

ただわれわれは、内部に何かが垂れこめているらしい彼のことについて、じつは一度たりとも「仕事」はしていないらしいということだけは知つておかなくてはならない。彼は毎日出勤し、毎日業務と連れ添つて過ごし、場合によつては誰にも言われないままみずからで休日にも出勤していくたりすることもあるが、それにしても彼は「仕事」をしているわけではないし、彼のワークを為そうとしているのでもない。彼は「自分」を思い込もうとしているだけだ。彼には彼の「話」がなく、「話」がない

なら彼に「わたし」はありえないのであって、彼はその「わたし」の代替物を得ようとして、出勤に安らぎと有利さを覚えているだけにすぎない。彼は業務上に、それなりの地位も実績も得ているのだ。彼はそれに基づいて、自分のことを「仕事をやつてきている人」と思い込もうとしている。そこまでくると、彼のことはもう余人が差出口をするべきような領域にはない。彼は二十年も三十年もそのようにしてきたのだから、彼のやっていることはもうこちらからは忖度のしようもないとみなすべきだ。じつさいわたしは、彼のそのようなことはもはや単なる「プライベート」の領域のことだと思っている。

ともあれ、そのような「年喰ったオッサン」を、われわれが周囲に容易に見つけることができるというのは事実だ。そしてここであなたにとつて必要な視点は、あなたにとつて正直なところ、あなたはたぶんそのオッサンにへへ「稽古をつけてほしい」とは思わない▽▽ということなのだ。そのことは端的に、あなたが直観的にそのオッサンについて“真の仕事を為してきてはいない”とみなしているということを表しているだろう。あなたはそのオッサンを捉えるのに、「仕事人間」という粗雑な標語をあてはめて済ましているだけで、あなたは本当にはそのオッサンが自分のワークを為したわけではないと判断しており、よもやそのオッサンから自分のワークを為すということの秘訣や心構えを教わりたいとは露ほども思っていない。

わたしが歯に衣を着せざ言うとすれば、わたしは彼について、

「彼は何の話もないだろうのに、彼から何の話を聞こうというのか？」と短くまとめてしまうだろう。とはいえる、この言いようはあまりにもむごたらしいもので、またかくいうわたしの側にどれだけ正当性があるのかわかったものではないから、あなたはわたしの言いようにまさにとつて同意することにはためらいを覚えるかもしれない。わたしは、人はそのようであつていいと思うが、それにしてもきっとあなたがわたし

のひどい言いように理性的には反駁しづらいというのも事実なのだ。あなたはけつきよくのところ、彼について「いいえ、あの人こそ、己のワーカを為してきた称えるべき人です」とは言い切れないからこそ、ここでひとまずは言い淀むしかないのであつて、ひいてはあなたはここで定まつてもいい結論に急ぐべきではなく、ただ理性と感情に保留を抱えたままこの先を慎重に進めばよいだろう。ひとまずは、あなたはきっと、「年喰ったオッサン」がもしあなたの指南・稽古役を買って出たら、そのことには否定的な拒絶感を覚えるということだ。

そしてこのことは、職場や業務についてのみ言えることではなく、一般には芸術的とされている人や作品についてさえ言えることだ。「ちゃんとやっているボク」を求めて手がけられた作業と成果は本質において決してワークとは言い得ないのと同様に、「芸術的なわたし」を求めて手がけられた作業と実作は本質において決してアートワークとは言えない。芸術的なわたし、文化的なわたし、作品的なわたし、センスのあるわたし。「わかっている人」のわたし。そんなものを言い張るために、制作のテーブルに毎日向かつたとして、そこに作品と呼んでいいものは決して現れてこない。

「年喰ったオッサン」は、生まれてこのかた一度も「仕事」をしたことがない。そのことと並列して、次のように知つておく必要がある。

「それっぽいクリエイター」は、生まれてこのかた一度も「作品」をしたことがない。

あなたは、一度も「仕事」をしたことがないオッサンを、誤つて粗雑に「仕事人間」と捉えることがあり、そのことと同様に、一度も「作品」をしたことがないクリエイターを、誤つて粗雑に「アーティスト」と捉えることがあるのだ。

このことは、両サイドとも、あなたの稽古の道をふさいでしまうので、そうではないのだとあなたは知つておかなくてはならない。

年喰ったオッサンは、「仕事」なんかしないただの社会人だし、それっぽいクリエイターは、「作品」なんかしないただの社会人だ。

そしてあなたがただの社会人のまま進んでしまうなら、稽古は得られず、あなたは彼らと同じものになっていくのだ。

## 【現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けて

いく】

現実的には、人はそうそう変わらない。

仮に、典型的な「キモオタ」と呼ばれる誰かを、強制的に「男前教室」みたいなものに放り込んだとして、彼がそれによって男前の誰かに生まれ変わるというようなことは、基本的でないものだ。厳しい男前教室でヒヒヒイ言わされ、カリキュラムをこなしてきたところで、そこから輩出されてくるのはやはり元どおりの、根本的に「キモオタ」の彼だ。彼に「男前」をやれと言いつけても、彼は以前と同じく「無理です」と言う。

あなたは、自分の親を長いあいだ見てきていると思うが、父親にせよ母親にせよ、彼らが長足の進歩を得て変わっていたなどということを目撃した覚えはないのではないか。あなたが子供のころから、あの母はあの母であり、あの父はあの父だった。あなたの両親はすばらしい両親だったかもしれないが、何にせよあなたが彼らを見てきた数十年において、彼らがまったく別のものへ飛躍していったというようなことは基本的になかったはずだ。頼りない父親が頼もしくなることは基本的にならないし、振る舞いが下卑ていた母親が上品で節度ある母親になるということも基本的でない。ただしもちろん、例外は存在するので、あなたの

両親がその例外にあたる方だったら、わたしはあなたとあなたの両親に對する非礼をただおわび申し上げる。話の綾としてやむなきこととご寛恕を賜りたい。ただ、それはあくまでそれは数的割合としてごく少数派の、やはり例外の方の話であるには違いない。

加齢していくにつれ、肉体は変化していくから、そのぶんの気質的な変化というのは起こってくる。先のキモオタの例でも、とにかく筋力トレーニングや心肺トレーニングを強制的に積ませるなら、肉体の変化によつて気質は変わっていくだろう。むしろ肉体が変化するとふつう元の気質は保てなくなると言つたほうがよいぐらいだ。よつて、かつては口うるさかった母親が、老齢になるにつれそこまで口うるさくはなくなるということはあるし、かつては居丈高だった父親が、老齢になつて穏やかさの成分を持ち始めることがある。

われわれは、いかにもというふうの「お疲れサラリーマン」を現実のものとしてイメージすることができるが、彼はサラリーマンとしていかにも疲れたという風情を醸しているのではなく、むしろ肉体が疲れたことによつていかにもサラリーマンという風情を醸しているのだ。

何にしても、それはあくまで肉体の変化に起因する気質の変化であつて、当人が何かを修得していったということではない。

だから、たとえば狭量な男が極端な筋力トレーニングを積んだとして、それによつて彼は豪快な男になるかというと、そうではなく、それは表面的に豪快ふうの気質がほとばしるようになるというだけだ。彼の精神が根本から変わるというわけではない。彼はただ、「自分の狭量ぶりをオラついて豪快に主張してくるようになる」だけだ。声はデカくなつているだろうし、筋トレにストレス発散を見つけてはいるだろうが、狭量という性質は変わっておらず、たいていの場合むしろそれは内部では加速している。

われわれが、何かを学び、何かを修め、それによつて変化を得るとい

うことは、現実的にはなかなかむつかしいことだ。先のキモオタの例のように、現実的にはそれは「ない」のだとまずみなしておく必要がある。あくまでその上にのみ、われわれが実効的な稽古のありようを理論立て見い出すことができるからだ。

あなた自身か、あるいはあなたがよく知る誰かを、拉致して密室に監禁したとする。その密室には書籍だけが置かれていて、あなたは書籍に記されている学門について試験をクリアしないと、その密室から解放してもらえないのだ。あなたはその監禁を解かれるのに、全力で勉強をして三ヶ月を要した。つまりあなたはその三ヶ月間、哲学書のようなものに首っ引きになった。

最後には、試験官に向けての口頭試問に正しく答えきり、ついに合格となつて解放されたのだが、それで解放されたあなたは、修めた学門によつて変化を得ているだろうか。あなたはようやく、ひさしぶりのいつもの町に戻り、ひさしぶりの我が家に帰ることができたのだが……

あなた自身のことが想像しづらければ、あなたの知人の場合でイメージしてもよい。あなたの知人が三ヶ月間、ストア学派を読まされたとして、三ヶ月後のその人は、理性に善なる神を見い出しているだろうか。あるいは三ヶ月間、エピクロス学派を読まされたとして、その人はおびやかされない魂に快楽を見い出しているだろうか。三ヶ月間、自省録を読まされたとして、その人は澄み切つてみずから品行をこそ問い合わせ続けているだろうか。三ヶ月間、留魂録を読まされたとして、その人は忠義と実行にためらいを持たない陽明学の人になつているだろうか。

あなたの想像するところ、そうではない、きっとあなたの知人は、あなたによく知るその人今まで、ただ「ひょんなことから、奇妙なことに詳しくなつた」だけではないだろうか。

われわれが、たとえ前向きに、みずから欲して学門を修めたとしても、

われわれはそこにある学門をただ「理解する」というだけ、ただそこに書かれていることが「分かる」というだけで、それによって自分を変えられるというわけではないのだ。

理解して、納得したとしても、何かが実現されるというわけではまったくない。

Understand は Realize ではないのだから。

たとえばあなたの知人がもともと、「オレ、人の視線とか、人にどう思われているかとか、スゲー気にしちゃうんだよね。気にしそぎだとはわかっているんだけどさ」と、悩み事のように言つていたとする。

それで彼は、自省録を読んで、目覚ましい発見をしたのだと、次のようにあなたに話してくれた。

「オレ、この本を読んでき、すげえ、マジそのとおりだつて思つたんだよ。オレ、もつと早くこのことを知りたかった。他人がオレのことをどう思うかって、それはオレが決められることじゃないから、オレが考えてもしようがないんだよね。それを考えるのはオレのテーマじやなくて、相手のテーマなんだよ。オレはただ、オレ自身の振る舞いに最善を尽くすことしかできない。そつちがオレのテーマで、オレがどう思われるかっていうのは向こうのテーマなんだよね。これって、言われてみたらまつたくそのとおりで、当たり前のことなんだけど、こんなのは自分じや気づけなかつたわ。すげえ勉強になつた」

こうして聞くと、たしかにそのとおり、彼にとつてはすごく「勉強になつた」のだと思われるが、それでいてその夜に、あなたが彼から受け取るチャットメッセージは次のとおりなのだ。

「なんか今日は、めちゃ一方的に話してばかりになつてごめん。妙にテンションあがつちやつて笑」

彼は引き続き、「人からどう思われているかが気になる」のだ。

なぜこのような、誰でもわかるほどの短絡的な矛盾が起るのかといふと、この場合、自省録の著者のことばおよび、自省録に書かれている「話」が、彼の体の真ん中には届いていないからだ。

彼の自我にしか届いていない。

彼は本を読んで、

「なるほど、これ、すげえ分かるわ」と想い、

「オレもぜひ、こういうふうになるわ」と想つた。

彼は、自省録の著者（アウレリウス）が言つてのこと、その内容は「分かる」のだが、だからといって、その話を主題ごと「体験」できたわけではない。

主題を体験できたわけではないので、彼において、その主題は体現されない。

この仕組みによって、われわれは現実的には、「人は変わらず、旧来の自分を続けていく」ということになる。

世の中には、いわゆる「本の虫」といって、大量の読書をこなしている人がいるが、あなたはそうした人の実物と面談したら、その実物の思ひがけなさに、大きな肩透かしの感触を受けるかもしれない。

「本の虫」は、「ひょんなことから、奇妙なことに、大量に、詳しく述べている」というだけで、書籍に示されていた主題のことごとくを体現できている人というわけではまったくないのだ。

「教養として」という言い方は一般に理解されうるけれど、実物に触れたあなたは、その人に「教養」があるとは認めないかもしれない。何ら体

現されることのない教養というのは、脳内に Wikipedia のカートリッジが挿さっているにすぎないのである。

現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けていく。だから多く

の人は、そこから現実的に、自分を変えようと思つたら、「自己洗脳をするしかない」と発想するのだ。

自己洗脳をして、自分に必要なものになりきつてしまえばいい。

営業マンにならなくてはならないなら、自分を営業マンに洗脳すればいい。そういう催眠暗示にかけられればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

そうして思い込んでしまえば、それそのものになるだろうということ。

思ひ込みを持つのに根拠ないのだから、とにかく「いけるいける」と勢いづいてそう思い込むしかない。

そして、冷静になつて考えると（冷静になつて考えてしまつたらオシマイだが）、そんなやりようがまさか正統な稽古であるはずはないのだ。それは稽古というよりはあきらかに無稽なのであって、無稽なればこそ、とにかくデタラメに思い込んでしまえ、力ずくで自己洗脳してしまえという言いようがまかりとおるのである。

そうしたやりようは、場合によつてやむをえないこともあり、そのすべてが無為になるとは言わないのであるが、さすがにそのやりようで真の何かに到達しうるとまでは思えない。

そうではないのだ。

現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けていく。

だからこそ、稽古というのは「非現実的」に取り組まねばならないの

が挿さっているにすぎないのである。

ここで人は、稽古についての受け取りを、おおきくふたつのパターン

に分岐させる。

ひとつには、非現実的な稽古こそが、稽古たりうるということがじつさいにあるという向きで、稽古という話を「統合」していこうと受け取る。

この受け取り方は、稽古の本義に沿っているが、一方で、このことが本当に受容できない者は、ただのインチキに耽つたり、ただのうさんくさいスピリチュアリズムに陥つたりすることがある。

もうひとつには、非現実的な稽古ということについて、「いや笑。それこそ非現実的でしょ」

と言い、稽古という話を現実的力感で「解体」していこうとすることがある。

これはそもそも、受け取り方というよりは内心で「受け取らない」方のスタイルなので、当人がしだいにその稽古じたいに向かわなくなつていく。

稽古に向かわないなら当人は「することがない」ので、この者はしだいに「他人がする稽古にケチをつける」ということにのみ向かっていくようになる。

他人のする稽古にケチをつけながら、当人は、万事「力量」のトレーニングだけを内心で信奉しているのであって、これは単純に言って「現実的」だ。

そもそも、現実的な力量トレーニングを信奉する人が多いのが当たり前ののであって、それが非現実的な稽古とは相克する以上、まず稽古に「入れる」という人がとても少ないとということになる。

数的割合としては、ここでほとんどの人（たぶん九割以上）が、稽古を解体して「力量トレーニング」を信奉しようとする向きを探り、残る一割未満の人も、やはり多くが、スピリチュアルな気分でこそ何かが出来るのだというただの空想に陥つてしまふ。

本質的に、稽古に「入る」ということじたいがむつかしいのだ。そのことがじつは最高難度で最大の壁と言つてもよいのかもしれない。じつさいのところ、稽古に「入る」ことが出来てしまえば、そこから先はもう当人が夢中になってやり始めるので、放つておいても勝手に稽古が進んでいく。もちろんその先には、まだまだ無数の閑門が立ちはだかっていて、それぞれの段階ではまたあらたに高次の稽古をつけてもらわなくてはならないのだが、それにしても何よりむつかしいのは万事の「入口」になつていて稽古の門だ。稽古といって、何をやっているのかわからないのだ。現実的に理解するということがまったく通用しないのだからわからないときは本当にまったくわからない。観測領域は相克され、わたしは「観測不能領域に稽古を積む」と言つていてるのだから、そこに観測のアンテナを向けようとすることはまったくのあべこべになつてしまふ。

「現実的」には、人は本質を変容できないのだから、稽古は「非現実的」に為されるしかない。そしてこのことについて必要な素養は、ここに示されているとおり現実的に有効なロゴスであつて、ここで現実性に支配されるパトスは障害にしかならない。つまり、現実的に有効なロゴスの能を持たない者、あるいはそれをおろそかにして軽んじている者は、逆にそれによつてこそ安易に空想に陥り、パトスのまま空想に耽り続ける者になつてしまふ。

わたしはこう申し上げているのだ、

「現実的にかんがえて、非現実的にしか稽古は成り立たないだろ」

このことにロゴスが応える者は稽古に入つていける可能性があるが、ここで内面にパトスが昂じる者や、ロゴスのつもりでけつきよく現実と力量のことしか信奉していない者は、稽古に入ることができない。

アウレリウスが稽古をつけても、彼はその稽古には入れなかつたよう

## 【稽古は自我未然につく】

四歳ぐらいのとき、われわれには自我が具わり、それ以降は、ひたすら「分かる」ばかりになっていく。

すべては自我にキヤッヂされ、自我はそれを理解し、分解し、解体して、すべてが「分かった」と言い張られて終わる。

玄関先ですべてが解体されるので、リビングにはもう何の命も届かなくなるのだ。

その「命のなさ」を、あろうことかわれわれは「大人」と言っている。

そうではない、命のなさは、ただの死に体であつて、ただの老け込み、ただの骸（むくろ）であつて、ただ老いさらばえただけのことでしかないのだ。

自我は、「分かる」のであって、その「分かる」の以降には、もう稽古の命はない。

だから稽古というのは、自我未然につく。

物心がつく未然のところにつく。

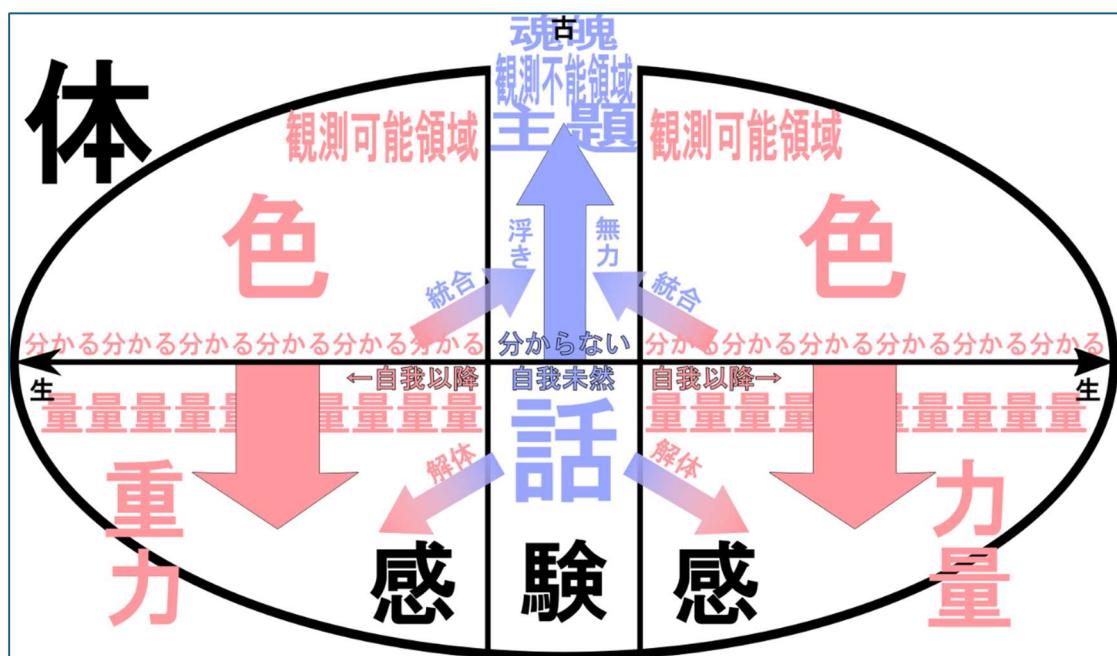
物心がつく未然、子供はまだ現実を認識できていなかつた。

まだ現実が分かつていなかつた。

だから、「非現実的」な稽古が接続する先は、われわれの自我以降の領域ではなく、自我未然の領域なのだ。

その領域を担っている器官が、体の真ん中、横隔膜のいちばん奥であり、正中線の通つているところだと本稿は述べている。

〔図〕



ここに示した図は、われながら一目瞭然性が低く、これを読み取らせようとするのは製作者側としてたいへん気が引ける。けれどもやむをえない、もともと平面図に転写できるたぐいの構造ではないのだ。からうじて説明つきなら、なんとか参照価値のある図になりうるだろう。まずわかりやすくするために、いつそ中央の、肝腎なところの青色のエリアを、真っ黒に塗りつぶしてしまったほうがよいのかもしれない。

中央の青色エリアを塗りつぶせば、残るのはもう力と量だけ、あとはそれを感じて「分かる」ということのみ。横隔膜なんかどこにもない。われわれの自我が生きている一般の日常はじつにそんなものだ。お金持ちはもつてている力、富の量。会社まで行くのに消費される力と、その量。もうちょっと寝ていていいという誘引力と、本当は欲しいのに与えられない睡眠量。美女の肢体が持つている魅力と、そのバスト・ウエスト・ヒップのサイズ比率（プロポーション）。われわれはこれについて、とてもパワフルに「分かるわあ」と言い合える。ただしやはり、そこには何の話もないのだ。金持ちがナイスバディの女を連れて遊びに行くのに、自分は朝から会社に行かねばならずじゅうぶんな睡眠さえ許されないというの、強い感想をもたらすし、その強い感想は「分かる」けれども、だからといってそれじたいにはやはり何の話もない。

①稽古は自我未然領域に得られる現象であつて、自我以降はただの「生（なま）」の世界だ

横軸はいちおう時間軸だと捉えてもらいたい。左右に偏向はなく、ただ中央から左右とも時が流れていくように矢印が伸びているだけだ。発

達の機序として、横軸の真ん中は「横隔膜のいちばん奥」だと思つてもらいたい。図中にはもう書き込む余地がなくなつてしまつた。

横軸、自我発生以降は、ひたすら「分かる」と「量」に満たされていく。すべての話は解体されていくのであって、この領域に稽古などありえない。この領域は、稽古どころかすべてが「生（なま）」だ。分かり、量り、重力が掛かり、時が流れていく。つぎつぎに状況が生じ、状況には感想が湧いてやまない。

自分で稽古をこねまわすことの無意味さがよくわかる。もちろん、稽古はよくかんがえねばならず、それは感覚のものではなく理性のものだが、その場合の「かんがえる」とは体の真ん中で行うもので、顔面と頭部にある自我（意識）でそれを考えるのではない。体の真ん中でするそれは「稽（かんが）える」という字があてられる。

乳幼児がやがて母国語を話したとして、母親がその乳幼児に、「あなたにはなぜ、ことばが“分かった”的？」と訊いたとしたら、その問いかけはいかにも無意味だろう。

われわれは、たとえ大江健三郎の難解な小説でも、そこからあらすじを抽出して理解することはできるし、何であればわれわれがそれをしなくとも、もうそうしたことは今後A-Iが勝手にやつてくれる見込みだ。だがまさかA-Iが大江の小説を「体験」しているはずはない。「分かる」ということは「体験する」ということではない。A-Iがするのは分析であつて体験ではない。

そしてわれわれも、四歳以降にするのは分析であつて体験ではない。図に照らし合させて、あなたは小説のひとつでも、それを「分かる」ということと、それを「体験する」というのは、体として担つている箇所が違うのだということを確かめられるはずだ。あなたが膨大な感想や強い感想を持ったとしても、それはやはり「体験する」ということではない。「感」は話の領域には所属していない。

体験は、体の真ん中でしか得られないのだ。当たり前だ、頭をひねつて体験するという奴がどこにいるというのだ。

## ② 時間を逆行し、重力と逆向きの作用が掛かる

横軸になつている矢印は、中央からの時間の経過を意味していて、左右とも絶対値であつてマイナスの方向は示していない。中央が単純に「始まり」と捉えてもらつてよいだろう。中央が原点 Origin で、横隔膜の一番奥、そして横軸が縦線と交差している点が「四歳時点」と捉えてよいが、縦線のほうは縦軸ではなく、この図は縦方向にはあまり明瞭な意味を与えられていない。単に、「体」という全体像を示さねばならなかつたのと、あとは書き込むことが多すぎてタテに膨れたというだけだ。

稽古というのは古につながつていくということだから、見てのとおり稽古の方向は時の流れと逆方向になる。「統合」の矢印はすべて時の流れと逆向きだ。そしてじつさいのこととして、体の真ん中、横隔膜のいちばん奥、正中線に魂魄との連絡を得ると、なぜかは知らないが重力の向きとは逆の作用、「浮身」と呼ばれている現象が発生する。なぜなのはわからぬ。量つたことはないが、まさか質量保存や万有引力の則が破れているわけでもなかろうし、体重計で量れば物理的に軽くなつているということではないのだろう。たぶん。

へへしかし、われわれが得るその「体験」は、まるで重力がどこかに行つて、体が浮き始めたものとしか思えない▽▽。

(※浮くといって、ヘリウム風船みたいに浮くわけではないです)

稽古というのは、時の流れを逆行させ、重力のはたらきと逆行するということなのだ。そういう「イメージ」とは思わないほうがいい。ここで、時間の逆流や力の反転は非現実的なのだが、先に述べたように、こ

こで現実的なことを欲しがる者は、そもそも稽古ということに色気を出さないほうがよい。現実的なことが欲しい者は素直に力量トレーニングに徹するべきだ。もちろん一方で、非現実的なほうに向かうということで、気分がスピリチュアルになつてしまふ人も、けつきよく現実から離脱した自分という差別を欲しがつてているだけなので、この人もやはり稽古には向かない。もつと現実的に非現実的な稽古が捉えられないといけない。

われわれの日常は、時が流れていつて重力で落下するのだ。稽古は、時が戻つてゆき、浮身で話・型 (forms) が統合されて現れてくる。ただそれだけなのだ。落下してゆく人類のビデオを逆再生すれば、そこには人類が古 (いにしえ) へと浮上していく像が映し出されるだろう。当たり前だ、ただそれだけのこと而已。逆再生すればそうなるというのは現実的なことだ。そしてこのことを常識で追求しきれないというのも現実的なことだ。

## ③ 「話」のほうが速く、「観測」のほうが後だ

われわれは、たとえば誰かが殴り掛かって来、そこから後に「乱闘」という話が続いていくものと思つてゐるが、本当は逆だ。図に現れてゐるところ、時間軸上で先に発生しているのは「話」のほうだ。発生した「話」が解体されて、観測可能な領域に流れでから、自我はそれを観測している。「観測」はそうしてずいぶんチンタラしているのだ。

誰かがじつさいに殴り掛かってきてから「乱闘」が発生するのではない。誰かがじつさいに殴りかかるという意志決定をしたときから乱闘という話が発生している。

そして、その「話」の発生が観測できないと言つてゐる者は、乱闘に巻

き込まれてからしかそこを離脱できない。遅い。観測未然、誰かが「殴りかかってやる」と意思決定したときには、もうその場を離れているようないと乱闘を回避できない。

（厳密には、すてきな命のある「話」の中を過ごしているところ、「わざわい」がやってくると「話」にひずみが生じるので、そのひずみの時点でもう体は座標を移動させているというふうになります。それはいわゆる「気配」ではなく、もつとはつきりとした「事象の変化」です）

稽古というのは、図のとおり、その「観測」が得られる前、「話」の発生それじたいに接続して、その「話」の発生時にはもう体がはたらいている、というようにしようとする営為なのだ。出来事を認識（観測）していたらもう何にも間に合っていないので、「出来事そのものに入つていなくてはならない」「出来事を、その発生時にもう書き換えてしまってはならない」ということになる。このことは、稽古ということについて最も非現実的だと思われる要素だ。

けれどもわたしから申し上げるなら、このことに否定的に首をかしげながら、それでも稽古をしたがるというのでは、その取り組みようのほうが非現実的で不毛だ。断言してよいが、こと「稽古」ということによんでは、観測が発生してから何かをしようとして、認識して「分かつて」から動き始めようとしてすることは、未来永劫の0点をもたらす地獄のような発想なのだ。そういう方は、何も無理はせず、一般にある反射神経のトレーニングに励まれればよい。

観測を得てから動く人は、雨が降ってきてからみずからの天気予報を発表しようとしている人というぐらい、時間軸も主題もズレてしまっている。

わたしはあなたが声を出す前からあなたの話を聞いているのだ。当たり前だ。白紙に話を書きつけるのが小説家なのだから、わたしの体験する「話」は常に観測より先行しているに決まっている。

図を見てもらいたい。わたしはここに「書き話す」ということをしてあるが、わたしは何かを分かつてから書き話しているのではないし、何かを観測してから書き話しているのでもない。何かを観測する未然、分かることで、四歳未然の体の真ん中で、「話」を直接体験し、体験してからそれを何事かの意味のあるもの（分かりうるもの）として筆記しているのだ。わたしは主題に出会つて書き話し、書き話すたびにまた主題に会い直している。主題を認識しても意味はなく、主題を体験しないと意味がない（図のとおり）。主題を体験しないと「話」にはならない。主題を「認識」すると、むしろ話には解体の作用がはたらいてしまう。

となると、単純に言つて、本当に図中の真ん中の、青い部分ばかり直接取り扱えるようになろうとするのが稽古なのだ。それは「分からぬ」のだし観測もできないのだから、ただ直接取り扱えるようになるしかない。体の真ん中で。何かを想うというチンタラしたことではなく、主題に出会うということが、同時に体の真ん中から「はたらいている」ということでないと間に合わない。それに間に合う脳と体を当たり前にするというのが稽古の目的だ。

#### ④ 脱力は違う、わたしは無力に立つ

最近は誰でもが「脱力」を言う。脱力は、やりたければそのようにすればいいだろうけれど、脱力というのはしょせん力の信奉でしかない。力を入れればいいことがあるかと思いきや、あまりそうでもなかつたので、逆に力の量を減らすこととした。するとこんどこそいいことがある気がする。そういう、けつきよくは力の量の加減でしかない。

たしかに、むやみに力を入れるよりは、高度に脱力されているほうがはるかに良いだろう。しかし、わたしは力を信奉しないので、わたしは

「フルパワーだろうが脱力だろうがおれは無力だ」と宣言したい。これはわたし自身の宣言することで、これじたいが正しいというようなことはない。力は無力なのだ。わたし自身、別にムツキムキに力を入れてもかまわないし、ダツラダラに力を抜いてもかまわない。どちらも同じで、どちらも無力のままだ。

通貨でない偽物の貨幣を賽銭箱に入れたとして、それはいくら入れても無賽銭だろう。ゼロにしたって無賽銭だし、山積み放り込んだって無賽銭だ。わたしにとつて無力宣言はそのような意味のもので、わたしは「脱力パワーに期待する」というややこしくなるような期待を企まないのだ。わたしはスポーツ選手ではないので、力みであろうが脱力であろうがパワーそれじたいに用事はない。

## ⑤具体的処理

实物を見るまでは、まったく信じてもらえないと思うが、じつさい体の角（かど）を処理していくと、人の体は「分からなく」なっていくのだ。肩・肘・胸・腰・股関節・膝、本当は足首などもそうだが、それぞれの稼働部位を体の真ん中のほう、正中線のほうへ「引き取つて」いくと、人の体はなぜか「分からぬ」ようになり、分からぬからこそ同一性のある「ひとつ」の体になるのだ。腕が体になり、脚が体になるということ。ふだんわれわれは、腕を腕として振り回し、脚を脚として蹴つ飛ばしているのだが、それが「分かっている」体であり、そのことは本当に「分からぬ」ものへと技術的に処理していくことができる（※稽古を要する術があるということであつて、それを可能とするライフハックがあるということではありません）。そうして体が分からなくなつていくほど、体の真ん中には浮身が掛かっている。そしてなぜかそのとき、すべ

ての作用は統合の向きにはたらいて、そこには型や話が現れてくるのだ。ここまできてついに、靈魂だと氣魄だと、魂が体現されて靈なるものになつてゐるとか、そういう眉唾の言いようも、「かもしけんな」と肯定したくなる余地が出でてくるのだ。見た目にも「なんだコイツ」というのがありありと出てくるから。

## ⑥横隔膜のいちばん奥を通つたものは体験され、そうでないものは体験されていない

試みに、わたしが「うわっ」と言つて、軽くおどろいてみよう。前もつてそう言つているのだから、それは一般にはわざとらしい小芝居をするということだ。

小芝居、あるいは猿芝居。にもかかわらず、あなたはわたしによるその実演を、作りものとは言えず、かといってリアルなものとも言えないで、「あれっ？」と困惑しだすだろう。わたしはわざとらしく「うわっ」と言つたのだが、なぜかあなたにはそのわざとらしいものが、「ちゃんとおどろいている」というふうに体験される。もちろんおどろく材料は何んのだから、わたしは「わざと」そのようにしていにすぎない。けれどもあなたはなぜかそこに、一ミリグラムのわざとらしさも見つけることができない。

あなたは混乱する。

わたしがそこで、

「じゃあ、本當にはおどろいてない、ウソの『うわっ』をやつてみましょうか」

と言い、そのとおりのことをすると、それはまた言つたとおりのもの

になるので、あなたはますます混乱する。

このことの種明かしは簡単で、われわれは、横隔膜のいちばん奥を通ったときにそれを「体験」しているということなのだ。わたしはその「うわつ」を、いちいち横隔膜のいちばん奥に通している。横隔膜のいちばん奥に通しているので、わざとでもたしかに「うわつ」と体験されるのだ。だからそれは偽物ではないし、かといって「リアルのやつ」でもない。

このことを「ファイクション」という。

横隔膜のいちばん奥は、魂魄の領域までつながっているので、魂魄の領域では「ウソのやつ」かつ「リアルのやつ」という相克が矛盾せず両立する。これがファイクションであって、言い換えると人が体の真ん中から体験できるものはすべてファイクションの事象ということなのだ。そのことを、わたしはしばしば作品性と呼んだりしてきた。本稿ではそのことを特に「話」と呼んでいる。

わたしは実演で、じつは「おどろいた」のではなく、

「わたしは『うわつ』とおどろいた」 作・九折空也

という「話」をやつたのだ。うわつとおどろく演技をやつたのではない。あなたはそれについて、その「話」を体験したということはまるでウソではなかつたので、自我的「分かる」機能ではそれを捉えれず、混乱したということなのだ。

ここで、無力のまま主題を呼び込むと、そのとき「主題」は無力なわたしと力の空撃ちで浮いたあなたに等しく「もろ」に突き刺さつてくる。突き刺さつてくるのか、あるいは突き抜けていくのか。それはわたしの力でもなければあなたの力でもない、直接の「主題」のはたらきが、その声が、体験が、一種えげつないものとしてさえあなたの体の真ん中を突き抜けていく。それは、誰の力かわからない、不明の何者かの力だ。その力だけが、あなたの体の真ん中に、直接の体験をもたらすことができる。そこでもたらされる体験は、あまりにも直接のもので、あまりにも精細なものだ。

他人の「体験」をまるで手縫いするように直接操作できるというの

(7)わたしの無力は、あなたを無力化させ、ここに主題の支配が呼び込まれる

もし、いちばん究極的なことを教えると言わいたら、わたしはこのことを教えるだろう。

わたしはフルパワーだろうが脱力だろうが無力だ。みずからの「力」および、その量に何らの本質も認めるつもりがない。

わたしが今まで無力を宣言するなら、そのときあなたは、わたしからは何らの力の作用も受けないとということになる。わたしからあなたへフルパワーは向けられないし、脱力さえ向けられない。するとあなたは、わたしに向けて対応発生させる自我の力量を発生させられなくなる。あるいは力量が発生しても、わたしからあなたに向いている力は存在しないので、あなたは自分に発生した力量が空撃ちされ、その力でみずからが浮き上がってしまう。われわれは両手で飛び箱を下向きに押せば押すほど、反力として体を上へと浮かせるではないか。

ここで、無力のまま主題を呼び込むと、そのとき「主題」は無力なわたしと力の空撃ちで浮いたあなたに等しく「もろ」に突き刺さつてくる。突き刺さつてくるのか、あるいは突き抜けていくのか。それはわたしの力でもなければあなたの力でもない、直接の「主題」のはたらきが、その声が、体験が、一種えげつないものとしてさえあなたの体の真ん中を突き抜けていく。それは、誰の力かわからない、不明の何者かの力だ。その力だけが、あなたの体の真ん中に、直接の体験をもたらすことができる。

じつにふしぎな感覚だ。細やかに、精緻に。もちろんそれはわたしの権威で起こっていることだ。何度も言うようにわたしは無力を宣言する。わたしがそれを宣言するのは、その主題の支配を呼び込みたいからだし、それ以上に、その主題の完璧無比の権威と、体験を直接操作するその細やかさと奥深さを思い知り、こんなもの何をどうあがいても個人の小細工やテクニックで上回れるわけがないではないかと、いいかげん馬鹿馬鹿しくなつたからだ。

「無力」、そして「主題の呼び込み」、これが最も究極のことだ。これ以上のことわわたしは知らないし、これ以上のことが必要とはもう思えない。

また、この「主題の呼び込み」におよんでわれわれは、「体験」と「観測」の時間がずれているということをいちばんはつきりと知ることがでできる。「体験」が先で「観測」はずっとあとだ。「話」が体験されるのが先で、「感じ」が観測されるのはまるで数秒後と言いたくなるほどずれている。

あわせて次のようにも言つておきたい。決して欠かせないこととして、「主題の呼び込み」があり、「仮に」、そこに「父と子」をあてがうとすれば、そのときわたしと主題は、どちらが父であり、どちらが子だろうか。

わたしはよもや、自分の側を「父です」だなどと言い張れる気はしない。仮にどちらかが父だというなら、あきらかに主題のほうが父だ。わたしは主題に対して子でしかない。自分のことを「主題の父です」と言い張るのは、あまりにもジョークかギャグすぎるだろう。

それで、仮にそのように、冷静に見れば主題のほうが父だったとして、わたしがその主題を表現するとなつたときにはどうなるのだろうか。表現するといって、それをどんなふうに表現していくのかについて、

それを子たるわたしが気ままに決めていけるのだろうか。

わたしにはそんな権威が与えられているのか。

わたしにはどうもそうは思えない。

たとえば仮に、音楽の父がいたとして、音楽の父といえば慣習的にバッハが想起されるが、どう演奏するかをバッハではなくおれが決めていくというのか。バッハに向けて、「いや、おれが決めるから、あんたは引っ込んで」と。

馬鹿げている。わたしの側は子であって、どう表現するかなどはすべて父にゆだねられている。そのこともあるつて、わたしは自分を「無力」だと言うのだ。どう表現するかを自分で決められると言うなら、それはみずからで「父は要らない」と言い放つていいことになるだろう。

わたしはいいかげん、いやというほど知っているのだ。わたしがもう何度も見てきたことだ。わたしの「表現」が、つまり何かしらのわたしの「話」が、目の前のあなたにありありと体験されるとき、本当にその体験は、もはやわたしを媒介していないというほどなのだ。そのとき、父からあなたの横隔膜へ、直接の体験が飛んでいるだけなのだ。主題の呼び込み。

本当に、

「もうおれは一切カンケーないんじゃないのこれ？」

と思える。

そのとき、わたしは父の子だが、あなたも父の子になつていて。そして、子から子に向けて何かが飛んでいるわけではなく、主題はすべて父から直接子へ飛んでいるのだ。

わたしの父が、わたしとあなたにショートケーキを買ってきてくれたとする。その場合、わたしも父のショートケーキを食うが、あなたも父のショートケーキを食うだろう。それでわたしは、あなたがその父のショートケーキを食つているのを見ているだけだ。わたし自身もそのケー

キを食いながら。

本当に、何なんだこれは、と思う。

しかもそのショートケーキはそもそも、父がわたしのために買ってきてくれたものというより、メインとしてあなたのために買つてきたものという感じがするのだ。むしろわたしの側が、あなたのご相伴にあずかり、ショートケーキにありついているという感じがする。つまり「あなた向けのケーキ」をおれがついでに一緒に食わせてもらつてているという味がする。

わたしが、目の前にあなたを置き、父に向けて、「なんつーか、こいつにP S 5を与えてやつてください」と頼む。すると、父はあなたにP S 5を贈る。Amazon で発注したやつみたいなものがあなたのところに届く。

そして、何か「もののついで」のように、わたしのところにも同じP S 5が届くのだ。やはり、Amazon で発注したやつ、みたいな感じで。わたしの目の前にいるあなたは、目に見えるものが目の前のわたししかいないので、P S 5が届いたことについて、わたしに感謝する。

あなたはそれをどうもわたしからの贈り物と誤解しているみたいだ。

たしかにそれは、わたしの采配であなたのところに届いたものではある。

けれども、率直なわたしの内面の声で言うと、「いや、それ、父からあなたへ贈られたやつやし」と思つていて。

正直なところ、父のところからあなたの横隔膜の奥へ、それが「送られている」「届いている」のが“見える”のだ。父が撃つた水鉄砲が、あなたの横隔膜の奥に届いている、その軌跡みたいなものが見える。それはわたしが撃つている水鉄砲ではない。

けれどもあなたは、さしあたりアテがないので、わたしに向けて、

「すごいですね」

と囁う。

わたしはそのとき、「うーん」と言うしかなく、憮然とするしかないのだ。

空軍が、敵陣地を爆撃し、これはたまらんといつて敵が降伏・投降してくる場合、敵兵はこちらの陸軍に投降してくるだろう。

空を飛び去つていった空軍に投降はできないからだ。

そのとき、何をしたわけでもない陸軍は、投降者たちを迎え入れ、戦勝者ぶることに引け目を覚えるだろう。

「降参です、すごかつたっす」

「まあ、うん、われわれがというより、ウチの空軍がエグかつただけだけどね……われわれは何もしていないし。爆撃エグいなーというのは、そのときわれわれも見ていたのでわかるよ。めっちゃ届いてるって。たしかにわれわれがその空軍を呼び込んだのではあるけれど、勝ったのはわれわれではないな、正直なところほとんどただ“見ていただけ”だつたもん」

奇妙なことに、こうして「主題の呼び込み」が為されるとき、なぜかその呼び込みにはたらいているわたしが、へへいちばん蚊帳の外▽▽といふ感じになるのだ。

あなたが稽古を積んでいくということは、あなたもその「蚊帳の外」が出来るようになつていくということだ。主題を呼び込み、主題をディールし、それでなぜかその主題の當為から自分がいちばん「蚊帳の外」になる。

周囲からは主役と思われているのに、当人が体験するのは、「お前がいちばんオマケ」なのだ。

なぜこんなふうになるのはいつまでも不思議だ。仮にここであてはめた父と子で言うなら、これはもう父の意志なのだろうとしか言えない。

⑧稽古は、肉体にも文体にも全体にもつく

われわれは魚の「切り身」を食べる。「切り身」を食べるとは言わない。

また、「体育」の授業があつたとして、それを「身育」の授業とは言わない。

「身」は、身体性において「いくつかに切り分けられたもの」を指してお

り、「体」は、身体性において「ひとつに統合されたもの」を指している。

われわれは「自身」の「体」をひとつのものに統合したいのだ。そのためにこそ、「身」に起こるすべてのことを正しく知り、正しく処理しよういうのが稽古の道筋となる。七つの会社を統合してホールディングスにするとき、逆にその七つの会社の各個に精通していないと、まともなホールディングスは運営されまい。

切り分けられて捉えられる複数の「身」は、どうしてひとつの「体」になりうるだろう。われわれが認識し、量り、感じて想う領域では、このことはどうしても成り立たない。切り分けられているということは、ひとつではないということだし、ひとつということは、切り分けられていないということにならざるを得ない。

魂魄との連絡が得られない場合、われわれはここに「呪縛」を持ち込まざるを得ない。

たとえば親と子は、それぞれ別個の人格だから、分かたれているが、けれども親子だから「ひとつなんだ」と言いたいところもあるだろう。家族なのだからバラバラでいるのはつらい。かといって、それぞれ各個がのびのびやれていないのであれば、それは健全な家族ではないといふことになる。ここで呪縛が起こる。

「いいわね？ わたしたちは家族なんですから、ひとつなんです。みん

なつながっているんですよ。それで、〇〇ちゃんも、もう大人なんだから、自分のことは自分でちゃんとやつていかなくちやだめ。大人になつたということは、もう誰も助けてくれないということなんです。そして、夜遅くなるならちゃんと連絡してね。言わなくともわかっていると思うけれど、お母さんの知らない誰かと夜遊びするのは禁止です。誰とどこで遊ぶのか、ちゃんと言つてもらわないとお母さんあなたのことわからぬから。いいわね、勝手なことしちゃだめよ。自分のことは自分で決めていけるようになりなさい」

呪縛は「血」の現象だ。われわれ人間に流れている血だけが、この「分かたれている」「ひとつである」という矛盾に血を沸騰させる。空をゆくツバメや海をゆくイワシの群れはそんなことを考えたことがない。彼らはそんなことを考える血筋はない。彼らは人間道の因果にはなく、他の畜生道などの因果にある。

われわれが矛盾・相克を「考えてしまう」「そこに血が沸騰してしまう」というのは、猫が獲物を「追つてしまふ、獲つてしまふ」「そこに血が沸騰してしまう」というのと同じだ。生きものの領域においてそれは逃れられない宿業の仕組みとなつていて（そこに意図的にブーストをかけるのが呪術だ）。

魂魄の領域においては、身と体が同時に成立する。いくつもに分かたれた身のままで、呪縛されずにひとつの体が得られる。

呪縛はただの「血による縛りつけ」でしかないから、それで分かたれた身が真に統合されてひとつになるわけではないのだ。われわれがそうして分割されたものを呪縛でつながつていると言い張り、振り回したとしても、その先にあることはただ「身のほど」を思い知らされるということのみ。

身と体の同時成立。分かたれて自由な身が、それでいながら統合されてひとつの体を為し、ひとつを為していながら各個でもあるというのは、

われわれの肉体にも起るし、物事の「全体」にも起る。さらにはここに書かれているような文章の、「文体」というレベルにも起るのだ。

万事について、そこに身と体の同時成立がなければ、本稿が述べているところの「体験」が得られない。

本稿が言うところの「体験」はすべて、矛盾がなぜか両立したまま得られるというものだから、われわれが本当にそこに見い出しているのは、人間道の業（カルマ）を超えて存在する魂魄と主題の権威なのだ。主題が体験されて、われわれはそこに「話」を見い出している。

浦島太郎は観測されたことのない話なので、新聞記事や企業の日報にそのいきさつを書けばただの「ウソ」ということになろう。けれども、それでいて浦島太郎という「話」それじたいはウソではないとということなのだ。それで浦島太郎は体験可能な「話」ということになる。逆に、新聞記事や日報には本来「話」なんて書かないのだということ。浦島太郎という寓話は、われわれが生きるということの「全体」に参与してくるだろが、新聞記事が原油価格の変動を報告してきたとして、それはわれわれが生きるということの「全体」に参与してはこない。原油価格が参与してくるのはわれわれが生きることの「部分」だ。あなたの聴くレコードとあなたの生はひとつに織り合わされているところがあるかもしれないが、そこに原油価格の糸は織り合わされてこない。

わたしが書き話すことは、ここでは各章に分かれしており、分かれているからこそ分かりやすさが得られてくるのだが、それでいてもしわたしが書き話す「全体」がひとつものになつていなかつたら、読み手のあなたは本稿を読書の「体験」として掴みとることができなくなってしまふだろう。ひとつの全体を為していなさい情報群はただの羅列であり、たとえばわれわれは電化製品の説明書に「読書体験」は期待しない。本稿では、各章が「身」なので、場合によつては一部だけを「切り身」にして摂取することもできようし、そうではなくひとつの「全体」を読書体験

することもできるということ。そして切り身というのも、「全体」がひとつを為しているからこそ、その切り身にも命が通つてることになるのだ。

數十もあるような交響曲の楽譜でも、そのひとつひとつは数秒に満たない音符という身であり、どれもこれも「分かる」音符が並んでいるだけではない。それが、それぞれに粒立つた音を鳴らしながら、同時に単なる音ではないひとつの「全体」を為しもする、そのような演奏が為されれば、そこには音楽体験というものがもたらされるということだ。そのことにはたらいているのはもはや音や楽器ではなく魂魄であり主題ということになる。

ここで、書き手のわたしがおり、読み手のあなたがいるのだとすれば、それぞれはそのような身分に分かたれていると言つていい。書き手と読み手が分かたれず混濁するのでは、まるで近年の「うp主」と「コメント欄」のようになつてしまふだろう。ではここに別個の身分が相互に睨めっこあるいは協働作業でもしているのかというと、そうではない、それぞれは各個の身分に隔たれてありながら、なぜか書き話しこそひとつの中を同時成立させてもらつ。それであなたは、文章を読んでいるよりも、体のいちばん奥に直接声を体験しているかのようには本稿をここまで読み進めてきたのだ。

さらに「全体」と言えば、わたしがこれまでに書き話してきたこと、そしてこれから書き話していくことも、それぞれ各個に隔たれてありながら、そのすべてがひとつの「全体」を為しているだろう。その全体にネーミングを与えるとしたら、そこにはもう著者名を与えるしかないので、あなたにとつては「九折さんを読んでいる」という体験があるわけだ。われわれはクラスメートの丸山くんの作文を読むとき、そのことを「丸山くんを読む」とは言わない。それは彼の作文を読むということだが、彼というひとつの全体性体験をもたらしてくるものではまさかないからだ。

稽古というのはこうして、身体的に起る現象だが、身体的に起るといふのは必ずしも肉体的に起ると限定されるのではなく、われわれ話している文章の文体は、たとえば「みなさん、こんにちは。ぼくは、○○です。ぼくは最近、こう思います」というような文章の文体とは異なる。ここで、どの文体が正しいということではなくて、文体をそれじたい体験可能なものにするためには、それぞれのことばが際やかな各個として並んでいながら、その角が処理されて正中線に引き取られていなくしてはならない——文章の真ん中に「浮身」が掛かっていないといけない——ということが本当にあるということなのだ。文章に肩肘や、腰や膝などは存在しないように思えるが、いつそ文章にも肩や肘や、腰や膝があるとみなしたほうがよい。それらが好き放題に暴れていっては、文章の真ん中に浮身はありえず、そのような文章は読み手にまったく体験をもたらしはせず、ただどこまでも書き手の「身のほど」をみずからで暴露していくというだけの、随所を角ばらせたものにしかならない。このような書き手は書き手としての「力量」を見せつけようとするに執着していく、そのくせじつさいには「身のほど」を暴露するばかりになるので、以降ますます文章の「肩肘」は力ずくで振り回されることになり、しだいにもはや「何を言おうとしているのかさえわからない」ような文章になっていく。

あなたが職場や取引先の誰かから受け取るメール等の文面について、「もはや何を言おうとしているのかさえわからない」という独特の疲労感を覚えることがあつたら、あなたが目撃しているのはまさにこのことなのだ。

「角ばっているばっかりで、何が言いたいのかさっぱりわからないよ」と、あなたは言いたい。

○です。ぼくは最近、こう思います」というような文章の文体とは異なる。

⑨稽古は時間的隔たりが感想されず、また時間的作轄（さくてつ）もなされない

三歳児に平安時代の話をしても、三歳児はそれを「ずいぶん過去のことだなあ」とは思わないだろう。なぜなら三歳児はまだ明確な自我を具えておらず、量・量るということを未だ活発にしていないからだ。経過した時間量を量らないので、三歳児は平安時代の話をおとぎ話と同じ位置にある何かというふうに捉える。

われわれにとつてたとえば、オバマさんがアメリカ大統領だつたのは、もうずいぶん過去のことだよ、という認識があつてよい。冷蔵庫にある牛乳は、もう二週間前に買ったものじやなかつたつけ、そういう認識があつてよい。けれども、落語の稽古や剣術の稽古があつたとして、そこで江戸時代をずいぶんな過去と捉えているようでは、それは時間量を量っているので、その感覚・感想にあるうちは、まるで稽古には入れない。稽古は時間をさかのぼっていく営為であり、たとえば17世紀の太刀筋が、「もつちゅりん」よりも時間的身近にあるというところへ至つて初めで、稽古は本質的に稽古となるのだ。稽古をする者は、今年の流行語や先週の課長からのメールよりも古（いにしえ）から伝えられたことばのほうが時間的身近になつていなくてはならない。

われわれに「量的感想」をもたらすものとして、「力量」に並びこの「時間量」というものが二巨頭としてある。この二つは本質的に同じなのだろう。

われわれは稽古といって、先週の続きを今日もやろうと考える。そして今日の稽古が終われば、「来週もがんばろう」と思うのだ。それは

ごくふつうことではあるが、このふつうこととを続いているかぎり、残念ながら稽古というのは真の実効をあなたにもたらさない。実効のあらわれは何百分の一かのペースになってしまい、このことはあなたにやがて不毛感と「飽きた」いう思いをもたらすだろう。

今週のドラえもんが面白かったとして、来週のドラえもんの日まで、ドラえもんの世界はどこかへ消え去っているのだろうか。それはおかしい。アニメ放映が週一のことであったとしても、ドラえもんの作中世界が週一というわけではないはずだ。それと同じように、稽古というのは取り組みをしていないあいだもずっと継続されていなくてはならず、この継続が途切れることを「作輶（さくてつ）」という。「学門の大禁忌は作輶なり」という吉田松陰のことばから、この作輶という語は一般によく知られている。

故バーンスタインのような音楽家が音楽の中にいるのは、演奏中だけのことだつたろうか。まさかそんなことはあるまい。あるいは、犯罪者が罪人であるのは犯行現場においてのみではなくそれ以降ずっとのはずだ。鳥が鳥でいるのは何も飛行中だけのことではないだろうし、モネが風景の中にいたのは何も筆を手にしているときだけではなかつたはず。であれば、稽古をする者が、取り組み中にだけその稽古の中にいるといふことであれば、そのことのほうが馬鹿げているのだ。取り組みをしていないときにも稽古はずつと続いていなくてはならない。そのことが当たり前になつている者のみ、稽古というのはまともな実効を現してくる。このように稽古というのは、歴史的にも作輶的にも、時間量という感覚支配から脱け出していくと実効が得られないのだ。稽古と日常を往復し、そのたびに作輶が起つてはいる者は、むしろ稽古中にも日常が残存しているのであって、けつきよくのところ非現実的な稽古には入れないということになる。さまざま稽古事が何ひとつ「ものにならなかつた」という人は、たいていこの作輶・時間量支配が原因になつてゐる。

## ⑩ 体の形

究極的なことをもうひとつ述べる。

体の真ん中、横隔膜のいちばん奥に、「話」が得られる。

横隔膜のいちばん奥、正中線を通路に、主題が体験される。

このことは、どのようにしてたらされるかというと、究極的には「体の形」だ。

たとえば、文学の魂魄に連絡を得るには、どうすればよいかといつて、そういう「体の形」を得るしかない。

シェイクスピア劇の世界に魂魄の連絡を得るには、どうすればよいかといつて、そういう「体の形」を得るしかない。

剣術の魂魄に連絡を得るには、体の形しかなく、唄い、踊ることの魂魄に連絡を得るには、体の形しかない。

落語と絵画はまったく別のものに見える。たしかに、志の輔らくごとハドソンリバー絵画はまったくの別物だ。しかしそれらはどちらも、それぞれが得られる「体の形」という一点のみから得られている。

このことは、実験でたしかめることさえできる。

あなたに音楽の指揮棒を持たせ、わたしはその横で割り箸を持つて立つていいよう。

すると、なぜかわたしの持つてはいる割り箸のほうが「指揮棒」に見える。

あなたに燕尾服を着せてさえ、やはりわたしの持つてはいる割り箸のほうが指揮棒に見える。

あなたは、わたしのポーズとまったく同じポーズをとる。寸分たがわづというほどに入念にだ。それでもなぜか、あなたの持つてはいる指揮棒



このことは、ショッキングではあれ、当たり前のことなのだ。

二歳児が手に持つてゐるミニカーと、四十歳のおばさんが手に持つているミニカーは違う。

二歳児が手に持つてゐるそれは、躍動感あらたかに走り回る、ワイルドでタフなマイカーだが、おばさんが手に持つてゐるそれは騒々しい玩具だ。

何が違うといつて、ミニカーを手にしているときの、二歳児の体の形と、おばさんの体の形が違う。

われわれは、体の形がその奥で、魂魄に連絡を得てゐるか否かを体験的に知つており、魂魄に連絡を得てゐるそれについては「あ」という反応を見せるのだ。そしてそうではないものには「うわ」という反応を見せる。それが微細だから見えにくいだけだ。自我の感想ノイズが大きくて埋もれてしまうだけ。

そして、体の形が違うだけでしかないという、このことが、思いがけずわれわれにショックを与える。

体の形じたいが、つながつてない、見捨てられてゐると思い知ることほど、自分を打ちのめすものはない。

稽古は、その体の形を得ていこうとする営為だが、ここに来て、「自分」は体にその形をとらせてくれない。体の真ん中、横隔膜と、顔面の自我は相克するのだ。両者は相互に侮辱的にはたらく。自我はその神経であなた体を支配し、当該の形を決して取らせないという本性を見せる。量れないものを受け入れることは許さない。量れるもののみを、観測し、量つた上でのみ信じるというのが自我だ。量れないものは受け入れない。つまり色（しき）しか受け入れない。

先ほど、「図中の中央、青色のエリアをすべて塗りつぶしたほうがわかりやすいかもしない」と述べたが、そのとおり、自我は元からそれをするつもりでいるのだ。話を生存させない。自我はあなたの体を隅々ま

で支配し、けつきよくは体に「自我の形」しか取らせないつもりだ。魂魄の形は取らせない。主題の形を取らせない。命の形は取らせない。「話」の形を取らせない。

いきます色（しき）の形を取りなさい。あなたにはそれ以外「無理です」という感と想が湧く。すごい重力だ。これを担いで歩いて進めと言わても、それはあまりにも不可能ですとあなたは屈さざるを得ない。こんなひどい苦役は無理です。とにかくものすごい重力と重量なのだ。しかも薄汚れて汚らしく、打ちのめされ続けている。

それで、なるほどたしかに、その巨大な重力と重量が大幅免除されることがあるなら、それはまるで身が「浮く」というように体験されるのかもしれない。角のすべてを正中線に引き取つて、主題のところへ帰らせるということなら、主題の側、魂魄の側は、その重さを抜き取るという権威さえ持つてゐるのかもしれない。

それが、話と色（しき）なのだ。じつのところ、「そんな話はない」まさに、色（しき）ばかりが攝取されている、そのことは体の形を見るだけでわかる。魂魄に連絡を得てゐる体と、そうでない体はまったく違うのだから。たとえ筋トレをしてポーリングを格好よくキメたとしても、それで横隔膜の最奥が魂魄と連絡を得ててくれているというわけではない。あなたが一冊の本を手に取る。その様子を動画で撮影してみると、映像中、あなたの手には本が携えられているとは認識されながら、そこに本の存在は体験されない。それは体の形が違うからだ。体の形が、読書や文学や古典といったところの魂魄に連絡を得てないので、あなたが持つてゐるのはただのいかめしい無縁の物品でしかない。あなたはそれを恥に——罪に——感じ、なんとかして補おう、ごまかそうと想う。そうした感と想が、自我のはたらきとなつてあなたの顔面に漂い出る。

あなたのまったく知らないことがある。それは、あなたがまったく気づかないことで、あなたがまったく保てず、あなたがまったく取り扱え

ないことだ。あなたはそれをこそなんとかしなくてはならない。

わたしがあなたのところに参じて、あなたの持っている本を、わたし  
が手ずから取り上げるということをしよう。そしてその本を、開くこと  
さえなしに、そのままあなたにふたたび授与することにする。このやり  
とりには何の意味があるだろう。ほんの数秒しか要しないことだ。そこ  
に恣意的な感情の起こりは何ひとつない。

何も起こらないはずだ。しかしそうではなく、以降の映像中であなた  
は、はつきりと「本を持っている」ものと体験される。

何が起こつたのか。あなたは自分の身に起こっていることに何ひとつ  
気づけていない。あなたはさすがにここにおいて、ご自身の知識と経験  
が深淵にまでおよんでいるとは主張されないだろう。

本を授与されたとき（厳密には、あなたがそれを受け取ることになっ  
たとき）、あなたの身は真ん中からスッと軽くなっている。浮身が掛かっ  
ているのだ。わたしは、あなたから本を取り上げるという形式、あなた  
に本を授与するという形式をきつちりとやつた。数秒だがそのようなこ  
とが出来る。そこには、あなたから本を取り上げるという話があり、あ  
なたに本を授与するという話があつたのだ。体の角と挙動の角はすべて  
正中線に引き取られてひとつ「全体」になつている。あなたはその「話」  
を体験しているから、以降の映像に「本を持っている」という体験が写  
り込む。

あなたはまったく気づかないけれど、この「本を取り上げる」「本を授  
与する」という、数秒にも満たない話・形式を与えられた中で、へへあ  
なたの体の形は変わっているVVのだ。わたしがそのとき、ほとんど無理や  
りあなたの体の形を変えたということ。

魚の小骨が喉に刺さったとき、あなたの体はじつとしていないだろう。  
であれば、横隔膜のいちばん奥に何かがもたらされれば、あなたの体は  
じつとしているわけではないのだ。体の形は変わっている。つまり、そ  
れが得られないですなんて考えるな。

うしてわたしはあなたにへへ稽古をつけたVVのだ。

ただ、あなたはその体の形を、十数秒さえみずからで保つことができ  
ず、つけられた稽古はそこからもう雲散霧消してしまう。あなたの身は  
そのとき、ふたたび「ものすごい重力」「無理です」に戻つているのだが、  
そのことさえあなたは気づかないのだ。

## 稽（かんが）えろ

だから、稽（かんが）えろとしか言えない。

稽（かんが）えるというのは、頭の先つちよで思い耽るということでは  
ない。

考えるのではなく稽えるのだ。

体の真ん中で稽えろ。

横隔膜のいちばん奥で稽えろ。

頭の先つちよで考えているから魂魄と連絡しない。

ブルースリーが、「考えるな、感じろ」と言つたが、わたしは「考える  
な、感じるな」と申し上げたい。

考えるな、感じるな、稽（かんが）えろ。

体の真ん中で稽（かんが）え続けろ。

手放すな。

あなたは世の中とのレスバトルにこだわるゴミ人間なのか。

魂魄と連絡を得よ。

それが得られないですなんて考えるな。

魂魄と連絡が得られるのは、向こうの側の性能であって、あなたの側の性能ではない。

魂魄と連絡が得られるか否かはあなたがどう思うかの問題ではない。

あなたはただ、稽（かんが）えるの厭（いや）がつてはいるだけだ。稽（かんが）える者は、それだけで、もう体の形を得始めている。

その体の形で、魂魄との連絡が得られるのであって、その連絡が「何」であるかなんて、あなたが知り得るのは十年以上も先だ。

とにかくただ連絡を得よ。あなたが講釈を垂れるのは十年後でいいし、感想をのたまうのは二十年後でいい。

体現している。

その体の形を失うな。

あなたの得意の自我が、昂つて、体の形を失わせる、そんなことはもうわかつてはいる。

あなたよりわたしのほうが何百倍もそのことを知っている。

なんとかしてもらう方法はない。

いいかげん飽きたらどうだ？

ただあなたが稽（かんが）えるだけだ。

体の真ん中で稽（かんが）えるだけだ。

あなたがそれをやめてしまふから何もかもが失われるだけだ。

あなたがそれをやめることをやめればいいだけだ。

あなたはまるで、自分が正しい人ですというように、四の五の言いだすのだが、本当は稽（かんが）えるのをやめただけだ。

すべて稽古不足だ。

稽（かんが）えることが足りていない。

稽（かんが）えるということを、都度にキヤンセルして、陳腐化して自

我のお得意を振りまいて、正しい人のふりをし続けるという、その汚らしいことをいつたい何年続けてきたのか。

そのことをこれからも続けていくつもりなのか。

へへあなたがどうであれ、まともな人はけつきよく、稽（かんが）えるのをやめず、魂魄との連絡を手放さないvv。

魂魄との連絡を手放すことを、どうしてあなたは「偉い」と思つているのだ？

あなたは悪魔の使い走りで、悪魔を主とし、悪魔の御心を実現するのが使命なのか。あなたの体は、悪霊による「靈なるもの」なのか。

魂魄との連絡に横やりを入れ、「そんなわたしは大魔王、イエーエー」と踊っている、その汚らしい顔面の何がうつくしいのか。

稽（かんが）えろ、体の形が変わるまで稽（かんが）えろ。

「汚らしかった顔面」が、「そうでもなくなる」まで稽（かんが）えろ。顔面が汚らしいなどと言われると、ショックで傷ついたと感じる人が多いと思うが、わたしはいま魂魄の話をしているのだ。

なぜ魂魄の話をしているのに、あなたは自分の顔面ショックの話をするのか。

馬脚を現していよう。

魂魄のことなど、信じようもないしどうでもよくて、自分の顔面の器量のほうが一億倍も大事なんだろう。

それが、うつくしいことなのか、汚らしいことなのか、体の真ん中で稽（かんが）えろ。

あなたはすぐに「分かりました」というが、あなたが分かるということには何の意味もない。

それがうつくしいことなのか、汚らしいことなのか、そんなことは、善惡の知識の実を食った者なら全員が分かっている。

漫画ワンピースではないのだから、われわれはその実を全員で食つているのだ。

だからあなたの「分かりました」なんて要らない。誰も必要としているない。

魂魄に問い合わせるまでして稽（かんが）えろ。

体の真ん中から、魂魄に問い合わせるまでして、はじめて何かが体現されうる。

あなたはいつも、

「分かっちゃいるんですけどねえ、やめられないんですよ」

と言う。

それは、あなたの「分かる」という機能には、何の意味もないし、何の権威もないからだ。

金輪際、分かるのをやめる。

それ、一ミリも、何にもならないから。

「体の真ん中で魂魄に問い合わせるまでしたんですけどねえ」

とだけ言え。

これまでに何ひとつ体現してきていないということを、よりもよつて威張り散らかすな。

この先、体の真ん中で、稽（かんが）えるということを続け、そのことをやめずに生き抜いたとき、十年後、あなたにあなたの「話」がないなんてことは決してありえない。

何の稽古もついてないなんてことは決してありえない。

ただそれだけなのだ。

ただそれだけのことなのに、あなたはなおも色（しき）を「わたし」として、差別の中に思い込みの自分を形成し、それに縋つてバランスを取るなんてめちゃくちやなことを続け、また十年後にも、何ひとつ主題を体現していないうことを威張り散らかすのか。

あなたの本質は話なのだ。

そのことはただ稽（かんが）えるということで得られる。

それがまるで足りていないだけだ。

あなたがそれをすぐにやめてしまうだけだ。

それでは、真ん中が空っぽで、そのせいで世界がグロいなんて、当たり前ではないか。

稽（かんが）えろ、体の形が変わりはじめる。

それは、「あなた」のはじまりだ。

引き返すな。

体を棄てるな、調整するな。

なぜあなたが引き返すのか、その理由も知っている。

知っているが、引き返すな、いま進まなくてもいいから引き返すな。

^^顔向けできない//のだろう、そのことはもう知っているから、引き返すな、うつむいてやりすごせ。

しばらく、あるいは長いこと、卑怯者でいるしかない。

そのことも知っているから引き返すな。

顔向けできる日が来るなんて、いつのことになるものか、果てしなく遠い気がする、そのことも知っているから引き返すな。

顔向けできず、うつむいて、卑怯者のまま、それでも引き返すことをやめたい。

そうするしかないとあなたが言うなら、それはもうあなたの話のはじまりだ。

勝手に自分を罰するなよ、何の権威もないくせに。

勝手に自分の罪を量るな。

顔向けできないまま、それでも進ませてほしいのだろう、そんなこととつくなじ知っている。

あなたがいまさら気づくようなことは、はるか以前にこちらでとつくにお見通しなのだ。

あなたは勝手に自分の罪を量り、

「進む資格がありません、とても顔向けできません」と言つている。

だからそれについて、こちらは長々と、

「そんな話はない」

と言つてゐるのだ。

あなたはやたら、善悪に自信があるようだが、どこに根拠があつての自信なのが、そのときだけやけに威張りくさるね。あやしいものだ。

それでも、あなたが勝手に量つた善悪は、何らの話でもない。

そんな色（しき）があるというだけで、そんな話はないのだ。

あなたはもう、その勝手に量るということをやめたらどうだ。

どうせ、自分は罰されるべきなんて「話」を、本当はどこからも見つけではこられないのだろう。それじゃ、シリアルスぶつてゐるわりにはずいぶんお粗末だと思わないか。自分で主張しておきながら「そんな話はなかつたです」と報告するよりないのか。

じゃあいいかげん、本当にはどういう話が見つかってしまうかという、そつちの話のほうを報告しろ。どんな話があつたのか。どのように生きろという話があつたのか。それはどうせ量りえない話だつたのだろう。量りえない話でけつこう、まさかそこであなたはなおも「量る」と言い出して、その自分のほうが権威があるとはまでは言い出せないのだから、あきらめてあなたはあなたの見つけた話に従いなさい。話の権威はあなたの色（しき）なんかじや量れないのです。それが話と色の間柄です。

〔話と色／了〕